

---

# ガジェイレル-Left-

皆麻 兔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ガジエイレル - Left -

### 【Nコード】

N2256L

### 【作者名】

皆麻 兎

### 【あらすじ】

剣術や魔法が存在し、多くの生き物が生きる世界”レジエンディラス”。”世界が自分達を創った”という考えを持って、人々は暮らす。

主人公である剣士アレンは、そんな世界で「イル」というモノか生き物なのかわからないモノを探す旅をしていた。しかし、彼は星が生んだ最終兵器の”鍵”という宿命を持たされているのであった

旅の途中、魔術師のイブールと格闘家のミュルザに出会うアレンとラスリア。

この風変わりな2人組も、ただの旅人ではない事を戦いの最中で知る事になる。

皮肉にも、敵の助けを借りて”未開の地”にたどり着いたアレンとラスリア。

探し求めていた”イル”に触れた途端、アレンの様子がおかしくなり・・・

アレンが”イル”に触れた後、バラバラとなる仲間たち。

その間に2つの世界は、本来あるべき姿に戻りつつあった。

そして、彼らの行く手を阻む事になる”8人の異端者”達が復活を遂げてしまう。

世界や周囲の環境が変わっていく中、彼らはどのように考え・行動をするのか？

## 第1話 祭りの準備

山間にある小さな村スト 人々は畑を耕し作物を育てながら、その日その日を生活する。そんなのどかな所に、この物語の主人公であるアレン・カグジェリカは訪れていた。

彼が持つライトグリーンの瞳は、辺りを見回す。

「おい……。この辺りに、鍛冶屋はないか？」

アレンはその場にいた村民に尋ねる。

「おや、旅人かい！めずらしいねえ……」

「……」

60は超えていそうな老婆ののんびりとした話し方に、少しイラッとした表情で睨む。

「……おお、すまんね。えつと……あの森の手前じゃよ……」

「……わかった。行ってみる」

アレンはそう言った後にこの老婆と別れ、手持ちの剣を磨いてもらうために、鍛冶屋へ急ぐ。

鍛冶屋へ向かう際、彼の視界に入ってきたのは、何かの準備をする村人達であった。

「夜に向けて、しっかりと準備しなきゃね！」

「なんてつたつて、数百年に1度のイベントなんだから……」

村人達の会話が聴こえる。

アレンは彼らに対して見向きもしなかったが、耳を傾けながら鍛冶屋へ向かう……。

「行ってくるね！シシュー！！」

自分の姉にそう告げて、黒髪の少女は家を出る。

この物語のヒロインであるラスリア・ユンドラフは、義理の姉と共に、この山間にある小さな村ストに暮らしていた。

「こんにちは！アミおばさん！！」

「いつもすまないねえー・・・」

「いえいえ！こちらこそ、毎度ご贖肩にしてもらって、すごく感謝してますよ！」

ラスリアはこの40代くらいの女性に、1つの紙袋を渡す。中身は彼女が姉と共に経営している果物屋の商品である。

「では・・・また、夜に！」

そう告げて女性と別れたラスリアは、次の行き先へと歩き始める。

ラスリアと彼女の姉は2人とも孤児で、同じ施設にて育った。施設を出た後は世界を旅した事もあったが、生活の事を考え、この村に定住することを決意する。しかし、このストはカルリエという国の1領土で、その北端に位置する人口の少ない村ため、生活もあまりゆとりがある訳ではなかった。しかし、それでも本人は満足しているかもしれないが・・・。

「えっと、最初はアミおばさんの家で、次は・・・」

自宅で育てた果物を村の家々に届けるのが、彼女の仕事だ。出かける前に書いたメモを読みながら、次の行き先を探す。

「次は・・・鍛冶屋のグロスイおじさんの家ね！」

「邪魔するぞ」

鍛冶屋の前に到着したアレンは、戸をノックした後に入る。

「ん・・・？ああ・・・客か・・・」

アレンよりも低い声で呟く鍛冶屋の男は、面倒くさそうな表情をしていた。

「剣を少し・・・磨いてくれないか？」

「・・・へいへい」

鍛冶屋の旦那であるグロスイという男は、アレンから剣を受け取る

「出来るだけ早く終わらせてほしいんだが・・・大丈夫か？」

「早めにねえ・・・。でも、今日は祭りの日だから、最低でも明日以降になるぜ？」

「・・・祭り・・・？」

不思議そうな表情をしながら、彼は鍛冶屋の旦那を見る。

「今夜は確か・・・“星降りの夜”・・・だったかな？数百年に1度だけ、空に浮かぶ星の光が地上に落ちてくるってのが今夜らしくてな。これは星命学を主とする、ライトリア教の教えの一部で・・・

「そんな事はどうでもいいから、聞かれた事だけに答える」

鍛冶屋の話に飽きたのか、ため息をつきながらアレンは呟く。

「・・・たく、いちいち注文の多い旅人だなあ・・・」

ブツクサ呟きながら、鍛冶屋の旦那は剣を磨き始めた。

コンコンコン

アレン達2人の目の前にある戸をノックする音が聞こえる。

「誰だ？」

「あ・・・。グロスイさん！私です・・・ラスリアです！」

鍛冶屋の旦那が問うと、戸の先から女性の声が聞こえてくる。

話の途中で割り込まれるのを嫌うアレンは、寡黙な美青年とは思えないようなしかめっ面をする。

「おお、ラスリアちゃんかい。入っていいぞ・・・！」

戸に向かって声を張り上げていたグロスイの口調が、明らかに自分と会話していた時と異なっていた。

それに気がついたアレンは、余計にイラッとする。

「こんにちは、グロスイおじさん！・・・約束の果物、届けに来ました」

戸から中に入ってきたこの黒髪の少女・・・ラスリアは笑顔で鍛冶屋の旦那の方を向く。

「・・・っ！！？」

彼女を見た途端、一瞬だけアレンの頭が痛む。

なんなんだ、この女は・・・！！？

彼は異質なモノを見るような表情かおで、ラスリアを見る。

しかし、これがアレンとラスリアの運命的な出会いだという事を、この時は2人とも気がついていないのであった。

## 第1話 祭りの準備（後書き）

お初な方ははじめまして。

作者の皆麻 兎と申します。

この度は『ガジエイレル・Left・』をご一読戴き、誠にありがとうございました。

さて、物語の方ですが今回もファンタジー作品を書かせて戴いてます！

しかし、タイトルを見た時に「なぜ”Left”？」と思われた方もいるのではないでしょうか。

この『ガジエイレル』は”星の心”という意味（言葉と意味は作者が考えたオリジナル）。また、次回以降でも書きますが、主人公の青年アレンにはこの意味を持つ紋章のような痣が左目の下に刻まれています。

小説のタイトルは、これにちなんでつけたかんじですね

また、話の内容はまだ公開できませんが、今回を”Left”としたので、後に”Right”というサブタイトルで違うタイトルを公開します。

本編は”Left”であり、物語の舞台や世界観は全く異なりますが、「この2作品はつながり・関連性がある」モノとして進めていくつもりです。

だから、”Left”の登場人物が”Right”に登場したり、またはその逆もありえるかもしれません。

それでは、ご意見・ご感想をお待ちしてます！

## 第2話 ”星降り”の夜に（前書き）

第一話で解説できなかったのですが、この作品ではシーンや話の変わり目によって、語り手の視線が変化していきます。

それは主人公であるアレンを含む登場人物5人によるモノですが、変わる際は、その前後に” ”を入れているので、その辺にも注目しながら、お読みください！

## 第2話 ”星降り”の夜に

突如中に入ってきた少女ラスリアを見たアレンの脳裏には、一瞬だけ何か映像のようなイメージが映し出されていた。

「・・・あら？お客さん・・・？」

アレンの存在に気がついたラスリアは鍛冶屋の旦那に問う。

「ああ・・・。今日は祭りの日だから、仕上がりは明日になる”  
って言ったのに、せつかちなんだよ。この坊ちゃんは・・・。」

「ふうーん・・・。」

ラスリアはアレンの方に振り向く。

「はじめまして、旅人さん！・・・今日の宿は決まりましたか？」

「・・・いや・・・。」

「じゃあ、帰りがけに私が紹介します・・・っていうより、私の家  
に来ませんか!？」

そっぽ向いているアレンにかまわず、彼の顔を覗きこむラスリア。

「・・・近いぞ、チビ」

「・・・え・・・？」

その台詞を聞いたラスリアの表情が固まる。

「・・・初対面の男に顔近づけすぎだって言ってるんだよ、このチ  
ビが!!！」

「た・・・旅人・・・さん・・・？」

物凄い形相で睨まれたラスリアは鍛冶屋の旦那と一緒にポカーンと  
していた。

ギイイイイ・・・

アレンは戸を開けた後に、チラッと彼らの方を向いて言った。

「・・・おい、女!!！」

「え・・・はい・・・？」

呆然としていたラスリアは、彼の声を聴いて我に返る。

「案内・・・してくれるんだろ？行くぞ・・・」  
前を向いて歩き出したアレンの表情が、普段の無表情さに比べると、少し緩んでいた。

2人が外に出ると、すっかり日の入りの時間になっていた。

「・・・日が沈んだら、始まるのか・・・？」

「え・・・？」

「今夜は“星降りの夜”・・・とか言っていたな。あのおっさんは・・・」

そう呟いたアレンは、沈む太陽の方角を眺めていた。

銀色の髪を持ち、澄んだ緑色の瞳を持つ旅人。この人は一体

？

ラスリアは彼の瞳を見ながら、そう考えていた。

彼女は予感していたのかもしれない。アレンは自分の運命を大きく変える人物ではないかと・・・。

日は沈み、ストでのお祭りが始まった。

村人は酒を片手に、食事をしながら楽しそうに会話をする。“祭り”といっても、このような小さい村なので、何か特別な儀式をするわけではない。今宵の“星降り”に関しても、観測されそうな時間帯に、皆で見るだけだという。

「・・・楽しんでますか？」

テーブルに座って静かに食事をするアレンの目の前に、ラスリアが歩いてきた。

「ご一緒・・・してもいいですか・・・？」

「・・・勝手にしろ・・・」

「では、お言葉に甘えて・・・」

そう呟いたラスリアは彼の向かいの席に座る。

2人の間に沈黙が続く。ラスリアはどう話しかければいいか迷っていた。

さつきはからかいすぎたかな・・・？

彼女を見て、ふとそう思ったアレンの重たい口が開く。

「イル”・・・って知っているか・・・？」

「え・・・？」

初めて聴く言葉に、ラスリアは食べる手を一旦止める。

「いえ、知らないです・・・。何なんですか・・・？」

彼女の台詞を聞いたアレンは深刻そうな表情かおをする。

「古代語で、イルは“心”という意味らしい・・・。だが、“心”に形がないように、その形状も全く不明だが・・・」

「・・・それを、あなたは・・・」

「アレンだ」

「あ、えつと・・・。それを探すために、アレンさんは旅をしているのですか・・・？」

「まあな・・・」

ボソツと呟くアレン。

初対面の人間に、なんでこんな話を話しているのだろう・・・？アレン自身も不思議でたまらなかった。

しかし、ラスリア（こいつ）を見た時に頭の中に映ったビジョン・・・。あれのせいなのかもな

アレンは考え事をしながら、シチューを口に入れる。2人は互いに黙り込んだまま、祭りの時間が過ぎていく。

「おい！！あれ・・・！！！！」

村人の一人の叫び声と直後、アレンとラスリアは我に返る。

気がつくと、南の方角から無数の星の光がこちらへ向かって飛んでいるのが見える。このストという村は、世界地図から見ても割りと北側に位置するため、“星降り”は南方から北上してくるよう

見えるのだ。

「すごい・・・まるで、流れ星みたい・・・！」

初めて見る光景に、ラスリアは感激していた。

祭りを楽しんでいた村人達は、皆が同じ方角を見ている。

「来る・・・」

「えっ？」

ラスリアの後ろでアレンがボソツと呟いたが、彼女は何を呟いていたのか聞こえていなかった。

すると、流れ星のように地上へ降り注ぐ星の内、一筋の光が、この村の方へ向かってくる。

カツ!!!

向かってきた星の光は、村の広場に植えられていた1本の木に当たり、周囲が一瞬だけ眩しくなる。

「きゃっ・・・」

ラスリアやその場にいた全員が瞬時に目を閉じた。

数秒後・・・光が消えた事を感じ取ったラスリアは恐る恐る目を開く。彼女の黒い瞳が最初に映し出したのは・・・アレンだった。

本人は、光が当たった木の方を向いて、床に座り込んでいる。

「アレンさん・・・？」

何か違和感を感じたラスリアはアレンの名前を呼び、恐る恐るその肩をポンと触る。

えっ・・・！！！？

ラスリアは何か熱いものに触れてしまったような勢いで、アレンの肩から手をどかす。

なんか、得たいの知れないモノに拒絶されたような

ラスリアは驚きを隠せない状態で黙り込んでいた。

彼女は、他人には教えていけないけれど、幼い頃から不思議な能力ちから

を持っていた。一つ目は、生まれつき回復魔法キユアが使えること。二つ目は、右手で何かに触れた時、稀にその触れた人から何かを感じ取れる能力の2つだ。後方の能力ちからは、気まぐれのように起きるので、あまり便利なモノとはいえない。

今まで何度か、他人（人）の「何か」を感じ取って来たけど……こんな風に拒絶されるような反応を見せるなんて、初めてだわ……

・

ラスリアは自分の右手を見つめながら、一人考え事をしてると……

「おい……!!」

「え……」

気がつくと、自分の目の前にアレンが立っていた。

「祭りの片付けを少しやるから……って、あんたの姉さんが呼びに来てたぞ」

「あ……そっか……」

“星降り”など、祭りのメインイベントが終わった後はいつも、片付けを開始する。しかし、時間帯は既に宵の刻のため、できる範囲で片付けをした後、残りは翌日に行うのが、いつものパターンである。

「はい、わかりました……!じゃあ、私は片付けをしてから帰るので、アレンさんは、私の家に戻っていてください!」

「……そうさせてもらう……」

そう言い残したアレンは、ラスリアの家の方へ歩いていった。

さっきのは一体、何だったんだろう

不思議でたまらないラスリアは、姉の下へ首をかしげながら歩いていく。

星の光が俺に告げたあの言葉

ラスリアの家に到着し、鍵が開いていないので、アレンは家の外で彼女達を待ちながら考え事をしていた。

彼は見た目で判断すると20歳くらいの青年だが、本人はそれ以前の記憶が全くない。そのため、自分はどこで生まれて、なぜ旅を始めたのかすらわからない。ただ一つわかるのは、“イルを必ず見つけなくてはいけない”という事だけ……。

ラスリア……とかいったか……。それにしても、“黒髪の少女と連れて行け”なんて……。声の主は、俺に何をさせたいのだろうか……？

一人考え事をしながら、アレンは座り込んでいた。

## 第2話 ”星降り”の夜に（後書き）

いかがでしたか？

物語を読んでいて、アレンとラスリアは性格がまるで違う事をご理解いただけたかと思えます。

今回の主人公は、割と寡黙な青年のため、ヒロインのラスリアは彼を引っ張っていくような光景が、既に頭の中にイメージされています。

物語の概要は、大分先まで考えているので、少しずつ整理しながら書いていきたいと思えますので、よろしくお願いいたします。

引き続き、ご意見・ご感想をお待ちしています

### 第3話 旅立ちのきっかけ

「あら？」

アレンが家の戸の近くで座り込んでから数分後、茶髪の女性がやってくる。

「あなたは……」

「……俺は、今晚だけこちらでお世話になる、旅の者だ」

その茶髪の女性はアレンの方を眺めてきよんとしていたが、すぐに最初の表情に戻る。

「……半ば、うちの義妹いもつとが強制的に……って所かしら？」

このラスリアの姉らしい女性の台詞に、一瞬ポカーンとしていたが、すぐに我に返って

「……そんな所かもな……」

と、返した。

「姉さん!!」

後ろを振り向くと、ラスリアが見知らぬ男と一緒に歩いてくるのが見えた。

彼女が姉の前まで歩いてくると、その口を開く。

「彼……グスタフがうちに用があるからって一緒に帰ってきたけど……どうしたの？」

その台詞を聞いた姉は一瞬黙り込む。

しかし、すぐに自分の方を向いて話し出す。

「ごめんなさいね、旅人さん。あなたを先に寝室にご案内するけど、3人で話があるんで、寝室にいてもらってもいいかしら？」

「……構わないが……」

一人だけ仲間はずれなかんじがしたが、アレンは元々、他人の事情にあまり干渉しない性格のため、何を話すのか気になる事はなかった。

「では、こちらで少し待っていてくださいね！」

ラスリアの姉シシユは、アレンを寝室に案内した後、笑顔で挨拶して部屋を出て行った。

さて、今後はどう進んでいくべきか

寝室のベッドに座り込み、アレンは手に入れたばかりの世界地図を広げる。

自分が何者すらかもあまりわからないアレンではあったが、どの場所にどんな国があるかだけは覚えていた。彼自身、なぜ所々で知識があるのかという疑問すら生まれないようだが……。

村人がここは「スト」という村だと言っていたが……ここか？アレンは世界地図に描かれているクウィーンヴァル大陸の北東の方に目を向ける。

彼がこの村を訪れた一番の理由は、この辺りで“星降り”がよく見えるのが、この場所だったという事を知っていたからである。

「未開の地」……」

彼は世界地図のど真ん中にある大陸に書かれた文字を読む。

この世界の中心に位置する大陸は、人が住んでいるかすらもわからない未到の地であるため、世界地図上でも、その土地の詳しい地形は描かれていない。この大陸には学者連中がいろんな議論を行い、いろいろな仮説が打ち立てられる。幾人もの冒険者達がこの地を目指したとも言われているが、生きて戻ってきたという話はまるで聞いたことがなかった。ゆえに、“未開の地”なのである。

おそらく、ここに「イル」があるのかもな

アレンは一人考え事をしながら、世界地図を見つめていた。

「話って何？シシユ姉さん！」

ラスリア達3人は、居間にある椅子に座る。彼女は何の話をするのか、気になって仕方があった。

姉さんとグスタフが隣同士で座っているって事は・・・何か、改まった話なのかな？

彼らの様子を見たラスリアは、内心そんな事を考えていた。

「ラスリア、あのな・・・」

「姉さんの・・・!」

グスタフが内容を話し出そうとした瞬間、ラスリアは彼の言葉を遮る。

「姉さんの口から・・・聞きたいです・・・」

はつきりとした口調で言うラスリアであったが、内心はとても緊張していた。

数秒程、彼ら3人の中で沈黙が続く。

「えっと・・・あのね、ラスリア・・・」

シシュの重たい口が開く。

「私達・・・結婚するの」

「・・・え・・・!？」

頬を赤らめながら言うシシュ（自分の姉）を見て、ラスリアは呆然とする。

「い・・・いつの間に・・・!!!？」

自分の姉とこのグスタフが仲が良い事は、彼女自身もよく知っていた。

しかし、こうなるとまでは予想だにしていなかったからだ。

「私達、お互いに両親がいないじゃない・・・?だから、誰に最初に報告するか、一瞬迷ったけど・・・やっぱり、血が繋がっていないなくても唯一の家族である、ラスリアへ一番最初に報告するのが良いかな・・・と思って」

「そっかぁ・・・おめでとう・・・!!おめでとう、シシュ姉さん  
!!!」

ラスリアは自分の事のように喜ぶ。

「喜んで……くれるの……？」

「もちろんよ！」

家族のいない自分達にとって、「新しい家族ができる」という事は、なによりも嬉しいはずである。

でも、そうなると私は……

内心、「自分の居場所がなくなるような」という疑惑が生まれる。

「果物屋（お店）は……どうなるの……？」

素朴に感じた疑問を、彼女は姉達にぶつける。

しかし、その答えはすぐに返ってきた。

「お店は彼も手伝ってくれるので、今まで通り大丈夫よ！」

「……でも……」

言葉を濁すラスリアには一つ不安があった。

彼ら姉妹はこのグスタフを良く知っている。それは良い所も悪い所も……。

彼は同じ村の人間で姉より2歳ほど上だが、実は仕事といえる仕事を全くしていない。親が地主だから、「働く」事を全く経験せずに育つ。そんな男に姉と、この店を任せる事ができるのだろうか

？

「グスタフ……本当に……大丈夫なのね……？」

ラスリアはジッと姉の婚約者の方を向く。

結婚には賛成だけど、この人で本当に大丈夫なのかな……？結構、不安……。

内心そう思う彼女に対し、グスタフの口が開く。

「確かに、僕は両親に甘えて、働いた事がない……。でも……少しずつ……。少しずつでいいから、仕事を覚えて“自立した大人”になりたいんだ……。だから……。！」

世間知らずの青年の目は真っ直ぐなかんじがした。

ラスリアとしては、まだ一つ不安があったが、その眼差しに強い意

思を感じた彼女は、ため息を尽きつつも  
「・・・義姉をよろしくお願いします」  
と、グスタフに挨拶をした。

姉たちとの話が終わり、部屋を出るラスリア。

「・・・お前は、どうするんだ？」

「わっ!!!」

いきなり声をかけられたので、驚いたが、自分の寝室の前でアレンが立っていた。

「・・・話を聞いていたのですか？」

「・・・聞きたかった訳ではないがな・・・」

アレンは静かに答える。

その後、ラスリアはその場で一瞬黙り込む。

「私・・・やりたい事があるんです・・・」

ラスリアは、深刻な表情かおをしながら話し始める。

「実は私と義姉は孤児だったんです。両親がいない事はあまり寂しくなかったのですが、私・・・自分の事がよくわからなくて・・・」

「・・・己が・・・？」

不思議そうな表情かおでアレンは彼女を見つめた。

「実は私、他人が持つていないような能力を持っていて、今から10年前・・・8歳の時に、自分の持つ能力を自覚しました」

ラスリアの話に、アレンは黙って聴いている。

「だから、自分が何者なのか、それを知りたくて旅をしたい・・・と考えた事もありました。しかし・・・義理の姉と一緒に始めたこの果物屋と、姉の事を思うと実行に移せなかった・・・」

その後、アレンの口が開く。

「・・・姉の結婚を機に、旅に出るのか・・・？」

「・・・はい。これも良い機会なのかも・・・というより、行かなければいけない気がするんです・・・!!」

「……だからか」

「……え……？」

ラスリアは、またもや彼の台詞を聞き逃す。

アレンさん……時々、ボソツと呟くから、何を言っているのかわからないな……

内心、そう思う彼女に対し、アレンはため息をついたような表情で

「……一緒に行くか……？」

と、言ってきた。

「え……？」

彼のハスキーボイスに、ラスリアはドキツとする。

「あなたと……ですか？」

「……嫌なら一人で行くことになるが……」

それを聞いたラスリアは、一瞬考える。

……驚きの発言がこの男性は多いな……。でも、私より長く旅をしている人に着いていく方が、なにかと安心……。かも？

彼女なりに一生懸命考えた結果、ツバをゴクリと飲んで口を開く。

「私も一緒に……あなたの旅に、連れて行ってください……！」

真剣な表情で、ラスリアはアレンに告げた。

この時、彼女はこの銀髪の青年の顔を初めて、真正面から見た。

澄んだライトグリーンの瞳だが、左目の下に、不思議な紋章のような形をした痣が存在する。

しかしラスリアは、今はどういふつもりで彼が「自分と一緒に行かないか」と言ってくれたのか、この痣は何なのか……。本人には訊かない事にした。

「……決まりだな」

そう呟いたアレンは、すぐさまベッドに寝転ぶ。

「あの……アレンさん……？」

呆気に取られたラスリアは恐る恐るアレンに声をかける。

「行くと決まったら、長居は無用だ。……早く寝てさっさと行くぞ」

と、言つて寝てしまった。

この人・・・もしかして、かなりせつかちな男性ひと・・・!!?!?  
あつという間に寝付いてしまったアレンを見て、ラスリアはため息をつきながら、布団をかぶせる。

翌朝・・・まだ義姉が寝入っているような時間帯に起きて、支度をするアレンとラスリア。

「姉さん・・・。いつてくるね・・・!」

面と向かつて挨拶すると泣きそうだったので、彼女は1枚の手紙を義姉の枕元にソツと置く。

旅の目的を果たしたら、またスト（この村）に戻ってくるから

そつ心に誓つたラスリアは、静かに家の戸を閉めた。

「・・・用意はできたか・・・?」

家を出ると、鍛冶屋から戻っていたアレンが前の方にいる。

「・・・はい。お待たせしました」

ラスリアはアレンの方を向いて、真剣な表情で頷いた。

「・・・行くぞ・・・」

「はい・・・!」

出会つてから間もないのに、割りと打ち解けられたのはなぜだろうと考えながら、ラスリアは5年間過ごした村を後にする。

ヴェスペデイラ暦25年

この年に起きた“星降り”

は世界中の全ての生き物が目撃していた。彼らが知らぬ違う世界でも・・・。

そして、その翌日にアレンとラスリアは旅立つたのだった

### 第3話 旅立ちのきっかけ（後書き）

いかがでしたでしょうか。

この物語の主人公アレンとヒロインであるラスリアのキャラ設定ですが

アレン・・・容姿端麗、冷静沈着。銀色の髪とライトグリーンの瞳を持ち、左目下には紋章のような形の痣を持っている。

ラスリア・・・見た目は可憐だが、強い意志の持ち主。回復魔法のキュア使い手

というのが、掲載開始前の設定。

ラスリアはほとんど変わっていませんが、アレンはこれに「実はどSキャラ」というのを作者の勝手な判断で追加いたしました。笑

そんなこんなで、後書きでは物語に関係する事を書いていきたいと考えています！

ですので、今後ともよろしくお願いいたします。

#### 第4話 互いを知って生まれる謎（前書き）

今回は彼らがどう旅をしていくか。そして、この物語の世界観がわかるような回になります！

## 第4話 互いを知って生まれる謎

“星命学”

それは、星がどのような仕組みで生まれ、人々の生活にどのような産物をもたらしているのかについて、論じられた学問。“惑星衝突の繰り返し星を生み、星は火・水・土・風を創り、そこから生物は産まれた”という文が有名。この学問を元として作られた宗教が、ライトリア教なのである

「それをよこせ」

「・・・嫌」

アレンとラスリアは、何かを巡って睨み合いをしている。

周りにいる人間は何をやっているのか、とヒソヒソ話をしているが、2人とも耳には入っていないかった。

「揚げ物にかけるソースはたくさんがいいんだ！たくさんが！！」

「だからって、真っ黒になるくらいとんかつソースをかける必要もないでしょう！これって、塩分の摂り過ぎなの！！！」

2人は揚げ物にかけるソースの量でもめているようだ。

ラスリアがいたストの村を出た彼らは、商業都市レンドに来ていた。

レンドに到着後、昼食をとるという目的で食堂に入った2人。アレンが揚げ物を、ラスリアがパスタを注文して食べようとしたら、彼がソースの入れ物の中身がなくなるくらいたっぷり入れ始めた事から、この抗争が起きた。

全く・・・俺は濃い味が好きただけだというのに、どうしてかけてはいけないのか・・・

ラスリアに押されて観念したアレンは、フーツとため息をつく。

だが、この女

揚げ物を口に運びながら、アレンはラスリアと初めて会った時に浮かんだビジョンを思い出していた。

ビジョンといっても写真のような動きのないイメージだが……。1つめは、誰かと対話しているビジョン。しかし、それは人ではない「何か」だった。その対象物が何なのかは謎だが、おそらく、何かと対話する能力を持っているという事になる……。

アレンには時折、謎の声の主が語りかけてくる。そして、多くの助言をしてくれるのだ。それは世界の事や、剣の使い方……。ただし、彼自身の事は教えてくれないが

すると、窓の外から、何やら不思議な音楽が聴こえてくる。

「おい……。あれは一体？」

「あれって……。ああ、“旅の語り部”<sup>オレボテフ</sup>の事ですか？」

窓の方を指差すアレンに対し、ラスリアは答える。

「“旅の語り部”<sup>オレボテフ</sup>……。？」

すると、ラスリアは声を低くして語りだす。

「今、この世界ではライトリア教が主な宗教でしょ……。1つの教えが存在すれば、それを認めない人々もいるって事……。つまり、彼らはライトリア教を批判し、違う思想を広める人たちなの……」

「……。では、なぜ楽器を奏でる？」

「……。それは、私にもよくわからないわ。多分、大きな音を鳴らした方が、皆聞いてくれるとか考えているのでは？」

会話を続けていると、次第に聴こえてきた音が小さくなっていく。まるで、何も知らない生徒と教師のような会話だったが、“旅の語り部”が去った後、その会話も収まった。

「宗教の事はともかく……。今後、どう進むつもりなんですか？」  
ラスリアが違う話題を切り出すと、アレンはジッと彼女を睨む。

「アレン……。さん？」

「・・・敬語・・・」

「え？」

「敬語と、その・・・」「さん」づけはやめてくれないか・・・」

「・・・はあ・・・」

ラスリアは呆気にとられた表情になる。

しかし、その台詞がアレンの「照れ隠し」だとわかった彼女は、すぐに我に返る。

「・・・次は、隣国レアナにある学術都市アテレステンへ行こうと考えている」

「学術都市・・・」

「・・・どうした？」

学術都市アテレステンの名前を聞いたラスリアが、その言葉に反応して考え込む。

「ちなみに、それは・・・」

「もちろん、イルのためだ。それに、イルがどんなモノにせよ、あの都市にいる学者連中に聞けば、何か掴める可能性が高いと思っ  
てな・・・」

「という事は・・・」

ガサツとラスリアは世界地図を取り出す。

「そこへ行くには、このラプンツェル山脈の山道を抜けなくては  
いけないかんじね」

「・・・ああ。その道中にあるオーブル遺跡も、念のため何か手  
かりがないか調べてみるつもりだ」

「そうね・・・」

・・・先ほどの反応は何だったんだ・・・？

行き先の話が終わり、食事代を払おうとした時に、アレンはふと考  
える。

あまり、行きたくない雰囲気をかもし出していたが・・・気のせ  
いか？

考え事をしながら会計をすまし、店を出て行こうとした時・・・

「その兄ちゃん！」  
後ろから食堂の店長が彼ら2人に声をかけてきた。

「あの・・・何でしょうか・・・？」

いきなり声をかけられて驚いたのか、ラスリアは恐る恐る尋ねる。

「いや・・・ね。盗み聞きするつもりはなかったんだけど、あんた達が行こうとしている“オーブル遺跡”の名前を聞いて思い出したんだ」

「何か知っている事でもあるのか・・・？」

店長の言葉に反応したアレンは、その女性ひとの目の前に来て顔を近づけた。

その綺麗な顔立ちのアレンに近づかれて頬を赤らめた食堂の人は、更に話を続ける。

「な・・・なんでも、その遺跡。“遺跡内で死んだ人間が不死者アンデッドになっ

ていっばいさ迷っている”という話を聞いた事があって、できれば行かない事をオススメするわ・・・」

そう教えてくれた後、すぐに自分の仕事へと戻っていった。

ラスリアがその人にお礼を言った後、彼らは食堂を後にする。  
レンドの表通りを歩いていく2人。“商業都市”と呼ばれるだけあって、道を行き交う人の数は多い。品物売る商人、それを買う街の人間や、旅人

他人との交流をあまり好まないアレンとしては、この人ゴミの中に紛れている事が、最も気楽な事であった。しかし、今はラスリアも一緒なので、独りではないが・・・。

### アンデッド 不死者か

旅をした時期があったとはいえ、流石にラスリアも不死者アンデッドを見た事がなかったなので、どんな存在モノなのか想像力を膨らませていた。見た

ことはないけれど、先ほど食堂のお姉さんがその言葉を口にした時、一瞬だけ鳥肌が立っていたのを彼女は感じていた。

とにかく、何か怖いモノなのかな？

考え事をしながら歩いていたので、2人とも黙ったままだった。黙って歩き続けてきたので、目標のラプンツェル山脈の麓に、割と早く到着する事ができた。

「日が暮れてきたな……。夜の登山は、危ない。……今日はここで野宿とするか……」

「そうですね……。じゃなかった！……そうね……」

“敬語は禁止”とアレンに言われたのを思い出したラスリアは、すぐに訂正をした。

それから数時間後……。辺りは暗くなり、風も出てきた。彼らは山の麓にある岩石だらけの場所で野宿をする事になった。食事を終わらせ、焚き火の前でアレンは剣を磨き、ラスリアはただただ炎を見つめていた。

「そういえば……」

アレンが手を動かしながら口を開く。

「学術都市アテレンに行く、何かまずい事でもあるのか……？」

「えっ……」

ラスリアはドキツとした。

動揺を隠して接していたつもりだけれど……バレていたのかな……

その場で考えるラスリアだったが、アレンの無表情でも真っ直ぐな瞳を直視できなかつた。

彼女は、自分が「特別な人間」である事はわかっていて。自分の出生のために、学術都市アテレンで誘拐されそうになったのだから。しかし、つらい目に遭った事などおくびに出さず、アレンに答

える。

「いえ。アテレステンは、1度訪れた事があって……ただでさえ地理に疎いのに、いきなり知っている街の名前が出てきたから……少しビツクリしただけなの」

そう答えたラスリアの顔をジッと見るアレン。

「……そうか……」

納得をしたのか、アレンは焚き火に背を向けて寝転び始める。

「明日も早い……。そろそろ寝るぞ……」

そう呟いて、あっという間に寝付いてしまった。

すぐさま眠りについたアレンを見て、ラスリアは思った。

アレン（この人）を信用していない訳ではない……。でも、自分の事で彼を巻き込みたくないから……。自分の事は、しばらく黙っておいた方が良さそうね

そう考えながら、ラスリアも焚き火の灯りを消し、横になって眠りについた。アレンが探す「イル」がどんなものかと考えながら

#### 第4話 互いを知って生まれる謎（後書き）

いかがでしたか。

話の中で”濃い味”か”薄い味”でアレンとラスリアがもめていましたが、皆さんはどっち派ですかね？

次回以降は、メインキャラの誰かが出てきます！

どんな登場人物が現れるかは、次回以降のお楽しみ  
引き続き、ご意見・ご感想をお待ちします！

**第5話 一風変わった2人組<前編> (前書き)**

この回から主要登場人物であるイブールとミュルザが登場します

## 第5話 一風変わった2人組<前編>

ラプンツェル山の麓で一夜を明かしたアレンとラスリアは、翌日山を登り始める。

「それにしても、今日が快晴で良かったよね！雨だったら、足元滑るだろうし……」

傾斜の激しい山道を通りながら、ラスリアは言う。

「……そう言っている割には、スイスイ進むな」

アレン自身も体力にはいくらか自信があったが、ラスリアが意外と持久力を持っているのに彼は驚いていた。

「オーブル遺跡……もうそろそろ見えるかな……？」

「ああ。おそろく……」

「こんなに高さのある場所に……どうして、遺跡を造ったのかしら……？」

歩きながらラスリアはポツリと呟く。

「……さあな。ただ、人間は神に近づきたい余りに、神の世界に最も近い場所……要は高さのある場所に作りたがるという話なら、どこかで聞いた事がある……」

「ふうん……」

ラスリアが頷いていると、後ろから聞こえてくる歩く音が消えた。

「……つ！！？」

「……アレン……！？」

その場に立ち止まったアレンは、眩暈を感じたかのように頭を抱える。

「そう。人は神に近づけば近づく程、後にその翼をもがれる。それがどれだけ愚かな事か身を持って教えてやるのが、お前の役目……」

『・・』

アレンの頭の中に響いてきた声はそのように述べる。

「翼をもがれる」・・・「身を持って教えてやる」・・・。一体、  
どういう事なんだ？

頭がスツと軽くなったアレンは、声の主が述べた言葉に疑問を持ち始める。しかし、なぜか「それ」を否定する気持ちにはなれなかったのだった。

「アレン！！・・・大丈夫？」

隣でラスリアが心配そうな表情で彼の顔を覗き込んでいた。

「・・・大丈夫だ」

ラスリアの肩に一瞬だけ寄りかかった後、すぐにその手を離れた。いつもの表情に戻ったアレンは、進行方向に身体をむきなおす。

「・・・オーブル遺跡に、そろそろ到着しそうだな」

山の中にあるオーブル遺跡の中は、土煙が立ちこみ、あまり空気のきれいな場所とはいえなかった。至る所に、不思議な紋様の描かれた壁画がビッシリと存在する。魔物の気配は感じられなかったが、逆に静かすぎて怖い雰囲気も出ている。

「魔物の姿がこれだけないというのも、不思議なモノだな・・・」

「確かに・・・。当然、この遺跡は国の管理下に入っていないから誰かが魔物退治に来ているとは思えないし・・・変なの」

辺りを見回しながら、2人は魔物に全く遭遇しない事を不思議がっていた。

「・・・そういえば、ずっと気になっていたんだけど・・・」

「どうした」

アレンがラスリアの方を振り向くと、彼女はお茶を濁したような表情をする。

「・・・なんだ。早く答えろ」

「う……うん……」

ツバをゴクリと飲み込んだラスリアは、その口を開く。

「あなたの左目の舌にある痣……。それ、どうしたの……。？」

「痣……。？」

その言葉を聞いたアレンはきよとんとしていた。

「痣……。あつたのか？俺に」

「ええ……。もしかして、鏡とか見たことないの……。？」

そういえば、自分の顔を鏡で見たことはないな

自我がはつきりしてから今まで、アレンは自分の姿をまじまじと見たことがなかった。だから、痣があるうとも、何も気に留めてはいなかった。

「ほら……。これ！」

ラスリアが自分で持っていた手鏡をアレンに手渡す。

「……。本当に、左目の下にある……」

手鏡を除いたアレンは、左目の下に不自然な形をした痣を自分が持っている事を知る。

「……。！！！！！」

その直後、アレンはバツと辺りを見回す。

「ア……。アレン！？」

いきなり動き始めた事に驚いたラスリアは、眼を丸くしてアレンを見る。

「……。誰か来る……」

アレンがそう呟いてから1秒経過したぐらいに、遠くから足音が聞こえる。

気がつくくと、自分の服の裾をラスリアが掴んでいた。

「……。どうした」

彼女の方を向くと、全身に鳥肌を立てて震えていた。

「ごめん……。でも、何か得体の知れないモノの気配を感じるか

ら・・・どうすればいいかわからないの・・・」  
軽く怯えた表情をするラスリア。

それにドキツとしながらも、アレンは足音の聴こえる方角に剣を向ける。

カツンカツンカツン・・・

ギイイイイン！！！！

柱の影から誰かが現れた直後、アレンは瞬時に踏み込む。彼の剣が何かとぶつかって響く音。

「・・・あつぶねえなあー・・・！！！」

気がつくと、目の前にはアレンと同じくらいの背丈で濃い紫色の髪をした男は立っていた。その左腕で、アレンの剣を受け止めている。

「アレン！！？」

彼の元へ追いついたラスリアが2人の姿を見つける。

「・・・ってあれ？」

「・・・どうやら、魔物ではなさそうだな・・・」

剣を鞘に戻しながら、アレンはこの紫色の髪をした男を睨みつける。

片腕で俺の剣を受け止めたのに、かすり傷一つすらつかなかった。

・・・こいつは一体・・・？

突然現れた男に不信任を抱くアレン。

「ミュルザ！！どこー？？」

遠くから、少し甲高い声が聴こえてくる。

その声を聴いた瞬間にアレンは身構えたが、それとほぼ同時に男は彼を睨みつける。

「・・・あ、いたいた！！全く、一人で勝手に進まないでくれる？」

そう呟きながら出てきたのは、金髪碧眼で髪が肩につくか否かぐらゐの長さを持つ女性だった。

「あれ？あんなたち・・・」

呆然としていたアレンとラスリアだったが、すぐに我に返る。

「あ・・・ごめんなさい！もしかして・・・この男性ひとの連れの方・・・ですか？」

「・・・ええ。そうよ」

ラスリアの問いに、この女性は笑顔で答えた。

「ちよつと、ミュルザ！またあんなから喧嘩しかけたんでしょ！？」

その声を張り上げた直後、このミュルザという男の背中を思いつきり叩く。

「痛つてえ！！何するんだよ、イブール姐さん！！！」

背中を叩かれて、痛がる男を見たラスリアが慌てる。

「いえ！！先に手を出したのは、アレンの方です！！・・・多分」その台詞を聞いてカチンときたアレン。

「・・・多分とはなんだ。多分とは・・・」

「あ・・・いや・・・。なんていうか、2人とも動きが早すぎたから、どちらが悪いかっていうのはわからなくて・・・」

そんな2人のやり取りを、イブールとミュルザは眺めていた。

「なににせよ、先ほどはごめんなさいね！！私はイブール・エンヴィ。遺跡発掘が好きなトレジャーハンターと言った所かしら？」

「あ・・・。私はラスリア・ユンドラフです・・・。それと・・・。気まずそうな表情でラスリアはアレンの方を向く。

「・・・アレン・カグジエリカだ」  
アレンは不機嫌かおそうな表情で名を名乗る。

うつ・・・。やっぱり怒っているのかな・・・。今後、あまり中途半端な言い方は辞めるようにしなきゃ

ラスリアがその場で考え事をしてしていると、目の前には紫色の髪をし

た男 ミュルザだった。

「きゃっ……」

その顔面がかなり近かったので、ラスリアは思わず後ずさりをする。「かわいい娘ちゃん。……俺の話聞いてた……？」

そう訊かれた時、彼がラスリア達に自己紹介をしてくれていたのを聞き逃していた事に気がつく。

「ご、ごめんなさい……」

「まあ、いいって事よ!!」

明るそうな笑顔でそう言ってくれたミュルザを見て、ラスリアはホツとした。

「じゃあ、嬢ちゃんのためにもう1度!……俺の名前はミュルザ・ブライドル。一応格闘家で、このイブール姐さんに雇われた傭兵つてかんじさ!よろしく!!」

「はぁ……」

元気に自己紹介をしたミュルザは、ラスリアと握手したかと思うと、その腕をブンブンと振るう。

「……気安く触るな」

「……ああ!?!?」

その直後、アレンがラスリアとミュルザの間に入り、彼の腕を掴み上げる。

アレン……?」

その険しい表情を見たラスリアは不思議に感じた。

確かにアレン（彼）は普段から無愛想な態度を取ったりするけど、この何かを警戒しているようなかんじは一体

周囲が険悪なムードになりつつある。それを察したイブールが口を開く。

「……………ここで出会ったのも何かの縁だし……良かったら、皆で一緒に遺跡探索しない?」

「……………そうですね!そうしますか!」

その一言に助けられた感覚を覚えたラスリアは険悪なムードになっているアレンとミュルザを宥めた。

この風変わりな2人組と出会ったアレンとラスリアは、オーブル遺跡の中を進んで行く。

「それにしても、この辺り一面にある壁画・・・何を意味するのかねえー・・・」

上を見上げながらミュルザが呟く。

「はるか昔、いろんな星を旅していた一族・・・今で言う古代種ね。彼らがこの地を見つけた時に建てた神殿の一つが、ここだと言われているわ・・・」

「・・・イブールさん。それは・・・？」

本を読みながら話す彼女に、ラスリアが横から話しかける。

「・・・ああ、これ？これは、遺跡とかいろんな事を事前に調べてまとめた、私のメモ帳。…分厚い本を持ってくるわけにはいかないしねー!」

「・・・かなり書き込んでいるようだな」

先ほどからずっと黙り込んでいたアレンが、珍しく口を開く。

「まー、それはどうも」

アレンが会話に入ってきて驚いていたイブールだったが、すぐに笑顔で返す。

イブールさん・・・こうやって会話していると普通の人に見えるけど、何か不思議な感覚がするのは・・・なんでだろう？

「どうした？」

「わっ・・・!」

ラスリアの耳元で、ミュルザが囁く。

「いえ・・・別に・・・」

いきなり囁かれて驚いたラスリアの心臓はドキドキと鳴っていた。

「・・・おい」

アレンの凶太い声が聞こえた直後、辺りを見回すとそこにいたのは

「あれが、アンデッド不死者・・・」

皮膚が焼けただれ、白目を向いているバケモノが彼らの周囲を囲んでいた。

「ラスリア・・・お前は下がっている」

「う・・・うん・・・」

ラスリアが頷いた直後、アレンは剣を構えて不死者に立ち向かっていく。

「・・・サポートするわ・・・！ミユルザ！！」

そう叫んだイブールはラスリアの側にいたミユルザに合図する。

「・・・了解」

ウインクしてから走り出したミユルザは敵の骨が碎けるくらいの勢いで蹴り飛ばし、イブールは呪文の詠唱を始めた。そしてその詠唱しているイブールをサポートするように、アレンが剣で敵を斬る。ラスリアは剣士も魔術師も格闘家も、戦っている姿を見た事がなかったがため、戦闘中にも関わらず少し嬉しそうにしていた。

「きゃあっ！！！！」

「ラスリアちゃん！！？」

敵をほとんど片付けたと全員が思い込んでいたため、ラスリアの背後に近寄っていたアンデッド不死者の存在に気がついていなかったようだ。

敵は背後からラスリアにしがみついていた。

「いや・・・放して・・・！！！！」

振り払おうにも、しがみついてきたアンデッド不死者は成人男性くらいのおおきさはあったため、簡単には振り払えなかった。

「！！！！！！！！」

ラスリアから少し離れた場所にいたアレンはすぐさま走り出す。

「あー・・・・・・」

理性を失い、うなだれたような声を出す敵はラスリアの首筋に今も噛みつきそうな目つきだ。

嫌・・・怖い

!!!!

ガブツ

鈍い音が聞こえる。恐怖の余り瞳を閉じていたラスリアだったが・  
・その首筋には噛み疲れていた痕はなかった。

「ミュルザ・・・さん・・・？」  
後ろを振り向くと、そこには不死者の顔面を右手でわしづかみをし、持ち上げているミュルザの姿があった。

「・・・たく、いくら美味そうな人間だからって、がつつく事はないだろうに・・・」

「え・・・!!!？」

その台詞を聞いたラスリアはギョツとした。

“美味そうな人間”・・・!!!??

不可思議な台詞に、ラスリアは身体を硬直させる。すると、彼女の考えを読んだように

「安心しな。捕って喰ったりはしねえよ。・・・今の俺は“首輪付き”だから・・・」

そう呟いたミュルザから、黒い光が現れる

第5話 一風変わった2人組<前編>（後書き）

いかがでしたか。

意味深な台詞を述べたミュルザですが、彼は一体何者なのか？

また、イブールに不思議な感覚を覚えたラスリア。

その真意はいかに・・・！？

メインキャラが一気に2人登場しましたが、これにはちゃんと理由があります。

その辺は次回以降で書いていきますので、お楽しみに

ご意見・ご感想をお待ちしてます（^^）

## 第6話 一風変わった2人組<後編> (前書き)

これまでのパターンはアレン ラスリアの順で視点が変わっていましたが、今回のように1話丸まる一人の視点で物語が進む場合もあります。

ちなみに、基本はアレン視点でのスタートです。

## 第6話 一風変わった2人組<後編>

「そいつを倒しなさい!!!」

アンデッド  
不死者に襲われているラスリアを助けようと走りだそうとしたアレ  
ンの背後で、その叫び声は聴こえた。

その直後は本当に一瞬の出来事だった。瞬きをした頃にはラスリア  
の目の前にミュルザが立ち塞がり…黒い光を発したかと思うと、掴  
みあげた不死者を粉々に砕いてしまったのだ。

「・・・大丈夫？」

突然の出来事で身体が硬直しているラスリアに、イブールが手を差  
し延べる。

「ありがとう…」

その手を取ってラスリアは立ち上がるが、その表情は驚きと戸惑い  
で溢れていた。

なんなんだ、こいつらは

アレンも、何がなんなのかわからずにいた。

「さて…」

ミュルザがボソツと呟いたかと思うと、ラスリアの腕を掴みあげる。

「痛っ…」

「貴様…!!」

アレンはすぐに身構えたが、ミュルザはそんな彼を睨みつける。

「!!!!!!」

最初は黒かったミュルザの瞳が、血のように真っ赤だった。  
身体が…石のように重い…!

「ミュルザ！」

「仕方ないだろう、イブール。見られちゃったものは…」  
ミュルザの横で、イブールが険しい表情をしている。

「貴様…やはり…！」

アレンが動けない身体を動かそうと足掻きながら、ミュルザ達を睨みつける。

当のミュルザは、怯えるラスリアと、立ちすくむアレンを見て口を開く。

「…察しの通り、俺はイブール（この女）に付き従う悪魔だ」

「悪…魔…？」

彼の側で、驚きの余り声を失うラスリア。  
すると、ミュルザの大きな手が彼女の頬に触れる。

「何…ちよつと頭の中をいじるだけさ。すぐに終わるぜ…」

「…止めなさい！ミュルザ！！！」

ラスリアの記憶を消そうとしたミュルザを、イブールが止める。

「わざわざ記憶を消さなくていいわ」

「…じゃあ、どうするんだ？」

「そうね…」

イブールは考えながら、アレンの方をちらつと見る。

彼らの間で沈黙が続く。

「…じゃあ、私達の旅に同行してもらおうかしら？」

「なっ…！！？」

「…私ね、旅をしながら、ある人物を探しているの」

「…！！？」

イブールが低い声で呟いた直後、アレンは殺気を感じ取る。

人とは思えない殺気……。だが、この女は普通の人間…。一体？

アレンが考え事をしていると、フワツと身体が急に軽くなる。

「まあ…てめえやこのお嬢ちゃんのお探しているモノ”も、ついでに探す手伝いをしてくみたいだぜ？」

ラスリアの腕を放して、ミュルザは話す。

「もしかして…あなたは、人間の心が読めるの…？」

「…まあな」

「……ちよつと!!」

ミルザとラスリアの会話に、イブルが割り込んでくる。

イブルは彼の耳元でコソコソと話し出す。

「ちよつと!!」探す手伝い”だなんて、私は考えていないわよ!!」

「まあまあ……。それより、あの銀髪野郎と黒髪の嬢ちゃん。…

どちらにせよ、この2人の記憶は消せなそうだ……」

「……どうして?」

「それは……」

……何を話しているのだろうか?

2人でコソコソしているのを見て、アレンやラスリアは不思議そうな表情で首をかしげていた。

「でも、“悪魔”だなんて聞いて、ビックリ!!……という事は、人間が持ち得ないような特殊能力を持っているというところかしら?」

魔物との戦いから数時間が経過し、すっかりいつもの調子に戻ったラスリア。

記憶を消されそうになった事なんて、当に忘れていたというような雰囲気だった。

悪魔……。か。人に化けれる奴は、相当魔力の高い連中だと聞いた事があるが……。アレンは悪魔について考える。

それは闇に生き、人間の恐怖・絶望・狂気・欲望など、あらゆる負の想念を好む。そして、狙いを定めた獲物は肉体から魂まで、全てを糧にしてしまう生物。

そう考えると同時に、ミルザ(この悪魔)を従えているイブルは、相当な暗い過去があるのではと考えていた。

「ラスリア……。だっけ。あんた、見た目と違って図太い神経しているなあ……」

平常心に返っているラスリアを見て、ミュルザはため息をつく。

「……とりあえず、本来の目的を達成しましょう！おそらく、もう少して遺跡の中心部に到着するはずだから……」

「……“遺跡発掘”という目的は、どうやら本当のようだな」

「……ええ」

アレンの呟きに、静かに応えるイブール。

「考古学にもいろいろな種類があるけど……私が一番興味あるのは古代種“キロ”と、彼らが作り上げた文化……。星と対話する能力を持つ彼らは、いくら調べても尽きないくらい、奥が深いのよ……！」

「“古代種”ねえ……」

「“星と対話する能力”……」

イブールの話に、ミュルザとラスリアはポツンと呟く。

「……どうやら、ここがこの遺跡の中心地みたいだな……」  
そう呟きながら、アレンは辺りを見回す。

彼らを通ってきた通路に描かれていた壁画は、どうやらこの場所の壁画への伏線だったと思われる。

「廊下に描かれていた壁画は、星を旅するキロ達の道のり……。そして、遺跡の中心地であるここに描かれている壁画は……。レジエンディラス（この世界）を見つけ、星と語りながらその地に住む生き物を探し出す……。それを意味しているのかしら……。？」  
この空間に描かれている巨大な壁画にソツと触れながら、感激するイブール。

ミュルザはその隣でやる気なさそうな表情かおをしている一方……  
「……どうした……。？」

アレンは壁画を触り、瞳を閉じて黙り込んでいるラスリアを目撃する。

「……」

彼の呼びかけに対し、ラスリアは何も答えなかった。

何をしているのかと気になりながらも、とりあえずは黙って見守るアレン。1分程経過したくらいに、ラスリアの瞳が開く。

「古代種・・・彼らは、永い旅路を経てこのレジエンディラスにたどりついたんだな・・・って考えていたの」

「・・・そう考えさせるモノが、壁画これにあったのか・・・？」

アレンがラスリアに問いかけると、せつなそうな表情かおをしていた彼女が、ハツと我に返る。

「なんとなく・・・かな？それより、イブール!!」

「何？ラスリア？」

首をかしげるアレンに対し、あたふたし始めたラスリアは、少し離れた位置にいたイブールを呼ぶ。彼女に呼ばれたイブールは、その両手に何かを握り締めていた。

「何か、収穫になる物とかあった？」

「ええ!・・・まあ、大した物ではないけど・・・」

そう呟いたイブールは、握り締めていた物をアレン達に見せる。

「石の・・・かけら？」

イブールの掌にあった物は、淡い水色をした石のかけらだった。

「これが“収穫”になるのか・・・？」

「絶対とは言えないけど・・・でもね、今さっき調べたら、この石は遺跡を形作る物質とは全く異なるみたいなの。・・・“未知の物質”といった所かしら？」

“遺跡発掘”とは、ここまで調べ上げるモノなのか？

考古学に対して知識も興味もないアレンにとって、熱心に遺跡を調べるイブールが不思議であり、逆に新鮮な感覚を持っていた。

「とりあえず、今回の調査はここまでね！」

「・・・もういいのか・・・？」

「だって、この遺跡を隅から隅まで調べていたら、一生を終えちゃいそうなくらい時間がかかりそうですもの・・・」

そう語りながら、イブールはフツと嗤う。

「イブール姐さん！学術都市アテレステンに・・・一旦戻るのか？」  
ミュルザはそう問いかけながら、チラツとラスリアの方を向く。

「どうやら、ミュルザ（この男）は相手の心を読めるのだろうな・・・。だが、なぜラスリアの方を向く？」

「まあ、結構動いた事だし・・・アテレステンでメシでも食べるかね！アレン君」

大きな声で話しながら、ミュルザがアレンの肩に腕を置く。

「・・・おい・・・！」

アレンはその腕を振り払おうとすると

「あの嬢ちゃん、他人ひとに知られたくない事があるらしい・・・。今は詮索しない事をお勧めするぜ・・・」

耳元でそう囁いたミュルザは、その後のアレンの肩から腕をどかす。

その後、彼ら4人はオーブル遺跡を出て、ラプンツェル山脈を下山していく。次の目的地は学術都市アテレステン　　一風変わった2人組であるイブールとミュルザと共に旅をする事になったアレン達。

彼はオーブル遺跡で“イル”の手がかりがあまりなかったのに対して残念な気持ちはあったが・・・それよりも、ミュルザが言っていた“他人に知られたくない事”の方が気になって仕方ない状態になっていた

## 第6話 一風変わった2人組<後編>（後書き）

いかがでしたか。

今回出てきたイブールとミユルザのキャラ設定は漫画『黒執事』の影響を強く受けています。しかし、この設定のおかげで、いくつか構想が浮かんできていますので、『黒執事』万々歳ですね

ちなみに、主人公のアレンのモデルは『FFVII』のクラウドや、『テイルズオブリバーズ』のヴェイグみたいな寡黙キャラです！

ご意見・ご感想のほかに、細かい評価もお待ちしてます

第7話 アテレステンに到着して(前書き)

今回は、イブールの視点からスタートです

## 第7話 アテレステンに到着して

古代種族「キロ」

彼らは星と対話する能力と、

高い知識を持つ一族。星から星へ旅を続け、生活を続ける。その能力から多くの星を切り開き、生き物が住める世界へと変化させる事を可能にした。しかし、今でいう“人間”が増え始めた時期からその数が減り始め、“8人の異端者”なる者が現れて起こった世界大戦によって、絶滅寸前に追い込まれる。レジエンディラスでの歴史において、彼らは絶滅したと思われるが

「“星の意思”と関係があるからだ」

自分の連れであるミュルザが言っていた言葉の意味を、イブールは考えていた。

彼女と共に旅をするミュルザは、一見は口数の多い軽薄な雰囲気のものだが、その正体は強大な力を持つ悪魔。オーブル遺跡で銀髪の青年アレんと、黒髪の少女ラスリアに出会った2人。しかし、不死者アンデッドとの戦いで、イブールが「命令」してしまったため、彼らにミュルザの悪魔としての力を見せてしまった。

その後、ミュルザ（悪魔）は2人の記憶を消そうと試みたが、消せなかった。イブールが思い出しているのは、その直後の台詞だった。悪魔あいつの力で記憶の消せない人間がいるなんて、思いもしなかったな……。でも、あのアレんって子はともかく、ラスリアは普通の女の子に見えるんだけど……。何者なのかしら……。？不思議そうな表情でイブールは考え事をする。

「俺様だって完璧ではないんだぜ？ご主人様よ……。！」  
ミュルザが彼女の耳元で囁いた。

人間の心を読むミュルザ（こいつ）の前では、あまり考え事できないな……。

イブールはフーツとため息をつく。

ラプンツェル山脈を降りたアレン・ラスリア・イブール・ミュルザの4人は、定期的に出ている馬車に乗って学術都市アテレステンを目指していた。“学術都市”と言われる事もあり、馬車の乗客には学者や宗教家の風貌をした者達が多い。

「ねえ、イブール……」

ふと顔を上げると、ラスリアがイブールに声をかけてきた。

「なあに？ラスリア……」

彼女はラスリアの顔を真正面から見る。

黒髪と黒い瞳

東方にあるシモク二人に似た顔立ちだけ

れど、言葉のなまりからして、シモク二人とは思えないわね……

「……イブール？」

「あ……ごめんなさい！……何だっ たっ け？」

ラスリアの言葉で我に返ったイブールは、再び話を聞く体勢になる。

「えっと、大したことではないのだけれど……」

「？」

イブールは笑顔で首をかしげると、ラスリアは自分の首筋を押さえながら口を開く。

「あなたの首に巻いているスカーフ（それ）……暑くないの……？」

「……！！！！」

その直後、イブールの表情が凍りつく。

もちろん、こんな暑そうな状況でスカーフをはずさないのにはちゃんとした理由がある。それは、決して知られたくない「モノ」がスカーフの下に隠れているからだ。

……一緒に旅をする事になったとはいえ、まだこの子達には

この時、イブールの頭の中には今から6年前

彼女が

16歳の時に起きた惨劇が浮かんでいた。

飛び散る血……穢された肉体……そして、現れる悪魔……

その出来事は、彼女にとって絶対に思い出したくない過去。ましてや、出会って間もないアレンやラスリアに話すことなどできるはずがない。

自分の過去に関わりがあつて首にスカーフを巻くイブール。それを知られたくなかつた彼女は

「・・・首元にこのスカーフを巻いていないと、落ち着かないのよ！」

普段の笑顔に戻つて答える。

その表情を見た時、最初は驚いていたラスリアも、ホツとしたのか穏やかな表情に変わったのだつた。

「・・・おい。そろそろ、アテレステンに馬車が着くぞイブールとラスリアの横からアレンがボソツと呟く。

「あら、本当？・・・じゃあ、降りる準備をしなきゃね・・・！」

アレン・・・ちょうど良いタイミングで、助かつたわ・・・これ以上、スカーフの話をしたくなかつたので、この時出たアレンの台詞にイブールは救われたような感覚を持った。

アテレステンに到着した彼らは、町の入り口で白い装束を渡される。

「なんだこりゃ・・・？」

「今日はライトリア教の祝典・・・。故に、この街を通る全ての人間が、象徴的な色である白い装束を身につけなければならないのだ」  
出入り口にいた役人はそう言っていた。

「・・・つたく、なんで俺まで・・・」  
渋々とミュルザは白装束を身につける。

確かに、悪魔であるミュルザにとって宗教的なモノは堅苦しい以外の何者でもない。しかし、目立たないためにも、本人には我慢してもらつた他なかつたのだ。

「白装束があつて良かった・・・」

「え・・・？」

ラスリアが小さな声で呟いていた台詞を、イブールはたまたま聞いていた。  
チラツと見ると、ラスリアの表情かおがそわそわしていて、周囲を気にしているように見える。そんな彼女達の様子を横目で見ていたミュルザは、ふと変わった人間の気配を感じていた。

学術都市アテレステンに到着してから、アレンは周囲の空気が微妙なかんじになっているのを感じ取っていた。

ラスリアはなぜかソワソワし始めているし、イブールとミュルザ（紫野郎）も何か深刻そうな表情かおをしている……。一体、どうなっているのだから

アレンはフーツとため息をつく。

「ところで……この都市で学者連中が集まる場所はどこだ……？」

他の人間がどんな事を考えていようと、俺はただひたすら“イル”を探し出さなくてはならない……。探さなくてはならない理由が自分でも理解できていないが、“本能的に”求めている……というべきなのだろうか……。

ラスリア達を見回しながら、アレンは考える。

「そう……ね。じゃあ、私の知り合いがいるコミュニニ大学にでも行ってみましょうか……！」

「コミュニニ大学……？」

振り向くと、ラスリアが首をかしげながら、何の事かという表情かおをしている。

「コミュニニ大学は、この学術都市アテレステンで一番大きな大学なの。施設や学科の豊富さはもちろん、あの大学の図書館に眠る文献の数も半端じゃないの……。」

「……なるほど。そこへ行けば、何かわかる……という事か？」  
「……まあ、一応ね！」

白装束を身に着けたアレン達は、町の表通りを通り抜けながら歩く。行き行く人全てが白装束を身にまとっているため、アレンにとっては少し不快に感じる光景だった。

「きゃあつ！」

ドンという音と共に、ラスリアが誰かとぶつかった。

「痛たたたた！」

ぶつかった拍子に地面に座り込んでしまったラスリアは、お尻を押さえる。

「君！……大丈夫かい？」

彼女に手を差し伸べたのは、白い甲冑を身にまとう一人の騎士だった。

「あ、はい。大丈夫です……」

この騎士の手を取って立ち上がった時、兜から見える金色の瞳にラスリアはドキツとする。

「よかった……。すまなかったね。わたしがちゃんと前を見ていなかったから……」

「いえ！私こそ……周りばかり見ていたから気がつかなくて……」

顔が赤い状態で会話をするラスリアを見て、アレンはなぜか複雑な気分になっていた。

「それでは、お嬢さん。わたしは職務がございしますので、これにて失礼します！」

しっかりと敬礼をした後、甲冑を身にまとった騎士はアレン達が来た方向へ歩いて行った。

「彼、きつと仕事のできる男……ってかんじがするわね！」

「そうかあ？なんだか、いい所のお坊ちゃんってかんじにも見えたが……」

アレンの横でイブールとミュルザが会話をする。

「!!!!!!」

何かを感じ取ったアレンは、その方向をギッと睨みつける。

「ニヤアー……」

振り向くと、アレンの目の前にいたのは1匹の黒猫だった。

……誰かの視線を感じたような気がしたが

去って行く猫を見つめながら、“誰かに見られていたような感覚”  
を覚えるアレン。

「アレン……どうしたの？」

ラスリアの声が聴こえたと同時に、アレンは我に返る。

「……何も無い。俺たちも行くぞ」

進行方向に向きなおしたアレンは、イブール達の下へ戻って行く。

しかし、この通りにある建物の奥では……

「シヤム……ご苦労だった」

先ほど、アレンが見かけた黒猫を撫でる。

そして、不適な笑みを浮かべながらこの男は呟く。

「……確かめる価値がありそうだな……」

## 第7話 アテレステンに到着して（後書き）

いかがでしたか。

お気づきの方もいるかと思いますが、回によっては伝承のような口調で始まる所があつたかと思えます。

これには理由があつて、サブタイトルには表記してませんが、このタイプの文面は章の始めという意味で入れています。

例えば、オーブル遺跡へ向かい始める事を書いた第4話とかも同じ手法です。

その回以降の5・6話は会話からであつたり、普通に物語が始まっているように書いています。

この”ガジエイレル”作品は、所々でこういった説明を入れたほうが良いと感じたので、今後も同じ手法で書いていきます。

さて、今回の章では、ヒロインであるラスリアの微妙な立場が良くわかる章となっています。

アレン達を後ろで見張っていた男の正体は……!?

次回をお楽しみに

ご意見・ご感想をお待ちしています

## 第8話 教授との会話の中で

「すごい・・・まるで、宮殿みたいだわ・・・！」

感激の余り、声が出ないような表情でラスリアは辺りを見回す。

学術都市アテレステンに存在するコミュニ二大学。都市の中で一番大規模と言われているだけあって、外から見ると本当に宮殿のような大きさだった。城壁を思わせるような門。学生達の話す声・・・。校舎内でも、とても開放的な雰囲気を持つ。

「そういえば、イブール姐さんは現役の学生だったか？」

何かを思い出したかのように尋ねてくるミユルザ。

「んー・・・1年ダブってはいるけれど、大学院に入っているから・・・現役って所ね」

「専攻は、考古学・・・と言った所か？」

普段は他人の会話を静かに聴く事の多いアレンが、めずらしく会話に入ってくる。

大学院・・・イブール（こいつ）からだったら、マトモな情報が得られるかもな

ただし、アレンは純粹に“イル”の事が知りたいだけであった。

「アレンだったらおそらく、図書館に行けばいろいろわかるかもしれないけど・・・その前に、私の用事を先に済ませてもいいかしら？」

「構わないが・・・なぜだ？」

「図書館はいつでも行けるし、閲覧だったら大学の人間じゃなくても可能だしね。ただ、私の用事の方は・・・教授が帰る前に行かないと、済ます事ができないから・・・」

本当は一刻も早く図書館で調べ物をしたいが・・・それなら、仕方ないか・・・

自分の用事を優先させたかったが、一歩留まる事にしたアレン。横

からラスリアの視線を感じたが、あまり気にしていなかった。

「おや、ご苦労だったね。イブール君」

“イブールの用事”を済ませるために、アレン達は彼女の師であるロレリア・ハノバンド教授の研究室を訪れていた。

「お待たせしました、ロレリア教授。・・・これが、今回の遺跡探索に関するレポートです」

そうやってイブールは、荷物の中から取り出した封筒を教授に渡す。ロレリア教授は、机の側に置いてあった眼鏡をつけた後、イブールのレポートに目を通す。そして、紙をパラパラとめくった後に口を開いた。

「これは、なかなか見ごたえがありそうじゃ・・・。後でじっくり読ませてもらうよ・・・」

「ありがとうございます、教授。よろしくお願い致します」

そうやって頭をペコリと下げるイブールを見た教授は、せつなそうな表情で呟く。

「・・・あんな事さえなければ、君はわたしの助手になっていたのかもしれないのにな・・・」

「??？」

その台詞を聞いたアレンとラスリアはきょとんとした顔で教授を見る。

周囲に沈黙が走り、気まずい雰囲気が変わる。

“あんな事”

この時、アレンは以前も思い浮かんだ“イブールの暗い過去”という言葉を思い出す。それについて教授は何かを知っているのかと疑い始めた矢先・・・。

「ロレリア教授!!」

イブールの大きな声が響く。

突然声を張り上げたので、その場にいた全員が驚いていた。

「一つ、お伺いしたいのですが……」

「ん……ああ。何かね？」

呆気に撮られていた教授は、すぐに我に返ってイブールの方を見る。  
「教授は……古代種“キロ”について……どう思われますか？」  
この時にアレンが気がついていなかったが、“キロ”の言葉にラス  
リアがわずかに反応する。

「キロか……」

そう呟きながら考え事をする教授。

なぜ今、古代種の話……？

アレンが不思議に思っていると、考え事をしていた教授の口が開く。  
「“素晴らしい”……の一言に尽きるかな。考古学者の間でも知  
られているように、星と対話できる能力や、魔術を作り出したその  
知識……。古代大戦さえなければ、彼らは今の世界をより良い  
モノに作り上げていただろうに……」

「古代大戦……？」

その場にいた全員が、教授の話に釘付けになる。

「古代大戦とは、このレジエンディアスの文明が滅びる原因となっ  
た戦いの事。多くの学者がそれについて調べ、いろんな説が飛び交  
つておる……」

「……私が大学に入学した頃にも、学内の討論大会で討議されて  
いましたね……」  
イブールが腕を組みながら呟く。

「あの時は、多くの説で学者達は激しい討論であった。文明が滅び  
たのは“自然災害が原因”であったり、“魔物との戦い”が原因で  
あったり……」

「教授さんよ……。あなたはどっと思っていたんだ……？」

“魔物との戦い”に反応したのが、ミュルザが会話に入ってくる。

「永い時を生きるミュルザ（こいつ）の事だ……。何か思うところ  
でもあるのか？」

彼の台詞を聞いた時、アレンは内心でそう思っていた。

「・・・討論大会では少数派な意見だったが、私は古代大戦についてはこう思う。“8人の異端者”と、彼らを生み出してしまった人間の弱さが原因だと・・・」

「“8人の異端者”・・・」

それを聴いたアレンの心臓が強く脈打ち始める。

「それは・・・どんな人達なんですか・・・？」

真剣な表情で話を聴いていたラスリアが、教授に問いかける。

「わからん。彼らについてはどの文献にも載っていないし、何かを発見した学者はいないからな・・・。ただ一つわかる事は、“8人の異端者”はそれぞれ違う民族の出身だったという事だけじゃ・・・」

「

「そう・・・ですか・・・」

残念そうな表情かおをするラスリア。

「これ以上、重い話をしていても仕方ない」と考えたのが、ロレリア教授が立ち上がるうとすると・・・

「ぐっ・・・！！！！」

アレンが頭を抱えて苦しみ始める。

「アレン・・・！！？」

「おい・・・君！！！！」

全身に汗をかき苦しむアレンを見たラスリア・イブール・ロレリア教授が彼の元に来る。

その後ろでは、深刻な表情で彼らを見つめるミュルザ。

頭が・・・熱い・・・！！！！

「ガアアアツ・・・！！！！！！！！」

ドサツ・・・

うめくような叫び声を上げたアレンはその直後、地面に倒れて気を失ってしまう。

アレンは遠のいてくる意識の中で、また一つの“ビジョン”を見ていた

アレン・・・大丈夫かな？

自分たちがロレリア教授と会話している途中、苦しみだしたかと思うと意識を失ってしまったアレン。側で眠りにについているアレンを見ながら、ラスリアは考える。

あれからイブールはロレリア教授と話がしたいというのもあつて、大学内にある学生食堂へ食事をしに行った。ミユルザも「目の届く範囲にいる」と言つて出て行つてしまった。

教授から留守番を頼まれて引き受けたけど・・・もしかしたら、気を使つてくれたのかな  
ロレリア教授の研究室でアレンと一緒に残つたラスリアは、辺りを見回しながら思う。

「やっぱり、私は・・・」  
思つていた事を何となく呟いたラスリア。

「私は・・・古代種“キロ”なのかも・・・」  
小さな声で呟く。

室内は静かで、廊下から生徒の声すらも聞こえない状況だった。

そう考えれば、自分が生まれつき持つ能力にも説明がつく。もちろん、今までも「そうではないか？」とは考えていたものの、今回みたいに他人の見解がなかったから絶対とは思えなかった。しかし、ロレリア教授との会話で、自分が古代種の末裔である事を改めて認識する事になる。

「う・・・」

気がつくくと、アレンがゆっくりと瞼を開いていた。

「アレン・・・大丈夫？」

意識の戻つた彼を見て、ラスリアは優しく声をかける。

「ああ・・・。それより、一体何が・・・？」

「あ・・・あのね・・・」

目が覚めたばかりで眠そうな表情をするアレンを見て、ラスリアは頬を少し赤らめる。

その後、アレンが倒れる直前の出来事を彼に話した。

「あの時はいつぱいいつぱいだっただが・・・そんな事になっていたとは・・・」

少し落ち着いてきたのか、上半身だけ起こしてアレンは呟く。

「ここだけの話だが・・・」

「ん・・・？」

アレンが意識を取り戻したので、ミュルザ辺りでも呼びに行こうかと考えた矢先、彼が口を開く。

「俺は・・・あの教授が言っていた“ 8人の異端者”・・・の説が一番有力なのではと思っている・・・」

「・・・何か根拠でもあるの？」

きよとんとしたラスリアは首をかしげながら彼を見る。

「・・・いや。単なる直感と言った所か・・・」

「プツ」

その台詞を聞いた途端、ラスリアが思わず笑う。

「・・・今、嗤ったな・・・!!!？」

笑われた事を不快に感じたアレンは、物凄い形相でラスリアを睨む。それに対してラスリアは、笑いを必死でこらえながら口を開く。

「いや・・・だって、そんな真顔で「直感だ」なんて言うから・・・」

「悪いか」

「ううん・・・。ただ、貴方は“冷静に現実を見る人”ってイメージが強かったから・・・」

それを聞いたアレンは、不満そうな表情で首をかしげていた。

普段あまり見せないアレンの態度に、ラスリアは新鮮さを感じていたのだった。

「キヤアアアアアアアツ!!!!!!」

扉の向こうで、物凄い悲鳴が聞こえる。

「えっ……！！？」

何が起きたのかと、ラスリアは研究室の扉を開ける。すると、廊下では生徒や教師がバタバタとしていた。

「アレン……私、何が起きたのを見てくるわ……！！」

「あ、ああ……」

研究室にアレンを一人残したラスリアは、悲鳴の聞こえた方へと走り出す。

向かった先では、何か恐ろしいモノを見たような表情で逃げ回る学生たち。

「何があつたんですか……！！？」

ちようどすれ違った男子生徒に、ラスリアは何が起きたのかを尋ねる。

「だ……校舎内に……突然、魔物が現れたんだ……！！！」

怯えた表情で応えた生徒は、ラスリアを振り切って走り去ってしまふ。

一体なぜ、大学内に魔物が

！！？

突然の出来事に、少し混乱してくる。

「あれは……！！？」

向かった先にある中庭には、校舎の天井を破りそうなくらい巨大で、右手にこん棒を持つ“トルル”がいたのであつた

## 第8話 教授との会話の中で（後書き）

いかがでしたか。

”古代大戦”について補足ですが、この”レジエンディラス”は大戦によって一度文明が滅び、また文明が発達し始めたという次第です。

なので、この戦いが起きるまでは2つの世界は1つだったという設定になっています。ただ、Leftに出てくる人々は、誰もこの設定を知らないという事にもしています。

それと、”8人の異端者”については『Right』の第3話を読んでいただければわかり戴けると思いますので、お時間ある時にでもどうぞ

コミュニニ大学内に突然現れたトル。

平和な場所に、なぜ魔物が……!!!?

ご意見・ご感想、それと評価の方もお待ちしております（^^）

## 第9話 治癒魔法（前書き）

<前回までのあらすじ>

アレン達は”イル”の手がかりを求めて、学術都市アテレステンにあるコミュニニ大学を訪れていた。

イブールの師でもあるロレリア教授との会話中、突如意識を失ってしまうアレン。

その後、アレンを介抱していたラスリアだったが、研究室の外から悲鳴が聞こえ・・・

## 第9話 治癒魔法

「きゃあああああつ!!!」

「逃げるおつ!!!」

コミュニ二大学内に突如現れてたトルル。

周囲にいた大学関係者は、皆パニックになっていた。

ドガアアアン!!!!

トルルが棍棒を一振りしただけで、中庭にあつた銅像が粉々に砕けてしまう。

どうして、こんな所に魔物が

そう考えているや否や、トルルの青白い瞳がこちらへ向く。

「あれ……?」

魔物を正面で見たとき、ラスリアは首をかしげながら違和感を感じる。

トルルは本来、知能が低いつて聞いたことあつたけど……。

あれは、まるで……

「そこのお嬢さん!!!下がちなさい……!!!」

すると、目の前に甲冑を身にまとつた兵士が何人が現れる。

おそらく、国の兵士であろう。

「はい……」

少しずつ後ろに下がるラスリア。

「この……なんで、コミュニ二大学こにに魔物が!?!」

「とにかく、こいつを倒すぞ!!!」

そう叫びながら、この4人の兵士達がトルルに立ち向かう。

すると、魔物は近傍を持った左手を思いつきり振り回す。

「ぐわああつ!!!」

「ぎゃああああつ!!!」

剣を持って立ち向かう彼らだったが、トルルの一撃でそれぞれが壁

に吹き飛ばされてしまう。

なんていう怪力(力)……………!!!!

トルルの馬鹿力を目の当たりにしたラスリアは、つばをゴクリと飲み込む。

「!!!!!!」

気がつくのと、トルルがラスリアの目の前まで移動していて、しかも腕を振り上げていた。

「きゃああつ!!!!!!」

物凄い轟音と共に振り下ろされる棍棒。

ラスリアは何とか避けたが、彼女が立っていた地面に大きなひびが入る。

「黒髪……………女……………」

「え……………」

トルルがうわ言のように何かを呟いている。

「キ……………口の……………末……………裔……………」

「!!!!!!」

まさか、こいつの狙いは……………私……………!!!!?

本能的に「逃げなくては」と感じ取ったラスリア。しかし、先ほどの攻撃を避けてから床に座り込んでしまい、彼女の足がガクガクと震えていた。

足が動かない……………どうして!!!!?

逃げようにも逃げられないラスリアにお構いなく、トルルはゆっくりと彼女に近づいてくる。

いや……………誰か……………助けて……………!!!!

怖くて声が出なくなっているラスリアは心の中で叫ぶ。トルルが腕を振り上げ、彼女に手を出そうとした瞬間……………

「ラスリア!!!!!!」

彼女の名前を呼ぶ声が聞こえる。

ドガアアアアン!!!!!!

物凄い音が周囲に響いたが、ラスリアは自分を誰かが抱きかかえているのに気がつく。視線を上によらずと、銀色の髪が彼女の頬に触れる。そこにいたのは、息切れしながらラスリアを抱きかかえるアレンの姿があった。

ラスリアがトロールを確認する数分前……

「一体、何が……」

ラスリアが研究室を出て行った後、ボソツと呟きながら立ち上がるうとするアレン。

「っ……!!」

立ち上がった瞬間、少しだけ眩暈に襲われる。

貧血……ではないはずだが、何だか気持ち悪い気分だ……

顔が真っ青になっていたモノの、何とか外に出ようと試みる。すると

「アレン！生きてっか!？」

「お前……」

なぜか窓際に、ミュルザが立っていた。

「一体、外で何が……?」

頭を抱えながら話すアレンにミュルザは言う。

「……問題なさそうだな」

「!?!?」

「……よく聞け、アレン。どういうわけだか、この大学校舎内に魔物が現れた」

「何!?!?」

“魔物”の言葉を聞いたとたん、がバット身を乗り出すアレン。

「早く倒さねば……!?!?!?!」

大学校舎内のため、当然魔法を使うことは許されない。だから、尚

更、剣などの打撃で倒さなければならぬ。

一刻も早く向かおうとするアレンに、ミウルザが軽く制止する。

「お前なら気がついていないかもしれんが・・・この大学に、俺みたいな異質な存在がもう一人いる・・・」

「何・・・だと・・・?」

悪魔こいつみたいな異質な存在・・・?

何のことかとアレンは考えていると

「あーもー、思考ストップ!!とにかく、俺はその“異質な存在”を確かめてくるから、お前はラスリアのところにも行ってやれ・・・!!!」

そういつたやり取りがあつて、現在に至る。

「ラスリア!!!」

大学の校舎内を走り回っていると、魔物に襲われているラスリアを発見する。

彼女を抱えて逃げた事で、魔物の攻撃から助け出すことはできたが、寝起きの運動がきつかったのか、息切れをしているアレン。少し落ち着かせた後、口を開く。

「・・・大丈夫か?」

「ええ・・・大丈夫よ!」

苦笑いでそう頷く。

気丈な表情をしていたラスリアだったが、手が微かに震えていた。

本当は怖いはずなのに、無理しやがつて・・・

表情は笑顔なのに、内心は怖がつているラスリアを見て、なぜか「守らなくては」という想いに駆られる。

なんだ・・・このかんじは・・・!!?」

「人を守りたいという気持ち」を知らなかったアレンにとって、この想いは生まれて初めてのモノであった。

「・・・お前は下がっていきなれ」

トロールから少し離れた場所でラスリアを下ろしながら、アレンは低

い声で呟く。

「……………!!」

ラスリアを庇うようにして抱きかかえたせいか、魔物の攻撃が少し掠ったようだ。

「アレン……腕……」

ラスリアが、血の出ているアレンの二の腕に視線を向ける。

「ああ、これか……。全く問題はない……」

棍棒の先っぽが当たったのか、少しだけ痛む二の腕。

「でも、戦っているうちに骨が……。なんて事になったら、取り返しがつかないし……」

そう呟いたラスリアは、怪我をしている方の腕を掴む。

パアアアツ……

ラスリアがその黒い瞳を閉じたかと思うと、彼女の手が光り出す。

「これは……」

気がつくくと、傷口がみるみると塞がっていく。

これは……キュア治療魔法……!!??

どんな魔法かは知っていたものの、初めて目にしたキュア治療魔法に対して、アレンは驚きを隠すことができなかった。そして、二の腕に負った傷は、あっという間に治ってしまった。

「助けてくれてありがとう、アレン!」

「あ……ああ……」

このとき、柔らかい笑顔で礼を言ってきたラスリアに、アレンは少しドキツとする。

気を取り直して、トロールに剣を向けるアレン。

ガキイイン!!!!!!

彼の剣とトロールの棍棒が当たったとき、耳を塞ぎたくなるような音が中庭に響く。

幸い、トロールは怪力が取り柄の魔物で動きも鈍いため、この後はあまり苦戦することなく倒すことができた。

アレンはこの時に戦っていたから気がついていなかったが、この時、物陰から彼とラスリアのやり取りを眺めている人間がいた。

「あれ」が言っていた通りだ。・・・あの娘は、やはり・・・」  
独り言をつぶやきながら、ほくそえむ男。

その片手にはトロルが封印されていた本がある。そして、魔物が倒されたのを確認した男は生徒たちの方へ去っていくのだった

## 第9話 治癒魔法（後書き）

いかがでしたか。

この回を読まれた事で、ラスリアが古代種族「キロ」である事はす  
ぐにわかると思います。

しかし、まだアレン達には教えていないので、知っているのはラス  
リア本人と、この作品をお読みになっている皆様のみです。

私は”既にわかりきっているけど、登場人物たちには知られていな  
い”という書き方がこれからも多いと思いますが、よろしく願  
います！

ご意見・ご感想、そして評価の方をお待ちしています！！

たくさんの方にお読みいただければ幸いです

## 第10話 天使と悪魔（前書き）

今回は、ミュルザの視点からスタートです。

## 第10話 天使と悪魔

“異質な存在”

自分の事をそう言った表現で口にしたとき、何か変なかんじがした。俺・・・ミュルザは、イブールという魔術師と行動を共にする悪魔異質といえれば確かにそうだが、自身に対してそういった価値観を持つたことはなかった。

研究室で倒れていたアレンをラスリアの元へ行くよう促した後、人間には見えないくらいの速さで、コミュニ二大学の校舎を走り回るミュルザ。

この建物に入ってから、妙な気配は感じていたが・・・今は、はつきりと感じる・・・。魔物が現れたのも、もしかしたらそれいつらの仕業かも  
走り回りながら考え事をする。

「!!!!!!!」

何かに身体が反応したのか、その場に立ち止まるミュルザ。  
立ち止まった場所は、生徒があまり使わなそうな階段だった。

「・・・コソコソしてないで、さっさと出てくるんだな」  
そう呟いて上を見上げるミュルザの瞳は、血のように真っ赤であった。

これは、悪魔が敵に対して威嚇行動を取ったり、特殊能力を使う際に起こる現象である。すると、カツンカツン・・・という靴の音と共に水色の髪色をした女性が現れ、ミュルザの方に視線を持っている。

「人間界で、お前のような奴を見かけるのは・・・初めてだな・・・」  
「・・・それは、こちらの台詞です」

その直後、ミュルザからは黒い翼が。そして、水色の髪を持つ女性

の背中からは白い羽が現れる。

「・・・なんで、“天使サマ”が人間の味方をする!?!」

「そういう貴方こそ・・・悪魔のくせに、随分とあの女性に入れ込んでいるようだけれど・・・?」

ミュルザが“天使”と述べる女性は、彼の質問に質問で返してきた。

天使 文字通り、“天の使い”である白い羽を持った種

族。“神の使い”とも言われるが、ここで言う“神”は天地創造をした存在ではない。ただ“自分が唯一絶対の存在である”という歪んだ考えしか持たない生命体の事を指す。

「・・・雑魚の魂を貪るのには飽きてしまったからな。・・・お樂しみは最後に取っておいていただけさ・・・!」

そう語るミュルザの表情は狂気に満ちていた。

「くだらないわね・・・」

「そういうてめえの方こそ!!」

天使がボソツと呟いた直後、反論するかのように叫ぶミュルザ。

「使い魔を利用して、俺達を後ろから尾行していた野郎・・・。あれがお前のご主人様だろう?・・・どう見ても精神がいかれていそうなのにな、不浄を嫌う天使あんなが従うなんて、反吐が出るね・・・!」

馬鹿にするような表情で、ミュルザは相手を皮肉る。

彼らの間に緊迫した空気が流れる。天使と悪魔は、古代より争いが絶えず、永きに渡って対立している関係。相容れない存在なのだ。・・・私はただ、“命令”で動いているだけ。それさえなければ、あんな汚らわしい男に力を貸したりしないわ」  
真剣な表情で、その女性は述べる。

彼女の髪が少し揺れた時、前髪の隙間から何か痣のようなモノがちらりと見える。それを見逃していなかったミュルザが、首をかしげながら口を開く。

「あんたの額にある刺青・・・。それって確か・・・」

「!?!?!」

彼の台詞を聞いたとたん、女性の顔色が激変する。

「ここは、人間が多くいる場所……。あの男の事もあるから今日はここで退散するけど、次に会った時は容赦しないから……！」

「あ……おい!!!」

翼を羽ばたかせる音が一瞬聴こえたかと思うと、ミュルザの頭上に先ほどの天使はいなくなっていた。

奴の額にあった刺青……あれは確か、墮天使の刻印

自分が持つ黒い翼を収めたミュルザは、あの墮天使がなぜ人間の味方をしているのかを考えながら、アレン達のいる方向へ歩き出す。

「お！イブール姐さん!!!」

イブールの気配をたどって進んだミュルザ。

そこにはアレンやラスリア。そして、ロレリア教授もいた。

「ミュルザ……あんたつてば、今までどこにいたのよ!?!?」

いつもと変わらぬ態度で、イブールの怒号が飛んでくる。

「悪い悪い!!ちよつと、町中をうるついでたもんで……」

とりあえず、いつもの軽い口調で受け流そうとするミュルザ。

イブール主には、後で話しておかなくてはな……

笑顔で会話する一方、内心はそう思っていた。

「あ……ゴホン!!!」

気がつくのと、わざとらしい咳払いをしているロレリア教授おっさんが自分たちの横に立っていた。

「あ……ごめんなさい、教授」

「いや、構わないのだが……わたしは講義もあるので、ここいらで失礼するよ」

そう言っつて、ソソクサと退散していった。

……どうやら、寂しがりやのおっさんみたいだな……

歩いていくロレリア教授を見て、ミュルザは思う。彼は普通の人間の心が読めるため、どんな言葉を発しようとも、嘘か真実かは手に

とるようにわかる。

「さて・・・と。私の用事も終わった事だし、アレンの用事を済ませましようか！」

「・・・頼む」

アレンとイブールの会話が終わった後、“イル”に関する情報を調べるため、大学内にある図書館へ向かい始めた。ラスリアとイブールは女同士で他愛もない会話をしながら進み、アレンとミュルザは黙ったまま進んでいた。

…野郎と2人で歩く趣味はねえが、女2人の会話に割り込む気はなれねえな…。

アレンをチラツと見ながら、ミュルザは考える。

「おい…」

「…なんだ？」

アレンの方から話しかけてきたので、一瞬戸惑うミュルザ。すると、アレンは低い声で話し始める。

「あんたは…”イル”の事、本当は何か知っているんじゃないの？」

その台詞を聞いたミュルザは一瞬黙る。

しかし、思い出したかのように話し出す。

「確かに…俺は人間（お前ら）より長く生きているから、いろいろな事を知っている。…しかし、“星の意思”に関する事だけは、何も知らないな…」

そもそも、悪魔は”星の意思”については関わりうとしねえから

アレンに告げた後、一瞬だけそう考えた。

「ついでに言っておくと、俺はあんたの心だけは読めない」

「…どういう事だ？」

ミュルザの台詞に、アレンの表情が険しくなる。

「そのままの意味だよ！俺が言うのもあれだが、お前も人間じゃな

い”何か”かもな…」

「そうか…」

その後、2人にまた沈黙が訪れる。

悪魔が心を読める生き物というのは、太古の記憶によりある程度知っている奴らばかり…。アレン（こいつ）のように心の読めない生き物ってというのは、相当やっかいな連中…。って事になるのかもな歩きながらミュルザはそんな事を考えていた。

図書館に向かう途中で私はラスリアと普通に会話をしていただけ、他人に興味を持たないミュルザと、割と無愛想なかんじのアレンが2人で会話をするなんてめずらしいな…

図書館に到着後、本を物色しながらイブールは考える。

図書館に到着したイブール達は、「ここでは一般人も本の閲覧ができる」とアレンやラスリアに告げ、各自調べ物を開始していた。本棚越しに見えるアレンとラスリアを見ると、2人は違う本棚を眺めている。アレンはいつもと変わらず無表情だが、ラスリアの表情は冴えない。

何があったのかは知らないけど、<sup>トロール</sup>魔物に襲われたりすれば、普通は沈むわよね…

「今はそつとしておこう」と考えたイブールは、星命学関係の本を探し始める。すると…

「イブール姐さん」

「あら、ミュルザ！…どうしたの？」

隣にミュルザが来て、彼女に声をかける。

「ちよつと、話が…」

その後、イブールとミュルザは図書館近くにある人気のない場所

へ行つた。

「話つて何？」

移動中、いつもは何かしら話しかけてくるミュルザが黙つたままだったので、到着後、イブールはすぐに話を切り出す。

「…この校舎内に魔物が出没していた時、俺は珍しい奴を見た」

「え…？」

急に真剣な表情をして話し出したので、イブールはドキツとした。

「珍しい奴”なんて言葉、あんたが使うのも変なかんじだけど…  
なんだつたの？」

「…天使だ」

「…は…！！？」

あまりに予想外の言葉に、イブールはつい声を張り上げてしまう。  
その後、イブールは声量を小さくして話す。

「…まあ、悪魔あんたみたいな生き物があるのだから、天使がいても不思議ではないけれど…。でも、なんでまたコミュニ二大学（こんな所）に…？」

星命学を勉強するイブールの周囲には型破りな思想を持つ人が多かったため、この突拍子のない話に対して、すぐに理解を示す事ができた。もつとも、悪魔と”契約”をしている時点で、イブールは普通の人間とは異なる人生を歩んでいるわけだが

「どうやら、天使そいつも俺と同じように、とある人間についてるみたいだ。…奴の目的はわからないが、本題はそいつではなく、そいつが味方をしている人間のほうだ」

「天使が側にいるくらいだから…そいつも”特殊な人間”って所かしら…」

イブールが腕を組みながら考え込む。

「…その人間は、おそらくラスリアを狙っている」

「え…」

ラスリアの名前が出たとたん、イブールの表情が凍りつく。

だが、イブールはチラツとミュルザの顔を見る。彼の表情が深刻になっっているのが、見てすぐに気がついた。

「おそろく」…なんて、あんたらしくない曖昧な表現ね？」

「…多分、あの天使が周りをうろついているから、考えている事が読みづらいんだろつよ」

イブールの台詞に、ミュルザは皮肉っているような口調で答えた。

その後、ミュルザは一息ついた所で会話を再開する。

「ラスリアちゃん…。彼女は古代種”キロ”の生き残りだ」

「…そういう事…」

”ラスリアが狙われている”という事実がわかったとき、「なぜ彼女か」と疑問に思っていた。しかし、絶滅したと思われる古代種であるのなら、納得ができる…イブールはそんな表情をしていた。

「という事は、その男…ライトリア教の関係者というかんじね…」

「ライトリア教ね…」

そう言つて、ミュルザは鼻で哂う。

しかし、そんなちよつとした仕草に対して、イブールは気にも留めていなかった。

星命学を元にした宗教であるライトリア教における古代種”キロ”は、”星を切り開く民”として、教団の中で神聖視されている存在である。しかし、古代大戦によってその数が激減。彼らを味方につければ、世界の発展と共に教団の権威も強くなる

教えとは裏腹に、そういった野望を持つ彼らがキロの生き残りを探すのに対して、躍起になつているのをイブールは知っていた。

「ここ周辺は兵士共が目光らせているから大丈夫だろうが、これからは注意してやつた方がいいかもな」

「…軽い気持ちであの子達を選んだのに、どうやらすごいのに当たつてしまつたようね…」

イブールが頭を抱えながら、ため息をついた。

すると、ミュルザは彼女の耳元でささやく。

「…だが、あいつらみたいいな連中と旅した方が、”目的の奴”に早

く逢えるかもしれないぜ…？」

「……」

「人間って奴は、特異な存在同士だと惹かれあうようにできている…。俺がお前の魂を頂戴する日も、近くなりそうだな…」

そう呟くと、ミュルザの唇がイブールの首元に触れる。

「…私は、”奴”を見つけて殺すまで、絶対死ぬわけにはいかない

…。両親を…殺した奴を見つけるまでは…！」

ミュルザがイブールの身体に触れている一方で、彼女の瞳は憎悪に満ちていたのだった…。

## 第10話 天使と悪魔（後書き）

いかがでしたか。

初期設定でのイブールとミュルザの関係はこんなモノではなかったのですが、ミュルザを”悪魔”という設定にしたらこんな風になっちゃいました（苦笑い）

でも、主人公のアレンとラスリアのペアが純な雰囲気なので、対照的で良いかなとも思います。

話についてですが、イブール・ミュルザペアはラスリアが古代種の末裔である事を知りましたが、本人はまだアレンにだけは話していません。

次回以降では、最後の主要キャラであるチャスが登場してくる事になります。彼らの関係はどうなるのか！？

次回をお楽しみに

ご意見・ご感想をお待ちしてます！

**第11話 特殊な結界の先にあるものは（前書き）**

今回は、丸々ラスリア視線で話を進めます！

## 第11話 特殊な結界の先にあるものは

「二大魔術」

それは、“命”と“時”の属性を持

つ魔術の事を指す。“命”とは、生き物の魂に繋がる属性を指し、回復魔法や蘇生術などがこれにあたる。一方、“時”は時間の流れを操る事を指し、時間を止めることや空間転移、姿をくrams魔法などがこれに当たる。

レジェンディラスにおいて、火や水などの4大元素による魔術を使える人間は多いが、この二大魔術に関してはいないに等しい。というのも、これらの術式を理解して使いこなせるのは、他ならぬ古代種キロだけだからである。

「・・・飛行竜ねえ・・・」

イブールが本を眺めながら呟く。

コミュニニ大学を後にしたアレン達は、街道を進みながらラスリアが見つけた1冊の本を眺めていた。彼らは「イル」に関する事が書かれた本を探す事はできなかったが、ラスリアが一つ気になる資料を見つけていたのだった。

「イル”の手がかりは見つからなかったけど・・・この飛行竜を操る“竜騎士”ならば、何か知っているんじゃないかなって思ったんだけど・・・どう?」

「“竜騎士”ねえ・・・俺も奴らには会った事ないから知らねえが、あたりの可能性もありそうだな・・・」

「・・・アレンはどう思う?」  
ラスリアとミュルザが会話する中、彼女は後ろにいたアレンに視線を向ける。

・・・“イル”の手がかりが、あの図書館で見つけられなかったとはいえ、そんな距離離さなくてもいいのに・・・

笑顔とは裏腹に、ラスリアは内心、しょんぼりした気持ちでいっぱいであった。返事を返してこないアレンを見て、また再び本へと視線を戻すラスリア。すると・・・

「・・・ラスリア」

「わっ!!?」

横を向くと、いつの間にかアレンがすぐ隣に来ていた。

あまりに突然だったため、声を張り上げて驚くラスリア。アレンは返事もせず、黙ったまま彼女を見つめる。

「な・・・何・・・?」

顔がすごい近かったため、頬を少し赤らめながら、ラスリアは緊張していた。

な・・・なんで、こんな所で緊張しているのよ、私!!!?

と、心の中で叫んでいた。

「眠い」

「え・・・?」

気がつくくと、アレンの瞳がものすごくシヨボシヨボしていて、今にも寝てしまいそうな勢이었다。

「うーん・・・これは、何かありそうだな・・・」

横を見ると、アレン程ではないが、ミュルザも眠そうな表情をしていた。

「私はなんともないけど・・・」

そう呟くイブールはハツとした。

「これってもしや・・・!!?」

「イブール?」

眠そうな男達を見て、イブールは何かを思い出したような表情かおをする。

「でも、そんな・・・」

「イブール!!どうしたの??」

考え込むイブールが気になったラスリアは、彼女の肩をさする。

「・・・いや、高等魔術だから使える人なんて見たことなかったけ

ど……」

「これ……アレン達が眠くなっているのは、魔術による効果って事？」

それを知った時、ラスリアは違和感を感じた。

これが魔術だとすると……魔法を操れるイブールはともかく、私がなんともないのは少し変よね……

考え事をしながら、ラスリアは周囲を歩き回る。気がつくくと、街道から外れ、森の中へと入り込んでいた。

「風が気持ちいい……」

森の中は静かで、一人でいても安らげる安心感のようなモノを感じていた。

そういえば、アレンと一緒に旅に出て以来……こうやって一人で動き回るなんて、久しぶりだな……

遺跡に行ったり、大きな街の大学へ行ったり……これまでの事を思い返すラスリア。彼女の後ろには、イブールがアレン達を率いて、歩いてきていた。

「どうやら……これが眠気を感じる正体って事ね……」

「？」

追いついてきたイブールが、ラスリアの方を見つめながら呟く。

「イブール……それって、どういう事？」

「それはね……」

彼女の隣に来たイブールは、手探りをしているような形で、右手を宙に上げる。。

バチバチバチ！！

感電したような音が聴こえたかと思うと、イブールは反射的に右手を引っ込めた。

痛みを感じてはいないようであったが、その瞬間、少し驚いたような表情かおをするイブール。

「……これは結果みたいね。しかも、“特殊効果”付の」

「特殊効果」・・・？」

「・・・この結界は、対象物を隠すだけではなく、近づいてきた生物の感覚を麻痺させて、進入すら考えさせないようにする効果が付加されているのよ」

「・・・結界術には、そんな種類モもあるのね・・・」

イブールの説明を聞いて、ラスリアは「なるほど」と納得しているような顔をする。

でも、一体誰が何のために、こんなに強力な結界を張ったんだろう・・・？」

彼女達が黙り始めた時、ラセリアはふとそんな事を考えていた。一方でイブールは、眠気によって地面に座り込んでいるアレンとミュルザの元へ歩き始めていた。ラスリアも、同じようにして歩き出そうとした瞬間・・・

「きゃっ!!」

勢い余って、地面にずっこけてしまう。

うつ伏せに倒れたラスリアの両足に、軽い打撲の痕ができる。

「ラスリア・・・!!!？」

「あれ・・・？」

イブールの声を聞いて我に返ったラスリアが起き上がってみると・・・なんと、弾かれるはずの結界を、彼女の身体が通り抜けていた。

「・・・ラスリアだけ、拒絶されなかった・・・!!!？」

イブールはとてつもない何かを見たような表情かおでラスリアを見つめる。

「ラスリアちゃん・・・。その先に・・・何かありそうか？」

「え・・・？あ、一応・・・」

眠気をこらえながら、ミュルザはラスリアに声をかける。

あれは・・・塔・・・？」

森の木々に囲まれてしつかりとは見えないが、少し離れた場所に塔らしき建造物がラスリアの視界に入ってくる。

「イブール・・・私・・・」

「・・・？」

前方にある塔を見た瞬間、直感だが「ここには何かある」と、ラスリアは感じていた。つばをゴクリと飲んだ痕、彼女は口を開く。

「私、ちよつとこの先に行つてくるわね！！」

「あ・・・ラスリア・・・！！」

「少し時間が経つたら、戻つてくるから・・・！！」

そう告げて、ラスリアは塔が見える方向へ走り出した。

「大きい・・・。しかも、すごい高さ・・・」

最初に見えた塔の真下にたどり着いたラスリアは、天高くそびえるこの塔を見上げていた。

あんな特殊な結界を張っているくらいだから、絶対に何かあるはず

そう考えたラスリアは、扉を強くノックした痕、その扉を開く。  
ギイイイイイ・・・

鉄の扉を開けて中に入ると、ラスリアの目には不思議な光景が飛び込んでくる。はいつてすぐの場所には、特に何もなかったが、その壁際には無数の文字や図形、数式のようなモノが描かれている。それは、上に上る階段がある場所の壁にもびつしりと書かれていた。

ラスリアはこの壁に描かれているモノを眺めながら、階段で上へ上へと上がっていく。

「ほとんどの文様が、紅く光っている・・・。これつてもしや・・・魔法？」

ラスリア一人の声が響く中、塔自体には人氣が全く感じられない。普通ならそれにすぐ気がつくはずだが、彼女は壁に描かれているモノが気になって、逆にその辺を気にしてはいなかった。

「“時空”を表す単語が多いな・・・。私は魔術師だからよくわからないけど、イブールだったらきつと・・・」

壁にソツと手を触れながら、独り言を呟くラスリアだった。

『数百年ぶりのお客みたいだね』

「えっ……!!!?!」

どこからともなく、男の声が聴こえる。

「誰!!!?」

いきなりの出来事に、少し慌て始めるラスリア。

しかし、黙り込まずに声の主は話し続ける。

『あの結界を潜り抜けたから「もしや」とは思ったが……まさか、こんな展開になるとはね……』

「……あなたは一体?」

意味深な台詞を述べる声の主。

しかし、何もわからないラスリアは、突然の出来事に驚きと戸惑いを隠せないでいた。

『……久々の客人だし、特別に僕の部屋へ招待してあげよう』

声の主がそう告げたとたん、ラスリアの前方に見える地面がカツ!  
!と光りはじめる。すると、光の中から魔方陣が現れる。

『その魔方陣の真ん中に立てば、僕のいる場所までワープする事ができるよ?』

「どっぴうつつもりなの……?」

彼女の問いかけの後、数秒だけ沈黙が訪れる。

考え込んでいたのか、少しだけ間が空いた後、声の主は話し始める。

『……どの道、このままだと君はこの塔から出ることはできない。

……そこで、僕の所まで来て話をさせてくれれば、お仲間の所へ返してあげるよ……』

……目で直接見てないはずなのに、アレン達みんなの存在に気がついていて……。何者かはわからないけど、用心するにこした事はなさそうね

考え事をしながら、ラスリアは魔方陣の方向へと歩き出す。

ブォン……

指定の場所に立った瞬間、地面に描かれている魔方陣が紅く光りだす。そして、一瞬の内に、ラスリアを声の主の下へ転送したのであ

つ  
た。

**第11話 特殊な結界の先にあるものは（後書き）**

ご意見・ご感想をお待ちしています！

## 第12話 同胞

「ここは……」

声の主が出現させた魔方陣によって、とある場所に移動したラスリア。

彼女の周囲には巨大な本棚がいくつも存在し、本がびっしりと納まっている。本棚の近くにある脚立の上にも、本が置かれている始末。

まるで、図書館みたい……

この空間を見た第一印象が、そんなかんじであった。

ゆっくりと用心しながら、ラスリアは歩いて行く。向かった先にある入り口には扉がなく、ノックが必要ない状況を彼女は不思議に感じていた。

「あなたは……誰？」

歩いていった先にいたのは、紺色の髪に黒い瞳を持つ、背の高い青年だった。

「はじめまして……だね。僕の“同胞”よ」

「“同胞”……？」

初対面の人間に向かって、いきなりそんな言葉が出てくるとは思いもよらなかった。

……そんな表情をするラスリア。

「……驚くのも無理はない。僕は自分が持つ能力を最大限まで知り尽くしているから、すぐに君の事がわかったただけだしね」

「……どういう意味？」

「君だつて、自分が“キロ”である事くらいは……勘付いているんじゃないの……？」

「……！」

“キロ”の言葉に反応するラスリア。

それと同時に、深刻な表情で身構える。それを見た紺色の髪の男は、自分の長い髪をなびかせながら口を開く。

「大丈夫だよ。ここには、君を捕まえようとする連中も、正体をバラすような連中も、誰一人としていない。なにより……」

「僕も君と同じ人種……古代種“キロ”の末裔だから……」

「……え……!!!?」

その台詞を聞いた途端、ラスリアの表情が固まった。確かに、この男性も私と同じ黒い瞳を持っている……。まさか、本当に

“自分以外にキロの生き残りがいる”……。17年間生きてきた中で、そんな事は一度たりとも考えた事はなかった。そのため、驚きを隠せないのは当然だ。そんなラスリアを見かねたのか、男は話し続ける。

「改めて自己紹介するね。僕はラクマリゼノ・アドグラフ。ラゼでいいよ!」

「あ……えっと、私はラスリア・ユンドラフ……です」

「ユンドラフ……?」

このラゼという男とラスリアは、互いに自己紹介をする。

その直後、彼はボソツと何かを呟いていたが、ラスリアはそれを聞き取る事ができなかった。ラゼは真剣な表情で考え込んでいたが、すぐに前を向いて話し始める。

「ラスリア」かあ……。あれ?本名は……?」

「え……!?!?」

ラスリアはドキツとした。

というのも、“ラスリア”という名はラゼと同様、愛称である事は彼女自身も知っていた。しかし、孤児院にいた頃、自分を拾ってくれた院長から「この名前は、あまり人前で名乗らない方がいい」と言われていたからだ。

今思えば、院長は私が古代種の末裔である事を、薄々と勘付いて

いたのかな……。

目線を下に向けながら、ラスリアは考え事をしていた。しかし、今の前にいるのは、自分と同じ“キロ”。この人にだったら……そう考えたラスリアは口を開く。

「ラスリア”は愛称で……本名は、ラストイルレリンドリア・ユンドラフです」

「やっぱり、長いね……」

その後、数秒間だけ彼らの間で沈黙が続く。

「そういえば、あなた……ラゼさんは、こんな森の中で何をしているのですか……？」

「何って……？」

ラスリアの台詞を聞いたラゼは、すぐに真剣な表情へ変わる。

その後、彼女はつばをゴクリと呑み、緊張感を持ちながら話し始める。

「イブール……私の仲間が、あの結界術を“高度な魔術”と言っていました。……あんな強力な術は初めて見たし、この塔の存在を隠してまで、何をしているのかなあ……って思ってた……」

自分で話している内に、なぜ彼がこんな場所にいるのかが、少しずつわかってきた。

……自分も同じ“キロ”なのに、何訊いちゃっているんだろう……私……

今の台詞を口走ってしまった事に、ラスリアは少し後悔した。

「……この場所だからというのは、特にはないよ」

「え……？」

「僕は“キロ”の中でも魔力が特に強くて、“二大魔術”も使える……。だから、この塔を自分の家として、ただひたすら研究を重ねているだけだよ」

「“二大魔術”って……あの？」

「そう」

ラゼがコクンと頷いたのを見て、改めてこの男性が“キロ”の末裔である事を理解できた。

「コミュニ二大学の図書館で調べ物をしていた時・・・仲間には話さなかったが、“キロ”について軽く触れている書物を見つけていた。それによると、回復魔法や蘇生術がこれに当てはまる「命」と、時間を操る「時」の属性を持つ魔法。 「二大魔術」を使えるのは古代種“キロ”だけである・・・と書かれていたからだ。

「・・・余計な詮索して、ごめんなさい・・・」

「・・・まあ、別にいいよ。それより、君こそ、なんであの辺をうるついていたの・・・？」

「・・・そうだ！貴方だったら、知っているかも・・・！」

「何が・・・？」

ラゼが首をかしげていたが、ラスリアはすぐに「イル」の手がかりを知っているであろう“竜騎士”について、尋ねてみた。

「奴らは用心深いからなあ・・・。ああ、でも“ウオトレスト”だったら、一度だけ会った事あるかも・・・」

「“ウオトレスト”・・・？」

「“竜騎士”にもいくつか部族があるんだけど、そいつらは水竜を長とする部族なんだ」

「・・・彼らは、どこで暮らしているの？」

「断崖絶壁の所にある滝、“ヒエロパニコン”。・・・奴らはその谷底で暮らしている」

「谷底・・・!!？」

思いもよらない回答に、声を張り上げてしまおうラスリア。

「・・・普通だったら、考えつかないだろう？僕も、彼らを見た時は驚いたよ！」

「そうだったんですね・・・」

ラゼの台詞に頷きながら、考え事を始める。

すると、同じようにして少し考えてから、ラゼも口を開く。

「それより、竜騎士を訪ねるって事は・・・“星の意思”と関係が

あるのかな？」

「……え……？」

「またもや初めて聞く言葉に、不思議そうな表情かおでラスリアは彼を見る。

「いや、でも…… “ラスリアの仲間が探しているモノ” について聞くって事は……」

その場でブツブツと呟くラゼ。

「一方でラスリアは、彼に“アレンが”イル”を探している」とまでは言わなかった。そのため、これ以上は知らないはずだった。しかし……

「ラスリア……」

「……何ですか？」

「その“探し物をしている” っていう仲間……。顔に紋章みたいな形の痣を持っているのでは!!？」

そう言ったのと同時に、ラゼはラスリアの両肩をつかむ。

態度が豹変したようで少し驚いたラスリア。「なぜ、ラゼ（この人）がアレンの痣について知っているのか」と考える余裕もなく、その場で頷くしかできなかった。

「とうとう……」

そう呟いた直後、彼女の肩から手を離れた。

何がどうなっているのか理解できないラスリアは、少し慌てた表情で尋ねる。

「なんで、アレンの痣の事を……!？」

しかし、その台詞に対して全く聴こえていない雰囲気だった。

一体、どうなっているの……？

「あ！戻ってきた……!!」

ラゼとの会話から1時間ほど過ぎ、ラスリアはアレン達の所へ戻ってきていた。

「ラスリア!……どうだった？」

彼女の近くに、イブールが寄ってくる。

「うん……。あれ？アレンとミユルザは……？」

ラスリアが辺りを見回すと、イブール以外に人気はなかった。

「ああ……。ずっとここに居るのは良くないと思っ、この先にある宿に置いてきたわ！」

「そうなんだ……」

とりあえず、皆がいる場所で話した方がいいかな

そう考えたラスリアは、イブールの方を向いて口を開く。

「皆に伝えたい事があるから……。まずは、その宿屋へ急ぎましょ  
う！」

「……そうね！」

納得したイブールは、ラスリアと一緒に歩き出した。

一方、ラスリアに竜騎士の事を教えたラズは、窓から遠くを見つめながら、ポツリと呟いていた。

「2つの世界が一つに戻るのも……。もうすぐって事なんだね……」

┌

## 第12話 同胞（後書き）

いかがでしたか。

ちなみに、このラズが独り住んでいる塔はゲーム「ヴァルキリー  
ロファイル・レナス」に出てくる”レザード・ヴァレスの塔”が  
モデルです。

彼はただの脇役キャラのように見えるかもしれませんが、後々にも  
登場するキーパーソンなので、今後の展開をお楽しみに

次回以降は、最後の主要登場キャラであるチエスが登場する事にな  
りますね（^^）

ご意見・ご感想をお待ちしてます！！

**第13話 自分とは異なる意思（前書き）**

今回は、新章突入前の、ひと段落なかんじです。

### 第13話 自分とは異なる意思

「断崖絶壁の所にある滝“ヒエロパニコン”に、竜騎士“ウォトレスト”……。そんな貴重な情報、よく聞き出せたわねえ……」  
イブルがラスリアを見ながら感心する。

「……俺やミュルザが宿屋で一休みしている間、何があったのだから……？」

アレンは、複雑そうな表情かおをしているラスリアの事を気にしていた。  
「“ヒエロパニコン”っていう滝があるのは知っていたが、“ウォトレスト”については、俺様も初耳だな……。ラスリアちゃんにその情報を教えてくれた野郎は、どんな奴だったんだろうなあ……？」

「……多分、学者か魔術師とかなんじゃないかしら……」

「……なる……」  
ラスリアはミュルザの方をチラッと見ながら答えた後、ミュルザ（奴）は半分納得したような表情かおを見せる。

「“ヒエロパニコン”って……確か、ルカ諸島を越えた先にある滝……だよな？」

アレンはそう言いながら、イブルの方を見る。

「そう……みたいね。今、私達がいる旅人の休憩所が大体ここだから……。ここから東へ行つた先に港町があるから、それに乗ればルカ諸島を通るはず……ね！」

イブルは世界地図を広げ、現在位置から指でなぞりながら、今後の進行方向について話す。

「竜騎士か……。場合によっては、竜の背に乗せてもらう事ってできないのかしら……？」

「残念だが、それは無理らしいぜ！……竜リウリウは相当プライドが高い。だって、下等生物である人間を背に乗せるくらいだったら、死を選ぶくらいらしいぜ？」

世界地図を眺めながら呟くラスリアに、ミュルザは返答する。

人間を小馬鹿にするような言い方に、アレンは少し不愉快な気分であったが、自分も“人ならざる者”である可能性が高いため、ミュルザを責める事はできなかった。

「とりあえず・・・ここを出たら、港町まで休憩できる場所はしばらくはないと思うの。だから、今日はゆっくり身体を休めてから出発しましょう!」

「俺様は別に、このまま出発してもいいけどな?」

「・・・あなたはそれでも、私達は休憩を取らないと、十分に力を発揮できないの!」

イブールの話にミュルザが割り込むが、すぐに一喝されてしまう。

アレン達は、休憩所にある宿屋にて1泊してから出発する事にした。

こういった旅人用の施設は、ちゃんと道のととのった街道にしか存在せず、旅人はこれを目印に旅路を決めている。

その後、辺りは暗くなり月が夜空を照らし始める。

皆が寝ている中、眠れなかったアレンは、ゆっくりと外へ歩いて行く。

「・・・眠れないのか?」

彼の視界に入ってきたのは、ベンチに腰掛けているラスリアの姿だった。

「アレン・・・」

ラスリアが彼の方に振り向いた後、アレンは彼女の隣に座る。

その後、アレンは聞くべきかどうか迷ったが、とりあえず訊いて見る事にした。

「あの結界の先で・・・一体、何があった・・・?」

「いつもお前は明るくて元気なのに・・・」とも言おうと思ったが、アレンは何があったかまでに留めた。

その後、2人の間に短い沈黙が訪れる。

しかし、自分からあまり話しかけないアレンにとって沈黙とは、特に気になる事でもなかった。そうして、少し考えたのか、ラスリアの重たい口が開く。

「私に竜騎士の情報を教えてくれた男性……アレンが持っている痣の事も知っていたの……」

「!!!!」

その台詞を聞いた途端、アレンの表情が変わる。

「そいつは……他には、何か言っただけか!?!?」

アレンはラスリアの肩を掴み、すぎるような表情で詰め寄る。

この痣の事を知っていたのなら……俺が何者だって事も知っているのでは……!?!?

この時、彼の頭にはそんな考えがよぎっていた。

「その後は、なんだか考え込んでしまったから、それ以上は聞き出せなかったの……」

「そう……か……」

納得したアレンは、ラスリアの肩から自分の両手を離す。

「ごめんなさい……」

「……?」

「私だけがあの塔に入れたのに……貴方の役に立てるような事、何一つできなかった……」

ラスリアはせつなそうな表情をしながら俯いていた。

今にも泣き出しそうな表情に、アレンの胸がドキツとする。

「……えっと……」

アレンは彼女に何て言葉をかければいいか、わからなくなっていた。とりあえず、最初に思った事を口に出してみる。

「俺の方こそ……すまない……。なんか……自分の事で精一杯で……相手の事なんざ、全然考えてなかった……かもしれない……」

この胸がズツシリするような感覚は一体

今まで感じた事のない気持ちになったアレンは、どうすればいいのかわからず、おどおどしていた。その様子を見ていたラスリアは、くすつと小さな声で笑う。

「・・・今、俺の事笑った・・・？」

「うん・・・」

ラスリアは笑いをこらえながら、小さく頷く。

「だって・・・いつもは涼しそうな表情かおしているアレンが、いじけた子供みただんだもの・・・！」

「・・・調子に乗るなよ！」

ラスリアの台詞に頬を赤らめたアレンは、彼女の額に軽くデコピンする。

「痛っ・・・」

「人の事笑った仕返し」

言葉とは裏腹に、ラスリアが自分に言ってくれた一言がすごく嬉しいと感じていたアレン。

その後、いつもの状態に戻った彼らは、話の再開をする。

「あ・・・そうそう！！」

「・・・どうした？」

「今思い出したんだけど・・・“星の意思”って何だと思う・・・？」

ラスリアは首をかしげながら、アレンに問いかける。

「“星の意思”・・・」

彼女が言った言葉を繰り返すアレン。すると・・・

「・・・！！？」

彼の頭から耳鳴りを感じる。

これは・・・以前にも、こんな事があったような・・・？

内心そう思っていると、閉じていた口が勝手に開き、思いもよらぬ台詞を発する。

「“星の意思”とは・・・この世界を創造し、見守る“星”が、特

定の生き物にだけ発する言葉。その言葉を正確に理解できるのは、この青年を含む2人だけ……」

この台詞は、ラスリアから見れば、アレンの口から発したように見えるが、当の本人はそんな台詞を言ったつもりはなかった。

この台詞……俺じゃない“誰か”が発している……!!?!

頭の片隅で、アレンが戸惑っている……

「アレン……アレン!!」

頭上からラスリアの声が響く。

「ラスリア……俺は……?」

「……虚ろな表情のまま、“星の意思”について述べていたの……でも、それってどういう事なの……?」

「俺が……“星の意思”の事を……」

自分の意思で言った言葉ではないので、アレンは呆気に取られていた。

月が彼らを照らす中、アレンとラスリアは他愛のない会話を繰り返していた。しかし、時間もかなり経過し、疲れたラスリアはその場に眠りについてしまう。しかも、寝相の悪い彼女は、アレンの肩に寄りかかるだけかと思いきや、そのまま膝まくらの上で眠っていた。そのため、アレンは動きたくても身動きが取れない。

……全く、あんなにしゃべりすぎるからだろ……

自分の膝の上で気持ち良さそうに眠るラスリアを見て、アレンはそう思った。しかし、時間が経つにつれて、こうしているのが苦にならなくなった。

「……子供ガキみたいだと思ったが、ちゃんとした女なんだな……」

アレンはフツと嗤いながら、彼女の頭を優しく撫でた。

「それにしても……」

アレンは自分とは違う意思が口にしていた台詞を、思い返していた。

“この青年”が俺だとしたら、“星の意思”を理解できるのが、もう1人いるって事だよな……。……俺みたいな存在が、もう

1人いるのか・・・？

その後、ベンチの上でウトウトした後、アレンはぐっすり寝ているラスリアを抱きかかえて寝室に戻った。そして、翌日の事を考えながら、アレンも床につく。

これまで見た事のない、不思議な夢を見ながら

### 第13話 自分とは異なる意思（後書き）

いかがでしたか。

この作品を書き始めてから、仲間が登場したり、戦闘があったり・  
・と、落ち着いた話がほとんどありませんでした。

そのため、今回は新章突入前の物語をつなぐ意味を考えながら執筆しました。

読んでわかるかと思いますが、アレンは「無知」ゆえに純粹であったりもします。

一方でラスリアも「素直で純粹な少女」という設定なので、この2人の関係はとつてもピュアなかんじになるよう、今後も書いていきたいです！

まあ、イブール・ミュルザペアとは真逆なかんじですかね（苦笑）

引き続き、ご意見・ご感想・作品に対する評価をお待ちしています

## 第14話 船に乗って

「竜」<sup>ドラゴン</sup> それは、“魔物”と称される生き物たちの中で、最も力や知能が発達した生き物。レジエンデirasにおける“竜”は基本的に皆、背中に翼を持っている。

そして、彼らには2つの特徴がある。それは、“慎重な竜”と“好戦的な竜”だ。前者の場合は“竜騎士”を背に乗せる竜が多く、高いプライドを持ち、正当な理由がない限り、他の生き物を襲う事はない。しかし、その一方で・・・後者の“好戦的な竜”は、前者と違い、非常に好戦的で、人間を含む生き物の血肉を食らう事を好む。その上、人語が通じないため、遭遇したモノは皆、倒すか食われるかの選択を迫られる・・・それだけ、凶暴な竜なのである。

ザザーーン・・・  
道中に立ち寄った休憩所を後にした後、アレン達は港町シャップに到着していた。

このシャップから出ている船は、彼らの目的地であるルカ諸島や、その先にあるウォルガネラタド大陸に近いため、いろんな目的地行きの船が出ていた。

「ここも、すごい人・・・！」  
ラスリアは行き交う人々をチラチラ見ながら、3人に対して言う。  
「港町だものね！商売人はもちろんの事、私達のような旅人も多く訪れるんで、毎日活気に溢れているわ・・・！」

「ふーん・・・。まあ、俺としては、人間なんかよりもこの町で食える海鮮料理とかが楽しみだけだな！」  
イブールとミュルザの会話を、横で聞き耳立てているアレンとラスリア。

海鮮料理かぁ・・・。そういえば、ずっと山暮らしだったから、

魚介類を全く食べていないなあ・・・

ラスリアはそんな事を考えながら、辺りを見回す。

「あら・・・？」

人ゴミの中でラスリアは、とある人物が視界に入ってくる。

水色の髪・・・澄んだ海水のように、綺麗な女性ひとだなあ・・・

ラスリアは、視線の先にいた水色の髪の女性に対して、釘付けとなっていた。

「あ・・・」

その女性がこちらを向いた時、急に恥ずかしくなってきたラスリアは、すぐさま俯く。

私ってば、女性を見つめるなんて・・・

そう思いながら顔をゆっくりと上げると、もうそこに女性はいなかった。

ドン！！

ラスリアが改めて前を向くと、いきなり誰かとぶつかった。

「きゃあっ・・・ごめんなさい・・・！」

「・・・よそ見すんじゃねえよ！！」

見上げると、自分とぶつかったのは体格の良さそうな男の人だった。

「す・・・すみません・・・」

その鬼気迫るような表情に圧倒されたラスリアは、ペコリとお辞儀した後、そそくさと仲間達の下へ走っていった。

「ラスリア、どうしたの？」

「うん・・・。あ、ちよつと考え事していたら、人とぶつかちゃったみたい・・・」

「ここはいろんな人間がいるからな・・・。気をつけるよ、ラスリア」

「・・・ありがとう、アレン」

イブルとラスリアとアレンの3人は、歩きながら話す。

アレン・・・なんだか、最初に出会ったときよりも、穏やかになっっている・・・。気のせいかな・・・？

自分に対する接し方が変わってきたように感じていたラスリアは、内心とても嬉しく感じていた。

「・・・ミュルザ？」

気がつくと、ミュルザは後ろで深刻な表情かおをしていた。

「どうしたの・・・？」

「ん・・・？」

ぼんやりしていたのが、ラスリアの声を聞いた瞬間、ミュルザは我に返った。

「・・・アホみたいに深刻な表情だったが、どうかしたのか？」

「アホつて、お前なあ・・・」

「まあまあ・・・」

互いに睨み合っていたアレンとミュルザを見かねたイブールが、2人の間に入る。

「まあ、それでも、あんたが深刻な表情かおをするのは珍しいわよねえ・

・・・。どうしたの？」

「・・・いや、大したことではないから、気にしなさんな！」

ミュルザは、そう言ってスタスタと前へ歩き始めた。

・・・本当に、どうしたんだらう？

ラスリアは内心で気になりつつも、アレン達と共に船乗り場へ向かう。

それにしても、ミュルザ（あいつ）は野郎のくせに、情けないな・

アレンは遠くの景色を眺めながら、一人考え事をしていた。

あれから、目的地であるルカ諸島行きの船に乗船した。そして、どいう訳なのか、一番タフそうなミュルザが船酔いで体調を崩してしまう。「側についているのは女共でいいだらう」と考えたアレンは、一人テラスの方にいた。

「それにしても・・・」

アレンは昨晚見た夢の事を思い出していた。

水晶でできた洞窟のような場所

見たことも行った

こともないような場所に、アレンは一人ただずんでいた・・・歩いていくと、その先には、銀髪で赤紫色の瞳をした女性が一人いた。しかし、驚くべき所は瞳の色と性別以外、自分と瓜二つなのだ。

こいつは、一体・・・？

アレンは首をかしげながら考え込む。女性は口を動かしてはいたが、何を話しているのか全く聞こえなかった。夢自体はそこで終わってしまったが・・・右目下にあつた痣が、自分が持っているモノと同じだという事だけは、鮮明に覚えていた。

言葉は聞き取れなかったが・・・この“初対面じゃないような感覚”・・・こんな事ってありなのか・・・？

考えれば考えるほど、答えが見つからず、アレンの頭はこんがらがってきていた。

とにかく、“ウォトレスト”やらに会えば・・・何かわかるはず！そう自分を奮い立たせたアレンは、ひとまず仲間たちがいる船室へ戻ろうと歩き始めた。

「黒髪の女!？」

突然、どこからか聞こえてきた台詞にアレンは反応する。

何かと気になったアレンが振り向くと、2・3人くらいの若い男が何かを話しこんでいた。

「おい!声がかいつての!！」

もう一人の男が、他の2人を静かにさせる。

「あ・・・えっと、さっきの港町で、一人のガキとぶつかったんですよ」

「それが・・・俺達の標的ターゲットである、黒髪の女・・・？」

「おい・・・。そのガキの風貌・・・どんなかんじだったんだ？」

3人の男達はヒソヒソと話す。

アレンは物陰に隠れて話を盗み聞きしていたが、聞いていく内に嫌な予感がしてくる。

ラスリアが、“誰かとぶつかった”とか言っていたが・・・まさか!?!?”

アレンの心臓がドクンドクンと脈打っている。

「風貌・・・っていつても、これといった特徴はねえですが・・・」

「じゃあ、連れとかはいたか?・・・流石に、女一人で旅はしないだろう・・・」

その台詞を聞いた男は、数秒だけ考え込む。

「チラツとしか見なかつたんで顔はわかりませんでしたけど・・・」

確か、銀髪の野郎と、紫の髪をした野郎・・・あと、金髪の姉ちゃんかな?そいつらの方へ歩いて行ってましたね・・・!」

「・・・じゃあ、決まりだな」

「え・・・じゃあ・・・」

「ああ・・・その小娘で間違いない。依頼人からの情報によると、連れの一人は紫色の髪をした野郎だって話だからな・・・!」

ガタン!!

その時、何かの物音が聞こえる。

「誰だ・・・!?!?」

物音に反応した男は、刃物を構えながら近づく。

「!?!?!?」

気がつくのと、そこには誰もいなかった。

「・・・くそつ!?!」

刃物を持った男は、悔しそうな表情で、床にあつた箱を蹴飛ばす。

「どうしましょう、兄貴・・・。今の話、聞かれたんじゃあ・・・」

「・・・まあ、どこのどいつが盗み聞きしていたにしろ、ここは海の上だ。連中だって、簡単には動けねえだろうさ・・・」

「・・・それじゃあ・・・」

「・・・船が港に到着したら、実行だな・・・!」



あまりに予想外の敵に、驚きを隠せない2人。

彼らがそこで見たのは、数匹の黒い竜

き物の血肉を好む“好戦的な竜”であった。

しかも、生

## 第14話 船に乗って（後書き）

いかがでしたか。

冒頭の説明でもあった”好戦的な竜”の設定については、ゲーム『ドラッグオンドラゴン』を参考にさせて戴きました。

しかし、それだけ獰猛な生き物だという事は、次回はバトルに突入するのが必至……？

そして、アレンが盗み聞きした男達の会話も気になりますよね？  
次回はその辺の事を含めて、急展開すると思うので、お楽しみに  
また、アレンが思い出していた「夢」については、同タイトルの『Right』を読めば、詳細がわかると思います！

それでは、ご意見・ご感想・作品に対する評価をお待ちしています

## 第15話 倒すか食われるかの戦い（前書き）

今回はイブール視点でスタート。

- また、少し長めなので、ミュルザやアレンに視点が変わることも・

## 第15話 倒すか食われるかの戦い

「ギヤオオオオオオオオツ!!!」

船上に現れた竜の叫び声が、船を揺らす。

あれこそ、人間を好んで食らう竜……。でも、彼らは海水を嫌っているはずなのに……

イブールは、なぜあの竜達がこの船上にいるのかが不思議で仕方なかった。

「くそ……。船の上（こんな所）で暴れられちゃあ、沈んじまうじやねーか!!!」

そう叫んだ後、何人かの旅人達が武器を構えて竜に立ち向かう。

地面に降り立っていた1匹の竜は、翼を羽ばたかせて物凄い強風を生む。

「きゃあああああつ!!!」

「くつ……!!」

その強風に、イブールとアレンは飛ばされないように船の手すりに捕まって何とか凌ぐ。

周囲にいた旅人たちも何人かこらえていたが、飛ばされた人間も数人いた。強風が止んだ後、目にも止まらぬ速さで飛び始めた竜は、あつという間に1人の人間を自身の牙で捕らえる。

「ぎゃあああああああつ!!!」

生きたまま捕らえられた男は、その鋭い牙によってゆっくりと噛み砕かれ、息絶えて行く……。

地面には男の血が飛び散り、その場にいた全員の表情が真つ青かおだった。

これが……「人間を食べる」という事……なのね……

目の前で見せられたイブールは、恐怖で顔が真つ青になっていた。

それは、普段は無表情である事が多いアレンでさえも、「恐ろしい」

と感じていたであろう。

その後、牙を血で紅く染めた竜は、獲物を定めるかのような目で辺りを見回す。船の上にいるのは1匹だけだが、まだ空中には3匹の竜が飛んでいる。そして、乗客達は全員、2つの行動を取るようになる。一つは、ただ恐怖の余りに身体が動かず、呆然としている人。・・・そして、あまりの恐ろしさに、船から脱出を図ろうとする者たち。

「イブール!!」

この時、アレンが彼女の側に寄ってくる。

「あの竜・・・何とか倒せないだろうか？」

「え・・・!?!」

思いにもよらないアレンの言葉に驚くイブール。

ただし、ここは海の上・・・しかも、周囲にはパニックになっている乗客がいる。

「・・・ここが陸上ならば、可能性はあるでしょうけど・・・。船の上は戦いに不向きだし、何より1匹倒してもまだ3匹残っているから、難しいわね・・・」

「そうか・・・」

何ともはがゆいような表情でアレンは周囲を見渡す。

・・・こんなに一般人がいる中では、ミュルザ（悪魔）の力は使えないし・・・

そう思いながら、竜達が飛んでいる上空を見上げる。

「・・・え・・・!?!」

すると、上空から何か“声”みたいなモノが聞こえてくる。

『逃げまとう人間ほど、面白いモノはねえな・・・!』

『・・・しかし、これだけ上質な餌が揃っていると、食うのが楽し

みだな!!』

「竜の・・・言葉・・・?」

「イブール・・・?」

上空を見上げたまま突っ立っているイブールに、アレンは首をかしげる。

でも・・・なんだって、あいつらの声が私にだけ聴こえるの・・・！！？

戸惑いながらも、竜達リウドの会話に耳を傾ける。

『さて、俺も狩りをしに行くか！』

『おい・・・言うておくれが、あの銀髪で痣のある男と、悪魔に寄り添っている黒髪の娘は食うなよ？』

『ああ・・・。あの墮天使の命令だったっけか・・・』

「・・・んなっ・・・！！？」

“銀髪の男”に“悪魔に寄り添っている黒髪の娘”って・・・その台詞を聞いて、すぐに何を意味するのか理解できた。しかも、“墮天使”って・・・まさか・・・

この時、イブールの頭の中には、コミュニニ大学で話していたミュルザとの会話だった。

ミュルザが遭遇した天使ってのも、もしかして・・・

そう考えてる余裕はあまりなく、すぐにアレンの声が聴こえる。

「・・・とにかく、ラスリアやミュルザと合流するぞ・・・！！！」

そう叫んだアレンは、イブールの腕を掴んで走り出す。

船室の方へ向かうと、逃げまとう人々で混乱していた。人ごみの中で、イブールとアレンは、一番目につきやすいミュルザの姿を探す。

「アレン！あそこ・・・！！！」

イブールが指さした先には、ラスリアの肩を借りながら歩くミュルザの姿があった。

「アレン！！！」

「ラスリア・・・！！！」

彼らの存在に気がついたラスリアが、2人の方へ歩いてくる。

「よう、お二人さん・・・。竜が出現したようだな？」

顔に汗を滲ませながら、ミュルザが呟く。

「ミュルザ……。あんた、船酔い大丈夫なの？」

「……まだ万全じゃねえが、相手が相手だけに、ぶっ殺さないと気が済まなくてね……」

「……？」

「……いや、こつちの話」

その直後、フィツとそっぽを向いてしまうミュルザ。

相変わらず、何を考えているのか掴めないわ……

イブールは内心でそう考えていた。

「だが、ミュルザ……。奴らを倒すつもりか？」

「……何？アレンくんは竜が怖いのかなあー？」

ラスリアの肩から腕を離れたミュルザは意地悪かおそうな表情でアレンを見る。

「そういうわけではない！……ただ、今は乗客がたくさんいるから、こんな場所で戦っては海の藻くずになるだけだって言いたいだけだ」

「……でも、確かに今の状況では戦えないわよね……」

隣でイブールは呟く。

その直後、イブールは竜達リムがしていた会話を思い出す。

「あるいは……」

「？イブール、どうしたの？」

ボソツと呟いたイブールに対し、ラスリアが尋ねる。

「一か八か……。でも、やってみる価値はあるかもしれない……」

その場で何かを思いついたイブールは、重たくなった口を開く。

「このままだと、全員の本领が発揮できないから……。乗客を全員避難させた後、奴らを迎え撃ちましょう……！」

……全く、俺のご主人はとんでもない事を考えやがる……

乗客が避難していくのを見届けながら、ミュルザはふと思う。

まあ、俺様の予感が的中しているのがわかったのはイブール（あの女）のおかげだから良しとしてやるか・・・

この時、ミュルザはチラツとイブールの方を見ていた。

この船に乗ってから船酔いで倒れていたため、悪魔としての感覚が鈍っていたミュルザ。しかし、今こうして逃げまとう人間たちを見て、ある男達3人に対し、感じ覚えのある感覚に気がついていた。それは、以前に出会った“墮天使”と同じ

「・・・あなたが言っていた“あれ”の存在・・・。本当にいるのね・・・」

今から数分前、イブールはミュルザにだけこの一言を発していた。何のことかと思っただが、彼女の心を読んだ直後、すぐに状況を理解した。そして、すぐに「墮天使の仕業」と断定したのだ。

しかし、イブールの奴が竜の言葉を聞き取れたとはな・・・何年か一緒に旅をしていたものの、今回それを初めて知ったミュルザ。その場でふと考え事をしていると・・・

「おい、ミュルザ！・・・そろそろ全部の乗客が避難し終わるから、操縦室の方へ行くぞ！」

「・・・へいへい」  
アレンに促されたミュルザは、すぐにイブール達のいる方向へ向かう。

テラスの方へ向かうと、2・3匹の竜が逃げ遅れた乗客を丸々食らっていた。本来、その行為に恐れおののくのが普通だが、悪魔であるミュルザにとっては何とも思わなかった。

「・・・つたく、お前ら竜は、丸かじりが好きだねえ・・・」

フーツとため息をつきながら、ミュルザは呟く。

「・・・冗談はそこまでにして。・・・ミュルザ、“命令”だからね」

そう言い放つイブールの表情は、いつもに増して真剣だった。

「・・・了解」

そう呟いた後、ミュルザは自身が持つ漆黒の翼を出現させる。

イブールに返事をしたミュルザは、目にも止まらぬ速さで竜リムに立ち向かっていく。

「よし、俺も行こう。船上にいれば攻撃は届くしな・・・。イブール、援護を頼む」

「・・・ええ」

そう告げたアレンは、剣を鞘から取り出し、魔物へと走り出す。

しかし、本当にミュルザ（奴）のスピードが速くて目に負えねえ・

走りながら、アレンはふと思った。

「はっ！！！！」

1匹の竜に対し、剣を振り落とすアレン。

それを見た竜がギョツとしたような瞳でこちらを睨む。素早いが故に避けられてしまったが、今の避け方に対し、アレンは違和感を感じていた。

動揺・・・でもしているのか・・・？

内心想ったが、今はとりあえず戦闘に集中する事にする。

まずは、ラスリア達には近づけないよう、追い込むように剣を振るうアレン。上空に飛び始めた時は、イブールによる炎の矢が飛ぶ。

「空を飛んでくれれば、こっちのものよ」

詠唱をしながら、イブールは得意げに言い放つ。

流石に相手は竜なので1発とはいかないが、気がつけばミュルザは竜を1匹海に沈めていた。そして、こちらもアレンとイブールの連携攻撃もあつてか、竜を1匹倒す事に成功する。あと最後の1匹となった途端、焦りを感じたのか、1匹の竜は再起を図ろうと大空

に飛び出す。

「くる……か？」

「いや……あの状態だと……」

空を見上げながら、アレンとミュルザは呟く。

竜は再び襲い掛かってくるかと思いきや、なんとそのまま飛んで逃げていくのだった。その様子を見届けたアレン達は、ほっと一息をつく。

「出会えば倒すか食われるか」って言われるくらい、凶暴な奴らだからね……。なんとか撃退できて良かったわ」

フーツとため息をつきながら、イブールはその場に座る。

「そうだな。少しの間くらい、休憩でも……」

「休憩しよう」と言いかけたミュルザの表情が一変する。

「きゃっ!!!?!」

「ぐあっ!!!?!」

ラスリアとミュルザの悲鳴がほぼ同時に聞こえた直後、ミュルザの身体は、船体の端っこに吹き飛ばされる。

「なっ……!!!?!」

気がつくと、ラスリアを背後から拘束し、アレン達の目の前に立ちはだかっている人物がいた。

「……てめえ……!!!?!」

「……久しぶりね、悪魔」

ラスリアを拘束した水色の髪の女性は、ミュルザに対して冷たく言い放つ。

そして、女性の背には白い翼が生えていた。

「お前は一体……?ラスリアを……どうするつもりだ……!!?!」

アレンは自身が持つライトグリーンの瞳でギラッと睨み付ける。

その台詞を聞いた女性は、ゆっくりとアレンの方を向く。

「はじめまして、“世界の心”<sup>ガジェイル</sup>。私の名はフリッグス。見ての通り、

天使よ」

「・・・そんな事を聞いているんじゃない・・・！」

そう叫ぶアレンを制止し、イブールが前に出てくる。

「貴女が・・・さっきの竜ドラゴンを操っていた天使・・・？」

「・・・さあ？まあ、貴女とも初対面よね。“ご主人様”・・・」

フリッグスの台詞を聞いたイブールはカツと頬を赤らめ、黙り込んでしまう。

すると、ミュルザが物凄い殺気を出しながら歩いてくる。

「墮天使が・・・また俺達の邪魔をする気かよ・・・！」

そう言うミュルザの表情を横目で見たアレンは、一瞬だけこの殺気の強さに恐怖した。

「・・・まあ、挨拶はさておき・・・。せつかくこれから使おうとした“駒”も使えなくなってしまったから、私が直々に来た・・・というわけ」

「・・・どうして、私なの？理由わけを教えて・・・！」  
墮天使の腕の中で、ラスリアは目的を聞き出そうとする。

フリッグスは少し考え事をしているようだったが、すぐに口を開く。  
「さあ・・・どうしてかしらね？私は単に、主の“命”で貴女を連れてこいと言われているだけだし・・・。人間の戯言に興味はないわ」

その台詞は、人間を馬鹿にしているようで、なぜかアレンにとっても不愉快であった。

「貴様・・・！」

「一応言っておくけれど・・・私を殺そうとしたら、このキ口の少女も巻き添えくらっちゃうわ。・・・それでもいいのかしら？」

アレン達を見ながら、フリッグスは不適に笑う。

「くっ・・・」

やむを得ず、剣を鞘に収めたアレン。

くそ・・・。この女がああ男共の“依頼人”だとしたら・・・このままだと、ラスリアだけが連れ去られてしまう・・・！一体、ど

うすれば・・・

その場にいる全員の間で緊張感が走る。勝利したような気分になっていたフリッグスは、そのままラスリアを連れて船を離れようとしていた。その時・・・

『そうはさせぬぞ』

アレン達でも誰でもない、見知らぬ声が響く。

「え・・・何・・・!!!?」

「!!!!?」

「この声質...もしや!!!?」

その場にいた全員が、声の聞こえた方角を探し、辺りを見回す。

「!!!皆、あそこ・・・!!!!」

声の正体に気がついたイブルが上空にいる何かを指差す。

「・・・竜・・・!!!?」

その正体に気がついた時、アレンは驚きの余りに声を失う。

彼らの上空に到達していたのは・・・藍色の翼を持つ竜にまたが

る男達

竜騎士の姿であった。

## 第15話 倒すか食われるかの戦い（後書き）

いかがでしたか。

小説は毎度、Wordで書いたモノをこちらにコピペして投稿しているのですが・・・いつもは5〜6枚分で終わるのが、今回は7枚近くまでいきました！

そう思うと、長めの話になったみたいですね。

竜って漫画絵にすると結構大変なので、こういった時は小説って便利だなと思います

さて、今回の最後の方でやっと、竜騎士が登場致しました。

彼らの登場は、アレン達の旅に大きな影響を与えることになるでしょう。

ご意見・ご感想をお待ちしてます

**第16話 竜騎士”ウォトレスト”（前書き）**

今回はラスリア視点からのスタートです。

## 第16話 竜騎士”ウオトレスト”

「厄介な連中が来たか・・・」  
ラスリアの頭上でボソツと呟くフリッグス。

・・・今だ・・・!

そう思ったラスリアは、フリッグスの腕を思いっきりひっかく。

「っ・・・!!」

思っていた以上に反応したフリッグスは、その瞬間拘束していた腕を緩める。

その直後、ラスリアは突き倒すようにして墮天使の腕から何とか逃れる事に成功した。

「ラスリア・・・!!」

敵から逃げた彼女を見つけたアレンが、ラスリアの肩を引き寄せる。もしかして、簡単に逃げられたのは・・・この手でミュルザに触れていたからかな・・・?

アレンの腕の中で、頬を赤らめながらラスリアはふと思った。  
船上には藍色の翼を持つ竜が2・3匹ほど、降り立っていた。

「・・・もしま、てめえらが、“ウオトレスト”か?」

ミュルザはまじまじとした表情で彼らを見つめる。

しかし、ミュルザの台詞に全く耳を貸さず、竜に跨っていた男は言う。

「黒竜たちの様子がおかしいとは思っていたが・・・貴様の仕業のようだな」

そう言つて、竜騎士の男性はフリッグスを睨みつける。

その様子を見た墮天使は、フーツと深いため息をついた後、その口を開く。

「普段は住処からなかなか出てこないくせに、今日は随分景気が宜しいのね?」

「理由は理解しているであろう？・・・もし、これ以上やるとい  
うのならば、我々が相手をしよう!!」

双方の間で緊迫した空気が流れる。

一方でアレン達は会話についてこれず、ただ呆然としていた。

この人達が、ラゼの言っていた“ウオトレスト”・・・。

ラスリアは彼らの尖った耳を見つめながら、竜騎士“ウオトレスト  
”である事を改めて認識する。

「ちっ・・・」

微かに舌打ちをしたフリッグスは、白い翼をはばたかせたと思いき  
や、その場から去ってしまう。

その瞬間をじっくりと見届けたウオトレスト（彼ら）は、すぐにラ  
スリア達の方へ向く。

「驚かせてしまったようで、申し訳ない。我々は“ウオトレスト”。

・・・人間達に“竜騎士”と呼ばれる者です」

「あ・・・。助けて戴き、ありがとうございました・・・」

自分に対して跪くので、驚いたラスリアはオドオドした表情で礼を  
言う。

「我々は、貴方様がこちらへ来るのを、ずっとお待ちしていました。  
そして・・・」

男はアレンの方を向いて話し出す。

「・・・貴方には、早急に我らの長に会ってもらわねばなりません。

・・・“世界の心”」

「え・・・!!?」

“世界の心”の言葉に反応したアレンは、目を丸くして竜騎士達を  
見つめた。

「・・・ここでは落ち着いて話もできないでしょう。・・・我々の  
村へ向かいます」

「すごい・・・絶景だわ・・・!」

竜騎士ウオトレストに助けられたアレン達は、彼らの竜の背に乗っ

てウオトレスト達の村へ向かっていた。

「空を飛ぶ」という生まれ初めて経験に、ラスリアの心は躍る。「そういえば・・・なぜ、私はアレンに対する待遇は良いのですか？」

先ほどから気になっていた事を、ラスリアは目の前に乗っている竜騎士の男に尋ねた。

「・・・古代種“キロ”は、我々竜騎士にとって、“同志”とも言える大切な存在だからです。また、彼の場合・・・」

「アレンの場合だと・・・？」

違う竜の上に跨っているアレンをチラリと見た後、男は呟く。「・・・彼については、後ほど“長”から聞いてください。今こ

で説明できるほど、簡単な存在ではないから・・・」  
この台詞が何を意味しているのかラスリアは理解できなかったが、とりあえず“キロ”だからと言って、自分が何かされるわけでもなさそうなので、少しホッとしていた。

「・・・じゃあ、逆にあのフリッグスっていう女性ひとは・・・私が“キロ”だから連れて行くこうとしていたのかな

目の前にいる竜騎士の男にしがみつきながら、ラスリアは一人考え事をしていた。

「いやー！こつやつて堂々と飛べるなんて、何十年ぶりたる・・・！……」

漆黒の翼を広げ、ミュルザはニヤニヤしながら大空を飛び交う。

そして、ラルリアが乗っている竜の近くまで飛んでくるミュルザ。

「よう、ラスリアちゃん！乗り心地はどうよ？」

「ええ・・・いいかんじ！・・・ミュルザも、すごい楽しそうね？」  
翼を生やしている所すらあまり見ないのに、こつやつて竜と同じようにして飛んでいるミュルザが逆に新鮮に感じていた。

「まあ、“契約”のせいもあってか、最近長距離と飛ぶ暇なかったんだよ！だから、こつやつて人目気にせずに飛べるのが楽しくてな

「楽しそうな表情で話すミュルザだったが、すぐにウオトレスト達や竜の冷たい視線を感じる。」

「・・・じゃあ、また後で・・・」  
そう言つてミュルザは離れていった。

そうよね・・・。私やアレンは普通に対応してもらっているけど、悪魔であるミュルザや普通の人間であるイブルに対しては、本来は忌み嫌っている存在だから・・・

ラスリアはラゼより、ウオトレストを含む竜騎士は、非常に警戒心が強いと聞いていた。また、竜に乗せてもらう前に、「今回は特別です」と言っていた事も、ラスリアはちゃんと記憶している。

・・・訊きたい事は山ほどあるけど、まずは竜騎士（彼ら）の里に着いてからの方が良さそうね・・・  
風を感じながら、ラスリア達を乗せた竜達は、崖の底にあるとされるウオトレストの村へと向かっていく。

「着いてきてください」

幾分か時間が経過した後、アレン達はウオトレストの村へ到着する。そして、自分達に話しかけていた男性が、彼らを村の奥へと案内する。

・・・ほとんどの者が、藍色の髪に澄んだ水色の瞳を持っている・・・。それに

歩きながら周囲を見渡していたアレンは、ウオトレスト（彼ら）を見ながら考えていると

「アレン」

「ん・・・？」

ラスリアが彼に声をかけてきた。

「ここの人達すごいね・・・。なんだか、普通の人間じゃ持ち得な

い“何か”を感じるの”

「そうだな……。俺も今、似たような事を考えていた……」  
彼らは奥へ奥へと進んでいく。

この村自体が森の中のため、周囲にはたくさんの木が生い茂っている。ミウルザはいつそ「飛びながら進みたい」と言っただが、当然イブルによつて却下される。しかし、仮に許可が下りても、ウオトレスト（彼ら）がそれを許さなかったであろう。

ウオトレスト（こいつら）や……。船で会った天使も言っていた  
“世界の心”<sup>ガジエイレル</sup>とは、一体何だろう……？

天使がなぜラスリアを連れ去ろうとしたのか、という事よりも、今のアレンはその事が気になって仕方なかった。

こうして、森の奥へと進んでいくアレン達。気がつくと、視線の先には門番らしき男2里と……。その間には一人の少年の姿が見えた。

「あ……。ビジョップ兄さん、おかえり！」

少年はこちらに向かって声をかけてくる。

「“兄さん”……？」

イブルが不思議そうな表情<sup>かお</sup>で少年を見つめる。

「チエス、今は客人の前だ。私語は慎みなさい」

「……」

“ビジョップ”とは、アレン達をこの場に連れてきた男性の名前であつた。

兄に指摘をされたチエスという少年は、しょんぼりとした表情<sup>かお</sup>で俯くが、すぐにアレン達を睨みつける。

「……じゃあ、僕が彼らを水竜様の下へ連れて行くよ……」

少年がそう呟くと、門番のような格好をした男達が、アレン達に道を譲った。

「あの……。水竜”って……」

「僕らウオトレストの長であり、“水”を司る神竜様のこと……」

僕ら以外だと滅多にお目にかかれなから、粗相のないようにね！」  
ラスリアの呟きに、少年は反対方向を向いたまま答える。

「・・・まさか、水竜にお目にかかれるとは・・・」

「それにしても、なぜあんな小さな子が案内をしているのかしら・・・」

アレンとラスリアの後ろでは、ミュルザとイブールがヒソヒソと話していた。

だが、こいつらの言う事も一理ある・・・。この子供は一体

アレンはこの12・13歳くらいの少年の後姿を見つめながら、更に奥へと進んでいく。

第16話 竜騎士”ウォトレスト”（後書き）

いかがでしたか。

今回は前回の事を思うと少し短めだったかと思われませんが、ちょうど区切りの良い場所だったので、ここまでとさせて戴きました。

・・・今回は後半だけでしたが、やっとチエスを登場させてあげることができました。「早く登場させたい」と思いつつも、物語の展開を考えるとすぐには出せなくて・・・この段階ではまだ仲間にはなりません、彼がアレン達の旅に加わるのは、必然的となるでしょう。

次回はいろんな意味で濃い内容になるような予感が・・・

とにかく、ご意見やご感想をお待ちします！

・・・できれば評価も！！

第17話 ”世界の心(ガジェイレル)” (前書き)

今回はほとんどアレン視線ですが、最後の一部分だけ違った視線が少し入ります。

第17話 ”世界の心（ガジェイレル）”

アレン達は奥へと進んでいくと、大きな湖のほとりに到着する。たくさんの木々が生い茂り、湖の水はとてもきれいで澄んでいた。

「綺麗・・・」

ラスリアがその光景に目を見張っていると、

「・・・こつち」

彼らを案内する少年  
差した。

チエスが湖の近くにある岩を指

アレン達はその場所に到達すると、少年は湖の方角に向けて跪く。

「ウンディエル様。・・・客人をお連れしました」

チエスの一言の後、湖から眩い光が発生する。

「きやつ・・・」

あまりの眩しさに目をつむるアレン達。

恐る恐る目を開けると・・・そこには、澄んだ水色の瞳をし、白銀色の体毛を持った竜がいた。

「あんたが・・・水竜・・・か・・・？」

少しずつ前に進みながら、アレンが尋ねる。

「・・・いかにも。私が“ウォトレスト”の長、水竜のウンディエルです」

水竜はアレンに対し、静かに答える。

「チエス、ご苦労でしたね・・・。後でそなたの兄にも、よろしく言っておいてください」

「承知しました。・・・ありがとうございます」

チエスはウンディエルにお辞儀をした後、ゆっくりと後ろの方へと下がっていく。

「・・・？」

この直後、なぜか周囲の空気が変わったような感覚をアレンは感じ

ていた。

『さて……。 “世界の心”<sup>ガジエイレル</sup>と、古代種“キロ”の末裔よ……。私に訊きたい事が、山ほどあるのではないでしょうか……。?』

「……はい」

少し間が空いた後、アレンとラスリアは大きく頷いた。

そして、その後から長い話は始まった。

『あなた方が知りたい事をまとめると……。 “世界の心”<sup>ガジエイレル</sup>とは何か」、「イル」とは何か」、「古代種キロについて」……。ですよしいですね?』

「ああ」

「はい……。お願いいたします」

アレンとラスリアは、2人とも真剣な表情で頷いた。

その会話を、イブールとミュルザは後ろで見守る。

『まず、ガジエイレルについては……。先に、古代大戦の話からしなくてはならないでしょうね……。』

「古代大戦……。それって、文明が滅びるきっかけとなった戦争……。?」

『はい。人間達の歴史ではそう語られていますが……。本当のきっかけは別にあります』

「……。まさか、それって“8人の異端者”の事か?」

彼らの会話の中に、ミュルザが割り込んでくる。

「ちよつと……。!」

いきなり口を開いた悪魔に驚いたチエスが、ミュルザを制止しようとする。

『大丈夫です、チエス。構いませんよ……。それに、今は歴史をよく知る悪魔がこの場にいた方が、話も理解しやすいでしょう……。』

水竜は、チエスを静かに制した。

勝ち誇ったような表情<sup>かお</sup>をするミュルザに対し、チエスはフィツとそ

つぽを向いてしまう。

『本題に戻るとしましょう……。彼が言う“8人の異端者”なる者達が、全ての生物に宣戦布告し、大きな戦へと発展した……。戦争は何とか、人間を含む“こちら側”が勝利しましたが、受けた被害は尋常ではありませんでした……。』

その台詞の直後、アレンの胸がドクンドクンと強く脈打ち始める。

『大戦が終わって間もない頃……。世界の危機を感じた“星の意志”……。すなわち、本来の“創造神”とも言える彼らが、1つの世界を2つに分離した』

「え……。!?!?」

アレン・ラスリア・イブールの3人は、目を丸くして驚く。

「ちなみに……。俺達悪魔や、船で出会った天使とかは、この2つの世界を自由に行き来できるんだ……。なんていったって、元は1つの世界だったんだしな！」

水竜の説明に、ミュルザが静かに補足した。

「じゃあ、俺達が暮らす世界とは別に……。もう一つ、世界がある……。という事か……。?」

驚きを隠せない表情で、アレンは呟く。

『……。そして、“星の意志”が世界を二分した時……。』

「え……。?」

再び話し始めたウンディエルに、全員の視線が集まる。

『世界を2つに分けた時……。』星の意志”は同時に世界を無に還す事のできる最終兵器を創り出した』

ファイナルウエボン  
ファイナルウエボン  
「最終……。兵器……。?」

その言葉を聞いた瞬間、アレンの心臓の脈はさらに強くなる。

“世界を二分”……。最終兵器の創造”……。もしかして、俺は……。?

自身の胸に手を当てながら、アレンの頭の中には嫌な予想が浮かんでいた。

「おい……。まさか……。?」

全員の真剣な表情が、水竜の方にしつかり向いていた。  
そして、ウンディエルは、その重たくなつた口をゆつくりと開く。  
『“星の意志”がその“最終兵器”ファイナルウェポンを発動するために創つた“鍵”  
となる存在……それが、貴方なのですよ。アレン……』  
「！！！！！！」

衝撃的な事実には、アレン達は皆言葉を失う。

その様子をチエスは、後ろの方で黙って見つめていた。

「俺は……」

数分が経過し、最初に口を開いたのはアレンだった。

「俺は……この世界を滅ぼすために……生み出されたと……  
？じゃあ、俺はそのために旅をしているって事になるのか……！  
！！？」

そう叫ぶアレンの表情は、まるで嘆いているかのようだった。  
必死の問いかけに水竜は黙つたままだったが、数秒が経過してすぐ  
に話し始める。

『確かに、貴方はそういった存在です。でも、今言えるのは、“  
鍵”という存在は貴方だけでない事』。そして、“イル”を求め  
る旅は世界を滅ぼす事とは無関係だという事』です……』  
「どういう……意味……？」

ウンディエルの台詞を疑問に感じたイプールの首を傾げながら尋  
ねる。

「まさか、アレンみたいな存在が……もう1人いるって事……  
！！？」

「……アビスウオクテラ」

イプールの台詞の直後、後ろでミュルザがボソツと呟く。

その台詞に反応したアレン達は、一斉にミュルザの方を見る。

「その“アレン（こいつ）と同じような存在”ってのは、“アビス  
ウオクテラ”……。すなわち、もう一つの世界にいるって事なん  
だろう？水竜様よ……！」

水竜に向かって語るミュルザに、ウンディエルは黙って頷いた。

『・・・そうです。そして、アレン。貴方が求めている“イル”とは、別世界にいる“彼女”の“心”を意味し、その行為は世界を1つに戻す事に結びついているのです・・・』

「世界を・・・元に・・・」

世界の歴史や、自身の事についてたくさん語られたので、アレンの頭の中は混乱していた。

その後、彼らの間で数分ほど沈黙が続く。古代大戦の真実や、“星の意志”。そして、アレンの正体など、いろんな話を聞いて混乱をしていたのは、アレンだけではないようだ。

『・・・“世界の心”<sup>ガジエイレル</sup>や“イル”についての話は以上です。次は、

“古代種キロ”についてですが・・・』

再び話し始めた水竜の表情が優れないようなかんじになる。

『ラスリア。貴方達キロの事は・・・残念ながら、あまりお話しできる事がないのです・・・』

「え・・・？」

『わかつている事は、キロは治癒魔法や蘇生術を得意とし、“星の意志”と対話する能力を持っている・・・ただそれだけです』

最初の話とは違い、古代種の話はすぐに終わってしまう。

あまりに得られた情報が少なく、啞然とするラスリア。その後、疲れきったアレン達の様子を察した水竜が、チエスに声をかける。

『チエス・・・。本来は許可できない事ですが、今宵だけ・・・彼らに食や寝どころの世話をお願いします』

その台詞を聞いたチエスは、最初はきょとんとしていたが、すぐに了承したようだった。

「水竜様・・・」

チエスを筆頭に、湖の間から去ろうとするアレン達。

ミュルザとイブールは先に歩き出したが、アレンとラスリアはまだその場に残っていた。

『アレンにラスリア・・・。私からお話しできる事は、これで全て

です』

「ありがとうございます……ございました……！」

複雑かおそうな表情で、ラスリアはウンディエルに頭を下げる。

『最後に一つ……』

「??？」

水竜がポツリと呟いたのに、アレン達は反応する。

『ラスリア……。少なくとも貴女という存在は、アレンにとってはなくてはならないモノ。彼を“イル”へ導く事は、貴女の使命だと思って全うしてください』

「はい……」

『それから、アレン』

「……」

『古代種キロが絶滅寸前なのはご存知ですよ？故に、邪な者たちは彼女を狙うでしょう。……貴方のその剣で、彼女を守ってお拳げなさい……』

水竜は、アレンにだけ小さな声で語りかけた。

その後、アレンとラスリアもイブル達がいる村の方へと戻っていく。歩いていく彼らの後姿を見つめながら、水竜はボソツと呟く。  
『チエスの報告にあった、黒竜と墮天使の話……。嫌な予感が的中しなければよいのですが……』

一方、とある洞窟の奥での事……。

「ミトセ様……」

壁に寄り添って呟く、フリッグスの姿があった。

その後、奥から誰かの足音が聞こえてくる。それは、彼女の主である男の姿だった。

「モーゼ様……。古代種捕獲の件……。誠に、申し訳ございませ  
んでした」

モーゼという男の足元で跪くフリッグス。

しかし、彼女の表情はとても誤っているようには見えなかった。

「・・・構わんよ。まあ、竜騎士ならば、悪いようにはせんだろう・  
・・・それよりも・・・」

不気味な笑いを浮かべながら、モーゼは話を続ける。

「あなたの報告にあつたように、“世界の心”<sup>ガジェイレル</sup>があの子と一緒にい  
ると言うのならば・・・“あそこ”を訪れるのは必然・・・。私は、  
彼らを迎え入れる準備に取り掛かるとするかね・・・」

「それでは、フリッグスよ・・・。私をあそこまで連れて行ってお  
くれ・・・」

「・・・はっ」

欲望に塗れた男の手で自分に触れられる事は、彼女にとって何より  
も苦痛だった。

しかし、フリッグスは自分の“本当の主”復活のため・・・洪々と  
その命令を実行する。

ミトセ様・・・。貴方様を含む他の方々が、なぜ“異端者”など  
と呼ばれたのか・・・私には理解できない

そう考えながら、フリッグスは自身の白い翼を広げていた。

第17話 ”世界の心（ガジエイレル）” （後書き）

いかがでしたか。

今までわかりにくい部分が多いこの作品でしたが、これでいくらかご理解できたかなと思います。（それでも何？って思われた方はすみません・・・）

『Right』と交互に連載してきたので、「やっとアレンも知ったか・・・！」と、作者としてはそんな気分です。

ちなみに、水竜ウンディエルは『聖剣伝説レジェンドオブマナ』に出てくる白竜（名前忘れた）がモデルです。

次回以降は、全てを知ったアレン達が、今後どのように旅を進めていくかについて描かれると思います。

引き続き、ご意見・ご感想・作品に対する評価や質問も受け付けますので、よろしくお願い致します。

## 第18話 それぞれが抱える想い（前書き）

今回は最初にイブール、次にラスリアという女性2人の視点から物語を進めます。

## 第18話 それぞれが抱える想い

ウオトレストの長である水竜・ウンディエルと対面を終えたアレ  
ン達は、彼女（＝雌？）の厚意で、一晩だけ里で泊めてもらう事にな  
った。村のあちこちにはテントのようなモノが立ち並び、彼らは  
村のほずれにある建物で一夜を過ごさせてもらう事になる。

人間（私）や悪魔ミユルザに対する扱いは変わってないのね・・・

イブールは寝袋の中でうずくまりながら、ふと考え事をしていた。  
竜騎士は警戒心が強く、本来なら自分達のような存在は、その場で  
殺されてもおかしくない状態だった。しかし、今回はウオトレスト  
（彼ら）にとっても非常に重要な存在であるアレンやラスリアのお  
かげで、今ここにいる

普通に生活していたら、まずこんな竜騎士と対面する機会などなか  
ったと実感するイブール。そろそろ、自身の瞳を閉じて眠りにつこ  
うとした瞬間

「・・・ちよつといいか？」

建物の外から声が聞こえる。

「・・・どうぞ」

イブールがそう言っただけ起き上がると、目の前にはチェスが立っ  
ていた。

「貴方は、昼間私達を案内してくれた・・・」

「チェス・・・」

「そう！君、チェスっていうのね・・・」

イブールはそう答えながら、自分より背の低いチェスを見つめる。

「・・・こんな時間にどうしたの？ “ただの人間” である私なんか  
に」

「 “ただの” じゃないよね？」

チェスがそう切り替えた瞬間、一瞬だけイブールはその場で固ま

る。

「・・・用件は何なの？」

あまり触れられたくない事を指摘されたかのように、深刻な表情かおをするイブール。

その後、チエスは近くに腰掛けてから話し始める。

「“契約”・・・って、どんなモノなの？」

「え・・・？」

なぜ、竜騎士であるこの子が、悪魔との契約の事を・・・？

イブールはそんな事を考えていると、チエスは話を続ける。

「翌朝、ちゃんとしたお達しがあるんだけど・・・。実は僕、お前達の旅へ同行する事になるんだ」

「・・・はい!!？」

その台詞を聞いたイブールは驚く。

チエスはウオトレストの一人とはいえ、まだ12・13歳くらいにしか見えない子供。こんなに幼いのに、旅などできるのかという考えが、彼女の頭によぎる。しかし、イブールは肝心な事を聞いていないのに気がつく。

「あれ・・・？じゃあ、なんで私の“契約”について聞くの・・・？」

それを聞いたチエスは一瞬言葉をつむぐが、またすぐに話し始めた。

「・・・実は僕、まだ相方となる竜ドラゴンがいないんだ」

「・・・？」

「・・・正確に言うと、まだ竜ドラゴンの背に乗って飛べる年齢としじゃないんだって」

「年齢・・・？」

竜騎士として竜にまたがる事と年齢に、どう関連性があるのかとイブールは首をかしげる。

「僕は今、人間年齢で言うと、12歳くらい。・・・実際はもっと長く生きているけれど、竜ドラゴンの背に乗れるのは、人間の年齢で18歳くらいなんだって」

「ふーん……」

竜について語るチエスに対し、イブールは興味津々な表情かおで話を聴いていた。

「だから……見ず知らずの悪魔と契りを交わす、“契約”が気になつていた……そういう事？」

イブールがチエスをチラツと見ると、彼は黙つて頷いた。

……竜騎士はどいつもこいつも、警戒心の強い故に頭硬い連中ばかりと思つていたけど……。この子の場合……

異民族である自分に、遠慮せずに興味関心をむき出すチエスに、イブールは少し感心していた。

「……他の皆はどう受け止めるかはわからないけど……。よろしくね、チエス」

「う、うん……」

イブールは「なぜ、自分達の旅に同行する事になつたのか」と考えたが、そこはあえて訊かなかった。というのも、彼女はそれがウンディエルの命令である事を理解していたからである。

そして、翌朝

「……お前達が捜し求めている、“イル”のある場所へたどり着くには……」

チエスの兄ビジョップは、イブール達を呼び寄せて、話を始めていた。

他のウオトレスト達やチエスが見守る中、ビジョップは世界地図を広げて話を進める。

「この場所へ到達するには、ドワーフの力が必要だ」

「ドワーフ……？」

「背が小さくて穴掘りの得意な、地下に住む小人の事さ！」

説明の中で、初めて訊いた言葉に不思議がるアレン。そんな彼にミユルザは補足をしていた。

「悪いが、余計な口は挟まないで貰おうか」

「・・・へいへい」

ビジョップがミュルザを睨みつけると、彼はバツが悪そうな表情で返事をした。

「その”ドワーフ”に会うためには、どうすればいいんですか？」

「それは・・・」

ラスリアからの質問に対し、ビジョップは世界地図のとある場所を指差してから答える。

「宗教自治区ルーマニシア・・・。ここを通過した先に、ドワーフの住む村があるとされている」

宗教自治区ルーマニシア・・・。あそこって確か・・・

この時、イプールの視線は自然とラスリアの方に向いていた。

このルーマニシアという都市は、どこの国にも属しておらず、1つの国とも言える都市。そして、ライトリア教の総本山でもあり、多くの巡礼者が行きかう事で有名である。

だが、そんな神聖な雰囲気のある都市であっても危険な場所には変わらない。

「ルーマニシアへ行ったら・・・何かしら接触がありそうよね。・

・・・この間の墮天使とか」

イプールはボソツと隣にいたミュルザに耳打ちした。

何を考えているのかを察したのか、ビジョップはため息をついた後に口を開く。

「本当はドワーフの住む村へ、乗せてあげられれば良かったのですが・・・。残念ながら、この宗教自治区には特殊な結界が張り巡らされているので、不可能なのですよ」

その台詞を聞き、「気を引き締めていかなくは」とイプールは自然に考えるようになっていた。

「・・・及ばずながら、あなた方の旅のお供をつけさせて戴きたいと思っています・・・チェス」

「はい」

ビジョップがチェスに呼びかけると、彼は返事をして兄の下へ歩い

てくる。

「……ウンディエル様の命令で、このチェスをあなた方の旅に同行させる事になりました……。身体は小さいですが、槍の扱いや魔術に関しては他の者に引けを取らない、ちゃんとした実力を兼ね備えています。どうか、旅の中でこやつ<sup>ウオトレスト</sup>の力を発揮させてあげてください」

「……ありがとうございます」

ラスリアはそう言った後、ペコリとお辞儀をした。

「改めて、チェス・アングル・ウオトレストです。以後よろしく……」

「イブール・エンヴィです。……よろしくね、チェス」

澄んだ水色の瞳を持つ少年は、ちゃんとした自己紹介を行う。

そしてアレン達もイブールを筆頭に自己紹介を始めた。そのやり取りがある程度終えた所で、ビジョップが声をかけてくる。

「それでは……崖の上までお送りしよう」

「あの……!!!」

ビジョップが歩き出そうとした瞬間、ラスリアが彼を呼び止める。

その声に、全員の視線が彼女に集まった。

「……何か……?」

振り向くビジョップに対し、ラスリアの表情が物凄く不安定に見えた。

「……いえ。やっぱり、何もありません……」

ラスリアは何かを言いたそうではあったが、結局何も言わずに黙りこんでしまう。

どうしたのかしら……?

何を言いたかったのかとイブールは心の中で気にかけていた。

次の行き先が決まったアレン達は、<sup>ウオトレスト</sup>竜騎士達の竜の力を借りて宗

教自治区ルーメニシエア近くの森まで送ってもらったことになった。

「よし……行くぞ!」

アレンがラスリア・イブール・ミュルザ・チェスの4人に呼びかけた後、竜はその大きな翼を羽ばたかせる。

ビジョップさん……

ウオトレストの村が小さくなるのを見届けながら、ラスリアはボンヤリと、昨夜した会話を思い出していた。

「ラゼが……私の事を……?」

「……はい……」

昨夜、眠れなかったラスリアは、チェスの兄ビジョップと少しだけ対談していた。

「3年ほど前、キ口の末裔……ラゼという青年は、誰に教わったわけでもなく、自らの足でこの里にたどり着きました」

……それで、「会ったことがある」って言っていたんだ……この時、ラスリアはラゼがこの地を訪れ、ウオトレストに会った事を改めて認識する。

「当時は、もうキ口は絶滅したものと我々も考えていましたので……彼の来訪には、誰もが驚かされました」

「そっか……。だから、私の時はすんなりと迎える事ができたんですね……」

ラスリアがそう呟くと、ビジョップは黙って頷いた。

「彼はウンディエル様と対面し、あの方にこう進言したそうです。

「キ口の生き残りは自分だけではない」と……」

「じゃあ……私と出会う前から、私の存在に気がついていて……という事でしょうか?」

「おそらく……」

「……ラスリア殿?」

ボンヤリと考え事をしていたラスリアは、目の前に乗っているウオ

トレストの男の声を聞いて、我に返る。

「あ……ごめんなさい！……なんでしたっけ？」

「全く……。この先、風圧がかなり強くなりますので、しっかりと捕まっけていてください！と、言っていたのです」

「……はい」

我に返ったラスリアは、前に乗る竜騎士の背中につかまった。

竜の背に乗せてもらっているとはいえ、ウオトレスト竜騎士なしで背に乗る事は決して許されない決まりのため、必ず竜騎士の一人と一緒に乗る事になっている。この不思議な掟に対し、ラスリアは特に違和感を感じていなかった。

ラゼ……。私と同じキロだという事はわかったけれど……。彼自身は何者なのかな……？

ラスリアは、出会う前から自分の事を知っていたラゼの事を思い浮かべながら、青い空を見つめていた。

そうしてアレン達は色々な想いを抱えながら、宗教自治区ルーメニシエアに向かう

第18話 それぞれが抱える想い（後書き）

いかがでしたか。

これedyouやく、パーティー5人が勢ぞろいとなりました。

しかし、物語全体の流れとしては、まだまだ前半なんですよね・・・

次回から新章突入となり、急展開を見せるかと思えます。

同タイトル『Right』と共に、よろしく願います。

それでは、ご意見・ご感想をお待ちします！

## 第19話 イブールの過去（前書き）

今回は、最初はアレンでスタートですが、半分以上はイブール視点での話です。

## 第19話 イブールの過去

「未開の地」

それは、レジエンディラスにおいてどこの国にも属していない大陸を指す。宗教や貿易、多くの目的を持つてその大陸を目指した旅人は多いが、誰一人としてそこから生きて帰ってきた者はいなかった。それ故に、「未開の地」なのである。この“大陸を目指す人々”の中には、ライトリア教を広めたライトリア教団の姿もあった。

そして、彼らにとつて「未開の地」とは、多くの資源や繁栄を導く“希望の大陸”であると解釈しているのであった。

竜騎士ウオトレストの力を借りて、アレン達は宗教自治区ルーメニシエアに到達していた。都市の入り口付近にある森で竜から降り、その後は徒歩で向かった。ルーメニシエアの中へ入ると、そこは多くの巡礼者が行き交っていた。

ライトリア教か・・・

宗教に全く興味のないアレンにとって、一つの教えでこんなに大きな街ができるという事が不思議でたまらなかった。

「ところで・・・」

歩いている途中、最初に口を開いたのは、チエスだった。

「君達は、このライトリア教とかの信者なの？」

「えっ・・・？」

チエスの問いかけに、全員が目パチクリする。

「僕も星命学の事は知っているけど、ライトリア教って、あれのパクリみたいなも・・・」

その先を言おうとした瞬間、イブールが咄嗟にチエスの口を塞いだ。

「イブール・・・？」

アレンは不思議そうな表情でイブールとチエスを見る。

そして、イブールは声のトーンを下げて話し出す。

「この都市はライトリア教の総本山。・・・悪気がなかったとしても、ちよつとでも教団の悪口を言ったら、捕らえられてしまうのよ。・・・」

「なるほど・・・。道理で、明るい人間と暗い人間の差がはつきりしているわけだ・・・」

ミュルザは周囲を見渡しながら、小さな声で咳く。

イブールがチエスの口から手を離すと、彼は咳をしながら話し出す。  
「・・・それだったら、長居は無用だね。早いところ、この都市を通り抜けた方が・・・」

「ええ。・・・でも、この都市はとても広いし、私達が向かう北側の出入り口まで結構距離があるはず。しかも、この自治区では一定の時間になると出入国できないと聞いたわ。だから・・・」

「1日はこの都市に滞在しないといけない・・・。そういう事？」

「ええ・・・」

真剣な表情で話すラスリアに、イブールは頷いた。

「・・・ならば、俺達が向かう出入り口付近にある宿に泊まればいいんだな？」

「そうね・・・。あと、教会からは少し離れた場所の方が無難かも。・・・」

話のまとまった彼らは、真つ先にその宿屋を探すために歩き出した。教会の施設の前はなるべく通らないようにし、少し隠れるようにして進む。アレンやチエスは、イブールから以前船で出くわした墮天使フリッグスが、ライトリア教団の関係者とながっている事を聞いていた。故に、教会の施設を避けて進む事に問題なく同意したのだった。

イブールは、「ライトリア教団が古代種キ口の生き残りを必死で探している」という事を知っていたようだが・・・。そういえば、あいつは何者なんだ・・・？

進みながら、アレンは考える。今回、ウォトレストとの一件でいる

んな事があつたため、すっかり訊くのを忘れていた。イブールは何者で、なぜ悪魔であるミュルザと「契約」したのかを……。

「誰だ……!?!?」

ミュルザが突然、大声で叫ぶ。

それと同時に、上の方を見上げていた。

「ちょ……どうしたのよ、急に!?!?」

いきなり叫びだしたミュルザに驚いたイブールが、あたふたしながらミュルザに問いかける。

「いや……。悪い、気のせいみたいだ……」

何を感じ取ったのかはわからなかったが、威嚇を示す紅い瞳から元の色に戻るミュルザ。

再び宿に向かつて歩いていくアレン達。しかし、ミュルザの感覚が間違っていたわけではなかった。既に、何者かが彼らを監視していたのだから

「うーん……。人間達が利用するっていうこの“宿屋”……悪くないかも……」

ふかふかのベッドに寝転びながら、チエスは満足そうな表情でかお呟く。

あれから、彼らが向かう入り口付近にある宿屋に到着したアレン達。ライトリア教団の総本山なだけあって、ルーメニシエアはとても広く、流石に1日では通り抜けられなかったのだ。辺りはすっかり暗くなり、月の光が街を照らしていた。

それにしても……こんなにあっさりたどり着けたのは、意外だったな……

イブールは宿屋のバルコニーで、夜風に当たりながら考える。ミュルザの言っていた墮天使が直接、ラスリアを捕らえようと現れたのだから、また同じような出来事があるのではないかと、イブールは

警戒していた。それとも、彼女の思い過ぎだったのか……。

「イブール」

「あら……」

後ろを振り返ると、自分の目の前にいたのはアレンだった。

「……どうしたの？」

「お前にちよつと、話が……」

イブールの問いに静かに答えたアレンは、辺りを見回す。

アレンから私に話……って、めずらしいわね……

内心でそう思いながら、イブールはアレンを見つめる。

「……で……話って何……？」

「……単刀直入に訊くが……」

そう切り出したアレンは、一瞬だけ黙り込んだ後、再び話し出す。

「お前は何者で……どうして、ミュルザ（あいつ）と“契約”し

たんだ……？」

「!!!!!!」

アレンの台詞を聞いた瞬間、イブールの表情が一変する。

……あまり触れてほしくなかったのに……

内心ではそう思ったものの、アレンの真っ直ぐな眼差しを見ている

と、とてもごまかせそうにもない。この時、イブールの視界に、チ

ラリとラスリアの姿が入ってくる。

……純真無垢なラスリア（あの子）にはとても話せないし、話

したくないけど……アレンだったら……

アレンとイブールの間で沈黙が続く中、イブールはどう答えようか

考えていた。

「自分の事を知った俺としては……お前が何者であっても、別に

驚きはしない……。それでも駄目か……？」

そう言われたとたん、断れないような心境に陥るイブール。

そして、意を決したイブールは、重たくなった口を開く。

「いいわ……。貴方にだけ……話してあげる……」

その後、イブールは自分の出生について話し出す。

「私の家は、ライトリア教団と結びつきの深い貴族だったの。古くから教会に資金援助をしていた関係で、いろんな情報を知ることができたのよ……」

「……それで、教会の内部事情を知っていた……ということか？」

「ええ」

イブールは首を縦に頷いた後、話を続ける。

「……貴族といつても、他の家々と比べるとそんなに有名でもなかった。それでも、私は幸せだったけど……」

「……“だつた”？」

「……私が15歳の時に……両親が殺された……!!」

「……!!」

その台詞を聞いたアレンは、目を丸くして驚く。  
一方でイブールは、拳を強く握り締め、その瞳に憎悪が宿り始めていた。

「あの惨劇が起きた日……私は外出をしていて、自宅に帰ってきた時の事だつた」

イブールは自身の胸に手を当てながら話を続ける。

「家の中は静かで……所々で使用者が全て殺されていた。そして……リビングでは、無残な姿で床に倒れていた父と母がいた……」

イブールの話を聴きながら、アレンは深刻そうな表情をしていた。

「でも……悪夢はこれで終わりではなかった……」

「その後……お前の身に、何があつたんだ……?」

アレンはつばをゴクリと飲み込んだ後に、その台詞を口にした。

イブールの表情が、より一層深刻なモノへと変化していく。

「両親の無残な姿を見た後、自分に何が起きたのかはわからない。

ただ……目を覚ました時には、鎖で拘束され、檻の中に閉じ込められていた」

「檻……だと？でも……何のために……」

「さあ……？一つ覚えている事は、仮面をしているおっさんやおばさんが時折、布か何かで覆い隠されていた私を、家畜のように見下していたくらいかしら……」

この時、イブールの脳裏には、当時の出来事がまるでつい先ほど起きた事のように甦る。

「でも……そんな扱いを受けたショックなのか、なぜ両親が殺されて、自分がこんな目に遭う羽目になったのかを思い出せたの……」

「……」

「……何を思い出したのか……訊かないの？」

自分が言った台詞によってアレンが質問してくるかと考えていたイブールだったが、何も訊かずに黙っているアレンを不思議そうに見つめた。

「俺はただ、イブールが話せる範囲での事を聞きたいだけだ。……お前がどうしても口に出しずらそうと感じたら、余計な口出しはしない……」

少しづつきらぼうなかんじはしたが、冷静にそう言ってくれるアレンに、イブールは少しだけホッとしていた。

しかし、だからといって自分の中に眠る憎悪が消えたわけではない。……もう生きる気力を失い、何もかもがどうでもよくなってきた頃……。私はとある会場に運び出された……」

イブールは再び話し始め、アレンはそれを黙って聴く体勢に戻る。

「そこでは、魔方陣の描かれた台の上に放り出された……。もちろん、四肢を鎖でつながれた状態で……」

「もしや、その時……？」

「そう……。 “ 奴ら ” は私を贄として、悪魔を呼び出したの……。それが、今のミユルザよ……」

そう呟いた後、イブールは首に巻いていたスカーフを取り始める。

「それ……は……？」

イブールの首筋を見つめるアレン。

そこには、異様な文様などが描かれた紋章のようなモノが掘り込まれていた。

「これこそが、悪魔と契約した時に浮かび上がる“契約書”……。これを手に入れた私は、ミュルザ（あいつ）を操る主となった……。そんな所よ……」

そう言つて、イブールは外したスカーフを再び巻き始める。

「という事は、もしかして……。お前は、両親を殺した連中を探すために、旅をしている……。という事が……？」

その台詞を聴いた瞬間、ドキツとするイブール。

本当にアレン（彼）は……。直球で訊いてくるんだから……。内心でそう想いながらも、イブールはすぐに答える。

「ええ……。私の記憶を頼りにすると、私の両親を殺した奴と、私を生贄にしようとした連中には共通点が多いの……。だから、見つけたその時は……！！！」

イブールの頭の中には、悪魔が呼び出される前後の事が浮かんでいた。

『イブール……。お前はこれから、悪魔の元へ嫁ぐ事となる……。我々、悪魔信仰の人間では不可能であり、これはとても名誉な事なのだよ……。？』

手に刃物を握りしめながら語っていた男の声は、今でもすぐに思い出せる……。それくらい、強烈なものだったのだった。

そして、刃物で肉体をズタズタに引き裂かれた後……。意識を取り戻した時には、既に“悪魔”といえる異形の存在が頭上にいた。

『へえ……。お前が俺様の新たな主人……。どんな奴かと思いきや、なかなか絵になるモノを持っているな……。』

意識が少しずつはつきりする中、悪魔は話し続ける。

『見えるぜ？お前の心……。生への執着・欲望……。そして、両親を殺した奴らへの憎しみ……。憎悪が……。！！』

そう語るミウルザ（悪魔）の瞳が血のように赤く、獲物を捕らえたような表情が最も印象的で、一番恐怖した瞬間だった

「……私については、以上よ。他に何か訊きたい事は……？」

「いや……もう大丈夫だ」

「そう……」

イブールがフーツとため息をつくとき、アレンはバルコニーから部屋の中へ戻ろうと足を動かし始める。

「話してくれて……」

「ん……？」

「話してくれて、ありがとうな……」

「……」

イブールは、複雑そうな表情をしながら、部屋へ戻るアレンを見送っていた。

その後、イブールは再び外の景色を眺めていた。

夜空に浮かぶ星を見つめながら、イブールはふと考え事をする。

……こんな風にして、“あの時”の出来事を話せるようになるとはね……

今も当然、両親を殺した奴は憎いけれど、思い出したくない過去について語れるようになった自分を見て「少しは強くなれたのかな」と考えていた。

「さて……と。私も中に入って寝ようかしら……」

ボソツと独り言を呟いた後、イブールは自分も中に戻ろうと足を動かし始めようとする……

「え……？」

地面には、黒い影が映っていた

## 第19話 イブールの過去（後書き）

いかがでしたか。

イブールの過去については、大分前から考えていたのですが、どのタイミングで載せようか迷っていました。

その後に、今回と次回以降を含む新章を考えました。

その結果、次回以降はノンストップなかんじで物語が進みそうなため、新章の一番最初の回に載せようと決定しました。

今回はイブールに忍び寄る黒い影の正体を含めた、いろんな展開が待っていると想います！

ご意見・ご感想・作品に対する評価の方を、よろしくお願い致します。

## 第20話 吸血鬼(前書き)

今回は滅多にないミュルザ視点と、今回初のチエス視点で物語を進めます！

## 第20話 吸血鬼

入浴や睡眠・・・人間の習慣にほとんど興味を持ったことはなかったが、案外悪くはないな・・・

イブールとアレンが二人で会話をしていた頃、ミュルザは一人、宿にある温泉に入っていた。

悪魔であるミュルザにとって、入浴といった人間の習慣は、あまり実行しなれないモノ。「なぜこんな事をするのか」と考えていたが、イブールと一緒にいる内に、人間の生活に溶け込み始めたのかもしれない。

「・・・さて、そろそろあいつらの所に戻るか」

そう呟いた後、温泉から出ようとすると・・・

「・・・!!!?」

瞬時に何かを感じ取ったのか、タオルを巻かないでバツと立ち上がる。

イブール（あの女）と一緒に感じる気配は

この時、ミュルザは昼間、移動中に背後から感じたモノと同じ気配を感じ取っていた。

「マジかよ・・・!!!」

小さく舌打ちしたミュルザは、猛スピードでイブール達のいる客室へ向かい始める。

「イブール・・・!!!」

速攻で着替えを済まし、部屋に戻ったミュルザ。

その視線の先にいたのは、茶色い髪の男に捕らえられたイブールの姿だった。

「ミュルザ・・・!」

今にも泣きそうな表情で、ラスリアがミュルザの元へ近づいてきた。周囲を見ると、アレンとチェスがそれぞれ剣と槍を構えている。ミ

ミルザは、イブールを拘束している男の表情を見る。

血のように赤い瞳に色白の肌……。やっぱり、こいつは……  
「……まさか、レジエンディラス（人間界）でてめえみたいな奴に会えるとはな……」

ミルザは殺意のこもった紅の目で、男を睨みつける。

「おい……。お前、こいつが何だか知っているのか？」

横でアレンがミルザに問いかける。

なるほど……。流石にアレン（こいつ）は連中の事知らねえよな。

・

内心でそう思いながら、ミルザは口を開く。

「どうして、うちのご主人様を人質にしてるかはわからねえが……

こいつは、人の生き血を啜る吸血鬼だ」

「なっ……！！！」

ミルザの台詞を聞いて、彼以外の4人は驚く。

「……道理で、あんたからは血の臭いがするのね……」

吸血鬼の腕の中にいたイブールが、ボソツと呟く。

「……こいつは少し厄介だな……」

悪魔であるミルザにとって吸血鬼は過去に何度か見かけた事があったので、本来はその心を読む事ができるはずであった。しかし、どういう訳か、自分の目の前にいる茶髪の吸血鬼の心だけは読めない。その事に対して、ミルザは不思議でたまらなかったのだ。

「その悪魔……。きつと、僕が何のためにこの娘を捕らえているのか、わからなくてイライラしているんじゃない……？」

「……てめえは一体……？」

今まで身体から発する邪気や殺気は、他の生物に負けた事がないくらい強いモノを持っていたミルザ。

しかし、目の前に感じる男の気は、殺気ではないが吐き気のするような感覚が強くて、悪魔であるミルザでさえも不快に感じているようだ。

「……まあ、僕の事は置いて……。それより……」

不気味な笑みを浮かべながら話す男は、右手を伸ばしてラスリアを指す。

「君…… “彼ら” から呼び出しがかかっているよ……」

「“彼ら”……?」

男の台詞に、首をかしげるチエス。

そんな彼に男は、チラッとだけ視線を移した。

「悪魔に竜騎士に“世界の（ガジエ）心”……。僕が言うのもな  
んだけど、変わった連中のたまり場なんだね、ここは……」

「何……!!?!?」

“世界の心”の言葉に、アレンが反応する。

その後、数秒間だけ沈黙が続く。彼らの間に流れる空気は、とても緊迫したものとなっていた。

「この自治区に入ってきたという事は……知っているんでしょ?

“彼ら”というのがライトリア教団を指している事も……!!」

アレン達が深刻な表情で身構えている中、吸血鬼はイブールの首に巻かれているスカーフを外し始める。

「……!!?!?!」

その行動に気がついたイブールの表情が変わる。

「とにかく、君達がおとなしくしてくれないと……」

イブールのスカーフをスルスルと外していく男を、ミュルザはジッと見つめていた。

「……一層、“契約書”を見てしまえば……」

悪魔にとつて、“契約書”は、その瞳で見たらその分だけ強い力を発揮できる、力の媒介みたいなモノ。当然、“契約書”をさらけ出さなくても命令に従うが、肉眼で見える方が遥かに良い。

「この娘……食べちゃうよ……?」

「んなっ……!!?!?」

その台詞を聞いた瞬間、ミュルザはゾツとした。

男はスカーフを外したイブールの首筋に舌を這わせていたのだ……  
しかも、舌は隠れていた“契約書”にも触れていた。

「……この野郎……!!」  
ミュルザはグツと拳を強く握り締める。

イブールの奴は……駄目か……!

イブールの方をチラッと見て彼女の心を読むと、憎悪と恐怖の入り混じったものが感じられた。そして、状態からしてとても自分に“命令”できる状態ではなかった。

「……くそっ……!!」

イブールが人質に取られてさえなければ、あの野郎を八つ裂きにできるのに……!!

悔しそうな表情で敵を見る一方、先ほどの行為で歯向かう気力をなくした事に、心を読む事で気がつく。

「……わかったわ。あなたの要求を呑むから……イブールを放して……!!」

真剣な表情で話すラスリアを見たミュルザは、彼女からあきらめ……というより、観念したような心情になっている事を読み取っていた。

まさか、こんな事になってしまうなんて……!!

夜が明けてきた頃、昇ろうとする太陽を見つめながら、チェスは考え事をしていた。

吸血鬼の襲撃でイブールを人質に取られた事で、抵抗の術を失ったアレン達。「ライトリア教団に見つかからないように」と移動してきたのに、全てが水の泡となってしまうのだ。

あれから、アレン達は教団の兵士達の手で檻のようなモノに閉じ込められ、そのまま馬車に乗せられて移動<sup>イレル</sup>していた。

「古代種を守り、“世界の（ガジエ）心”の手助けをするように」とウオトレストの長である水竜ウンディエルの命を受けていたチェス。村を出てからあまり時は経っていないとはいえ、自らの使命を

全うできない自分に憤りを感じていた。

「ごめん……。僕が、不甲斐ないばかりに……」

「チエス……。あなたは、何も悪くないわ……」

俯いたまま嘆くように話すチエスに、ラスリアは静かに話す。

「ストの村を出た時から……。こうなるんじゃないか……。って気はしていたから……」

その台詞を聞いたアレンは、せつなそうな表情かおをしていた。

「……。まさか、心の読めない吸血鬼なんてのがいるとはな……」

「……。それって、どういう事……。？」

不思議に感じたチエスは、ミュルザを見る。

教団の紋章が描かれた首輪を無理やりつけさせられたミュルザは、少しうなだれているような雰囲気だった。

……。あの首輪が、悪魔の力を押さえ込んでいるのか……

チエスはまじまじと首輪を見つめていた。

「……。その通り……。俺が今言った言葉は、そのままの意味だつて事だよ……」

表情を変えずに答えたミュルザを見たチエスはようやく確信をした。

こいつ、僕の心が……

そう考えていると……

「えっ……。!!!?」

「きやあっ……。!!」

チエスとイブールが、ほぼ同時に悲鳴を上げる。

その直後、ミュルザの表情も少し変わる。

『なぜ、この悪魔は僕の心を読めなかつたんだと思う……。？』

「頭の中に響いてくる声……。これは……!」

耳がキーンとした状態でチエスは呟くが、アレンとラスリアは何の事か理解できず、きよとんとしていた。

「……。精神感応能力……。か……。!」

隣にいるイブールとミウルザの表情を見る限り、あの吸血鬼の精神  
レバシー  
感応能力を感じ取っているのは、僕を含めて3人だけか・・・

チエスが内心でそう思っていると、茶髪の吸血鬼による話は続く。

「僕はね・・・。生まれた時から、他の吸血鬼（仲間）よりも持ち  
うる能力が非常に高めだったんだ・・・！」

声が嬉しそうなかんじの口調だったため、チエスはその辺に違和感  
を感じていた。

『でも・・・ある時を境に、皆から「変な奴」扱いを受け始めた・  
・。噂や暴言はどんどんエスカレートし、ついには“吸血鬼族を滅  
ぼそうとする異端者”とまで言われるようになってしまふ・・・』  
“異端者”という言葉聞いた途端、チエスは身体をビクツとさせ  
る。

「・・・チエス・・・？」

不思議そうな表情でラスリアがチエスを見つめる。

そういえば・・・以前、ビジョップ兄さんから聞いた事がある。

昔、世界を滅ぼそうと戦争を起こした“8人の異端者”とかいう連  
中の事を

「あ・・・」

チエスの表情が、みるみる硬直していく。

彼は、異民族で構成された“8人の異端者”達が、それぞれの種  
族出身なのかを思い出す。

「まさ・・・か・・・？」

ガタガタと身体を震わすチエス。

それに気がついたのか、吸血鬼はまた精神感応能力を利用して、話  
す。

「ウオトレストの少年が・・・どうやら、気がついたみたいだね・  
・。」

「何・・・だと・・・!!!?」

ミウルザが物凄い形相で茶髪の男を睨んでいたが、本人は全く気にな  
っていない様子だ。

「そう。僕はね……かつて“8人の異端者”と呼ばれて恐れられていた者の一人……“血に飢えた吸血鬼ジェルム”なんだよ……！」

狂気にも近い声で語るジェルムの声を聴き、イブール・ミュルザ・チエスの3人は呆然としていた……。

## 第20話 吸血鬼（後書き）

いかがでしたか。

悪魔であるミユルザが人間と同じように風呂につかるのも不思議ではありますが、やはり「ライトリア教団で、なぜ吸血鬼を従えているのか」という方が疑問に感じられたかと思います。

次回はついに、墮天使フリッグスの主モーゼと対面する事になるのですが、実はこの人・・・  
続きは次回にて

ご意見・ご感想と作品への評価・質問をよろしくお願い致します

## 第21話 対面と再会（前書き）

<前回までのあらすじ>

宗教自治区ルーメニシエアの宿屋にて、茶髪の吸血鬼ジェルムに襲われるアレン達。イブールを人質に取った彼は、自分が世界を滅ぼそうとした”8人の異端者”の一人であることを語る。

そして、ジェルムの背後にいるライトリア教団の兵士達に拘束されたアレン達は、彼らの手によって、教団の礼拝堂に連れて来られていた・・・

## 第21話 対面と再会

「着いたぞ」

馬車を運転していた兵士の声が聞こえると、檻の扉も開けられ、兵士達に囲まれながら進んでいく。

「ここが、ライトリア教の礼拝堂・・・」

ラスリアは辺りを見回しながら、考え事をしていた。彼女の周囲には、屈強な兵士が囲むようにして存在し、仲間達はその後ろから歩かされていた。

「こんな事になるなら・・・ずっと、ストの村にいるべきだったのかな・・・」

ラスリアは拳をギュツと握り締めながら、後悔の念を抱いていると、奥の方から教皇のような服装をした男性が、兵士達と共に歩いてきた。

「やっと・・・お会いできましたな。・・・古代種キロの末裔・・・」

「貴方は・・・？」

ラスリアは、鋭い眼差しで睨みつける。

「ああ・・・申し遅れました。わたしは、ライトリア教団の僧長モーゼと申します。・・・以後お見知りおきを・・・」

自己紹介をしたモーゼは、ラスリアの目の前で深いお辞儀をした。

「それにしても・・・絶滅したと思われていた古代種に生き残りがいたとは・・・このモーゼ、誠に嬉しく思います」

「そんな事より、早く彼らを解放して・・・！！」

ラスリアは相手に対して眉間にしわを寄せながら叫ぶ。

「ラスリア・・・！」

背後では小声で叫ぶチェスの声が聴こえる。

しかし、モーゼはそれに臆することなく、「その台詞を待っていま

した」と言わんばかりの表情で話を続ける。

「全ては、貴女次第です。ラスリア様……。貴女が我々にご協力戴ければ……」

「……私は、何をすればいいんですか……？」

怒りを抑えながら、ラスリアは話す。

背後ではガチャンという槍と槍のぶつかる音が聴こえる。

ここで拒否をしたら……皆が何をされるかわからない。そんなのは……嫌……!!

ラスリアは心の中で叫ぶ。

自分を含む5人の中で、一番強いであろうミュルザですら、教団の紋章が入った首輪で押さえつけられる始末……。それは、ラスリアの行動次第で、すぐに仲間達（彼ら）の首が飛ぶという事を示している何よりの証拠であった。

モーゼはニヤニヤとしながら、話を続ける。

「ラスリア様は、“未開の地”をご存知かな……？」

「……ええ」

“未開の地”という言葉聞いた瞬間、ラスリアは胸をドキッとさせる。

「あの土地では、未だ発見のされていない生物や、資源が眠る、まさに“聖地”なのです。そして……」

「そして……？」

「“星の意志”の力が強い……。これは何を意味するか、おわかりかな……？」

その台詞を聞いたラスリアは、首を横に振る。

「確か、貴方達“キロ”は、“星と対話する能力”をお持ちだとか……」

「……私自身は、星に語りかける事すらやったことないですけどね」

「構いませんよ、別に……。微力ながら、貴方様が無事に役目を終えられるよう、我々も助力致しますので……」

「……おい……！」

ラスリアが後ろを振り向くと、チエスがモーゼを睨みつけていた。

「僧長の御前であるぞ……！」

口出しをしたチエスに、兵士は槍を構える。

「やめて……！」

ラスリアはその場へ走っていきそうな勢いで叫んだが、周囲にいた兵士達に遮られる。

「構わんよ……。どうやら、その少年がこの私に何か言いたいみたいだからな……」

モーゼの視線は、明らかにチエスを見下していた。

「……未開の地」<sup>ちから</sup>って聞いて思い出したんだけど、あそこに行くには、ドワーフの能力を借りないとたどり着けないんじゃないの？

チエスは皮肉っているような口調で話す。

そうだ……。ウオトレストの里でも、ビジョップさんがそのような事を言っていた……！

ラスリアは竜騎士の里で話していた事を思い出す。

でも、そうだとすると……

モーゼの顔をチラリと見るラスリア。しかし、彼の表情は不安など全く感じさせない状態であった。

「その心配は皆無よ……。坊や」

ラスリアがモーゼを見たのとほぼ同時に、横から聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「あなた……！」

ラスリア達の目の前に現れたのは、巡礼者のような格好をしていたが、紛れもない墮天使フリッグスの姿であった。

「なるほど……。てめえの主つてのが、このおっさんだったという訳だ……」

後ろの方でミユルザがボソツと呟く。

しかし、フリッグスはアレンやミュルザ達には見向きもせず、モーゼに対して跪く。

「モーゼ様。例の件、協力を取り付けました」

「ごくろっ……」

フリッグスの知らせを聞いたモーゼは、再びニヤニヤした表情をする。

「もしや……ドワーフに協力を約束してもらったの……?」

フリッグスやモーゼの口調から考え、ラスリアは答えを出す。

その後、一瞬だけ黙った後にフリッグスの口が開く。

「残念ね、古代種。確かに、おかげで“未開の地”まで地下トンネルを通って行ける事になったけれど……“協力”ではないのよ……」

「……?」

フリッグスの台詞に、疑問を感じるラスリア。

その口から、思いにもよらない一言が出てくる。

「“協力”というより、“強制”ね……彼ら、なかなか言うことを聞いてくれなかったから……」

「なんて女性……!!!」

キツと睨むラスリア。

「強制って……彼らに手をかけたの!!!?」

チエスが物凄い険しい表情でフリッグスを睨みつける。

「まあ、それはさておき……。ラスリア様の役目を滞りもなく終わらせるには、君の力が必要なんだよ……!」

そう言ってモーゼが指差したのは……アレンだった。

「……?」

「行けばわかるわ」

ラスリアの言葉に、フリッグスが瞬時に答える。

「……!!!?」

この時、背後から何か殺気のようなモノを感じたラスリア。

再び後ろを振り向くと、そこではイブールが、物凄い形相をしていたのだ。

「イブール……?」

その表情は、いつもの穏やかな彼女とは思えないくらい、怒りに満ちている。　　そんな表情だった。

「あんだ……だったのね……」

「?」

イブールは低い声で何か呟いていたが、何を言っているのか近くにいたアレン達すらも聞こえなかった。

「あんたが……私の両親を……!!!」

「イブ……」

そう叫びながらモーゼを睨みつける表情を見たラスリアは、彼女から感じる殺気に対し、全身に鳥肌が立つ。

モーゼ……この僧長とイブールの間に、一体何が起きたの……!!!?

ラスリアは必死で兵士の拘束から抜け出そうとするが、なかなか抜け出せないようだ。

「……あああああああああ……!!!」

雄叫びのような絶叫が、礼拝堂内に響き渡る。

「……あああああああああ……!!!」

雄叫びのようなイブールの絶叫が礼拝堂中に響き渡る。

イブール……一体、どうしたって言うんだ……!!!?

豹変したイブールを見たアレンは、驚きの余りに、慌てふためく。彼の後ろにいるミウルザは、首輪で力を押さえつけられているのか、表情を一つも変えずにイブールを見つめていた。

「……いい声で鳴くじゃねえか……」

「……!!!?」

ミュルザがボソツと何か呟いたのを聞いた瞬間・・・  
バサツ・・・

アレンの目の前に、何か白い物が出現したのを感じる。

「なっ・・・!!!!」

一瞬の出来事で見逃してしまったが、気がつくといブールはフリッ  
グスの手で地面に叩きつけられた状態で押さえ込まれていた。

墮天使の背には、白い羽が見える・・・。

「全く・・・。こんな所で暴走なんてされちゃあ、困るのね・・・」  
フーツとため息をつきながら、フリッグスは呟く。

「どういう意味だ・・・!!!!?」

アレンは深刻な表情でフリッグスを睨みつける。

「どうもこうも、貴方・・・この女から、何も聞いてないわけ・・・  
?」

「何・・・!!!?」

イブールを指差しながら問いかけるフリッグスを見たアレンは、困  
惑する。

「“両親の仇”って・・・どういう・・・事?」

イブールが絶叫する前に聴いた台詞を聞き逃していなかったチエス  
は、ポツンと呟く。

「・・・!!!!」

チエスの台詞を聴いたアレンは表情を一変させる。

そういえば、昨夜・・・イブール（こいつ）が俺に話してくれた  
のは・・・

アレンの脳裏には、宿屋でイブールが語っていた自身の出生の事が  
思い浮かぶ。

「まさか・・・?」

汗を握るアレンは、無意識の内に視線をモーゼの方に向けていた。

「あの時は、顔をじっくり見れなかったけれど・・・。その笑い方  
と、声・・・間違いないわ・・・!!!!」

振り向くと、堕天使に押さえつけられてはいるものの、正気に戻ったイブールの声が聴こえる。

「おい、イブール……。もしや、この男……」

アレンだけでなく、全員の視線がイブールに集まる。

「ええ……。そうよ、アレン。奴は……。僧長モーゼは……。私の両親を殺害し、私を悪魔召喚の生贄にしようとした、張本人よ……。！！！！」

礼拝堂の中は、再びイブールの叫び声と、溢れんばかりの憎悪の念でいっぱいになっていた

## 第21話 対面と再会（後書き）

いかがでしたか。

第20話の後書きで、言いかけていた事が何だったのか、おわかりいただけたかと思えます！

ちなみに、僧長モーゼのモデルは、ゲーム『テイルズオブジァビス』に出てくる大詠師モース。アビスの漫画本を持っていたので、イメージするにはもってこいなかんじでしたね

さて、教団に捕らえられてしまったアレン達の運命はいかに・・・！！？

次回をお楽しみに（^^）

引き続き、ご意見・ご感想をお待ちします！

第22話 悔しさを胸に秘めて(前書き)

今回はイブール・アレン・ラスリアと、3つの視点で物語が進みます。

## 第22話 悔しさを胸に秘めて

「放せ……!!!!」

イブールは自分を押さえつけている墮天使フリッグスをどかさうと暴れる。

「やっと……やっと見つけたというのに……!!!!」

そう叫ぶイブールの表情は、物凄く必死だった。

悪魔ミユルザと契約を交わした時から、目的を果たすためだけに生きてきた……。今、こうして目の前に敵がいるのに、手も足も出ないなんて……!!!!

心の中で叫びながら、イブールは自身の拳を強く握り締める。

「……僧長！」

声の聴こえた方に振り向いてみると、一人の兵士がモーゼに近づいてきた。

「どうしたのかね？」

「実は……」

その後、兵士から耳打ちをされて、何の報告を受けたのか、表情が上機嫌になる。

「ラスリア様。こちらの準備がととのいましたので、早速出発しようといたしましょうか……」

「……嫌」と言っても、それは無理なお願いのようですね」

深刻な表情かおをしながら、ラスリアは答える。

そんな彼女を見たモーゼは、満足そうな表情で話す。

「……娘とあの小僧を連れて行け」

モーゼは低い声で兵士に命じる。

そうして、アレンとラスリアの2人だけがモーゼによって“未開の地”に行く事になる。

「……」

礼拝堂を去る時、アレンがイブールの方をチラリと見つめる。

え……？

アレンはイブールに向かつて、口パクで何かを伝えようとしていた。イブールはその言った言葉が何を意味しているのかと考えていると、アレンはラスリアと共に連れて行かれてしまう。

彼らが去った後、礼拝堂の中にはモーゼとフリッグス。そして、イブール・ミウルザ・チェスが残っていた。

「さて……お前達の処遇だが……」

「……ラスリアがあんた達に従う以上、僕らに手出しはできないはずだよ！！？」

チェスが威嚇するような表情でモーゼに対して話す。

すると、一瞬の内に周囲の空気が変わる。そして、ラスリア達の前で取っていた態度とは全く違う態度に変わるモーゼ。

「確かに、手出しせんよ。……あの娘が役目を終えるまでは……だけどな」

そう呟くモーゼの表情は狂気に満ちていた。

その会話を客観的な視点で聴いていたフリッグスはため息をつく。

「我が主、モーゼ様……。一つ忠告致しますが、あまりこやつらを挑発すると、私ですら抑えられなくなってしまうが……」

フリッグスは圧倒的な力でイブールをおさえつけているが、彼女自身はまだ逆らおうという気持ちが消えていなかった。

「……ラスリアが役目を終えて帰ってくる事で、私達が用なしになったとしても……例えば死んだとしても、お前を必ず……殺す……！！！！」

身体を震わせながら、モーゼを睨みつけるイブール。

「ふ……私の“神”を奪った阿婆擦れが……」

モーゼは、イブールを見下しながらポツリと呟いた。

「……こやつらは、私が戻るまで、牢に閉じ込めておけ……！！！！」

そう叫んだモーゼに応じた兵士達は、彼らを縛り上げて連れて行く。

興奮していたイブールも、フリッグスから一般兵士に預けられ、その口に猿轡をつけさせられた。そうして、イブールから順番に、礼拝堂を後にしていく。

「おい・・・その変態僧侶・・・！」

最後に連れて行かれるミュルザは、振り返ってからモーゼに声をかける。

「・・・私の“神”・・・！」

モーゼは他の人には聞こえないくらいの小さな声で呟く。

その表情は目が見開いていて、すがっているような雰囲気であった。

「底なしの強欲野郎も悪くはねえが・・・。どんなに悪魔（俺ら）を崇拜しようとも、あんたみたいな野郎は、雌の悪魔すら呼び出せねえよ・・・！」

そう言い捨てて、ミュルザは去っていった。

礼拝堂の中は、モーゼただひとりとなる。モーゼは、表向きにはライトリア教の僧をまとめる人間であったが、本当に崇拜しているのは“悪魔”

いわゆる、“悪魔信仰”だったのだ。

自分が崇拜している“神”を生贄として捧げた女に奪われ、その“神”にきつぱりと言い捨てられたモーゼは、悔しさの余りに強く拳を握り締めていた。

「ここは・・・」

兵士によって連れて行かれたアレンとラスリアは、それから馬車に押し込まれ、とある場所に連れてかれていた。

「ここが・・・ドワーフの里・・・」

辺りを見回しながら、ラスリアは呟く。

そこにいたのは、成人した男性ですら、馬車の車輪くらいの身長しかないドワーフがたくさんいた。しかも、彼らは教団の人間やラスリアを見ながら、オドオドしている。

それにしても・・・イブールに伝えたあの言葉・・・ちゃんと理解できたのだろうか・・・？

アレンはゆっくりと歩きながら考える。

礼拝堂の中で、モーゼとのやり取りをしていた際・・・最近は何とんだなかった“ビジョン”が、アレンの頭の中に入ってきていた。

しかも、今までと比べるととても鮮明で、故にそこで口走っていた言葉も記憶する事ができた。

俺が見たビジョン・・・イブールが、ミュルザに“あの言葉”を唱える事で、奴にはめられた首輪が外れるというモノだった・・・。なんだって、“星の意志”とやらは、この事を俺に・・・？

“星の意志”がアレンに対して“ビジョン”を何度か見せてはきたが、「今回は今までとは違う気がする」という考えが、アレンの頭の中を占めていた。

「では、長老よ・・・。通路は完成した・・・ようですね？」

モーゼが、ドワーフ族の長老と話をしていた。

「・・・本当に、古代種“キロ”の末裔はおるのですな・・・？」

「ええ・・・。あちらに・・・」

そう言つて、モーゼはラスリアを自分の側に連れてくる。

アレンは、その様子を後ろから眺めていた。

「・・・嘘偽りがなかったのなら、ここまでする必要はなかったのでは・・・？」

長老は、モーゼをジツと睨みつけながら話す。

彼の周囲では、傷だらけで寝込んでいる者や、死者に布をかぶせて泣いているドワーフの姿が見える。

「・・・それは、あなた方ドワーフが、我々ライトリア教団に逆らう事の無意味さを、ご享受戴く為にただでございます」

「ふん・・・綺麗な言葉で飾りおって・・・」

舌打ちをした長老は、若いドワーフにモーゼ達を案内させるよう言う。

ドワーフを殺す事で、逆らわないようにする見せしめか……。大儀を掲げて殺しを正当化させるなんて、馬鹿馬鹿しい……。アレンは彼らのやり取りを見ながら、内心そう思っていた。モーゼは案内役のドワーフの下へ歩いていくと、アレン達も一緒に歩かされる。

「ごめん……。なさい……」

兵士の中から、ラスリアの声が聴こえる。

後姿だったので表情はわからなかったが、その声が酷く震えていた。くそ……。仲間達あいつらが人質にさえなっていなければ、兵士達を倒して、この場から去れるのに……!!!  
今回の件で、皮肉にもアレンは自分の旅の目的地へたどり着く事ができる……。しかし、自らの手ではなく、こんな形で到達するという事に対して、不満で仕方のないアレンだった。

「ごめん……。なさい……」

負傷したドワーフに向かってこの台詞を発した時、ラスリアは自分が産まれた事に後悔した。

私はなんで……。産まれてきてしまったのだろう……。ドワーフが作った地下通路を歩きながら、ラスリアはずっとそんな事を考えていた。

ラスリアが姉と共に孤児院へいた頃、「自分はどうして産まれたのか」と、問答した事があった。

『私達は、いろんな人達に愛されて、祝福されて生まれて来るんだ……。って、院長先生が言っていたわ』

その時、姉が言っていた言葉が、再びラスリアの頭の中によぎる。

「本当に……。祝福されているのかしら……。」  
歩きながら、ラスリアはボソツと呟く。

しかし、今は自分のせいで皆が危険な目に遭い、自分も逆らえない状態にある。・・・こんな自分が、本当に愛されて生まれた存在なのだろうか

ラスリアは、自分の中で自問自答を繰り返していた。

そうしてラスリア達の一行は、無事に地下通路を通り抜け、念願の“未開の地”に到達する。

「ここが・・・」

ラスリアを含め、その場にいた全員が目を見張る。

彼らの先に見える風景は、多くの森林と巨大な山が存在し、水の澄んだ湖が存在する・・・本当の“自然界”だった。

「ここが、”未開の地”・・・!!」

モーゼと共に同行していた墮天使フリッグスが、感激したような表情で辺りを見回す。

ここに、アレンが探しているという“イル”が・・・草木を見つめながら、ラスリアがそう考えていると・・・

『そうだ』

「・・・!!?」

ラスリアの頭の中に、声が響く。

「ラスリア様・・・!!!?」

「今・・・頭の中に、声が・・・!」

ラスリアは頭を抱えながら、呟く。

「今、私に語り返してくれたこの声・・・もしかして・・・」

ラスリアは、驚くモーゼをそっちのけにして、周囲を見回す。

『そう・・・私こそ、そなた達が言う“星の意志”・・・。よくぞ、ここまで来たな・・・キ口の娘・・・』

頭の中に響いてくる言葉を聞いたラスリアは、これこそ自分が産まれ持った能力ちからである事を実感する。

「・・・その私達には聞こえない声・・・“星の意志”ね・・・?」

深刻な表情で尋ねてくるフリッグスに、ラスリアは黙って頷いた。

「！！！！！」

ラスリアとフリッグス以外の人間は、この顔を見て驚く。

しかし、そんな彼らを気にしないかのように、ラスリアは語りかける。

「私達は……この土地の事……そして、貴方の事が知りたいのです……！教えて戴けないでしょうか……？」

ラスリアの台詞に、“星の意志”は少しの間だけ黙り込む。しかし……

『……よからう。では、ラストイルレリンドリア・ユンドラフよ。……そなた達を“あそこ”へ導こう……』

その台詞の後、ラスリア達の立っている地面が光りだす。

「これは……！？」

「この地面に描かれている文字……おそらく、古代文字だ……！！！」

モーゼや他の兵士達が慌てる中、アレンは地面に浮かび上がった魔方阵の文様を見つめていた。

「ラスリア様……これは……！？」

「おそらく、“星の意志”は、私達をある場所に転送して、そこで話がしたいとの事かと……」

ラスリアは、魔方阵を見つめながら考える。

一目見ただけで、私の本名を言い当てた……。もしかして、私が本当に望んでいる事も、わかっているのかな……？

ラスリアは、表向きにはモーゼに従っているが、本当に望んでいる事は、アレンが無事捜し求めている“イル”を見つける事……。

それを、“星の意志”は理解してくれたのかと、一瞬考えていた。

そして、発動した魔方阵は、ラスリア達をその“イル”が存在する場所へと転送するのであった

## 第22話 悔しさを胸に秘めて（後書き）

いかがでしたか。

今回のサブタイトルに入れた”悔しさ”とは、両親の敵な目の前にいるのに、何も出来ないイブール。自分のせいで仲間達を危機に陥れてしまった事を後悔するラスリア。そして、他人の犠牲によって自らの目的が達成されてしまう悔しさをかみ締めるアレン……。そんな彼らの”悔しさ”という意味をこめて、このタイトルをつけました。

これまでは章ごとにLeft Rightと執筆してきましたが、この辺りは前半の正念場でもあるので、この回も含めて、本当の交互に執筆していく事になりそうです。

ご意見・ご感想をお待ちしています！

### 第23話 ついで・・・（前書き）

この回でついに、アレンが捜し求めていた”イル”の元へ辿り着きます。

### 第23話 ついに・・・

“星の意志”の力によつて、最初いた位置とは別の場所に転送されたアレン達。辿り着いた先で初めて見たモノは、辺り一面にある水晶のような鉱石の壁であった。

「ここは・・・」

アレンを始め、ラスリアやモーゼ達も目を見張っていた。

もしや・・・ここは、夢に出てきた場所・・・？

アレンは、この水晶のような壁を見渡し・・・以前、夢の中で見た風景を思い出していた。

「・・・っ!?!?」

すると、アレンの胸に鋭い痛みが走る。

一瞬だけだったが・・・この痛みは、一体・・・

左手で自分の胸を押さえながら、アレンは前を見る。その先には、更に奥へと続く道が存在していた。

後ろでは、「この水晶のような鉱石は滅多に見れない」等と、感激しているモーゼがいたが・・・今のアレンは全く眼中にない。

「アレン・・・。おそらく、この先に・・・」

「・・・ああ」

後ろから聴こえるラスリアの言葉を聴いて、アレンは頷く。

おそらく、この先に・・・「イル」が・・・!

胸に当たった左手でギュツと服の裾を掴むアレン。その様子を見ていたフリッグスが、モーゼに声をかける。

「・・・モーゼ様。“星の意志”とやらがああ娘に、あんな奥へ行くよう促しているようですが・・・」

「・・・おお、そうかそうか。・・・では、ラスリア様。その奥の方へ行ってみるとしましょうか」

一人夢中になっていたモーゼは、フリッグスの声かけによつて我に返り、ズンズンと洞窟の奥深くへと進み始める。

「早く歩け」

兵士に囲まれているアレンとラスリアは、彼らの命に従うかのよう  
に歩き出す。

そして、その一番後ろから歩き出す墮天使フリッグス。歩いていく  
アレン達を見つめながら、不気味にほくそ笑んでいた……。

奥へ奥へと進んでいくと、天井が高く、中庭のように広い空間へ  
と出る。壁は先ほどのような鉱石ではなく、草木と水が混じったモ  
ノが凝固した……特殊な壁だった。

そして、同じ素材で出来た天井からは、日の光は差しこんでくる。

「綺麗……」

この別世界のような景色に、ラスリアは見ほれていた。

地面はチラホラと草が生え、その地面をアレンは踏み出す。

「ついに……辿り着いたんだな……」

自分が何者かわからず、空っぽだったアレンの心にあったのは、た  
だ「イルを探せ」という事だった。

ラスリアを狙っていた連中の手によって到達したのは不快ではある  
が、とにかく「目的地に到達できた」という想いが、アレンの胸の  
中にこみ上げてくる。

「!!!!!!?」

物思いにふけていたアレンだったが、突如、彼の頭の中に耳鳴りの  
ようにキーンとした音が響く。

すると、少しずつアレンの視界が真っ白になっていく。

これは……!!!?

自分に何が起きているのかわからないアレンは、両手で頭を抱える。  
『よくぞ、ここまで辿り着いた……。そして、お前は“彼女”と

一つに……』

頭の中に、謎の音が響く。

ラス……リア……

僅かに見えていた彼女を見たアレンは、ラスリアの名前を呼ぼうとしたが・・・声が出ず、ついに、アレンの視界は真っ暗となってしまう

「アレン・・・!!!?」

“星の意志”に導かれて到達したこの場所。

不思議な空気を感じ、最初はこの景色に見ほれていたが・・・異変はすぐに起こった。

気がつく、アレンの身体から蒼い光は発し、彼は頭を抱えている。

「こ・・・これは・・・!!!?」

「・・・始まったか・・・」

横でモーゼやフリッグスが呟いていたが、ラスリアには全く聴こえていなかった。

頭を抱えていたアレンが、こちらを振り返った時、彼の苦しそうな表情が見える。

「わた・・・し・・・?」

声こそは出ていなかったものの、アレンが口パクで何かを呟いていたのだ。

その唇の動かし方から・・・アレンが自分の名前を呼んでいたのに気がつく。

「アレ・・・」

ゴオオオオオツ

ラスリアが彼の名前を呼ぼうとした瞬間、アレンから発していた蒼い光が大きくなり、その場にいたラスリア達は目をつぶる。

数秒後、ラスリア達は、そつと瞼を開く。・・・目の前にいたアレンから、蒼い光は消えていた。

「アレン・・・大丈夫・・・?」

目をこすっている兵士をよそ目に、ラスリアは俯いているアレンに  
一歩ずつ近寄る。

「……ご苦労だったな……“キロ”の娘……」

「えっ……!?!」

アレンの口から“キロ”という言葉聞いた瞬間、ラスリアはビク  
ツとさせる。

「アレ……ン……?」

顔を上げ、ゆっくりとアレンは立ち上がる。

「アレン……ではない……の……?」

アレンの顔をしっかりと見た時、ラスリアは気がついた。

彼の瞳が、本来のライトグリーン色ではなく……血のように真っ  
赤に変わっていたのだ。

継るようにして、右腕を前に出していたラスリア。しかし、アレ  
ンはその彼女を全く見ずに、前へとゆっくり歩き出す。

「一体……どういう……事……?」

アレンに何が起きたのかわからず、呆然とするラスリア。

「我は、お前達が言う“星の意志”そのもの……。我がこの“鍵  
”と一つになり、“イル”と交わる事で……世界は本来の姿を取  
り戻す……」

「……!?!?!」

アレンの中にいる“何か”が自らを“星の意思”と名乗る事で、そ  
の場にいる全員が驚く。

「そんな……」

ラスリアはペタンとその場に座り込む。

「ああ……。やっと……。やっと……。辿り着いた……」

気がつく、アレンは宙に浮かび、鳶に絡まった何かに向かって両  
腕を上げていた。

「な……。なんだ、あれは!?!?!」

上を見上げた兵士が、驚きの余り声を張り上げる。

宙に浮いたアレンが見つめていたモノ

それは、物凄い

音をたてながら動く・・・巨大な心臓のような「何か」であった。そして、その「何か」の周囲には、膜のようなモノが張り巡らされている。それを見つめるアレンの瞳は、狂気に満ちていた。

「一つに・・・なるのだ・・・!!!!」

狂気に満ちた笑みで一言叫んだアレンは、その膜のようなモノに、自分の両手をズブツとのめり込む。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

気がつくと、周囲が激しく揺れ始め、壁からミシミシと壊れるような音が聴こえる。

「な・・・なんだ・・・!?!」

「まさか・・・崩れる・・・!?!」

ラスリアの周囲にいた兵士達が、慌て始める。

「フフフフ・・・」

「フリッグス・・・何を笑っておるのだ!?!」

俯いたまま笑っているフリッグスに対し、モーゼは慌てた表情で怒鳴る。

「フフフフ・・・アハハハハハハッ!!!!!!」

フリッグスは急に立ち上がり、甲高い声で笑っていた。

その狂気に満ちた笑いに、ラスリアは全身に鳥肌が立つ。

「これで・・・とうとう・・・!我々の悲願が...!あの方が・・・

!!!!ミトセ様が・・・復活なさる・・・!!!!」

「ミトセ・・・ですって・・・!?!」

「あのお方を呼び捨てにするな!!!!!!」

ラスリアが驚いた表情でフリッグスを見ると、墮天使は物凄い形相で彼女を睨んだ。

「フフフ・・・ご苦労だったわ、古代種。あんたやあの坊やおかげで、ミトセ様を含む“8人の異端者”と呼ばれた方々が復活でき

るのだから……!!!!」

「え……!!!?!」

“ 8人の異端者”の復活……ですって……!!!?!?

フリッグスの思いがけない台詞に、身体を硬直させるラスリア。

「フリッグス……貴様、裏切るつもりか!!!?!」

「……ふん。裏切るも何も、私は既に復活していたジェルム様の命でお前に近づいただけ……。故に、始めから貴様のような下等生物に忠誠など誓っていない!!!」

鋭い眼差しでモーゼを睨みつけるフリッグス。

その後、一瞬だけラスリアの方を見てから口を開く。

「……本当なら、貴様のような穢れきった人間……。今すぐ浄化したい所だが……。お前を殺したがっている人間もいる事だし、あえて見逃してやろう……!!」

「ひ……ひいいいい……」

顔が真っ青になり、身体がガクガクになったモーゼは、震える声で兵士達に命令する。

「ひ……ひとまず、退却だ!!!!お……お前らは……私を守れ……!!!!あと、娘も連れてくるのだ……!!!!」

そう言い放った後、一目散に入り口の方へと走っていく。

「来い!!!!」

「きゃっ……」

兵士がいきなりラスリアの腕を掴む。

「ちよつと待って!!!!……アレんが……!!!!」

「馬鹿言つな!!!!早くしないと、生き埋めになるぞ!!!!」

兵士はラスリアの腕を掴み、無理やりその場から連れ出そうとする。

「アレん……アレん……」

彼らがいた場所がどんどん崩れていく中、ラスリアはアレンの名前を呼んだ。

アレんは全く動こうとせず、そのまま宙で立ち尽くしていた。

「ひいいいっ！！！！」

物凄い焦った表情で逃げるモーゼ。

その後ろから、ラスリアと一緒に同行していた兵士達が走る。彼らの後ろは、追いかけるようにして足場が崩れている。

何とか地上に到達し、後は目の前に見える丸太の橋を渡るだけとなっていた。橋の下には、水が物凄い勢いで流れている。

当のラスリアは、一歩も止まらず走らされていたので、息があがっていた。一般の兵士と比べると、彼女の体力はあまりない。

「早く来い・・・崩れるぞ・・・！！！」

ラスリアの視線の先には、既に橋を渡りきったモーゼの姿が見える。グラグラと揺れる橋を渡り始めるラスリア。しかし、兵士に掴まれた腕が痛くてたまらなかつたラスリアは・・・

「放し・・・て！！！」

腕を力いっぱい振り回して、兵士の腕を振り切る。

「あ・・・！！！」

しかし、足場の悪い橋で振り切ったため、身体のバランスを崩すラスリア。

ブチン

その勢いに乗ってか、彼女達が走ってきた側にある橋を支える縄が切れる。

「きゃああああああっ！！！！！！！」

“イル”が存在している洞窟の崩壊と共に、ラスリアの身体も激しい水流の中に飲み込まれていくのであった

## 第23話 ついに・・・（後書き）

いかがでしたか。

この回を持って、前半は終了となります。

次回は新章突入＆後半のスタートです！！

やっと折り返し地点に辿り着いたので、作者もどっぴり展開になっていくかドキドキですね

引き続き、ご意見・ご感想をお待ちしてます！！

## 第24話 提案（前書き）

今回は、全部チエス視線で物語が進みます！

## 第24話 提案

“2つの世界の統合” 「イル」を求めていたアレンがそれにとどり着き、それに触れた後、地震と共に起こった超常現象。地上にいた生き物にとっては地震が起きているだけに見えるが、実際に統合された瞬間・・・物凄い衝撃もあり、全ての生き物が気を失う。

この出来事によって、レジエンディラスにはなかったモノが出現したり、逆にこれまでであったものが消失したりする。・・・そして、この超常現象の力によって、永きに渡って幽閉されていた罪人達が野に放たれた事を・・・ほとんどの人々は知らなかった。

「よいしょつ...と...!」

草木が多く生えた山道を、チエスは登る。

「ここを抜ければ・・・」

一人で山道を歩いてきたチエスは、見晴らしの良い場所を目指していた。

それにしても・・・

チエスは歩きながら、周囲を見渡す。鳥の囀る声・・・木をつたう小動物・・・どこにでもある山。しかし、唯一違っていた事は・・・

「1つに戻った世界・・・か・・・」

その場に立ち止まったチエスは、ここに向かう前の会話を思い出す。

「う・・・一体、何が・・・？」

ルーメニシエアにて、ライトリア教団の連中に監禁されていたチエス・イブール・ミウルザの3人。しかし、イブールはアレンが教えしてくれた言葉が、ミウルザに嵌められた首輪を解除する魔法のようなモノだと気がつく・・・そして、自分を押さえつけていたモノ

から解放されたミュルザは、自分とイブールを抱えて、ルーメニシエアを脱出した。

・・・その後、いきなり地震が起きたと思った矢先に意識を失っていたようだ。

「意識を・・・失っていた・・・のね」

ゆっくりと起き上がったイブールが、低い声で呟く。

しかし、先に目が覚めていたミュルザは、遠くの方を見つめながら、その場に立ち尽くしていた。

「ミュルザ・・・どうしたの？」

チエスはその場に立ち尽くしている彼を、横から見上げる。

「この感覚は・・・もはや・・・!？」

そう呟く彼の表情は、普段のふざけた時の笑顔ではなく・・・ひどく困惑していた。

「ミュルザ・・・どうかしたの・・・？」

イブールがそう問いかけると、少しの間だけ沈黙が走る。

「もしかしたら・・・2つの世界が元に・・・元に戻ったのかも・・・な」

ミュルザらしからぬ、不確実な台詞に、チエスとイブールは首を傾げる。

そんな2人に対して、ミュルザは顔をしかめながら話し出す。

「俺は、世界が2つに分かれた後・・・すなわち、古代大戦が終わった後に誕生した悪魔だからな・・・。本当に2つの世界が元に戻っていたとしても、分断前を知らない俺様が確実な事は言えねえ・・・」

「そう・・・だったんだ・・・」

その言葉で、ミュルザがそれについて断言できないのがよくわかった。

それにしても・・・古代大戦が終わった後とはいえ、ミュルザ（こいつ）は1000年近く生きてる・・・って事だよな・・・  
彼ら3人の中で一番背の低いチエスは、自分より背の高いミュルザ

を見上げながら考え事をしていた。

数分ほど、彼らの間に沈黙が続いた後・・・最初に口を開いたのは、イブールだった。

「あんたが言うように、2つの世界が統合したとすると・・・私、少し行きたい場所があるのよね」

「行きたい・・・場所・・・？」

きよとんとさせたチエスはイブールを見つめる。

「・・・ええ。多分、そこへ行けば、この世界の現状とか・・・何かわかるかもしれない・・・って考えているの」

そう語るイブールは、チラッとミュルザの方へ視線を向ける。

「・・・了解」

低い声で、何かに了承したように呟くミュルザは、その直後、チエスに視線を落とす。

「おい、ガキんちよ!!」

「な・・・なんだよ!」

自分の事をガキ扱いするミュルザに、チエスは少しイラッとする。

「俺はイブールと一緒に、その“行きたい所”へ行く・・・。だからお前は、水竜の元へ向かえ・・・」

「え・・・？」

ミュルザの口から、思いもしない言葉が紡ぎだされ、チエスはその場で驚く。

水竜・・・僕らウオトレストの長である水竜ウンディエル様の事・・・

「なぜ」と聞くまでもなく、ミュルザは言い切る。

「・・・奴はこの世界でも数少ない、世界が分かれる前を知っている竜だ。・・・ウオトレストであるお前なら、信用もあるだろうし・・・

。。。だから、この現状を奴に報告し、何か聞きだしてこい」

「聞き出してこい」・・・という言い方は気に食わなかったが、おそらく、「指示を仰げ」と言っているのだろう。そして、ウオトレスト（みんな）に会いに行くのに、ミュルザやイブールのように竜

騎士でない者を連れて行くのは得策ではない……。それをわかっているの発言なのかもしれない……。

ミュルザの提案に乗ったチエスは、彼ら2人と別行動を開始し、現在に至る。チエスは竜騎士ウオトレストの1人ではあるが、まだ幼いため、背にまたがれる竜がない。そんな彼が仲間たちと連絡を取る方法は……。一つしかなかった。

「よし……。ここからだつたら……。！」  
山道を進んでいたチエスは、見晴らしのよい崖の前にたどり着いていた。

彼の下には、数メートルは深さのある崖……。そして、その下には勢いよく流れる川が存在する。

「よし……。他の獣達に見つかるなよ……。！」

そう呟くチエスの掌には、登山中に見つけた小鳥の姿があった。

彼の水色の瞳が閉ざされ、何か念じ始めた数分後……。手の中にいた小鳥が羽ばたき始める。

さて……。この川の流れに沿っていけば……！

その後、チエスは空を飛んでいた……。否、この川に沿って飛んでいるのは、チエスの意識を宿した先ほどの小鳥だった。

竜騎士である彼らは、常に槍を扱う訓練と共に、もう1つの訓練も行っていた。それは、背にまたがる竜と心を通わせるための訓練

豊富な知識を持つ竜を従わせるのは困難のため、将来竜騎士となる子供達はまず、自分の意識を動物に移して操る術から身につけていくのだ。

やっぱり、水の加護もあってか……。小鳥を扱いやすいな……。小鳥の瞳を借りて周囲を見渡していたチエスは、ふとそんな事を考えていた。

ウオトレストであるチエス達の一族は、水に強く、そして操る事のできる竜騎士。どんな術を使うにせよ、恩恵に預かれる属性の側で

は、何かしら力が増幅するようになっていた。

彼の意識を映した小鳥は、川に落ちないように注意をしながら飛ぶ。そして、チエスは鳥が川に落ちてしまわないように、集中力を保つよう努力し、時間が過ぎていく。

あれ・・・？

川沿いを進んでいく内に、人影が見える。しかし、この辺りに人間の住む村とかはないはずなので、普通の人間ではない。しかも、布か何かで顔を隠しているため、男か女かすらわからなかった。

いくら鳥に意識を映して飛んでいるからとはいえ、あまり近くで飛ぶと危険かもしれないという考えから、その人物の後ろを飛び去ろうとする。

え・・・！！？

小鳥が、その人物の背後を飛び始めた時だった・・・

「！！？」

声をかけたわけでもないのに・・・気がつけば、その顔を隠している人間は、チエスの方を振り向いていた。

いつのまに・・・？

当然、このまま立ち止まるわけにいかなかったチエスは、羽を下ろさず、そのまま目の前を通り過ぎる。その時に見えたその人間は・・・少し“不気味”とも取れる笑みが、一瞬だけ見えた。そして、その瞳が血のように真っ赤であった・・・。

とにかく・・・ウオトレスト（みんな）を探さなくては・・・！！  
真っ赤な瞳をした人が、なぜ自分を見つめていたのかは理解できなかったが、今やっている事に集中しようと思いついたチエスは、再びウオトレストの里を目指して、飛び始める。

そして、数時間後

「・・・しかし、俺らと別れた後、そんな事が・・・」

チエスの目の前には、彼の兄であるビジョップの姿があった。

あれから、何とか仲間達に連絡の取れたチエスは、兄がまたがって

いる竜に乗せてもらいながら、ウオトレストの里へ向かっていた。  
「そうなんだ……。だから、ウンディエル様に知恵を授けてもらおうかと思って……。」  
そう語るチエス。

しかし、その提案をしたのが悪魔であるミユルザだという事は伏せておく事にした。自分よりも異民族に対する警戒心の強い兄では、怒りをあらわにするのは目に見えているからだ。最も、それは兄だけに限らないが……。

そして、ウオトレストの里に到着したチエスとビジョップの兄弟は、そのまま水竜ウンディエルの元へ赴く。  
村を出てまだそんなに日にちが経っていないのに、チエスにとっては相当久しぶりな感覚を覚えていた。

「お久しぶりです、ウンディエル様……」

『……。元気そうで、何よりです』

チエスは深くお辞儀をしながら、水竜に挨拶の言葉を述べる。

それに対して、ウンディエルは穏やかな声で答えてくれた。しかし、数秒ほどの沈黙が続いた後、本題に入ろうと目つきが真剣になるウンディエル。

『して、一体何があったのですか……。？』

「えっと……」

チエスは、ここに来るまでの出来事を、水竜に報告する。

『なるほど……。それで、私を頼ってきたのですね……。』

ウンディエルは、その場でため息をつくような表情かおをする。

「僕らは誰も、2つの世界が分裂する前を知らなくて……。貴方にだったら、冷静な対応をできるかと」

『……。』

「ウンディエル様……。？」

チエスがウンディエルと話していると、突然黙り込む水竜。

……。どうしたんだろう……。？

内心でそう考えながら、水竜を見つめる。そして・・・

『すみませんね、チエス・・・』

「何が・・・何か、見えたのですか？」

そう問いかけるチエス。

彼らの長である水竜ウンディエルは、自らの属性である水を使って、様々な使い道を知っていた。

すると、主と僕の間には、少しの間だけ、沈黙が続く。

そして数分後・・・最初に話し始めたのが、ウンディエルだった。

『さきほど・・・水の流れから、とある人間の存在を確認できました』

「人間・・・ですか？」

チエスは、水竜が“人間”の事を話し出すなんて珍しいと考えていた。

他の仲間達ほどでなくても、少なからず人間に警戒心を抱いているからだ。

『この独特の気は・・・』

そう呟きながら、水竜の視線はチエスに映る。

『・・・おそらく、以前にお会いした、あのラスリアという少女のモノですね・・・』

## 第24話 提案（後書き）

いかがでしたか。

作品中で語られていた、竜騎士の”訓練”は、「こんな事が必要かな」と、自分で考えた設定。

また、「動物に自らの意識を映し、操る」という術は、漫画『ヴァンパイア騎士』から来ています。

チエス達ウオトレストの長である水竜ウンディエルは、宗教自治区ルーメニシエアでバラバラになって以来会っていなかったラスリアの気配を感じ取っていた。

次回は、そんな彼女を発見した所からスタートする事になりそうです。

引き続き、ご意見。・ご感想をお待ちしています

## 第25話 不要な事とこれからすべき事（前書き）

今回は、ラスリア視点でスタート。後にチエスへと変わります！

## 第25話 不要な事とこれからすべき事

「それにしても…まさか、この小娘とあの坊ちゃんが出会っていたとはね…」

「運命とは不思議なモノだな…」

深い眠りについていたラスリアは、誰かが不思議な会話をしている夢を見ていた。

「なんにせよ、この2人…今は接触すべきではないわ。だから、記憶を消しておく必要があるわね」

「ああ…」

会話が途切れた直後、大きな手が自分に近づいてくるように見える。しかし、その手の正体である男たちの顔はまるで見えなかった。辺りが真っ暗になると、後ろから、ラスリアの名前を呼ぶ声が聴こえてくる。

この声は

「ラスリア!!」

気がつくと、頭上にチエスの顔があった。

「チエス…?」

「良かった…気がついたみたいだね!!」

チエスの安堵した声とは裏腹に、頭がボンヤリするラスリアは…その声も弱弱しい。

「ここは…?」

「ここはね。僕らウオトレストの里だよ!」

チエスが今現在の場所を答えてくれた後、耳を澄ますと遠くで水の流れる音が聴こえてくる。

その後、チエスはラスリアが目覚めた事を報告するためなのか、彼女が眠っていた民家から外に飛び出していく。

私…どうして、意識を失っていたのかしら…?

ラスリアは自分に何が起きたのかを、ゆっくりと起き上がってから考えていた。

『…ご苦労だったな…“キロ”の娘…』

「…!!!」

頭の中によぎった、アレンの台詞と彼の狂気じみた表情…それを思い出した途端、自分が橋から転落した事を思い出す。

「そっか…アレンは…!?」

ラスリアは必死の余り、近くにいたチェスの兄ビジョップに掴み掛かる。

「ラ…ラスリア殿…!!どうされました…!!!?」

いきなり服を掴れたビジョップは、目を見開いた状態で慌てふためく。

「ラスリア…!!」

「…!!」

ビジョップの後ろから怒鳴り声が聞こえたかと思うと、そこには少しの間だけ席を外していたチェスの姿があった。

彼の怒鳴り声によって冷静さを取り戻したラスリアは、真剣な表情をしながらチェスに話しかける。

「チェス！彼は…アレンがどこにいるか、貴方知らない!?」

ラスリアの台詞に、チェスは深刻そうな表情かおをしながら口を開く。

「ううん…。今、ウオトレスト（みんな）にもお願いして探してもらっているけど、まだ…」

「そっか…」

あまり良くない知らせに、ラスリアは俯いてしまう。

その後、チェスはラスリアを発見するまでの経緯を教えてくれた。アレンやイブールのおかげで、なんとかライトリア教団から逃げ出せたこと。仲間であるウオトレストには伏せているが、ミュルザから水竜の元へ赴き、知恵を授かるという案を受けて動き始めた事。

そして、彼らの里に到着後、水竜ウンディエルが自分の気配を感じ取ってくれたおかげで、こうして保護ができたという事を

私とアレンが”未開の地”に連れて行かれてから…いろんな事があつたのね…

ラスリアは、自分が眠っていた布団にくるまりながら、考え事をしていた。

「あれ…？」

何か、得体の知れない違和感を感じる。

そういえば、眠っている間に、夢を見たような気がしたけど…

そう考えながら、夢の内容を思い出そうとするが…何も思い出せない。

「…まあ、いいか…」

忘れたという事は「それほど重要な夢でない」と判断したラスリアは、それについて考える事を諦めた。

「アレン…」

行方のわからない仲間の顔を思い浮かべながら、ラスリアは物思いにふける。

怪我とか…していないのかしら…？

そう考えながら、自分に残っている打撲の後を見つめるラスリア。

命に別状がなかったとはいえ、チェスや他のウォトレスト達に安静にするようにと促されていた。しかし、ラスリアの胸の内は、アレンを探しにいきたくてたまらないのだ。

「どうか…無事でありますように…」

ラスリアは手を胸に当て、祈るような表情で、アレンの無事を願っていた。

「ビジョップ兄さん！どうだった…？」

ラスリアを民家に残して外に飛び出したチエスは、仲間の伝令を受け取った兄の下を訪れていた。

「ああ……。はつきりとした情報ではないが、いろいろわかったぜ……」

兄のビジョップは、少しだけ愉快そうな表情<sup>かお</sup>で語る。

「仲間から聞いた情報だと……」

話し始める兄を見つめながら、チエスはつばをゴクリと飲み込む。

「お前が探しているアレンという青年かどうかはわからないが……先日、“未開の地”の西端に出現した人間の村で、銀髪の青年が保護されたらしい……」

「“出現”……?」

その言葉に反応するチエス。

そんな弟に気がついたのか、ビジョップは補足をする。

「……ウンディエル様も以前、おっしやっていたらう。「世界が元の姿を取り戻せば、これまでなかったモノも出現する」と……!」

「あ……!」

その台詞を聞いたチエスは、アレンとラスリアの目の前でウンディエルがしていた会話を思い出す。

「それと……これは先ほど、別口で聞いた話なんだが……」  
ビジョップが気まずそうな表情<sup>かお</sup>を見せ始める。

「……今回の“世界統合”やその他も含めて……明日の夕刻より、レジエンディラス（この世界）に存在する竜騎士の長を集めて、会合を開くらしい……」

「……会合……?」

「……ああ。事が事だけに、俺達には打ち明けてもらえないらしいが……」

そう話すビジョップは、ため息まじりの声で再び話します。

「お前やラスリア様には悪いんだが……明日、早急にこの里を発つてくれないか?」

「え……?」

この時、チエスの頭の中には、「なぜ」という考えがよぎる。

「……その長達が集まる会合……この里で行われるらしい」

「えつ……!」

その事実を知って、何となくではあるが、自分達を遠ざけようとする理由がよくわかった。

「そっか……。他の長の方々は“キロ”を嫌っているんだよね……」

「ああ……。すまない」

「……いやいや!兄さんが謝る事では……」

兄が少し落ち込んだ表情かおをしたので、チエスは慌て始める。

……とりあえず、話題を反らさなきゃ……

そう考え付いたチエスは、数秒黙り込んだ後、口を開く。

「ありがとう、兄さん。じゃあ、明日の朝に出発するから、その……」

“アレン(彼)が保護された”とされる村の場所……その位置を教えてもらえるかな……?」

厄介者扱いされてもめげないチエスは、精一杯の笑顔で兄に問いかける。

「ああ……!」

兄のビジョップは、そんな弟を見て安堵したのか、柔らかそうな表情でうなづいた。

「ラスリア!!」

兄との会話を終えたチエスは、ラスリアのいる民家へと戻ってきた。

「チエス……どうだった?」

チエスの顔を見たラスリアが、物凄い勢いで食いついてくる。

「えつと……」

とりあえず、厄介者扱いされている点は伏せるといふ形で話そうとチエスは決めていた。

「……アレンかどうかは定かではないけど……。とある村で、

彼らしき青年が保護されたってお情報が入ってきたんだ！」

「・・・本当？」

「よがるような表情かおをしていたラスリアに、チェスは黙って頷く。

「よかった・・・」

安堵したラスリアは、手を胸に当てながら微笑んでいた。

その気持ちの元気をを感じ取ったチェスは、「翌日にすぐ出発しても大丈夫」という考えを強く持ち始める。

こうしてチェスとラスリアは、翌日にウォトレストの里を出発し、仲間の手を借りてアレンがいるかもしれないという村へと急ぎ始める。

・・・そこで、信じられない出来事に遭遇するとも知らずに

## 第25話 不要な事とこれからすべき事（後書き）

いかがでしたか。

よく夢を見てから目を覚ますと、夢の内容を思い出せない・・・なんてよくありますよね？

今回、ラスリアが夢の内容を思い出せなかったのは、そういった事実もあるのですが・・・実は、それだけではないんです。

そして、この夢の真実は『Ringht』をお読み戴ければわかると思いますので、お時間ある時にでもどうぞ

ご意見・ご感想や、作品に関する質問もお待ちしています

## 第26話 アレンを保護するために<前編>（前書き）

久々の前編後編の構成章です。

この章では、チエスとラスリアの視線によって交互に物語が進みます。

## 第26話 アレンを保護するために<前編>

「人ならぬ人」  
それは、人間以外の人類の事を指す。  
レジェンディアでその名に当てはまる種族は古代種“キロ”とウオ  
トレストを含む竜騎士のみである。しかし、古代大戦が起きる以前  
には、魔術を操る一族や獣人・・・他にも多様な能力を持つ「人な  
らぬ人」が存在していた・・・。

「わ・・・!!」

アレンを保護するために仲間の竜に乗せてもらったチェスとラスリ  
アは、遙か上空を飛んでいた。

「世界が一つになった”なんて、最初は信じられなかったけど・・・  
これを見れば、納得だよね・・・」

「ああ、そうだな・・・」

上空から地上を見つめながら、チェスと兄のビジョップは話す。  
彼らの目に映っていたのは・・・世界統合によって変形した大地だ  
った。レジェンディアスの世界地図では海しかなかった場所にもい  
つの間にか島が現れていたり、大地と大地がぶつかり合ったのか、  
人間達の集落がボロボロになった様を上空からでもよくわかる。

「兄さん・・・!あれ、なんだろう?」

チェスは海岸沿いにある船のようなモノを指差す。

「船・・・か?でも、あんな鋼鉄でできた船なんて見た事ないが・・・  
」

ビジョップは、その鋼鉄の船を上から眺めながら首を傾げる。

「・・・もしかしたら、もう一つの世界の乗り物かなあ・・・?」

「かもな」

ビジョップが弟の方をチラリと見た後、すぐに進行方向に向き直る。

「お!見えた!!!・・・そろそろ到着するぞ!!!」

目的地が見えてきたのか、彼ら兄弟を乗せた竜は一気に地上へと下

降する。

僕も早く・・・兄さんみたいに、こうやって空を駆け巡りたいな・・・!

竜と心を通わし、自在に操っている兄を見て、チエスはそんな想いを抱いていた。

バサッ

村の近くにある平原にて、2頭の竜が地面に降り立つ。竜から降りたチエスとラスリアの視線の先には、偵察に出てこの場所で待機をしていたウオトレストの青年が待ち構えていた。

「この平原の先にある村で先日、銀髪の青年が発見されたそうです」

「そっか・・・。ありがとうございます！」

チエスはその青年に礼を言っていた。

アレン・・・大丈夫かしら・・・?

平原を見つめていると、不意にウオトレストの青年がポロツと呟く。「ただ・・・一応、気をつけてください。あの村は世界統合によって出現した村・・・どんな人間が待ち構えているのか、わかったものではないですから・・・」

その台詞を聞いた途端、胸がドキツとした。

「古代種キロ（わたし）の事・・・知っているのかな？」

「・・・どうだろう？少なくとも、得体の知らないアレンを保護してくれたとなると、そんなに悪い連中ではないはず・・・」

ラスリアが呟きながらチエスに視線を落とすと、彼も小さな声で呟く。

こうしてラスリアとチエスは、平原を真っ直ぐ歩き、初めて訪れる村の中へと足を踏み入れた。

「結構、喉かな村だね・・・」

チエスが率直な感想を述べる。

彼らが訪れた村は、小さいながらも都会の喧騒がなく、のんびりとした時間が流れているような村だった。

「あの・・・いいですか？」

ラスリアが通りがかりの人に声をかける。

声をかけられた中年女性は、最初はビクツとしたがすぐに口を開く。

「な・・・何か用??」

あれ・・・?

女性が口にした言葉は、普段自分達が話している言語とは、明らかに違っていた。

「・・・なんて言ってるのかな?」

言葉がわからないチエスは、首をかしげる。

しかし、ラスリアはなぜかこの聞きなれない言葉の意味をすぐに理解できた。

「えつと・・・。最近、ここいらで銀髪の青年が発見されたと聞いたんですが・・・」

ラスリアが使い慣れない言葉で話を切り出すと・・・その女性は、言葉を濁す。

「・・・あんだ達、まさか・・・そいつの連れ・・・?」

気まずそうな表情で話す女性に、ラスリアとチエスはきょとんとしていた。

その後、声をかけた中年女性がとある場所に案内してくれた。

「・・・民宿・・・?」

民家の扉の上に掲げられている看板の文字を読むラスリア。

「ラスリア・・・君、よくこの言葉わかるね!・・・もしかして、古代語とか?」

不思議そうな表情かおをしながら、チエスがラスリアを見上げていた。

「・・・多分、古代語ではないと思うわ。ただ・・・なぜか、頭の中に言葉の意味が流れてくるような・・・」

「だとすると・・・」

複雑な表情かおをするラスリアに、チェスは言葉を言いかける。

「もしかしたら、それも”キロ”が持ちうる特殊能力なのかもね！」  
チェスは無邪気な笑顔でそう述べる。

そう・・・なのかな・・・？

ラスリアは心の中で自問しながら、民家の戸をノックした。

「はーいー！！」

ノックの音に気がついたのか、自分と年齢としが近そうな女性の声が聞こえてくる。

扉の開く音と共に、ラスリアとチェスの目の前に一人の女性が現れる。

「すみません。ここ2・3日休業をしまして・・・」

そう話す女性は、2人の身なりを見て、驚いた表情かおをする。

「あの・・・」

ラスリアが声をかけると、女性は我に返る。

「先日、こちらの家の方が、銀髪の青年を発見したって聞いたので  
スガ・・・」

たどたどしい口調で話すラスリアに、女性はきょとんとしていた。

「貴方達・・・あの男性の友達？」

「ええ・・・まあ・・・」

その場で頷くラスリア。

すると、女性はため息交じりで話し出す。

「確かに、私が彼を保護しましたが・・・」

「・・・何か問題でもあるの？」

意味はわからずとも、会話を聴いていたチェスが彼女達の会話に入ってくる。

すると、女性はラスリア達を招き入れるような仕草をする。

「着いてきてください・・・。彼は奥の部屋にいます」

女性に案内されて、ラスリアとチェスは民宿の中にあるとある部屋に入らせてもらった。

「・・・アレン！！！」

中に入ったラスリアは、椅子に座っているアレンらしき男性を見つめる。

肩近くまで伸びた銀髪、左目下にある痣　その姿は、確実に

ラスリアのよく知るアレンの姿だった。

「アレン・・・無事でよかった・・・！！！」

椅子に座ったままの彼に抱きつくラスリア。

“未開の地”であんな出来事が起こったのに、無事に・・・しかも、ほぼ無傷で助かったなんて奇跡としかいいようがない。ラスリアの顔は、うれし涙で濡れていた。しかし・・・

「・・・あれ？」

チエスが不思議そうな表情かおをする。

「チエス・・・？」

「なんか・・・アレンの様子がおかしい。見て・・・！」

チエスがアレンの顔を指差す。

その表情はとても虚ろで、生気を感じられない。しかも、突然抱きついたのに口を開かず、ただボンヤリとしたままである。

「これは・・・一体・・・？」

アレンの異変に気がついたラスリアは、一歩ずつ後ろに下がる。

「彼・・・目を覚まして以来、ずっとその調子なんです」

後ろから聞こえた声に、振り返るラスリアとチエス。

そこには、先ほど自分達を案内してくれた女性が立っていた。

「えつと・・・」

上目遣いでその女性を見つめるラスリア。

それを見た女性は、ラスリアが何を言いたいのかに気がつく。

「ああ・・・ごめんなさい。私、この民宿を経営する女将の娘であるフラメンと申します」

「あ・・・。私は、ラスリアと申します」

「僕はチエス」

フラメンが自己紹介をしたのをきっかけに、ラスリア達も自分の名

前を名乗り始めた。

「えっと・・・フラメンさん・・・。その・・・“目が覚めて以来この調子”とハ・・・？」

名前を教えてもらったラスリアは、先ほどの台詞について尋ねる。

「・・・発見当初は意識を失っていたのですが・・・目が覚めても全く話そうともせず、虚ろな表情のまま・・・。しかも、自分で動く事もできない状態なんです・・・。」

そう話すフラメンは、アレンの足元を見て話し出す。

「幸い、この車椅子のおかげで彼を移動させるくらいはできます。

ただ・・・どこの人間かもわからない上に、今は司令部とも連絡取れないから・・・。」

フラメンが“車椅子”や“司令部”といった聞きなれない言葉を口にしていたが、今のラスリアにはその意味を確かめようとする気がなかった。

せつかく、無事ってわかったのに・・・。どうしてこんな・・・！！！！

その場に座り込んでしまったラスリアは、心の中で叫んでいた。目の前にいるアレンは、何を口にする事もなく、ただ虚ろな表情でラスリアを見つめていた。

今は・・・一人にしておいた方がいいかも・・・

そう考えたチエスは、フラメンという女性の民宿を出て、村を散歩していた。

「そういえば・・・。」

先程降り立った場所に、仲間を一人残してきた事を思い出すチエス。・・・あんな状態ではあるけど、とりあえずアレンを見つけたから報告に行かなくちゃ・・・！！

そう思い立ったチエスは、小走りで村の外へと走り抜けていく。

村の敷地を離れ、草原の中を走っている・・・

「ギャオオオオオオオオツ!!!」

上空から、何かの鳴き声が響いてくる。

「あれは・・・!!」

チエスの上空を、数匹の黒竜が横切った。

そして、竜達が向かっている方向は・・・チエスが来た村の方向だった。

「まさか・・・あの村を襲う気!!?」

好戦的で、人間や他の生き物を好んで食する彼らの凶暴性は、チエスもよく知っていた。

全身が震えながらも、引き返そうとするチエス。

黒い竜は元々、絶滅されたと言われている漆黒の竜騎士“ダークイブナーレ”を背に乗せていた竜だった。しかし、乗り手の竜騎士は古代より邪悪な神と契約していた竜が長だったため、他の竜騎士の手によって滅ぼされたのだ。

乗り手は倒されたものの、優れた戦闘能力を持っていた黒い竜は、何とか繁殖を繰り返す事で生き残る事ができたとされている。

「チエス!!!」

チエスの背後から、聞き慣れた声が聞こえてくる。

彼の後ろにいたのは、草原に残したウオトレストの青年だった。

「おい・・・見たか?あの黒竜たち・・・!!」

そう叫ぶ仲間の表情が、物凄い深刻だった。

「うん・・・!」

手に汗水を握りながら、チエスはその場で頷く。

「応援を呼びたい所だが・・・里にいる仲間達も今、手が放せないらしい・・・」

「そんな・・・!じゃあ、どうすれば・・・!?」

「落ち着け、チエス!!槍や魔法が優れていても、相手はあの黒竜お前一人じゃ、太刀打ちはできねえ・・・!だから、何が何でもラ

スリア殿と、アレンとかいう青年を避難させるんだ……！わかるな！？」

「……うん……！」

“無理に戦おうとせず、彼らを避難させる”と厳命されたチエスは、急いで村の方へと戻り始める。

「アレンとスリア……無事でいてよ……！！！」

チエスは祈るような想いで呟きながら、全速力で村の方へと走っていく。

第26話 アレンを保護するために<前編>(後書き)

いかがでしたか。

今回はラスリアが持つ古代種としての能力ちからである、” いろんな言語に対応できる ” というモノが発揮されました。

それと、この回で初登場したフラメンという女性。

実は『Right』に出てくる登場人物(脇役ですが)だったりするのです。

どこで出てきたかは、『ガジェイレル - Right -』をお読み戴ければ、どんな人物かわかると思います！

そうすれば、「どうしてこんな展開になったのか」がよくわかると思います！

それでは、引き続きご意見。・ご感想をお待ちします

第27話 アレンを保護するために<後編>(前書き)

<前回までのあらすじ>

チエスと合流したラスリアは、アレンが保護されたという村に向かう。

世界統合によって現れた村でアレンを見つける事は出来たものの…彼は意識はあっても、物言わぬ身体になっていた。

その姿を見たラスリアは愕然とする

チエスはアレンをラスリアに任せて村を出ると、黒竜と入れ違いになる。

彼らが村を襲う事に気がついたチエスは、急いで村へと戻るのだった。

## 第27話 アレンを保護するために<後編>

また、この目で見るとは、思いもしなかった…  
ラスリアの頭の中にこんな考えがよぎる。

虚ろな表情のまま車椅子に座っているアレンの傍で天窓の向こうを見つめていた。彼女たちが滞在しているこの村に、かつて船の上でも遭遇した黒い竜が襲い掛かってきたのだ。そして、以前にイブールが「彼らは好戦的で人間の肉を好んで食らう」竜だという話を聞いていたラスリアは、すぐに避難をする事に決める。

「…ってあれ？フラメンさん!!？」  
気がつくと、アレンを保護してくれたフラメンという女性の姿がない。

それもそのはず、魔物の襲撃によって危機感を感じたのか、真つ先に逃げ出していたようだ。

「アレン…!!!!」

ラスリアは、アレンと一緒に避難しようとする。

「これ…このまま、動かせるみたいね…！」

車椅子が、アレンを座らせたまま動かせる事を知ったラスリアは、すぐに民宿から外に出る。

外に出ると…そこは悲惨な状態だった。フラメンが言うには、この村に住んでいる男たちや年頃の女性は皆、遠くへ出稼ぎに行っている。そのため、村には高齢者や子供といった…戦いの経験のない者達しかいないのだ。故に…人々は皆、パニックに陥っていた。

そして、そんな彼らを追い立てる竜や、既に手中に収めた獲物を食らっている竜もいた。

「…っ!!!!」

黒竜の鋭い牙によって噛み砕かれていく村民を見たラスリアの表情かおは、真つ青になる。

早く…逃げなきゃ…!!!

このまま同じ場所にいたら、すぐに竜の餌となってしまう。村周辺の地理は全くわからないが、ラスリアはアレンと共に村の裏手にある森へと走り出す。

「ラスリアー!!!どこー!!!?」

村に引き返してきたチェスは、ラスリアの名前を呼びながら彼女を探す。

村民達は魔物の襲来によって慌てふためいていた。

でも、いくら普通の人間だからって…魔物に対してここまでパニックになるものかなあ?

チェスは逃げまどう村民を客観的に見つめながらそんな事を考える。そして、走り回っていると、周囲には竜の爪で引き裂かれた人間…そして、捕らえられ餌のように食われていく人間の姿があちこちで見られる。

全く…竜族の恥さらしが…!!!

人間がどうなるかと知った事ではないけれど、本能の赴くまま殺戮を続ける黒竜達に、チェスはウオトレストの一人として憤りを感じていた。

「!!!?」

何かに気づいたチェスは、ピタリとその場に立ち止まる。

「誰かに見られていたような…?」

低い声で呟きながら、チェスは周囲を見渡す。すると、民家の柱の側で、布で顔を隠している女性らしき人が見える。

「…?」

何かと思ったチェスは、その一点を見つめっていると…女性はフツと晒った後に、その場から姿を消してしまう。

「ちょ…!!!?」

突然消えた女性のいた場所まで走り寄るチエス。しかし、その場所には既に女性の姿はなかった。

…なんだったんだ、今は…?

殺気ではなかったものの、変わった気を感じていたチエスは、その場で考え込む。そして、普通の人間のモノとは思えない気に違和感を感じていた。

「…あつ…!!!」

チエスは思い出したかのように声を張り上げる。

「早く…ラスリアとアレンを見つけなきゃ…!!!」

チエスは黒竜と対峙しないようにコソコソ隠れながら、村の中を走っていく。

「はあ…はあ…」

車椅子に乗ったアレンを連れ、ラスリアは、村の裏にある森の中を走り出す。

後ろで人々の悲鳴や竜の咆哮が聞こえようと、全く振り返らずに

「あつ…!!!」

車椅子の車輪が、木の根っこに引っかかった途端、その場に立ち止まるラスリア。

車椅子を引きながら走っていたので、いくら汗をかいていた。

「ここまで来れば…少しは…大丈夫…かな…」

後ろから魔物が追ってこない事を確認したラスリアは、一旦この場所ので休憩をする事にした。

民宿を出る時は頭の中が多少混乱していたが…こうして落ち着くと、少しずつ脳みそが冴えてくる。

そして、頭が冴えてきたのと同時に、村で黒竜に食い殺される村民

の姿が再び頭の中によぎる。

「…っ！！！」

ラスリアは拳を強く握り締め、村人達を救えなかった事に後悔していた。

「何が”古代種”よ…。結局私は…あの村の人たちすら守る事ができない…！！」

ラスリアは無力な自分が嫌いであつた。

「強く…ならなきゃ…」

ラスリアは俯きながら、ポツリと呟く。

そして、彼女の瞳は後悔と自責の念でいっぱいであつた。

涙で濡れたラスリアの視線は…何も受け答えをしない、アレンに向いていた。

「そうだよね…」

アレンがこんな状態である今…私がしつかりしなくちゃ…！！

そう思い立ったラスリアは、涙を腕で拭き、歩き出そうと立ち上がった時だつた。

「…来る」

アレンの口から、低い声の呟きが聞こえる。

「え…？」

意表を突かれたような表情で、ラスリアは後ろからアレンを見つめた。

そして、顔を前に上げると…そこには、見慣れない男性の姿があつた。

ガツチリとした体格に、濃い茶髪と白銀色の瞳…。そして、その背中には身の丈並の大ききがある大剣を担いでいた。

「誰…？」

目の前にいる相手に対して、不信感を覚えるラスリア。

どう見ても村の人ではないし…。耳が尖っているけど、竜騎士…  
ってかんじでもない。…何者なの…？

ラスリアは男を睨み付けていると…

「おお、ご苦労さん！」

「…？」

その軽い口調に驚くラスリア。

しかし、ニヤニヤしているにも関わらず、この男性から感じられる殺気は半端ではなかった。

「ああ…えつと、そのガキをこっちに渡してもらえねえかな？」

そう語る男は、車椅子に座るアレンを指差す。

この台詞を聞いた瞬間、ラスリアは彼を「味方ではない」と判断した。

「…彼をどうするつもり…？」

「悪いが、それは企業機密」

どういふ目的でここに現れたのか聞き出そうとしたが、すぐに却下されてしまう。

「なんだか、この男性…」

にらみ合っているだけなのに、ラスリアは首を？まれているような…そんな気分になっていた。

その場で黙り込んでいるラスリアを見た男は、ため息をしてから口を開く。

「あのなあ…言うておくが、俺は「お願い」でも「交渉」をしに来たわけでもねえ…」

その後、空気を切る音と共に、ラスリアの首に大剣の矛先が向けられていた。

「これは、「命令」だ」

「…!!!」

剣をつきつけられたラスリアは、男の表情を見て、全身に鳥肌が立つ。

その瞳は、まるで獲物を見定めた肉食動物のようだった。

しかし、意を決したラスリアは、再び男をにらみ出す。「絶対にアレンを渡さない」という意思を表しているかのように

2人の間に緊迫した空気が流れる。お互いに譲る気配はなく、沈黙が続いた。

「なら…」

大剣を握る男の口から、ボソツと何かつぶやいていたが、ラスリアには全く聞こえていなかった。

「力ずくで行くしかねえようだな…!!!」

そう叫んだ男は、大剣を一振りする。

「きゃああああっ!!!」

剣から生まれた衝撃波は、華奢なラスリアの身体を軽く吹き飛ばしてしまう。

ドサツという音と共に、地面に倒れ伏すラスリア。その状態を、男は上から見下ろしていた。

「けっ…他愛もねえ…」

そう呟いた男は、ゆっくりと歩き出し、アレンに手を伸ばそうとする。すると…

「やめてえええっ!!!」

そう叫びながら、ラスリアが男の目の前に立ちはだかる。

衝撃波に飛ばされたその足には、いくつかがかすり傷があった。ラスリアよりも背丈があるこの男は、彼女を見下すような表情で見つめていた。

「貴方が何者かは知らないけど…アレンは、私が守る…!!!」

必死な表情で訴えかけるラスリア。

ただし、剣士でも格闘家でも魔術師でもないラスリアには、彼に對抗する術はない。

自分は何もできない…けど、アレンはいつも私を守ってくれた…

!!

ラスリアの頭の中には、これまでアレンと過ごした場面が次々と浮かぶ。「動かない彼のためにも、自分にできる事したい」という考えが、ラスリアの脳内を占めていた。

ドスッ

すると、鈍い音が周囲に響く。

ラスリアのお腹に、一発の拳が入ったのだった。

「うっ…!!」

殴られた痛みと共に、ラスリアの視界がどんどんぼやけていく。

「アレ…ン…」

意識が遠のき、そして…ラスリアは相手の腕に寄りかかるようにして倒れ、意識を失ってしまうのであった

「ラスリア…!!」

気がつくと、頭上にはチェスの姿があった。

「チェス…?」

こんな経験は初めてではなかったので、ラスリアはすぐに起き上がる事ができた。

また、自分が大剣を持った男に腹を殴られて、気絶していた事にもすぐに思い出す。

「アレンは…!!?」

ラスリアは、慌てて周囲を見渡す。

「落ちていて…ラスリア!!」

ラスリアを落ち着かせようと、チェスは彼女の両肩を?む。

「あ…」

気がつくと、車椅子に座ったアレンの後ろに、ウォトレストの青年がいた。

「よかった…」

アレンの無事を確認できたラスリアは、安心したのか、身体をふらつかせる。

「わわわっ!!!?」

チェスの膝の上にラスリアは倒れこみ、頬を赤らめるチェス。

チェスは緊張したような口調で話し出す。

「ここで何があったか知らないけど…。とにかく、ここに長居をす

るわけにはいかないから、とりあえずは移動しよう…！」

そう言った直後、チエスは立ち上がる。

彼と一緒に立ち上がったラスリアは、車椅子に座っているアレンやウオトレストの男性と共に歩き出す。

そういえば…どうして、あの男性は、アレンを連れて行かなかったのかしら…？

虚ろな表情のままであるアレンを見つめながら、ラスリアは考えていた。

しかし、ラスリアはこの時、何も知らなかった。彼女が出会った男が、後に強大な敵となる事を

第27話 アレンを保護するために<後編>（後書き）

いかがでしたか。

この章、今思えば2部完結は無理があったかな？とか思いつつも、とりあえずまとまったので良かったなとは思いますが。

アレンは物言わぬ状態ではありますが、これが永遠に続くわけでもないです。

だから、もう少しの間はアレン視点で物語を進める事は不可能そうです。

…一応、主人公なんですけどね（苦笑）

それでは、ご意見・ご感想をお待ちしてます！

では

## 第28話 状況整理（前書き）

今回は、久々にアレン視点から始まります！

ほとんどが彼の視点で話が進みますが、後半の最後の方だけ、ラスリア視点が入っています。

## 第28話 状況整理

“世界統合”によって、本来の姿を取り戻した世界。しかし、言語や文化の全く異なった形で発展を続けていたレジエンデirasとアビスウオクテラの人々は、事態を把握できずに混乱を極めた。アビスウオクテラにある“ギルガメシュ連邦”という国だけがこの事態をしっかりと把握し、少しずつ対処してきたが・・・

鳥の鳴き声・・・フクロウの類か・・・？

長い眠りについてたアレンは、少しずつ意識がはつきりしてくる。そして、窓を開けるかのように重たくなった瞼をゆっくりと開く・・・。

「・・・・・・・・」

瞳を開いたアレンが最初に見たモノは、木の葉だった。

枝から落ちてきた1枚の葉っぱがアレンの頬に当たり、彼はゆっくりと起き上がる。

「ここは・・・」

意識を取り戻したとはいえ、まだ頭の芯がボンヤリしていたアレンは、ゆっくりと辺りを見回す。

彼の周囲は真っ暗で、横には焚き火を消した跡がある。

今は、夜・・・なんだな・・・

木々の隙間から見える月と、フクロウの鳴き声で、アレンは今が夜だと認識した。

「・・・・・・・・よっ」

斜め後ろから、聞きなれた声が聞こえる。

「ミュルザか・・・」

「おお！・・・やっと目覚めたようだな・・・」

目が覚めたアレンを見たミュルザが、ニッと笑う。

「いろいろとごつちゃになっているかもしれないが・・・」  
ミュルザは、途中言いかげながら、地面に寝ているラスリア達に視線を落とす。

「こいつら、いろいろと疲れているみたいだから・・・詳しい話はまた翌日・・・な？」

そうアレンに伝えたミュルザは、そのまま木に寄りかかる。

アレンは自分の近くですやすやと眠っているラスリアとチエスを見つめる。

無事・・・だったんだな・・・

アレンは未開の地にて、“星の意思”に頭の中を介入され、ほとんど意識のない状態に陥っていた。自分がしでかした事によって・・・仲間たちに危害を及ぼしていたのではとずっと気がかりだった。

・・・今の段階で、俺が“目覚めた”を知るのはミュルザ（あいつ）だけだし・・・。朝までおとなしくしているとするか・・・そう考えたアレンは、再び地面に寝転び、瞳を閉じて眠りについた。

そして、翌朝

「アレン・・・元に戻ったんだね!!!」

チエスが何かに感激したような表情かおで喜ぶ。

「・・・アレン・・・!!!」

「!!!!!!」

かすれたような声で自分の名前を呼んだラスリアが、いきなり抱きついてきた。

「おい、ラスリア・・・」

突然の出来事に戸惑うアレンの頬が、僅かに赤くなる。

「私・・・すつつつごく心配していたんだからね・・・!!!」

気がつくくと、涙で顔がグシャグシャになっているラスリアが、アレンの顔の近くにあった。

そして、再びアレンの胸にすがりついて泣く様を見て・・・彼は、不思議と暖かい気持ちになっていた。

「悪い……。心配、かけたな……」  
自分のためにここまで心配してくれるなんて事が、アレンにとっては何よりも嬉しかったのだ。その気持ちもあってか……。ラスリアの背中にアレンは自分の腕をソツと回した。

「……。なかなか、お熱いことで!!」

気がつくと、チエスとミュルザの卑しい視線が感じられた。

それを不快に感じたアレンは、即座にラスリアを離す。そして、ブスツと捻くれたような表情かおをしながら口を開いた。

「と、とにかくだ……。俺が目覚めるまでに何があつたか、教えてくれないか？」

アレンの一言で、皆引き締まったような表情を見せる。

「そうだね……。結構いろんな事があつたし……。ね」

「だな。この後にまた出発しなきゃいけないし……。今のうちに、状況整理でもしときたいよな」

互いを見て話す、チエスとミュルザ。

しかし、その横でラスリアだけは口を開かず黙り込んでいた。

「……。ラスリア？」

どうかしたのかと思つたアレンは、ラスリアに声をかける。

「あ……。ううん、大丈夫だよ」

アレンの視線に気がついたラスリアは、笑顔で返す。

しかし、それが無理して作つたような笑顔ではないかとアレンは感じていた。

「まず、話を遡るには……。あの時だな!!」

そう始めに切り出したのが、ミュルザだった。

「アレン（お前）とラスリアちゃんが、教団共に連れて行かれた後・  
・俺とイブールと、このガキンちょは、連中の手で幽閉されてい  
たが……」

「だから、ガキ扱いしないでよ!!」

言いかけたミュルザに、チエスが割って入ってくる。

それを見た悪魔は、ため息交じりで再び話し出す。

「・・・まあ、お前がイブールに教えてた言葉ってのが、あの首輪を外すバスワード的なモノだという事に気がつき・・・力を取り戻した俺様は、こいつを連れて脱出できたわけだ」

「気がついた・・・か」

ミュルザの話聞いて、アレンは自分が口パクで伝えていた内容をわかってもらえた事に、少し安心していた。

「そして、ルーメニシエアを脱出後・・・地震に遭って気絶して・・・。その更に後、俺様はこいつに“水竜の元へ行け”と指示した」  
そう語るミュルザは、チエスの方を指差す。

彼の会話を黙って聞くアレンとラスリア。

「そして、僕は・・・ミュルザやイブールと別れて、単独行動を開始。・・・ウオトレスト（僕ら）の里に戻ってウンディエル様にお会いし・・・ラスリアを発見する事ができた」

「・・・水竜の元へ行った理由は・・・？」

「・・・ミュルザですら、この世界が分裂する前を知らなかった。だから、僕らの身の回りでその頃をよく知る方が・・・ウンディエル様だったんだ」

アレンの質問に、チエスは懸命に答えてくれた。

「という事は・・・。チエスと合流するまで、お前は・・・」

「・・・うん。私は多分、川に流されて倒れていたみたい。そのおかげで、ウンディエル様が私の気を感じ取ってくれたらしいわ・・・」

アレンは、ここまでの内容を頭の中で整理する。

3人で脱出したチエス達は地震・・・世界の統合が成された後に2手に別れ、単独行動を開始したチエスが、1人行方知らずになっていたラスリアを見つけた・・・といった所か・・・腕を組みながら考え事をするアレン。

「そういえば・・・。ミュルザはイブールと行動を共にしていたの

よね？・・・どうして今は単独行動を・・・？」

不思議そうな表情かおをしながら、ラスリアはミュルザに尋ねた。

「言われてみれば、確かに・・・」

アレンも、なぜ別行動を取っていたミュルザが今は、イブールとも別々になっているのが気になっていた。

そして、面倒くさそうな表情かおで頭をポリポリかきながら、ミュルザは語り始める。

「・・・俺様が、チェスと別れた後、イブール姐さんが“行きたい”と言っていたとある遺跡へ向かったんだ」

「・・・趣味の遺跡発掘って事か・・・？」

アレンが皮肉るような口調で呟くが、ミュルザは反論する事はなかった。

「・・・まあ、それも理由の一つかもしれないが・・・」

「確か、僕と別れる前・・・“あそこに行けば、何かわかるかも”ってイブールは言っただけじゃなかった？」

うつむくミュルザに、チェスが補足する。

「ああ。そして、イブール（あいつ）の記憶を頼りに・・・俺達はその遺跡にたどり着いたんだが・・・」

「・・・何かあったのか？」

複雑かたそうな表情をし始めたミュルザに、アレンは尋ねる。

すると、彼は首を縦に振った後に口を開く。

「どうやらその遺跡・・・特殊な結界みたいなのが張り巡らされていて、俺様だけ入る事ができなかったんだ」

「じゃあ・・・イブールは、一人でその遺跡の中へ進んだという事？」

「・・・ああ。“ここまで来たのに、あきらめるわけにはいかない”とか言っただけ・・・」

「悪魔を弾く結界がある遺跡・・・か・・・」

ラスリアの問いにミュルザが答え、その側でチェスがボソツと低い声で呟いていた。

「・・・それで、俺はあいつを待ったために遺跡の近くで居眠りしていたが・・・。せつかく暇なのだから、お前らと合流でもしところかと思つて・・・昨夜、お前が目覚める前に、こいつらと合流したんだ」

そう語るミュルザの視線はアレンに向いていたが、顎でラスリアやチエスの方を指していた。

「本当・・・いろいろあつたんだな・・・」

これまでの経緯を知ったアレンは、ボソツと呟く。

俺も・・・目が覚めるまでに起こつた出来事を・・・話せる限り、

教えといた方がいいかもな・・・

アレンは、「そうしよう」というより、「そうしなければ」という思いに駆られていた。

「お前は・・・眠りにについている間、何があつたのか・・・覚えているのか？」

ミュルザがアレンの顔を覗き込むようにして、顔を近づける。

「・・・」

アレンは何かを言いかけた時に気がつく。

今はとにかく・・・イブールと合流する方が先・・・だよな

そう考えたアレンは、立ち上がつて仲間たちの方を見る。

「覚えている範囲でしか伝えられないが・・・とりあえず、歩きながら話そう・・・」

そう言い張つたアレンは、先頭を切つて歩き出した。

それからアレンは、ラスリア達に、自分が目覚めるまでに起きた出来事について語り始めた。自分と同じ“世界の心”ガジエイレルであるセリエルという女性に出会っていた事。“未開の地”で“イル”に触れた事で、その女性と自分との肉体が入れ替わっていた事・・・。そして、“8人の異端者復活”といった情報を交換していた事や、肉体

が入れ替わっていた時に起きた出来事について話してくれた。

という事は・・・あの時、車椅子に乗せて一緒に避難していたアレ  
ンの中には、セリエル・・・っていう女性の魂があったという事ね  
・

アレンの話を聞いたラスリアは、黒竜が村に襲い掛かってきた時の  
事を思い返していた。

普通だったら到底理解できないような内容をアレンが話したにも関  
わらず、ラスリアを含む仲間達は、割りとすぐに理解を示していた。

「・・・“ 8人の異端者”の中に、竜騎士もいたんだ・・・」  
気がつく、チエスがラスリアの横でポツンと呟いていた。

「チエス・・・どうしたの？」

ラスリアが彼に声をかけたにも関わらず、チエスはまるで聞こえて  
ないかのようにボソボソと呟く。

「兄さんやオトレスト（みんな）から聞いた、漆黒の竜騎士の話  
・・・。もしかして、“彼女”が・・・？」

「・・・ガキンちょ！！！」

ラスリアの声に聞く耳持たずなチエスを見かねたミュルザが、大声  
でチエスと呼ぶ。

「えっ・・・なに・・・？」

「ガキ」という言葉に反応したのか、やっと周囲の状況に気がつく  
チエス。

何を考えているのかお見通しだったミュルザは、彼を見下すような  
表情で口を開く。

「・・・お前、女の子を困らせてるんじゃないよ。それに・・・あ  
ともう少いで、目的地に着くぜ？」

私に気を使ってくれたのか・・・それとも、ただチエスがボソボ  
ソ呟いているのが気に食わなかっただけなのか・・・。どちらにせ  
よ、少し助かったかも・・・

ラスリアは内心でそう感じていた。

チエスの呟いている内容は理解できなかったが・・・彼らのいる場

所から少し離れた場所に、遺跡と思われる高さのある塔が目に入ってくる。

「あそこに、イブールが・・・」

ラスリアは、天まで届きそうなくらい高さのある塔を遠くから見つめながら、一言呟く。

そして、彼らはイブールがいるという、遺跡へ足を進めるのであった。

## 第28話 状況整理（後書き）

いかがでしたか。

サブタイトルにもあった通り、情報交換と状況の整理が今回のメインでした。

説明口調の文が多いのはあまり小説としては好まれないのですが、ここいらでこういった回を作らないと、「今後彼らがどう動くか」が全く読み手さんに通じないだろうと考え、この回を入れました。次回は遺跡探索に単独で始めたイブールを探すという所から始まります！

お楽しみに

それでは、引き続きご意見・ご感想をお待ちします（\* ^ ^ \*

第29話 遺跡とは思えない塔（前書き）

今回はラスリア イブール アレンの順に視点が変わります。

## 第29話 遺跡とは思えない塔

「わああ……」

イブールがいるとされた遺跡に到着したアレン達。

「遠くから見てもすごかったけど……近くで見ると、てっぺんが全然見えないわね……」

”遺跡”というより、”塔”という表現の方が正確なのかもしれない。

チエスとラスリアが、それぞれ塔を見た感想を述べていた。

「本当に……イブールの奴、一度入ったきり出ていないんだよね？」

「……ああ」

アレンはミュルザの方を見て尋ねると、彼は首を縦に振る。

「あの結界の影響なのか、塔に入っていた途端、イブール（あいつ）を察知できなくなったんだ。戻ってきていたら、流石に俺様なら気がつく。だが……」

「だが……？」

「……あれから全く気を感じ取れないから、塔から一步も出ていないのは間違いないだろう」

「確かに……これだけ高さがあれば、そんなすぐに探索は終わらないだろうし……」

アレンの側でチエスが補足をする。

それにしても……どうして、イブールはこの遺跡を探索しようと考え付いたのかしら？

ラスリアは、アレンとミュルザの会話を聞きながら考え事をしていく。しかし、その答えが出ないまま、彼らは塔の中へと入っていく。

「遺跡という割に、中は綺麗だよな……」

ラスリア達は結界の外にミュルザを残し、3人で塔の中に入っていく。

「そうね…。でも、それより不思議なのは…」

ラスリアは途中言いかけた状態で、視線をアレンに向ける。

何が言いたいのかに気がついたアレンは、ゆっくりと口を開く。

「…俺達も、結界に弾かれずに入れた…という事…」

「…確かに」

アレンの台詞に、チエスも同意していた。

「…こんな言い方は皆に失礼だけど…自分を含め、私たち3人は」

普通の人間”じゃないから

ラスリアは周囲を見渡しながら考える。

塔の概観と比べ、中は床や壁の色はシンプルでも、どこか洗練されたようなデザインをした空間であった。そして、この塔がどの時代の文明かもわからない。

「これ…いつの時代の建造物なんだろうね？」

不意にチエスがポツリと独り言を言う。

「わからないわ…。私の種族のモノとも思えないし…一体、誰が何のために作ったのかしら…」

ラスリアは壁にソツと手を触れながらつぶやく。

「…もしかしたら、”あちらの世界”の建築物かもな…」

「え…？」

アレンの意外な一言に目を丸くするラスリア。

そんな彼女なんてお構いなしに、アレンは右手で指差す。

「…あれを見る」

「あれは…？」

アレンが指差した先には

扉みたいなモノと、スイツ

チのようなモノが見える。

「これは一体、なんだろう？扉みたいに見えるけど…持つ所がないし…」

「…それはおそらく、この塔の上へ上るために使う、”機械”とかいうものらしいな」

”機械”…??」

聞きなれない言葉に首をかしげるチエス。

「でも、アレン。どうして、あなたがそんな事を…?」

「…おそらく、あの女が俺の肉体にいたときに…あいつが持っている知識が、俺の肉体に刻まれたからだと思う…」

ラスリアの問いに、居心地悪いような表情で答えるアレン。

「…今までは自分ばかりが、”変わった人間”だと思っただけだけれど…そういうわけでもないのかも…」

アレンの話聞いて、ラスリアは内心でそう考えていた。

その後、アレンがスイッチのようなモノに触れると、扉がガーンという音と共に開く。

「わあ…今度は、丸いスイッチの中に文字が刻まれているね…」

「この文字…?」

扉の中に入ると、中は狭い空間で、扉側の壁には文字の書かれたスイッチがいくつも存在している。

チエスとアレンはそれらに見入っていた。

「ねえ、ラスリア!…これ、なんて読むかわかる?」

チエスが柔らかそうな表情をしながら、ラスリアの方に振り返って質問をする。

「あ…えつと…」

ラスリアはボタンに書かれた文字を見た途端…その意味がパツと頭の中に浮かぶ。

「この文字は…数を表しているみたい。なので、数が一番大きなスイッチを押せば…」

ラスリアが一つのボタンに触れると、地面が揺れる音と共に機械が動き出す。

「流石、ラスリア!」

「だが、ラスリア…。この文字、どうして読めたんだ?」

機械が動き始めて喜ぶ隣で、アレンはラスリアに問いかける。

その瞬間、彼女は少しドキツとする。

なんか…アレンにこういう事を訊かれるのって…何か嫌だな…

ラスリアは上目づかいでアレンを見つめながら考えていた。

「私が、古代種だから…だと思っ…」

この台詞を何とか口にしたものの…複雑な心境であったラスリアは、正面を向いて話せなかった。

「あれ…？」

アレンとラスリアの間には沈黙が続く。

何が起こったのかはつきりとは理解できていないチェスは、この気まずい空気にどうすればいいか迷っていた。

アレン・ラスリア・チェスの3人が”機械”を使って塔を上っていた頃　　独り探索を開始していたイブールは、塔の最上階にたどり着いていた。

「あー…やつと屋上だわー！」

疲れた表情で呟くイブール。

「…あの”機械”とかいう奴…あのスイッチが最上階へ行くためのモノだったのね…」

独り呟くイブールは、一瞬考え事をする。

…一応、コミュニ二大学で一通りの古代語（こくご）を勉強してきたのに…  
”あれ”は見た事も聞いた事もない言語だった。…一体、この遺跡はいつの時代のモノなの！！？

大学で考古学を学んできた彼女にとって、遺跡がどういったモノなのかわからないという事は、イライラさせる大元であった。

「それにしても…」

遺跡探索の間、ずっと塔の中に滞在していたイブール。

そのため、久しぶりに外の空気を吸えた事が、何よりの癒しだった。そして、風を感じながら背伸びをした後、気を取り直して”最後の探索”に乗り出す。

「…あら…？」

ゆっくりと屋上を歩き出してみると…イブールの視線の先に、何か祭壇のようなモノが見える。

何かを…祭っているのかしら…？

恐る恐る近づいてみると…

「綺麗…！」

祭壇の中心に祭られていたのは

淡い水色をした水晶の

ような石だった。

イブールは、その石が触れないかとソツと手を出す。それはこの塔に入る時、ミウルザが塔の結界に弾かれた瞬間を、その目で見ていたからだ。恐る恐る手を差し出したイブール。

…しかし、何かに弾かれる事なく、その石を手を持つ事ができた。

「ふふ…。遺跡についてはよくわからなかったけど…これさえあれば、いろいろとわかりそうね。」

水晶のような石を発見したイブールは、たちまち上機嫌になっていた。

「あら？そういえば…」

ふと思い出したイブールは、袋の中から布でくるんだ石のかけらを取り出す。

「やつぱり…」

布から石のかけらを取り出した彼女は、手に入れた水晶とそれを見比べる。

すると、色も素材も…大きさ以外はすべて同じ物であった。

以前、オーブル遺跡で手に入れたこのカケラ…この遺跡のモノだったのね…

かけらと石の両方を眺めながら、イブールは考える。そして、オーブル遺跡の名前が出た途端…不意にアレンとラスリアの事を思い出す。

あの子達に出会ったのも…オーブル遺跡だったかしら…

イブールは物思いにふけながら、青空を見上げる。

「大丈夫かな、あの子たち…」

ルーメニシエアで引き離されて以来、アレンとラスリアに会っていないイブールは、彼ら2人の身を案じていた。

その後、数分程、イブールは黙ったままその場に立ち尽くしていた。そして、数分が経過し

「そうだ！本来の目的を忘れちゃ駄目じゃない……！」

我に返ったイブールは、すぐにその場から歩き始める。

ミュルザが、私とチェスを抱えて脱出してくれた際……一般人に見つからないよう大空に飛び出した時、私の視界に入ってきたこの塔……。一瞬だけだったとはいえ、あんなに遠い場所からでもよく見えたんだから……その屋上であれば今の世界を見渡せるはず……！

イブールがミュルザに頼んでこの塔に連れてきてもらった一番の理由が、これであった。彼女は走り歩きで、屋上の端っこへと向かう。

「これは……！！！」

イブールが屋上の端っこにたどり着いて下の景色を眺めた途端……彼女は目を丸くして驚いた。

ちょうどこの日は快晴で雲ひとつなかったため……台地や海がよく見えた。

「ここから見える分だけでも……地形が思いっきり変わっている事がよくわかるわ……！！！」

イブールは、具体的な地名はわからずとも、レジエンディラスの世界地図に載っていた地形図くらいは頭に入れていた。

「あの辺は砂時計みたいな形をした半島があったのに、今は全く見当たらないし、あの大陸の先端が、何かと衝突起こして地割れしているようにも見える……。しかも、あんな場所に滝つぼなんて、なかったわ……！」

自分の視界に入ってくる景色を見つめながら、独りボソボソと呟く。「……？」

何かを感じたイブールは、突然後ろを振り向く。

……何か聞こえたような気がしたけど……気のせいかしら？

そう思うが、やはり、塔の屋上にはイブール以外は誰もいない。「

何も無い」と考えた彼女は、再び同じ方向に向きなおして、地上の景色を瞳めに焼き付けていた。

「わっ…!!?」

塔の中にあつた”機械”で一番上のフロアを目指していたアレン達。アレンとラスリアの間で微妙な雰囲気になっていがた…突然、チエスが何かに驚いたかのように叫び声をあげる。

「どうした…?」

チエスの声に気がついたアレンが、咄嗟に彼の方へ視線を向ける。すると、チエスは…自分の左腕を抑えながら、こもったような声で話す。

「このかんじは…間違いない。あいつらだ…!!!!」

「チエス…どういう事!？」

チエスの呟きに、ラスリアが不安そうな表情かおを見せる。

チエス（こいつ）の聲が、微かに震えていた…。もしや、何かに怯えているのか…?

チエスの表情を見ながら、アレンはふと考えていた。

「2人とも…特に、ラスリアはよく覚えているよね? 凶暴かつ好戦的な黒い竜を…!!!!」

「!!!!!!」

”黒い竜”の名前が出た途端、アレンとラスリアの表情が一変する。

「黒い竜”って…あの時、船の上に現れた…!？」

アレンはこの時、以前にウオトレストの里へ向かう際、人間たちに襲い掛かってきた黒い竜を思い出す。

「ラスリア…?」

横にいたラスリアが、俯いたまま震えていた。

アレンは肉体が入れ替わっていたので、ラスリアが黒い竜の襲来をもう一度見ていたという事実を知らなかった。しかし、彼女が怖が

っているのを、アレンは察知していた。

「大丈夫だ、ラスリア…。お前は、俺が守るから…」  
そうラスリアに囁いたアレンは、ラスリアの肩にソツと左手を乗せる。

「うん…」

俯いたままであったため、ラスリアの表情は見えなかったが…彼女の声から少しは安心したのかと思い、アレン自身も安堵した。

ガーツという音と共に、扉が開き、開いたのとほぼ同時にアレン達は扉の外へ飛び出す。

「ここが、最上階とやらか…！」

周囲を見渡しアレン。

ラスリアやチエスも、必死になってイブールを捜す。

もし、この場所にイブールがいたとしたら、黒い竜と鉢合わせになっている可能性が高いからだ。

「イブール……！！ど……どこ……？」

チエスの大声が周囲に響く。

「あ……あれ……！！」

チエスが大声で叫んでいると、何かに気がついたラスリアが指を指す。

「竜が…集まっている……！！？」

ラスリアが指差している方向を見ると…祭壇らしきモノのまた更に奥の方で…黒竜が2・3匹ほど、地上に降り立って集まっていた。

「あれ…？あいつらが口に銜えているモノ…まさか…！！？」

黒い竜が口に銜えているモノが何か見えたチエスの表情が、見る見ると青ざめていく。

「イブール……！！！！」

1匹の竜が口に銜えているモノが…イブールだと気がついたアレンは、すぐさま走り出す。

「アレン……！！！！」

後ろからラスリアの叫び声が聞こえたが、アレンは振り返る事なく走り出す。

アレン達の存在に気がついた黒竜たちは、走ってくるアレンの方に振り向く。

「どうやら…気絶しているだけのようだな…！」

竜に捕らえられたイブールは、見たところ外傷はなく、殺された形跡は見当たらない。しかし、意識を失っているのは確かなようだが…

「ギャオオオオオオツ…！」

1匹の竜が、威嚇するかのような咆哮をあげる。

それを割りと至近距離で聴いていたアレンは、そのあまりの大きさに顔をしかめる。

「っ…！！！！」

すると、3匹の黒い竜はほぼ同時に巨大な翼を羽ばたかせる。

その羽ばたかせた際に起こった強風に気がついたアレンは、その場に立ち止まって防御の体制をとる。

そして、反射的に閉じていた瞳を恐る恐る開くと…既に、竜達は大空に向かって羽ばたいていた。そして、アレン達には目も暮れず…イブールを銜えたまま、大空の彼方へと飛び立ってしまったのであった。

## 第29話 遺跡とは思えない塔（後書き）

毎度、ご一読ありがとうございます。

今回、この回を執筆して思ったのですが、「（口の中に）はさむ」の意味を持つ「くわえる」が「銜える」と書くのを初めて知りました！

「なるほどなあー」とは思いましたが…もしかしたら、私が勉強不足なだけでしょうかね？笑

さて、この回でイブールが突如、魔物にさらわれてしまいました。今後どうなってしまうのか？

次回をお楽しみに

ご意見・ご感想や、作品に対する質問などがありましたら、よろしく願います！

**第30話 悪魔のプライド（前書き）**

今回はチエス ミュルザ ラスリアの視点で進みます。

### 第30話 悪魔のプライド

「くそっ……！」

黒竜に逃げられてしまい、アレンはその場で舌打ちをする。

「イブール……！」

ラスリアはイブールが連れ去られた方向を見て、呆然と立ち尽くしていた。

それにしても……なぜ、黒い竜はイブールを連れ去ったんだろう？ただ餌としてだったら、その場で丸呑みしちゃうだろうし……大空を見渡しながら、チエスは考え事をしていた。

「あれ……？」

周囲を見渡した時、チエスの視界に祭壇が写っていた。

近づいてよく見てみると　そこには、何かが安置されていたような形跡がある。

「この祭壇……」

ボソツと呟いたチエスは、後ろの方にいたアレンとラスリアに声をかける。

「2人とも！これを見て……！！」

そう叫ぶと、我に返ったアレンとラスリアは、チエスの近くまで歩いてきた。

「……見て」

「これは……」

「……何かが祭られていた……って事かしら……？」

アレンとラスリアも、祭壇の周りに集まってその場を見つめる。

「祭られていたモノがあつたとされる台の上は、ほとんどが埃などで汚れているけど……その安置されていた場所だけ、何も汚れがついていない。だからおそらく、この台座に祭られていたモノを取ったのが……」

「・・・イブールって事か」

そう答えるアレンの横で、チエスは黙って頷く。

「・・・竜が人間をそう簡単にさらったりしないはずだし・・・。  
むしろ、黒竜あいつらは元々、ここに祭られていた“何か”が狙いだった。  
・と考えるのが自然かも・・・。」

自分で何を言っているかあまり意識していなかったが、チエスは今  
時分が述べた事が、真実のような気がしてならなかった。

「・・・どちらにせよ、早いところここを出て、地上にいるミュル  
ザと合流しよう！」

「そうね・・・！」

アレンの意見に同意したラスリアは、彼と一緒に上るために使用し  
ていた“機械”の元へ歩き出す。

そんな2人の後姿を見ながら、チエスは思った。

なんか・・・嫌な予感がするな・・・

チエス達が急いで塔から地上へと降り始めた頃 遺

跡の近くにいたミュルザは、木陰に寄りかかって居眠りをしていた。

「んー・・・」

太陽の光が顔面に差し込んできたのか、ミュルザはゆっくりと瞼を  
開く。

「誰だっ!!?」

しかし、自分の周囲に誰かいる事に気がついたミュルザは、瞬時に  
起き上がって周囲を見渡す。

「あん・・・?」

太陽の光が眩しくて見えづらかったが、彼の視線の先には一人の女  
性がいた。

「・・・なんだ、てめえ?」

何者かと問いかけるが、返事がない。

「・・・この感覚って確か・・・」

女性をまじまじと見ながら、ミュルザは考える。

「・・・まさか、こんな所でミュルザ様にお会いできるとは・・・」

「!?!?」

布で覆っていた女性の口から、自分の名前が出た途端、ミュルザは驚く。

「・・・お前つてもしや・・・古代大戦前、同族に滅ぼされた・・・」

「

ミュルザが何かを言いかけると、その女性はフツと微笑んでから口を開く。

「お察しの通り・・・。私は昔、同族によって滅ぼされた漆黒の竜騎士“ダークイブナーレ”の生き残りよ」

この女性は自分が竜騎士である事を告げたが、ミュルザが驚く気配はなかった。

「なるほどな・・・。“ダークイブナーレ”ならば、俺様を知っているのも納得できる。・・・何せ、お前らの長である黒竜は、俺達悪魔を統べる邪神と契約を結んでいたからな・・・」

何かを思い出したようにして語るミュルザ。

その後、ミュルザはその女性をジツと見つめながら話を続ける。

「それで、生き残りであるあんたが、“8人の異端者”の一人となった。・・・だろう?“漆黒の悪魔ヴァリモナルザ”さんよ?」

相手の心が手に取るようにわかるミュルザは、ニヤニヤしながらこのヴァリモナルザを睨む。

「俺と喧嘩しに来たようには見えないが・・・何の用だ?」

「・・・貴方は、私の心を読めるのですよね?・・・でしたら、ご自分でお考えになれば?」

ミュルザの質問に、はぐらかすような返事をするヴァリモナルザ。

気がつく、彼女の背後に、1匹の黒い竜が降り立っていた。そして、竜の背中に乗った後、ヴァリモナルザはミュルザに言う。

「また、近い内にお会いするかもしれないね……！」  
何かを企んでいるような表情かおをしながらそう言い放った彼女を乗せた竜は、そのまま大空へと羽ばたいていってしまふ。

ホツと一息ついたミュルザは、その場に座り込む。

「一体……あの石はなんなんだ……？」

ミュルザは座り込みながら、ヴァリモナルザが考えていたビジョンの内、何とか読み取る事ができたビジョンについて考えていた。

あの水色の石……それが、あの塔にあるようだが……。奴は一体、あれを何に使うのだろう……？

腕を組んで真面目に考えていると……

「お……い……い……！ミュルザ……！」

遠くから、チエスの声が聞こえてくる。

「おお、お前ら！」

塔の中に入っていたアレン・ラスリア・チエスの3人が帰ってきたため、ミュルザは彼らを迎えた。

「……って、おい！イブル姐さんは……？」

3人の様子がおかしい事に気がついたミュルザは、不意にラスリアと目が合う。

「え……」

その時、ラスリアの考えている事を読んだ途端、ミュルザは驚きの余りに声を失う。

黒い竜共が……イブル（あいつ）を……！！？

ラスリアが言葉で説明する前に、塔で何がおきたのかをミュルザは理解してしまった。

「くそ……！！！」

ミュルザは悔しさの余り、その場で地団太踏む。

あのヴァリモナルザとかいう女がさっきこの場にいたのは……俺の注意を自分に惹き、その隙に目的を達成するためか……！！敵の目的を理解したミュルザだったが……この時、異様なくらい

の憤りを感じていた。

「同族に滅ぼされた分際で、この俺様を出し抜くとはな……！」  
低い声で呟くミュルザの瞳は、僅かに紅くなっていた。

「ミュルザ……大丈夫？」

ラスリアの台詞を聞いて我に返ったミュルザ。

振り向くと、彼女だけではなく、チエスやアレンも深刻そうな表情かおをしていた事に気がつく。

「あ……ああ。大丈夫だよ！」

ラスリアの表情を見たミュルザは、少しおどおどしていた。

“ 8人の異端者 ” の一人に会った……なんて、まだ言わない方がいいかもな

内心でそう考えるミュルザ。

それを見かねたのか、アレンが突如口を開く。

「とにかく、奴らに連れ去られたイブールを救出しなくてはならない。……さて、どうやって探すか……」

「……さつき屋上で黒い竜を見た時……彼らは西の空へと飛んでいっていた。ならば、その方向へ向かえばあるいは……？」

「あ……でも、申し訳ない事が一つ……」

「……？チエス、どうしたの……？」

気まずそうな声で話すチエスに、首をかしげるラスリア。

なるほどな……

この時、ミュルザはチエスが言いたかった事を既に読み取っていた。  
「ミュルザはもうわかっていていると思うけど……。実は先日から、ウオトレスト（ぼくら）の里で重要な会合が催されているんだ。そこには、各部族の長が集まっているから……。今、竜騎士以外の者達を入れてはいけないんだ……」

チエスの台詞を聞いた4人は、一様に黙り込む。

水竜共が使えないとなると、あとは……  
他に手立てがないかと考えるミュルザ。

「……そうだ!!」

その時、ミュルザが不意に何かを思いつく。

「・・・そうだ!!」

黙り込んでいた自分達の側で、何かに閃いたミュルザが声を張り上げる。

・・・何か、良い方法でも思いついたのかしら・・・?

ラスリアはミュルザを見つめながら、そう考えていた。

「何か、妙案でも思いついたの?」

チエスが興味津々な表情でミュルザの顔を覗き込む。

そんな彼など眼中になかったミュルザは、ゆっくりとラスリアの方に歩いてくる。

「ラスリアちゃん」

「何・・・?」

いきなり目の前に来たミュルザに、ラスリアはドキツとした。

以前、同じような事が起きた時は・・・腕を掴みあげられたからね。多分、無意識の内に身体が警戒しているのかも・・・

悪魔であるミュルザに身体が反応した事で、そう考えるラスリア。すると、ラスリアの黒い瞳を見つめながら、彼は話す。

「俺様がある術を使えば、奴らの所に乗り込めるんだが・・・。そのためには、ラスリアちゃん。君の力が必要なんだ」

「え・・・?」

ラスリアは、ミュルザがなぜこのような事を話しているのか不思議に感じる。

「ちよつと、ミュルザ!何するつもり?」

ミュルザに隠されて見えない場所から、チエスの声が聞こえる。すると、彼は面倒くさそうな表情をして、話す。

「・・・ガキが見るモノじゃねえな、これは・・・」

「俺にもわかるように説明しろ」

アレンも、何をしようとしているか気になっっているようだ。

「ラスリアちゃんには、一時的な“契約”をしてもらう」

「え……？」

“契約”という言葉にドキツとするラスリア。

しかし、少しだけ違和感を感じる。

「一時的”……って、どういう事……？」

そう問いかけると、「待ってました」と言わんばかりの表情でミュルザは話す。

「今回、お前らが果たしたい“イブールを助ける”という目的を達成するまでの短期間という意味さ。俺達悪魔は、人間と“契約”している間は他の連中と“契約”できないが……こういった一時的なモノなら可能なんだ」

「でも、悪魔の”契約”とイブールを助けるのに、何の関係が……？」

チエスが首をかしげながら、ミュルザに尋ねる。

「……“契約”とは、悪魔が更に強大な力を手にするためにやる儀式のようなモノ。それを行えば、俺様はお前らを連れて、あの黒い竜共の元へ運んでやる事が可能になるわけ！」

「なるほど……」

ラスリアは、腕を組みながら頷いていた。

……ウオトレストの人達には頼れないし、ちまちま探していたらイブールの命が危ない……。もしかしたら、これが最良の選択……かも？

生きてまま連れ去られたとはいえ、敵がイブールをずっと殺さないでおくとは思えない。彼女の身の安全の事を考えると、ミュルザの提案に従うのが一番ではないかと、ラスリアは考える。

そして、意を決したラスリアは、ミュルザに声をかける。

「……いいわ。一時的に、“契約”しましょう！」

「ラスリア……!？」

チエスやアレンが驚く中、ミュルザはニツと笑った。

「・・・で、私は何をすればいいの？」

そう問いかけると、ミュルザはニヤニヤしながら答える。

「そうだなあー・・・。あんたの場合だったら・・・キスが無難かもな！」

「ええっ!!?」

思いにもよらない返事が返ってきたため、ラスリアは驚く。

「あー。もちろん、おでことかじゃなくて、唇に・・・だ」

「ミュルザ・・・てめえ・・・!!」

いても立つてもいられなくなったアレンが、ラスリアとミュルザの間に割って入ってきた。

「言っておくが」

すると、ミュルザが突然凶太い声で言いかけたせいか、アレンが身体をビクツとさせる。

「俺様も、連中に出し抜かれてイライラしてるんだ。・・・イブー  
ル（あいつ）を早く助けるなら、これが最良の選択って事くらい・・・  
てめえだって、わかっているんだろ？」

ミュルザはイラついたような声で、アレンを睨み付ける。

その表情から見てとれる殺気は半端ではない。

「あ・・・アレン！私は、大丈夫・・・だから・・・」

頬を少し赤らめながら、ラスリアはアレンを引き止める。

「だが・・・」

「ありがとう、アレン。でも・・・彼の言う通り、これが一番最良の選択だと、私もわかってるから・・・ね？」

ラスリアがアレンに作り笑いでそう説得すると・・・アレンは、渋々2人の間から抜け出して、そっぽを向いてしまう。

「じゃあ、あいつも同意してくれた事だし・・・チャチャツとやっちゃいますか！」

先ほどの怖い表情から、突然いつものミュルザに戻ったので、返ってそれに対して恐怖を感じた。

しかし、そんな事を考えても、彼には筒抜けだつて事をすっかり忘れていたラスリア。

ミュルザの大きな手が、ラスリアの頬に触れる。

「イブール姐さんの事を考えると、まだまだガキンちよだが・・・」  
耳元で囁くミュルザに、ラスリアはドキツとする。

心臓がドキドキする・・・。男の人が、ここまで近くに寄ってくるの・・・初めてだもんね・・・

内心でそう考えていると、ミュルザの顔がゆっくりと近づいてくる。  
「・・・っ!!」

ラスリアの唇に、何か柔らかいモノが触れる。

気がつけば、ミュルザの左手がラスリアの頭を抑え、彼の瞳が閉じられていた。

長く厚いキス・・・これが、愛する人とのモノであつたら、もっと喜んでいたのかもしれない。

「・・・!!?」  
そんなラスリアの気持ちを察したのか、ミュルザは彼女の口に舌を入れる。

息が・・・!!

突然の出来事に、何も考えられなくなるラスリア。

ほんの1分足らずの出来事が、何時間という途方もないくらい長い時間のよう感じられた。

そして、ミュルザの方から、唇を離す。

「いやぁー!!これは力沸いてきそうだな!!・・・俺様とあんなが本当の恋人同士だったら、この続きができるのにな!!」

「・・・」  
顔を真っ赤にしているラスリアの側で、ミュルザはからかうような口調で言った。

やっと終わった事に気がついたアレンとチェスは、ラスリアとミュルザの方を見る。

「・・・終わつたんだらう?さっさと、行くぞ」

アレンが白い目でミュルザを見つめながら、早く行こうと催促する。

「本当、お前はせっつかちな野郎だねえー……」

そんなアレンを見たミュルザが、ため息交じりで呟く。

「……でもまあ」

そう呟くと、ミュルザの背中に黒い翼が現れる。

「力も沸いてきた事だし……衰えない内に、使つとするかあ!!」

そう叫ぶや否や、地面に黒い魔方陣が現れる。

「まさか……この人数で、瞬間移動……!?!」

地面に浮かび上がった魔方陣を見つめながら、チエスが驚いていた。

「本来の姿に戻れば……もつとすごい事ができるぜ?」

ニヤニヤしながら、ミュルザは話す。

すると、魔法が発動したのか、魔方陣から漆黒の光が現れる。

イブール……どうか、無事でいて……!!!!

ラスリアは心の中でそう祈る。

そして、力を得たミュルザが唱えた瞬間移動の魔術が発動し、彼らを黒い竜達の元へ運んでいくこととなる。

### 第30話 悪魔のプライド（後書き）

毎度、ご一読ありがとうございます。

今回、久々にミュルザ視点で書きましたが……。普段はアレンやラスリア視点で物語を書く事が多いので、今回はミュルザの心情をよく描けたのがよかったと思っています。

いつもおちゃらけてはいる彼ですが、他の悪魔と同様でプライドはかなり高いです。

また、主であるイブールを守れなかったという事も、プライドの高い彼にとっては屈辱的なモノ。

そして、ラスリアと一時的な”契約”をしたので……。もしかしたら、今の彼は無敵状態？かもしれませぬ 笑

次回はイブールがさらわれた理由や、竜達が狙っていたあの淡い水色の石について語られると思います。

では、ご意見・ご感想がありましたら、よろしくお願い致します。

### 第31話 漆黒の竜騎士”ダークイブナーレ”（前書き）

<前回までのあらすじ>

イブールと合流するために、天高くそびえる塔を訪れたアレン達。イブールが探索をし、アレン達が彼女の元へ追いつこうとしていた時、ミュルザはヴァリモナルザという女性と会っていた。

しかし、イブールは突如襲い掛かってきた黒い竜の手によってどこかに連れ去られてしまう。

その後、一刻も早くイブールを助けるため、ミュルザがラスリアに「一時的な契約をする」と提案。何とかそれを決意したラスリアは、ミュルザの「一時的な主」となり、力を得た彼は、自身の力でアレン達をイブールの元へと運ぶのであった。

### 第31話 漆黒の竜騎士”ダークイブナール”

ラスリアがミュルザと一時的な“契約”を結んでいた頃

黒い竜によって連れ去られたイブールは、見知らぬ山の中にいた。両腕に手枷をはめられ、魔術を封じられているイブールは、静かに目の前にいる女性をにらみつける。イブールはこのヴァリモナルザと名乗る女性の事を考えながら、口を開く。

「…状況がよく飲み込めてないの。だから、詳しく説明してくれないかしら？」

そう問いかけるイブール。

すると、その目の前にいる女性は口を開く。

「…私の目的は、この石であって、貴女ではないの。この子達には“石を取ってこい”と命じたただけだったんだけど…貴女というオマケがついてしまっただけの事よ」

女性は側にいる黒竜を撫でながら語る。

「…この女が黒竜を操っていたという事は…チェスと同じ、竜騎士…？」

イブールは女性を見つめながら考える。

黒髪・黒い瞳という特徴はラスリアと同じだけど…こいつの場合、瞳がミュルザ（あいつ）みたいで、怖い…

気がつくくと、竜達の側にいた黒髪の女性が、イブールの近くに来る。

「“悪魔の花嫁”…」

「えっ…!？」

女性が突然、呟いた言葉に動揺するイブール。すると、女性は手でイブールの頬に触れる。

「“あの方達”はとても気まぐれだけど…まさか、貴女みたいな女と契約を交わすとはねえ…」

「“あの方達”って…ミュルザ達、悪魔の事？」

何を言っているか、いまいち理解できなかったイブールは、首をか  
しげながらヴァリモナルザに尋ねる。

パン!!!!

その直後、女性は突然イブールの頬をたたく。

あまりに突然の出来事だったため、イブールはその場で固まってし  
まう。

「痛っ……」

「悪魔（あの方）を呼び捨てにしないで!!!!」

気がつく……ヴァリモナルザの表情は眉間にしわが寄り、かなり怒  
っているような表情かおとなっていた。

「もしかして、あんた……悪魔崇拜者か何か？」

イブールの台詞に反応する漆黒の竜騎士。

竜騎士が悪魔を崇拜するなんて事……あつたかしら？

自分で言った台詞とはいえ、イブール本人もその場で一瞬考え込ん  
でしまう。

「……」

ヴァリモナルザが、何かを言おうとしていた時だった。

「やあ、ヴァリ」

ヴァリモナルザの背後から、見知らぬ男性の声が聴こえる。

「……ハデユスカ」

自分の背後にいる事に気がついたヴァリモナルザは、すぐに立ち上  
がって男を睨む。

燃えるような赤い髪の男は、一瞬だけイブールに視線を落としたが、  
すぐにヴァリモナルザの方へ向いて話し始める。

「例のモノは……ちゃんと、手に入れられた？」

「ええ。……これよ」

ヴァリモナルザは、イブールから取り上げた淡い水色の石を男に渡  
す。

「……お疲れ様。あと、残りは3つだね」

「ええ……」

石を手渡したヴァリモナルザは、深刻そうな表情をしながら黙り込む。

「ところで…」

男がイブールの方を向いた時、彼女は身体をビクツとさせる。

このハデユスとかいう男…ヴァリモナルザの仲間みたいだけど、竜騎士ではない…わよね…

男を見上げながら、いろいろと考えるイブール。

「この娘はどうしたの？…竜の餌？」

「…そんな所ね」

「ふーん…」

その後、彼らの間で沈黙が続く。

数分後、最初に口を開いたのがハデユスであった。

「さて、僕はそろそろ行くよ。これから”大仕事“に向かわないといけないから…」

「“大仕事”…？」

その言葉に反応するイブール。

すると、ハデユスの視線がイブールに向く。

「！！？」

顔に軽い痛みを感じたかと思うと…イブールのすぐ真横に、細長い刃があつた。

ポタツとにじみ出た血が地面に落ちると、自分の顔に傷が入った事に気がつく。イブールは恐る恐る視線を上げると　　なんと、その刃はハデユス指から伸びていたモノだったのだ。

「…部外者は、僕らの会話に入ってきたきちゃ駄目だよ」

ハデユスは微笑みながらそう告げると、指から伸びた刃を引っ込め、その場を去っていつてしまふ。

一体…どうなっているのよ…！！？

何がどうなっているのか想像すらできないイブールは、ただ黙り込むしかできなかつた。

「早く…」

ボソツと呟いたまま俯いたイブールからは、強烈な殺気が溢れ始める。

「早く来い・・・我が僕よ...!」

ドサツ

ミュルザが唱えた瞬間移動の魔術によって、イブールがいる山にたどり着いたアレン達。

これが、瞬間移動・・・

本当に一瞬の出来事だったため、アレンは物凄く不思議に感じていた。

そして、着地した後、立ち上がった彼らは辺りを見回す。

「ここに、イブールが...」

辺りを見回した後、最初に口を開いたのはチェスだった。

すると、ミュルザは何か反応したのか、一点を見つめている。

「ミュルザ・・・?」

「・・・どうかしたのか?」

ミュルザの様子に気がついたラスリアとアレンは、彼に声をかける。

「・・・いや。なんでもねえ・・・行くぞ」

低い声で一言呟いたミュルザは、スタスタと歩き出してしまふ。

「・・・どうしたのかしら?」

「ねー・・・」

ミュルザの返答に、首を傾げるラスリアとチェス。

「だが・・・この先に、敵がいるのは間違いなさそうだ。・・・2

人とも、気を引き締めて行くぞ」

そう2人にアレンは告げたものの、彼自身もミュルザの態度には少々気になっていた。

・・・何を感じ取っていたのやら・・・

短いため息をついた後、アレンもミュルザ達について歩いて行く。

「イブール!!」

ラスリアが叫んだかと思うと・・・アレン達の視線の先には、両腕を拘束されたイブールと、黒髪・黒い瞳の女性がいた。

「・・・貴様が、イブールをさらった奴か」

「さらうだなんて・・・。彼女はたまたま、この子達と一緒に来ちゃっただけなんだけどね」

黒髪の女性はイブールの方を見ながら呟く。

「貴様の目的は一体・・・」

アレンがその先を言おうとしたその時だった。

「まさ・・・か・・・」

前に歩き出しながら、チェスが何かを呟いたのだ。

そして、アレン達の前に出ると、黒髪の女性を見つめながら口を開く。

「お姉さん・・・。もしかして、“ダークイブナーレ”・・・?」

「え・・・?」

チェスが述べた台詞を聞いたアレンとラスリアは、何の事か理解ができずに首をかしげる。

「・・・はるか昔、同じ竜騎士共に滅ぼされた、黒い竜の背に乗る竜騎士の事だぜ」

「滅ぼされた・・・」

首をかしげる2人に、後ろからミウルザが助け舟を出してくれた。

ミウルザの方を向いたままでアレンは動かなかったが、“滅ぶ”という言葉に反応していたラスリアは、俯いている。

「・・・という事は、君が・・・“漆黒の悪魔ヴァリモナルザ”・・・なんだね」

せつなそうな表情で話すチェスに大使、ヴァリモナルザという黒髪の竜騎士は、不快そうな表情で、チェスを睨みつける。

「・・・何、その顔。“異端者”扱いをされた私を、哀れんでいるつもり・・・!?」

「いや……。そういうわけでは……」

「じゃあ、なんだっていうのよ!!?」

ヴァリモナルザの物凄い剣幕に、黙り込んでしまうチェス。

「チェス……“異端者”って事はつまり……」

ラスリアがチェスの方を見ると、その視線に彼は答える。

「……以前、里の皆から聞いた事があったんだ。古代大戦の前後に、人々を殺戮して戦争を起こした張本人たちの中に……僕と同じ竜騎士の女性がいる……って話を」

「!!!!!!」

チェスの台詞を聞いたアレンとラスリアは、驚きの余り表情を一変させる。

……そんな話が、ウオトレストの間では広がっていたのか……アレンはヴァリモナルザを見つめながら、ふとそう考えた。

その後、その場にいる全員の間で沈黙が続く。どちらも緊張状態で、いつ戦いが始まってもおかしくない状況だった。

「てめえの事情なんざ知らねえが……。とっとと、そいつを返してもらおうか……!!」

物凄い形相で、ミュルザはヴァリモナルザを睨む。

最初はミュルザの瞳を真っ直ぐに見つめていたヴァリモナルザであったが……小さなため息交じりで、話し出す。

「ええ、貴方様がそれを望むのなら、構いませんよ……。ただし……」

ミュルザの台詞に応えた漆黒の竜騎士は、どこからか黒い槍を出現させる。

「その少年が、私に勝つたら……ですけどね!!」

「えっ……!?!?」

ヴァリモナルザが持つ漆黒の槍の矛先は、チェスに向けられていた。

「つまり……貴様とチェスで、一騎打ちをさせるといふ事か……?」

アレンがそう尋ねると、ヴァリモナルザは黙って頷いた。

「わかっているとは思いますが……。もし、あなた方が邪魔をしたら……。」

「!!!!!!」

気がつく、イブールの周囲に2匹程の黒い竜が待機していた。その瞳は、今にもイブールを食らいそうな眼差しをしている。

「……チエス。お前は大丈夫か？」

“イブールの命はこちらが握っている”と言わんばかりの行動に、アレンは憤りを感じつつも、怒りを押させてチエスに声をかける。チエスも最初は戸惑っていたが、相手が本気だと理解したのか……。矛先にかぶせていた布を外す。布の下に隠れていたのは

藍色で先がかなり尖った、竜騎士が持つ槍の矛先であった。

「彼女を人質になんかしなくても……僕は貴方と一対一で戦うつもりだったから」

「何ですって……？」

イブールを見下ろしながら呟くチエスに、ヴァリモナルザは反応する。

すると、チエスが持つ水色の瞳が、より真剣な目つきになる。そして、その小さな手は、自身の槍を強く握り締めていた。

「例え、同族であろうとも……過去の過ちは、これから生きる僕達が断ち切らねばならない……!!」

「ふふ……ならば、坊やの四肢を引き裂き、その裂き首を水竜の元へ献上してあげるわ……!!」

チエスの覚悟を聞いたヴァリモナルザは、狂気と歓喜の両方を思わせるような表情かおをしながら叫ぶ。

こうして、アレン・ラスリア・イブール・ミュルザら4人が見守る中、チエスは竜騎士ヴァリモナルザとの一騎撃ちを開始するのであった

### 第31話 漆黒の竜騎士”ダークイブナーレ”（後書き）

いかがでしたか。

この回を書くにあたって、いくつか迷う事がありました。

というのも、この『ガジェイレル・Left』はあまり戦闘シーンを長々と書いていなかったため、「この戦いをどうしよう」といろいろ悩んでいたからです。

展開的に、ヴァリモナルザと戦うのは必至ですが、ただ普通に4人で立ち向かうっただけでいいのか否か……。

戦いをどう始めようか悩んだすえ、今回は「同じ竜騎士であるチェスガヴァリモナルザと一騎打ちをする」という展開に決めました。

また、この”ダームイブナーレ編”が終わったら、『Light』

の執筆に入ると思うので、今後もよろしく願いします！！

**第32話 過去の罪をかみしめながら（前書き）**

今回は、始めから終わりまで、全部チエス視点で話が進みます。

### 第32話 過去の罪をかみしめながら

キイン!!!

槍同士が、互いの矛先を突く音が周囲に響き渡る。

「チエス・・・」

チエスとヴァリモナルザによる一騎撃ちを、ラスリア達は静かに見守っていた。

「やあつ!!!」

自分の身の丈程ある槍を突き出すチエス。

「ふふ・・・」

チエスが放つ“突き”を軽々と避けるヴァリモナルザ。

2人が後ろに引き下がった時、見下しているような表情をするヴァリモナルザに対し、チエスは息があがって苦しそうな表情をしていた。

やはり、ヴァリモナルザ（この人）は強い・・・!!

相手を見つめながら、チエスは内心でそう実感していた。

「見たところ貴方・・・。まだ背に乘せる竜がいないんですよ・・・？」

チエスに矛先を向けながら、漆黒の竜騎士は口を開く。

「・・・そうだよ。でも、子供だからって何か問題でもあるというの？」

「ふふ・・・。要は、まだひよつ子のくせに・・・よく一騎撃ちを受ける気になったのね・・・と思って」

小馬鹿にしているような口調にチエスは不快に感じていたが・・・グツと自分の感情を抑えた声で放つ。

「子供だから勝てない”なんて、浅はかな考え方だね”

「なに・・・？」

”浅はか”という台詞に反応するヴァリモナルザ。

「僕は確かに、まだ子供だけど．．．でも、僕がウオトレストの1人である事になんら変わりはない。そして．．．お姉さんと同じ、竜騎士である事も．．．!」

チエスの会話に、ヴァリモナルザは黙り込んでいた。

そして、チエスは考える。なぜ、この女性は黒い竜達を使って、人間たちを襲わせたのか。そして．．．どうして時折、せつなそうな表情かおを見せるのか。

「お姉さんはどうして．．．“8人の異端者”に．．．なったの?」  
いろいろな考えで頭の中がこんがらがるチエスは、ヴァリモナルザを真っ直ぐな瞳で見つめる。

その後、数分ほどの沈黙が続いたが．．．すぐに、ヴァリモナルザの方から口を開いた。

「そう．．．。あなたは、古代大戦が起こる前はまだこの世にいなかったんですものね．．．。ならば、我らイブナーレがどんな目に遭わされたのかも、知らないわよねえ!!?」

黒　否、ヴァリモナルザが持つ漆黒の瞳には殺意がキラキラと輝いていた。

「．．．忘れもしないわ。ウオトレスト(あんたら)や火の“サランドクター”。風の“シルクル”に大地の“ノスガルン”．．．。奴らが、私達“ダークイブナーレ”の里を襲った時の事を．．．!!」

チエスが黙って聴いている中、ヴァリモナルザの話は続く。

「．．．家族も仲間も恋人も．．．あんたらに殺されたわ。私は、パートナーである黒竜と共に、命からがら逃げ出した．．．」

そう語る彼女は、その手に持っている槍を強く握り締めた。

「．．．私の身体は、同胞やあんたらの返り血で汚れていた．．．。そして、絶望に打ちひしがれている所を．．．“あの方”に助けられた．．．」

「“あの方”．．．?」

チエスや、後ろで聞いていたアレン達の表情が険しくなる。

「あの方」は言った……。 “愚かな連中をこの世から消し去り、私と共に誰も傷つかない理想郷を創りあげよう”と……。！！」  
何かにとり憑かれたような表情で話すヴァリモナルザ。

「故に、私も“異端者”となった。だが、後悔などしていない……」  
すると、その視線が急にアレンの方へと向く。

「ウフフ……。あの方と行動を共にした事で……。私の願いは成就されようとしている……。あとは、その坊やが再び、“あの娘”と一つになれば……。！！！」

アレンの方を向いて叫ぶ彼女の表情はもはや正気ではなかった。

その様子を見つめていたチエスは、胸を抉られたように苦しい気持ちになつていた。

この女性を復讐に駆り立てたのは……。紛れもない、僕ら竜騎士……

チエスにとつて、自分が当事者でない事など関係なかった。

ウオトレストの子供の中でも、一つ飛びぬけていたチエスは孤独だった……。水竜のウンディエルにその実力を認められてからは、誰一人としてチエスと行動を共にしようとした少年はいない。唯一、変わらずに接してくれたのが兄のビジョップだけだったのが現状である。

「僕も……。あまり、仲間たちのことを快く思っていなかった……」

下に俯きながら、呟くチエス。

その直後、槍と槍の重なる音が響く。チエスが考え事をしている内に、ヴァリモナルザの方から仕掛けてきたのだ。

「……でも、憎しみに身を任せて殺戮を繰り返したら……。それでこそ、“竜騎士”といえなくなってしまう……。！！！」

敵の攻撃を受けながら、チエスは相手に訴えかける。

「それに……。無関係な人間たちを殺し、世界を滅ぼしてしまう……。それじゃあ、邪神を嫌っていたがために“ダークイブナーレ”」

を滅ぼした・・・僕の先祖たちとなんら変わらない・・・!!!」  
キイイーン!!!

渾身の力を込めて放った攻撃は、ヴァリモナルザの攻めを押し戻した。

思いがけない反撃に、ただ自分の槍を見つめるヴァリモナルザ。そして、自分の身体が地についている事すらも、気がついていなかったようだ。

「正しき心にて槍を放て」・・・」

チエスがヴァリモナルザの方へ歩きながら、ボソツと呟く。

「その言葉は・・・」

「・・・うん。ウンディエル様を含めた、各一族の長達が、僕らに唱えていた言葉だよ」

「・・・」

「古代大戦の時、この志に反してしまった僕らは、もうこれ以上・・・悲劇を起こさないためにも、遙か昔から言い伝えられているこの言葉をつねに口ずさむようにしているんだ。・・・かといって、これで過去の罪が消えるわけじゃないけれど・・・」

そしてこれからも・・・次世代を担う僕らは、この罪を胸にしまっておかなくてはならない

チエスは心の中で、自分にそう言い聞かせていた。

それから数分程、彼らの間に長い沈黙が続いた。

すると、ゆっくりと立ち上がったヴァリモナルザは・・・漆黒の槍を魔術でしまいこんだ。

「え・・・?」

予想だにしていなかった行動に、驚きを隠せないチエス。

「一騎撃ちは・・・もう終わりね」

「えつと・・・?」

状況が上手く飲み込めていなかったチエスは、首をかしげながらヴァリモナルザを見る。

「まだまだ戦えるけど・・・今日はこの辺までにしておいてあげる・

」

「!!!」

その言葉を聞いたチエスは、“もう仲間を解放してあげる”という事を意味しているのに、やっと気がつく。

「おい・・・ちよつと待て!!!」

黒い竜に乗ってどこかに去ろうとするヴァリモナルザに、ミュルザは引き止める。

「てめえ・・・どういつつもりだ？途中で一騎撃ちを止めるたあ・・・

」

疑いの目で漆黒の竜騎士を見るミュルザ。

すると、ため息交じりで彼女は答えた。

「・・・相容れない者同士、これ以上、殺りあっても：時間の無駄つて事ですよ。ミュルザ様・・・」

「あ・・・おい・・・!!」

そう告げた直後・・・ヴァリモナルザは、数匹の竜を引き連れて、どこか遠くへと飛んでいってしまった。

「・・・ふー・・・」

ヴァリモナルザがいなくなったのを確認したチエスは・・・その場に座り込んでしまう。

「チエス・・・!!」

そんなチエスに、ラスリアが真っ先に駆けつけてくれた。

「・・・ご苦労様。チエス・・・」

優しい口調でそう言ってくれたラスリアは、治癒魔法で少しずつチエスの傷を治し始める。

「ありがとう、ラスリア・・・」

そう呟くチエスの後ろでは、ミュルザが腕を拘束されたイブールを助けていた。

「思えば、僕たちも・・・それぞれ、違う人種の集まりなんだよね・・・」

チエスはアレンやイブール、そしてミュルザを見つめながら呟いた。  
「8人の異端者」達は、人々を傷つけるといふ道を選んでしまっ  
たけれど……。例え異なる人種であろうとも……。心の持ち様で  
仲良くなれるのもありかなって気がするんだ……」

「……そうね」

チエスは見えていなかったが、この時ラスリアは少し複雑そうな表  
情おもをしていた。

こうして、何とかイブールを救出できたアレン達。しかし、「8  
人の異端者」達の暗躍が続き、世界が滅ぼされようとする日が近づ  
きつつある……。という現状は、少しも変わっていないのであった

### 第32話 過去の罪をかみしめながら（後書き）

いかがでしたか。

今回は、チエスとヴァリモナルザの一騎撃ちがメインだったので、少し本文が短かったかもしれないです。

また、「当事者でなくても、自分たちが犯した罪を忘れてはいけません」そんな想いをこめて今回は執筆しました。

ただ、竜騎士にしる人間にしる、他人に対して不安や恐怖を覚えてしまうのは、ありがちな事なのかもしれないです。

そんな感情が、今日でも戦争とか巻き起こしているわけだし・・・

・・・と、あまり暗い話になるとあれなので、ここまで！

次回から新章突入となりますが・・・『Right』の執筆もあるので、多少日にちが空くかもしれませんが、ご了承ください。

それでは、引き続きご意見・ご感想、そして作品への質問などがありましたら、よろしく願います（^^）

### 第33話 世界が変わる様（前書き）

今回は、半分以上はアレンの視点ですが、後半の少しをラスリア視点で描きました。

### 第33話 世界が変わる様

“キタモラフ石” 古代種“キロ”が創ったとされる水晶のような石。

“レジエンディラス”と“アビスウオクテラ”の双方の世界に2つずつ存在していたその石は、“星”と呼ぶこの世界を、他の世界から分離する結界の役割を担っている。

この世に“神”という存在はあるものの、それは「自分が最も至高の存在である」という歪んだ概念を持つ生命体を指す。故に、その“神”や“神”が従えし“天使”なる者たちの侵略を避けるため、キロはこの石を創ったのであった。

この石については、どの世界の文献にも載っておらず、知る者もほとんどいない。知っているのは、石を創った古代種“キロ”。そして、キタモラフ石の“守り手”を担ってきた強い魔力を持つ一族

“デステイニーレ族”のみである。

「あの石・・・なんだったのかしら・・・？」

事の発端は、イブールが呟いた一言だった。

チエスがヴァリモナルザと一騎打ちをし、イブールを助けた後・・・アレン達は自分たちのいた山を下山し、山の麓で野宿をしていた。

「あの石・・・って？」

イブールの側でチエスが尋ねる。

俺たちがあの場所に到達するまでの間・・・イブールは何を見たんだろう？

イブールとチエスを見つめながら、アレンはふと疑問に思う。

「貴方たちがあの場所にたどり着く前・・・私はヴァリモナルザと会話をしていたの・・・そうしたら、彼女の仲間らしき男が現れて・・・」

「・・・その男性は、何をするために・・・？」

ラスリアがと問いかけると、イブールは首を横に振る。

「・・・わからない。ただ、私があたの塔で見つけた・・・水色で水晶のような石をヴァリモナルザから受け取り、その場を後にしてしまったかんじなの」

「水晶つて・・・それを連中に奪われたって事か？」

「ええ」

普段は他人ひとの話に関心を持たないミュルザが、珍しく食いついてくる。

「話を聞いている限りだと・・・」

そこにアレンが割って入ってくる。

「イブールが見つつけ、奪われたその石・・・。奴らにとって、何か大切な物だろうな」

「そうね・・・」

アレンの意見に、イブールを始めとする全員が同意した。

その後、話題は黒竜を見かけた塔のような遺跡へと変わる。

「ところで、イブール・・・あたの塔で一体、何を調べていたの？」

「ええ・・・」

相槌を打ったイブールは、一枚の地図を取り出す。

「私の目的はね、あの高くそびえる塔の屋上から、今の世界を見渡そうということだったの」

「・・・それで、結果はどうだったの？」

世界地図を物珍しそうに見つめながら、チエスが問いかける。

すると、イブールは一息ついてから口を開く。

「・・・案の定、すごいことになっていたわ」

「“すごいこと”・・・？」

「例えば・・・この地図上にある砂時計みたいな形をした半島！これは跡形もなくなっていたし・・・。あと、地図上だと・・・ここね！」

そう言い切ると、イブールは地図上に描かれているルカ諸島を指差す。

「チエスを除く私達は、港町キャップから船に乗ったわよね？・・・

あの港町があった大陸の先端辺りに、地割れが起きていたの……。  
そこまで見て、確信したわ」

「……だな。姐さんの見たものが本当なら……。やはり、2つの世界は1つに戻ったわけだ」

「……地割れや島などの消失……」

イブールやミュルザが話す側で、ポツリとつぶやくラスリア。

「つまり……。2つの世界が1つに融合された反動か何かで、地割れやあるはずのない島の出現・消失が起きている……。って事？」

「ラスリア……。どうかしたか？」

不可思議そうな表情<sup>かお</sup>で話すラスリアを見たアレンは、不意に尋ねる。

「……。わからない。でも、なんだか……。その“反動”ともいえる現象を……。どこかで見たような気がするんだけど……」

「……。頭の中がこんがらがっているな、ラスリアちゃん」

「ええ……。何か見たような、見てないような……。？記憶が曖昧なのよね……」

ラスリアは何かを思い出そうとしていたようだったが、それは無理だと理解したのか、思い出すことをすぐにやめた。

彼女の心の中を何となく読み取っていたミュルザも、視線を元の方  
向に戻す。

「そういえば……。今、俺達のいるこの場所って……。世界地図のどの辺りに位置するんだ？」

「え……」

アレンの一言に、全員が言葉を詰まらせる。

「イブールの証言通りだと、例の塔は学術都市アテレステンの近く  
のようだが……。俺達の場合、ミュルザの魔法でここまで移動し  
てきたから……。どうなんだろうか？」

アレンは思ったことを口に出す。

……。そして、その内に“向こうの世界”にいた連中と、誰かし  
ら接触する事になりそうだな……

アレンは世界地図を見つめながら、一人考え事をしていた。

「・・・とりあえず、夜が明けたら動き出そうよ。偵察だったら、僕がミュルザが行けそうだしね！」

沈黙が続く中、最初に言葉を発したのはチェスだった。

「あん？俺様はともかく、ガキンちよに偵察なんてできるのか？・・・まだ、竜を持っていないのに・・・」

途中言いかけていたミュルザに、イブールが彼の足を思いつきり踏んづける。

「痛つてえ！！イブール姐さん、何するんだよ・・・！？」

「・・・空気読みなさいつての！」

イブールは、痛がるミュルザの耳元で囁く。

無意識の内に、アレンとラスリアの視線はチェスに向いていた。

・・・たく、ミュルザの阿呆が・・・

「竜を持っていない」

ヴァリモナルザとの決闘を

終えたチェスにとつて、この言葉は禁句の他ならない。竜騎士は相棒とも言える竜を得る事で一人前となるわけで、ただ槍が使えるだけではまだ半人前。それは、アレンですらわかる事だったのだ。

ミュルザの何気ない一言に、複雑そうな表情かおをするものの・・・チェスはすぐに笑顔に戻って言う。

「動物に意識を移す術を使えば・・・僕だって、偵察くらいお手の物だもんね！」

軽く威張っているような口調で言うチェスの表情は、少し無理をしているようにも見える。

「・・・そうね！とにかく、明日に備えて今日は寝ましょう！私達とはともかく・・・チェスやイブールは疲れているでしょうし・・・」  
状況を察したのか、ラスリアはなだめるようにして皆に声をかけていた。

「・・・そうだな。俺が火の番をするから・・・お前ら、早く寝ろ」  
アレンもチェス達にそう告げる。

そして、翌朝

チエスは戦いで疲れている・・・ということ、ミュルザを偵察に行かせた。

「・・・それにしても、ラスリアがミュルザ（あいつ）と一時的な契約を結んでいたとはねえ・・・」

話は、イブールを助けに行く前、ラスリアがミュルザと交わした一時的な“契約”の内容になっていた。

「なんか、手間かけさせちゃってごめんなさいね・・・。ミュルザ（あいつ）に何かされなかった・・・？」

「いや・・・特に大したことは・・・」

疑問をぶつけられたラスリアは、ミュルザとのキスの事を思い出していたのか、頬を赤らめていた。

「ふーん・・・」

「え・・・？」

すると、イブールは聞き出すの諦めたのか、違う方向を向いてしまふ。

それが予想外だったのか、呆気に取られたような表情をするラスリア。

「まあ、あなたのその表情おもを見れば、何となく想像がつくわね・・・

」

「・・・」

そう呟くイブールの側で、アレンとチエスは複雑な表情をしながら見つめていた。

「おーい！！！」

すると、頭上からミュルザの声が聞こえる。

空から偵察をしていたミュルザは、地上に降り立ち、黒い翼を魔術でしまいこんだ。

「で？どうだった・・・？」

イブールが彼に声をかけると、ミュルザは不意にラスリアの方を見つめる。

「ラスリアちゃん・・・何で顔真っ赤にしてるんだい？」

そう尋ねるミュルザはニヤニヤしていた。  
当然のように、ラスリアは黙り続ける。

「・・・この野郎、わかっていて訊きやがったな・・・  
相手の心を読むミュルザは、やはり根っからの悪魔だなとアレンは感じていた。

「そうそう！この先に、村があつたぜ！！そこにいる人間は・・・  
、どうやらレジエンディラス（こつち）の人間共みたいだな！」  
「なるほど・・・。じゃあ、僕達が怪しまれる心配は少なそう・・・  
か」

「因みに・・・その村、何て名前なの？」  
ラスリアの問いかけにより、全員の視線が彼女に移る。

ラスリアは、未だ頬を赤らめつつも、何かを感じたのか、そう口にしたようだった。

「確か・・・村人が、“スト”とかいう名前を口走ってたな」  
「！！！！！」

その名前を聞いたアレンとラスリアは表情を一変させる。  
しかし、何の事だかわからないイブルとチエスは彼らを見つめていた。

「ここが、あの“スト”の周辺・・・」  
「・・・まさか、またあの村の近くを訪れるようになるとは・・・」  
「  
アレンはポツリと呟く。

ストという村が何かをミュルザは察したのか、黙ったままだった。  
「アレン・・・その村に、何かあるの？それとも、一度行った事のある場所・・・？」

疑問を感じたイブルが、アレンに対して問いかける。

「俺が旅の途中で立ち寄った村だ・・・そして、ラスリアのふるさと・・・」

「そう・・・」  
ストという村がどんな村で、アレンはそこで“星降り”を初めて目

にした事をイブールやチエスに話す。

すると、ラスリアがスタスタと歩き始めた。

「ラスリア・・・？」

「・・・ここが、あの村の近くなら、大体わかるかも・・・！」

「ラスリア！？」

ラスリアが何かを呟いたかと思うと、突然走り出したのだ。

そんな彼女を彼らは追いかける。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

全速力で走るラスリア。

それを、アレン達は追いかけていた。

何だろう・・・さつきから、ひどい胸騒ぎがする・・・！！！！

そう思いながら走り続けるラスリアの脈は、どんどん激しく鼓動している。

山を降りたとはいえ、地面は草木で覆われた森。足場も決して良いものではなく、何も考えずに走るラスリアのバランスを何度か落としかけた。

「あ・・・！」

森の中を走って行く内に、見覚えのある景色にたどり着く。

ラスリアの目に入ってきたのは・・・少し前まで、自分が暮らしていた故郷。ストの村の概観だった。

「ラスリアちゃん！」

気がつくと、彼女の後ろにはミュルザがいた。

そして、その後を続くようにアレン・イブール・チエスの3人が追いつく。

「ラスリア・・・突然走り出して、一体どうしたんだ？」

息切れをしながら、アレンが彼女に問いかける。

「何か・・・嫌な胸騒ぎがしたの」

「でも、魔物の襲撃を受けたかんじでもなさそうだし・・・至って普通の村つばいよ?」

「でも・・・」

・・・なんだろう・・・この、言葉で言い表せないような感覚・・・

チエスの発言を返す事のできなかったラスリア。

少しの間だけ、彼らの間で沈黙が続く。

「・・・おそらく、“キロ”としての第六感が何かかもしれないわね。・・・念のため、用心しながら村へ入りましょ!」

「え・・・入るのか!?」

イプールの提案に驚くミュルザ。

「・・・?どうかした?」

「いや・・・そうだな。まずは村人共から情報を集めるのが先決・・・って事だろ?」

「そういう事!それに・・・」  
「気まずそうな表情かおをしているミュルザの事はお構いなしに、イプー  
ルはラスリアを見つめる。

「久しぶりの故郷なんですよ?・・・せつかくだから、家族とかに挨拶でもしたら?」

「イプー!・・・」

ミュルザがなぜ、驚いていたのかはわからなかったが、ラスリアはイプールの気遣いにいくらか安堵した。

「じゃあ、早速行ってみよう!・・・運良ければ、ラスリアの家で泊まれるかもしれないしね!」

チエスは上機嫌で歩き始める。

久々の故郷・・・か

ラスリアは懐かしく思う一方で、胸騒ぎが止まらない自分がある事に、まだ不安を覚えていた。

「・・・ラスリアちゃん!!?」

山間にある村・ストを訪れたラスリア達が最初に会ったのは・・・  
何度か世話になっていたアミおばさんだった。

「お久しぶりです！アミおばさん！！」

まるでわが子が帰ってきたような表情で、ラスリアを抱きしめるアミ。

その後、彼女はアレン達を見つめる。

「この方々は・・・？」

「ええ。私と一緒に旅をしている仲間たちです！」

「あらあら・・・こんな美女・美男子の皆さんとねえ・・・」

「あら！お世辞が上手なんですわね！」

ラスリアとアミの会話に、イブールがニコニコしながらしゃしゃり出てくる。

・・・イブールって、こんなおばさんみたいな態度も取るんだ・・・

アミと和気藹々に話すイブールを見て、ラスリアは内心想った。

「と、ところで・・・」

背後から殺気のようなものを感じ取っていたラスリアは、焦り顔で話を切り出す。

「シシュ姉さんは・・・今、家にいるかなあ？」

「えっ！！？」

ラスリアの台詞を聞いたアミは、身体を硬直させる。

「アミおばさん・・・？」

黙り込んでしまうアミの顔を覗き込むラスリア。

すると、我に返ったアミは、ラスリアの方を見て口を開く。

「実は・・・」

アミおばさんと別れたアレン達は、ラスリアの姉シシュが住む家に向かう。

「ラスリアにそっくりな少女・・・かあ」

歩きながら、チェスがポツリと呟く。

アミおばさんの話だと、シシユも夫のグスタフも、変わらず元気との事だった。ただ、つい先日、シシユがラスリアにそっくりな少女が行き倒れているのを目撃する。最初はラスリアだと勘違いして介抱をしていたが、その少女は明らかにラスリアではなく・・・しかも聞いたことのない言葉を話すため、会話もなかなかできなくて困惑している・・・との事だった。

「ねえ、ミュルザ」

「ん・・・？」

ラスリアは下を向いたまま、ミュルザに話しかける。

「貴方がストに入りたがらなかったのって・・・こういう事？」

「まあ・・・な。おそらく、お前の姉ちゃんの所にいる小娘っていうのは・・・“向こうの世界”の奴だろうな。“言葉が通じない”とか言っていたし・・・」

「シシユ姉さん・・・大丈夫かな？」

おそらく、私そっくりの少女を見つけた時・・・物凄く不安な想いをしたんだろうな・・・。いくら偶然とはいえ、何だか申し訳ない気分・・・

ラスリアは、歩きながら先ほど感じた“胸騒ぎ”の正体がこれ・・・だったのではと思い始める。

そして、ラスリアの姉シシユが経営する果物屋へと近づいていくアレン達であった。

### 第33話 世界が変わる様（後書き）

いかがでしたか。

今回は、彼らの住む世界”レジエンディラス”の地形の話が出ましたね。

ここで出ていた世界地図。ネームとかでしっかり作成はしていませんが、おおよそ当てはまるようには考えています。

でも、”もう一つの世界”であるアビスウオクテラ（『ガジエイレル・Right』の世界）と一つになった事で、いろんな事が起きています・・・って事について詳しく書いてみました。

近い内にちゃんとまとめようと思ってますが・・・例えば、アレン達が最初に向かっていた”未開の地”。あそこは、世界地図ではど真ん中にある大陸にあるのですが・・・”アビスウオクテラ”ではその場所、セリエル（『Rught』の主人公）が暮らしていたギルガメシュ連邦がある・・・といった具合に考えています。

他にも、ちゃんと当てはめてますが・・・書くとき長くなるので、今回は割愛させていただきます。

さて、次回はラスリアにそっくりな少女と対面する事になるのですが・・・。

この少女の存在は、アレン達の旅路にどんな影響を与えるのか！？  
お楽しみに

第34話 ラスリアと瓜二つの少女(前書き)

今回はラスリア チェスの視点で進みます。

### 第34話 ラスリアと瓜二つの少女

「いらつしゃい！」

ラスリアの実家に到着し、最初に迎えてくれたのは彼女の姉の夫グスタフだった。

「久しぶりね、グスタフ！」

「もしかして……ラスリア!?!？」

果物屋の店番をしていたグスタフは、義妹の帰還に驚きつつも、嬉しさを滲ませた表情かおをする。

「あ……君は、あの時の……?」

グスタフは、ラスリアの後ろにいたアレンに気がついたようだが、アレン自身は何も口に出さず黙っていた。

アレン……グスタフみたいなタイプの男性むね、苦手なんだろうなあ……

ラスリアは内心でそう考えていた。

「はじめまして！私はこの子と旅をしている、イブール・エンヴィイという者です」

「僕は、チエス・アングル・ウオトレスト」

「ミュルザ・プライドルだ！」

ラスリアが紹介するまでもなく、仲間たちは自己紹介を始めた。彼らの自己紹介を聞いていたグスタフは、物珍しいような表情かおをする。

「結構、面白そうな人達と旅をしているんだなあ……。あ！そういうえば、今日はどういった用件で来たんだい？」

「あ……」

その台詞を聞いたラスリアは、気まずそうな表情かおをする。グスタフによって周囲の空気が変わったが、当の本人は全く気がついていない。

「あ……さ、グスタフ……。シシュ姉さん、いる……?」

そう尋ねるが、どんな返答が来るのかは、ラスリアもアレン達もわかっていた。

「もちろん、いるよ！ただ・・・」

「ラスリア・・・本当に、あなたなの・・・？」

「久しぶりね・・・シシュ姉さん・・・！！」

久しぶりの再会に、ラスリアは姉に抱きつく。

久々の、この暖かくて心地よい感覚・・・。「帰ってきた」って実感するなあ・・・

姉の胸の中で、ラスリアはそんな事を考えていた。

「あら！アレンさん・・・だったかしら？・・・いつも、妹がお世話になっていきます」

「あ・・・ああ・・・」

アレンの存在に気がついたシシュは、満面の笑みで彼に挨拶をする。しかし、アレンは先ほどのグスタフの時とは打って変わって、少し呆気にとられたような表情で受け答えしていた。

・・・会うの久しぶりだし、いろいろ話したい事もあるけど・・・。やっぱり、先に本題を放した方がいいかな・・・

実の姉妹ではないとはいえ、旅に出てから全く会っていなかった家族に、話したい事は積もるようにあるラスリア。しかし、自分だけならまだしも・・・アレンやイブル達もいるという事実が、ラスリアを現実に戻す。

つばをゴクリと飲み込んだ後、ラスリアは口を開く。

「姉さん・・・。アミおばさんから聞いたんだけど・・・」

途中まで言いかけたラスリアの表情を見たシシュは、妹が何を言いたいのかすぐに察したのか、閉じていた口を開く。

「・・・ごめんね、ラスリア。あの娘は・・・貴方が以前使っていた部屋にいるわ」

その後、アレン達はラスリアの部屋の前に立つ。そして、シシユが部屋のドアを開けた。

「・・・入るわ」

そう呟いた後、ラスリアの部屋のドアが開かれる。

「!!!!」

部屋の中に入ったアレン達の表情が一変する。

小さな部屋の隅にあるベッドの中、上半身だけ起き上がっていたのは・・・黒髪・黒い瞳で、来ている服が違うというだけで、本当にラスリアそっくりの少女がそこにいた。

本当に、瓜二つだなあ・・・

チエスは内心でそう考えていた。

チエスだけでなく、アレンやラスリア達も、感心しているような表情でこの少女を見つめていた。

しかし、当の本人は何が起きているのかわからず、不安そうな表情かおでチエス達を見つめる。

「WHO・・・？」

自分たちを見たこの少女が、何かをボソツと呟いた。

「この嬢ちゃん・・・何か呟いたみたいだが、どうやら俺達見て不安になつてるみたいだぜ？」

その呟きに気がついたのは、ミュルザだった。

しかし、心の中を読めても、この少女が口にした言葉の意味を理解できないミュルザは、上っ面でした心情を読み取る事ができないようだ。

「ラスリア・・・この女性むすめ、何て言っているかわかる・・・？」

チエスは、自分の隣にいたラスリアに問いかける。

そして、自分たちに「誰？」と問いかけっていると、ラスリアは説明してくれた。しかし、アレンやイブール、そしてシシユはこの状況に驚いていた。

「ラスリア・・・お前、この女の言っている言葉がわかるのか・・・」

？」

「・・・それに、チエス。貴方、ラスリアが今の言葉を理解できると知っていたの？」

アレンの問いに対し、ラスリアは複雑そうな表情で頷く。

そして、チエスも黙ったまま頷いた後、口を開いた。

「・・・イブールと合流する前、僕とラスリアは世界統合によって現れた村で、ちよつとね・・・」

「・・・なるほど。アビスウオクテラ（あつち）の人間に会ったって事か・・・」

チエスの答えを壁際で聞いていたミュルザは、納得したような表情かおでベッドにいる少女を見つめていた。

“アレンを保護するために訪れた”・・・という言葉までは、言わなくてもいいかな・・・

実際、“もう1つの世界”の人間と会ったのは、アレンを保護するために向かった村での出来事。しかし、あえてその言葉を本人の前で言わないようにしようと考えていたチエスであった。

「U・・・」

ラスリアが、聞きなれない言葉で、自分と瓜二つの少女に話しかけていた。

その話し方は、聞いていてたどたどしい発音ではあったものの・・・この“もう一つの世界の住人”の表情を見るからに、ちゃんと理解してもらっているようだった。

ラスリアとその少女の声が部屋の中で続く。チエス達は、その様子を黙って見守っていた。

それから数分後

聞いた話を頭の中で整理し終えたラスリアが、仲間たちの方を向いて話し出す。

「聞いた話をまとめると・・・この子、シアっていうの。彼女は世界が統合するまで、ギルガメシュ連邦・・・とかいう国で、歌を歌う仕事をしていたんですって。それで、いろいろあって・・・今

は“キタモラフ石”という石を探しているんだとか」

「“キタモラフ石”・・・!?!」

シアが口にしてきた石の名前を聞き、それに反応したのはイブールだった。

すると、ラスリアは何かを尋ねるような口調で、シアに話しかける。それにしても、このシアって子・・・。声までもがラスリアそっくりだから、何だか双子のようにも見えるな・・・

チエスはこの2人のやり取りを見ていて、内心でフツと思った。

「えっと・・・なんでも、その石は彼女の先祖が代々“守護”していたとかいう石ですって」

「その石の形状・・・例えば、色とかは!?!?」

ラスリアが同時通訳した言葉に食いつくイブール。

イブール・・・もしかして・・・?

チエスがイブールを見つめていると、その後ろでチエスが「俺も同じこと考えていた」と言いそうな表情をしていた。

そして、同時通訳をするラスリアの視線は、いつの間にかイブールに向いている。

「淡い水色で・・・水晶みたいな形をした石・・・だそうよ」

「!?!?!」

その場にいる全員の表情が一変する。

でも・・・イブールがその石の形状を知りたがった時点で、皆気がついていたのである・・・

チエスは内心でそう考える。

このシアの話によって、イブールが塔のような遺跡で発見し、後に奪われた石が、その“キタモラフ石”だと判明したのであった。

「それにしても・・・その石の守護って事は・・・“守り人”をやっていたんだよね?普通の人間にできる事ではなさそうな気が・・・

」

「・・・確かに。いろいろ話してくれるのはいいが・・・お前、何者だ・・・?」

チエスが呟き、アレンがシアの顔を上から見下ろしながら尋ねる。最初は怯えているような表情を見せていたシアだったが・・・アレンに見つめられた途端、食い入るように、彼を見つめ返す。

「・・・？」

上目使いで長時間見上げられて、アレンは変な気分になっていた。すると、不思議に感じたラスリアが「どうしたの？」と問いかけているような口調で、彼女に尋ねる。しかし、当の本人は黙り込んでしまった。

フーツと深いため息をついたラスリアは、皆の方を向いて話し出す。「これ以上訊くと・・・逆に、警戒心を強めてしまうかもしれないわ。その石の事・・・私から彼女に、もう少し訊いて見る事にするだから・・・」  
口を動かしながら、ラスリアは姉の方を見る。

「あら！もちろん、ここは貴方の家でもあるし・・・ちよつと狭いけど、皆で泊まる分には全然大歓迎よ！」

「ありがとう、姉さん・・・」

ウィンクしながら答えるシシュに、ラスリアは安堵の表情かおを見せる。そして、アレン達はラスリアの家で1泊する事となる。ラスリアが自分たちの事を話したせいか・・・シアも疑いの目をあまり向けなくなり、穏やかになっていた。

その後、ラスリアはシアからちよくちよく話を聞き、それをアレン達に伝える事で次の目的地が、“キタモラフ石”があるとされる渓谷と決まったのであった。

それにしても・・・シアはアレンを見つめていた・・・あれって、何を意味するのかなあ・・・？

チエスは、夜空に輝く星を見ながらボンヤリ考え事をする。

こうして、チエスはシアが何者で・・・なぜ、ストの村の近くで行き倒れていたのかを考えながら、静かに瞳を閉じたのであった

### 第34話 ラスリアと瓜二つの少女（後書き）

いかがでしたか。

今回は”ラスリアと瓜二つ”である少女シアが初登場しました。

ちなみに、この少女は『ガジェイル・Right』にも登場しています。

これまでは『Left』のキャラが『Right』に登場・・・つて感じでしたが、今後はその逆が増えるかもしれませんね。

今回は、その”キタモラフ石”を探す所から始まる感じかな？

それにしても、ラスリアは久々の里帰りだったのに・・・シアの登場によって、一番ゆっくりできない人物になってしまいましたね（苦笑）

それでは、引き続きご意見・ご感想などをお待ちしています

第35話 石を求めて（前書き）

今回はずっとトラスリア視線です。

### 第35話 石を求めて

イブールがああ塔で見つけたもの……あれが、“キタモラフ石”だったとはね……

翌日、ストの村を出発したアレン達は、ラスリアと瓜二つな少女・シアと共にその石があるとされる溪谷を登り始める。足元を気にしながら歩くラスリアは、そんな事を考えていた。

「神とやらの侵略から星を守る”か……”」

「その石が4つ存在するのは……四方に配置し、結界の力を強めるためなんだろうね……！」

シアから聞いた“キタモラフ石”について、イブールとチェスが歩きながら語り合う。

場所が場所なだけに、ミュルザに頼んで偵察に行ってきたらという手段もあったが……霧が濃くて視界が悪いため、結局は彼も飛ばないで進んでいる。

アレンとミュルザは、ただ黙り込んだままチェスとイブールの会話に聴き入っていた。

「ねえ、シア」

「……なんですか？ラスリア……」

ラスリアは先頭を歩いているシアに声をかける。

「貴女は、その石を見つけたら、どうするつもりなの……？」  
ラスリアの問いかけで俯いてしまうシア。

あ……。ちょっと馴れ馴れしかった……かな？

地面を見ながら黙り込んでしまったシアを見て、ラスリアは少し申し訳ない気持ちになっていた。

「どうする……って事はないです。ただ……“無事”かどうかを確認したいだけで……」

「“無事”……？」

ただとどしい口調で話すシアの回答に、首をかしげるラスリア。

「・・・昨夜、皆さんにも申し上げましたが・・・あの石がこの世界に存在することで、“神”の侵略を防いでいる。すなわち・・・あの石が破壊されれば、この世界は滅びの道を辿る事となるのです」  
「もし、4つのキタモラフ石が破壊されてしまったら・・・世界はどうなってしまうの？」

ラスリアは、恐る恐る感じた疑問をシアに問いかける。  
すると、彼女は深刻そうな表情で口を開く。

「神々とて、この大地そのものは破壊しないと思う・・・。ただ、神を崇拜しない私達人間は、確実に滅ぼされる・・・」

「そんな・・・」

もし・・・本当の方が一、その石が破壊された上にウンディエル様がおっしゃっていた“ファイナルウエボン最終兵器”が“星の意思”によって発動してしまつたら・・・!!

ラスリアはこの時、最悪の事態が起きた時の事を一瞬考えてしまう。

いや・・・。そんな事、何が何でもあつてはいけないことだわ・・・!

そう強く願いながら、ラスリアは自分の拳を強く握り締める。

「・・・時にラスリア」

「えっ・・・？」

不意に正面から見つめられたラスリアは、心臓が少し跳ねた。

すると、シアは自分たちの後ろを歩いているアレンに視線を向けて、重たくなつた口を開く。

「あの銀髪の方・・・。アレンさん・・・でしたっけ？」

「ええ。・・・アレンが何か？」

「・・・彼の左目下にある痣・・・。もしかして、生まれつき持っているものなのデハ？」

「!!!」

突然、アレンの痣の事を尋ねられたラスリアはその場に立ち止まる。何があつたのかとイブールやチェスがラスリアに話しかける中、ミユルザだけが黙ってラスリア達を見つめていた。

「なぜ・・・それを・・・？」

ラスリアの心臓は、強く脈を打っている。

「昨日出会ったばかりの少女が、なぜアレンの痣について尋ねるのか」という疑問が浮かべる。それと同時に、ラスリアは少しだけシアに対して不信感を募らせる。

「・・・世界が一つになる前・・・私はとある場所で、彼そっくりの女性と会った」

何か気がついたのか、複雑な表情かおで語り始めるシア。

「もしかして・・・“セリエル”っていう名前・・・？」

そう問いかけるラスリアに、シアは深いため息をつく。

「・・・名前まではわからない。ただ、そのときに会ったあの女性も、アレン（かれ）と同じような形をした痣を持っていた・・・私の知る限りだと、彼は“世界の心”ガシエイレルよネ・・・？」

ラスリアはこの時、なぜシアはここまで知っているのが疑問でたまらなかった。

「確かに、嬢ちゃんの考えている通りだが・・・なぜ、そんなことまで知っている？アレン（あいつ）については、“星の意思”や“キロ”くらいしか知りえぬ情報だが・・・」

そんな疑問を代わりにぶつけてくれたのが、ミュルザだった。ミュルザはおそらく、言葉の意味はわからなくても、心の中を読み取る事でシアが何を話しているのか読み取っていたのだろう。

彼の発言により、その場にいる全員が黙り始める。しかし、ミュルザの話す言葉を理解できないシアは、すがりつくような表情でラスリアを見つめる。

「ラスリア・・・彼はなんて・・・？」

「あ、えっと・・・。なんで貴女が、“世界の心”ガシエイレルの事を・・・知っているのかって・・・」

「！！！！」

“世界の心”ガシエイレルに反応するアレン。

周囲が緊迫とした状況に陥る。

「シアちゃん……。貴女つてもしや……。『デステイニーレ族』  
なのでは……。?」

「エ……。!?!?」

腕を組みながら話すイブールに全員の視線が集まる。

シアも言葉の意味はわからなくても、「デステイニーレ族」という  
単語を聞き取れていたのか、わずかに反応する。

「イブール……。『デステイニーレ族』って……。何?」

不思議そうな表情かおをしながら、チェスがイブールに尋ねた。

「……。昨夜、貴女が『キタモラフ石を守る一族』……。って聞いて  
ピンと来たの。大学で少し学んだ程度の知識だけど……」

そう呟くイブールの台詞を、ラスリアがシアに同時通訳をする。

「……。貴女がおっしゃる通り……。私は古代種『キロ』と人間の  
血を引く『デステイニーレ族』の人間……。でス」

ラスリアが通訳をしてから数秒ほど、シアは黙っていたが……。真  
つ直ぐにイブール達を見つめて答えた。

このかんじ……。『あまり自分の種族こくを教えたくなかった』みた  
いな口調……

この時、シアを見てラスリアは心の底からそう思った。

それはアレン達に出会うまで、彼女もシアと同じような立場だった  
からである。

それから数時間の間、彼らは渓谷の頂上を目指して登り続けた。  
足場が悪いため、一歩間違えればあの世行きとなる可能性が高い。  
それによって、全員が用心して進む。最も、空を飛べるミュルザだ  
けはあまり用心していなかったが……

「はぁ……。やっと、頂上に到着……。だね」

何とか登りつめた彼らの息があがっていた。

「ここに、『キタモラフ石』があるんだな……。?」

アレンの呟きに、シアは黙って頷く。

「あ……!!」

「どうしたの？イブール……」

何かに気がついたような口ぶりで、その場に固まるイブール。

突然立ち止まった彼女に、チエスが声をかける。すると、深刻そうな表情で口を開く。

「いろんな事があつて、すっかり忘れていた！私からキタモラフ石を奪ったあの女……」。“8人の異端者”だったのよね……！」

「……だったな。それがどうかしたのか？」

「あ……!!!?」

イブールとアレンの2人が会話している中、チエスの表情が深刻になつていく。

「チエス……!!!?」

みるみると表情が青ざめて行くチエスに、不安を感じるラスリア。

「シア……あなたも、大丈夫……!!!?」

気がつくのと、自分の側にいたシアの表情も青ざめていた。

そして、2人は苦しいようにうつむく。

「……こりゃあ、悪魔おれらにしてみても不快な波長……。だが、一体誰が……!!!?」

ミュルザも、顔色は悪くなつていないものの、右手で耳を半分塞いでいた。

ミュルザが敵の正体をわからないって事は……。また吸血鬼の時みたいに、心を読めない相手……!!!?

チエスやシア。そしてミュルザと違い、アレン・ラスリア・イブールの3人は特に何も起こっていない。ラスリアの頭の中には、「なぜ、自分たちだけ」という考えがよぎる。

「んもうー。観客ギヤラリーが少ないって、つまらないわねえ……」

「!!!?」

前方から、見知らぬ女性のような声が聞こえる。

「誰……!!!?」

声に気がついたイブールとアレンは、すぐに身構える。

しかし、渓谷の頂上は霧に覆われていたため、すぐにその人物を見る事ができなかった。

「それにしても、あたし一人でこんな場所におつかいだなんて・・・。ミトセも人使い荒いんだから・・・。」

そうつぶやきながら、霧の中から出てきたのは・・・紅い髪を持ち、女性のような化粧をした男性だった。

「え・・・!!?」

その人物が視界に入った途端　一瞬だけ、ラスリアの脳内にビジョンのようなモノが浮かんだ。

「ラスリア・・・大丈夫か？」

その後、アレンの呼びかけでラスリアは我に返る。

今のかんじは・・・一体・・・

ビジョンが何を示しているのかは理解できなかったが、この目の前にいる人物を見た事によって起きたのは確かであった。

「・・・コルテラ・・・やはり、貴方だったのネ!!!」

苦しそうな表情で俯いていたシアが、鋭い眼差しで紅い髪の男を睨む。

「シア・・・貴方、この人を知っているの・・・!!?」

シアの台詞に驚いたラスリアは、固まった表情のまま彼女に問いかける。

すると、このコルテラという男は、シアの存在に気がついたのか、しかめっ面をする。

「あらあら・・・こんな所にいたのね？ “裏切り者” のシアちゃん！」

「んなつ!!?」

不気味な声色で話すこの男に、アレンやイブールも驚く。

「あ・・・キタモラフ石”!!!」

コルテラの右手に光っている石がキタモラフ石だと気がついたイブールが、大声を張り上げる。

すると、コルテラの視線がイブールやアレン達に映る。

「ふーん・・・悪魔にその飼い主に、レジェンディラスの“世界の心”<sup>ガジエイレル</sup>・・・それに、あの時の小娘までいるのねえ・・・」

「あの時」・・・？」

コルテラの台詞を聞いたラスリアは、何のことかわからず首を傾げる。

すると、この男は何かを思い出したような表情をして口を開く。

「ああ・・・今のはなしね！こっちの話だから！！」

「・・・？」

コルテラの表情が少しだけ慌てている雰囲気になっていたので、ラスリアはますます不思議な気分になっていた。

「コルテラ・・・貴方、その石をどうするつもりなの！！？」

物凄い剣幕で声を張り上げるシアに、周囲の空気が緊迫としたモノに変化する。

すると、数秒間ほど黙り込んだ後に、コルテラは口を開く。

「どうするっ たってねえ・・・。あたしら“8人の異端者”がこの石を回収している」って言えばわかるかしら？」

「！！？」

その台詞を聞いたラスリア達の表情が一変する。

「・・・って事は、てめえも“異端者”の一人ってわけだな・・・。ミュルザがニヤニヤした表情で呟いたが、その瞳は笑っていなかった。

「でも・・・あなたからは、普通の人間みたいな感覚がする・・・。しかも、これって・・・」

そう呟くチェスの視線は、いつの間にかシアに向いていた。

「・・・？“8人の異端者”って、皆が異民族なんじゃないのか？」

不思議に感じていたアレンが、チェスに尋ねるが答えられる雰囲気ではない。

「ウフフフフ・・・」

「何が可笑しいの・・・!?!」

不気味に笑うコルテラに、いらつきを見せるシア。  
すると、愉快そうな表情で口を開く。

「ええ。ウォトレストの坊やは勘が鋭いわねー・・・って感心して  
いたの!」

「・・・どういう意味だ」

今の口ぶりで不快な気分になったのか、アレンも鋭い眼差しでコル  
テラを睨み付ける。

「・・・坊やのご想像通りよ。あたしとそこにいるシアって小娘は、  
同じ種族なのよ。ついでに言うと、あたしたち“8人の異端者”を  
復活する手助けをしていたのも、この女よ」

「なっ・・・!?!?」

ラスリア達の視線は、一気にシアへ向けられる。

彼らの視線を浴びていたシアは、気まずい表情かおとなり・・・その様  
子を、コルテラはニヤニヤしながら見つめていたのであった

### 第35話 石を求めて（後書き）

毎度、ご一読ありがとうございます。

今回は久しぶりに登場人物一人だけの視点で話が進みました。

なぜ、ラスリア視点だったのかというと・・・前回から登場したシアの話す言葉を唯一解釈のできる人物だから・・・です。

彼女の視点で描いていたから、シアも物語上では普通に話しているように見えるよう執筆しました。

ただ、現実的な話をいうと、シアの台詞の裏でラスリアが同時通訳している・・・みたいなかんじ（笑）

・・・そうになると、この章が終わるまで他の人物で話進められないかも・・・？

まあ、その辺りはちゃんと調整するつもりです！

今回はコルテラが最後に言っていた台詞の意味がちゃんとわかるようになっていきます。ただし、その前に『ガジエイレル - Right』の”歌姫”というタイトルがついた話を先に読むと、話がよくわかるかもしれませぬ

それでは、引き続きご意見・ご感想をお待ちしてます

第36話 けじめをつけるために(前書き)

今回はラスリア イブール アレンの視点で話が進みます。

### 第36話 けじめをつけるために

「復活の・・・手助け・・・!!!?」

コルテラが述べた台詞が、アレン達全員を不安に誘う。

しかし、そんな彼らに構うことなく、コルテラは話を続ける。

「・・・まあ、最終的にあの檻から出られたのは・・・世界統合によつて起きた衝撃のエネルギーなんでしょうけど・・・」  
彼は呟くようにして語った。

「シア・・・あのコルテラっていう男性ひとが言っていること、本当なの？」

ラスリアは口を動かしながら、シアの方を見る。

しかし、自分と瓜二つの顔であるシアに疑いの眼差しを向けるのは、ラスリア自身あまり好まなかった。

まるで・・・鏡の中にいる自分を見ているようだわ

ラスリアは内心でそんなことを考えていた。

「この女が何をしでかしたのかは知らないが・・・とにかく、その石を俺たちに渡せ」

そう口走りながら、コルテラに剣を向けるアレン。

「アレン・・・」

迷いのない眼差しで敵を睨むアレンを見たラスリア達は、目を覚ましたような気分になる。

「確かに・・・今は彼女の詮索よりも、その石を手に入れる事の方が先よね！」

「・・・だな。それに、てめえをボコボコにしてから口割らせるのもありだしな！」

気がつくくと、イブールやミルザが身構えていた。

独り気まずそうな表情かおのまま、シアは黙り続ける。そんな彼女に、なんて声をかけてあげればいいのか迷うラスリア。一瞬考えた後、ラ

スリアはシアの肩に手を乗せて口を開く。

「シア……。どうしても言いたくなければ、無理に訊くつもりはないわ。とにかく、今は戦闘の邪魔にならないよう、後ろへ……」  
「ラスリア……」

そう言つて、シアを避難させようとするラスリア。

ラスリアは、戦闘に突入すれば自分が一番足手まといになることをわかっていた。故に、自然とシアを連れてその場を離れるという行動に移せたのだろう。アレン達やコルテラとの間で、緊迫として空気が広がる。少しでも動けば、戦が開始されるかのように。

「……むかつく」

「……？」

緊迫した雰囲気が続く中、コルテラはボソツと何か呟いていた。

しかし、あまりに小さな声だったため、ラスリア達は何て言ったのかが理解できない。

「あたしが、“あの人”と組んだことで、デステイニーレ族は忌み嫌われるようになったというのに……。何なのよ、この状態……！」

最初の台詞よりも大きな声で、コルテラは話す。

その口調には、わずかに苛立っているのが感じられた。

「どついう……。意味……？」

敵の言う台詞の意味をよく理解できなかったチエスが、恐る恐る尋ねる。

この男性おとこは一体、何を考えているの……？

ラスリアも不思議でたまらなかった。しかし、そんな悠長に考え事をする暇は、すぐになくなってしまふ。

「シア……。危ない……！」

シアの立つ地面が急に光り始めたのに気がついたラスリアは、彼女を庇うかのように突き飛ばす。

ズバツ

その直後、地面から飛び出した光のようなモノが、ラスリアの右腕

を貫通する。

「っ……!!!!?」

ほんの一瞬の出来事だったのに、感じたことのない痛みを感じ始める。

その直後、膝を曲げたラスリアは腕を押さえながら地面に座り込む。

「ラスリア!!!」

気がつくのと、ラスリアの側にアレンが寄ってきていた。

「ラスリア!!!大丈夫か……!!!?!」

「う……うん。……なんとか……」

非常時にこういう考えは不謹慎かもしれないけど……

普段は冷静沈着なアレンが、こういう時に冷静さを忘れて自分を心配してくれているような物言いに、ラスリアは少しばかりか安堵感を得ていた。しかし、だからと言って、腕の痛みが消えるわけではない。

「ラスリアさん……。ごめんなさい……。私なんかのため……  
……!!」

横から涙目になったシアがいた。

ラスリアは何か言葉を返そうとした、怪我による出血で意識が朦朧とし始めていた。

「……」

「ラスリア……?」

アレンが心配する中、ラスリアは黒い瞳を閉じて黙り込む。

すると、ラスリアの腕から光が発し、その光は怪我をした右腕に乗り移って行く。その様子をアレンやシア。チエス達だけでなく、敵であるはずのコルテラも黙って見つめていた。

そして、時間が経過するにつれ、彼女が負わされた傷が癒えていく。「治癒……魔法……!!!?!」

シアが初めて見たような表情で驚いていた。

しかし、その後すぐに納得したのか……。拳を強く握り締め、立ち上がる。

「ラスリア」

「え・・・？」

頭上からシアの声が聴こえる。

・・・あれ・・・？

下から見上げているためにはつきりとはわからないが、シアの表情かおが違つような感覚を、ラスリアは持った。

「さがっててください。彼は・・・私が倒します」

「！！？」

その台詞を聞いたアレン達は、全員が表情を変える。

「シア・・・？」

「彼・・・は、私と同じ一族・・・過去に犯した罪は、自分たちで清算しなくてはならナイ。・・・ダカラ・・・！！！！」

そう語るシアの表情は、真剣そのものだった。

「・・・援護するわ」

敵の前に立ちふさがったシアを見たイブールは、伝わらないのはわかっていても、彼女を援護しようと、横に立った。

「TH・・・」

当然、シアが何を言っているのか理解はできなかったが・・・表情から、「ありがとう」と小さな声で呟いたように見えた。

「・・・そういえば、あんたの本気を今まで見た事ないのよねえ・・・シア」

視線の先にいる“魔術師コルテラ”は、不気味な笑みを浮かべながら呟いてる。

しかし、口を動かしながらも、魔術の詠唱は止まっていなかった。

彼の周囲から、かまいたちのようなモノが発生し、こちらへ飛んでくる。

「W F H F ! ! ! ! !」

「 ! ! ! ! !」

それに対し、たった一言を発しただけなのに、シアとイブールの周囲に結界が出現する。

詠唱時間が短ければ短いほど、凄腕の魔術師だつて言われているけど……。この娘、できるわね……!

瞬時に魔法を発動させたシアを見て、イブールは内心想った。

しかし、対するコルテラも、詠唱の短さと術発動の早さがずば抜けているのがよくわかる。徐々に強まる攻撃に、イブールも援護を加える。敵は、かまいたちに限らず、灼熱の炎や氷、強風を撃つてくる。

「ミュルザ…… “命令” よ!!! ラスリア達を安全な場所へ連れて行って……! ! ! ! !」

「はいよ!」

この戦闘で、後方にいるラスリア達に危害が及ぶ可能性を考えたイブールは、ミュルザに彼らを安全な場所へ連れて行くよう命令した。そして、ミュルザ達の姿が見えなくなっていく。

「さて……これで、思う存分に暴れられるわね……!」

イブールは、コルテラの攻撃を防ぎながら叫ぶ。

「あつはつは!!! シアならともかく……あんたみたいな雑魚魔術師が、あたしと対等に殺れるとも思つて……?」

「……五月蠅いわねえ。このオカマ野郎が」

今の台詞が気に障ったイブールは、鋭い眼差しでコルテラを睨み付ける。

「最も……シアと力を合わせた所で、一族で忌み嫌われるほど強かったあたしに勝てるはずなんて、ないけどね……! ! !」

「……」

コルテラの台詞に、シアは魔術を防ぎながら黙り込んでいた。

「……それにしても、あんたら普通の人間つて弱いものよねえー

! ! !」

「なんですって・・・？」

「だって、そうじゃない！・・・独りじゃ何もできないから、群れる！そして、群れから少しでも外れた奴には容赦がない・・・！！」  
狂気じみた表情で叫ぶコルテラ。

その後、彼の視線はシアに移る。

「シア・・・。あたしの子孫であるあんただって同じ・・・！あの連邦に家族を人質に取られなければ、“8人の異端者”あたしたち復活の手伝いだってさせられる事なかったでしょうにねえ・・・！！」

「ちよつと、あんた・・・！」

イブールが言い返そうとした途端、シアが彼女の肩を掴む。

「シア・・・！？」

イブールの肩を掴んでいたシアは、彼女をなだめようとしているようにも見えた。

「Shout up!!!」

シアが、物凄い形相で声を張り上げる。

言葉の意味はわからなくても、イブールは相手を黙らせようとしていたような気がしていた。実際、それが正しい解釈なのかはわからないようだが・・・。

その後、双方は互角の戦いを繰り広げる。しかし、2：1で戦って5分5分のため、隙を見せた方が負ける。逆に、隙について魔術を封じる事ができれば、イブール達の勝利となる。

一瞬・・・一瞬でいいから、奴に隙ができれば・・・！！！！

イブールは攻防をしながら、反撃のチャンスをうかがっていた。

「おい・・・ミウルザ！！！！」

イブールがミウルザに“命令”した事で、アレン達は敵から少し離れた場所に移動していた。

アレンは、自分たちを運んだミウルザの胸ぐらを掴む。

「おい・・・貴様、“命令”とはいえ“主”を見捨てるとは・・・それでも悪魔か！！？」

ひょうひょうとした雰囲気を出しているミュルザに、アレンは苛立ちを隠せなかった。

「アレン・・・ミュルザも！少し落ち着いてよ・・・！」  
視線の下からチエスの声が聞こえていた。

「・・・てめえら人間の理屈で、語っているんじゃないよ」  
ミュルザが鋭い眼差しでアレンを睨む。

その勢いに押されたアレンは、ミュルザから手を離す。

「アレン・・・。私が思うに、シアははじめをつけたいて考えているんじゃないかな？」

「はじめ・・・？」

冷静さを取り戻したアレンの側で、ラスリアが口を開く。

「あのコルテラって男性ひと、シアと同じ民族なんですよ？・・・イブールも、何となくそれを理解して、援護に回ったんだと思うわ」

「ラスリア・・・」

彼女の台詞を聞いたアレンは、その場で考え込む。

イブールもあの女も・・・体力の限界だつてある。いつまでも魔術を唱え続けられるわけでもないだろうな

その時、アレンは敵の隙をつく方法を思いついた。

「・・・とにかく、俺はあの場所に戻る。だから、ラスリアはミュルザ（あいつ）とここで待っていてくれ」

「ああん？てめえ、俺様に指図するつもりか？」

アレンの台詞を聞いたミュルザが、嫌かあそうな表情をする。

「・・・別に。ただ、あいつらの援護へ行くのに、これが最善の策と判断しただけだ」

「・・・相変わらず、すました野郎だぜ」

ミュルザは相変わらず嫌かあそうな表情をしていたが、どうやら納得はしてくれたようだった。

「さて・・・。行くぞ、チエス」

「う……うん……！」

アレンはチェスに声をかけ、彼らはイブールやシアが戦っている場  
所に戻り始める。

### 第36話 けじめをつけるために（後書き）

いかがでしたか。

読んでいて気がついた方もいるかもしれませんが、シアが口走っている言葉は英語。

アルファベットを適当に並べただけの所もありますが・・・「Sh out up」は「黙れ」という意味です。とりあえず、ちゃんとした文法で台詞も入れないとは思って・・・

英語がもつと堪能だったら、いろんな文を載せられたのになと思います（汗）

次回で、魔術師コルテラとの戦いが終わりを迎えます。

シアはサブキャラの一人のため、この章が終わればアレン達と別れることになります。しかし、「8人の異端者”復活に関与する人物”としてキーパソンであったのは確かですね。

シアは、『ガジエイレル・Riight』にも出ていたし・・・

それでは、最近仕事が忙しくて更新頻度が減りつつありますが、今後もよろしくお願いします！

作品に対するご意見・ご感想・質問等もどしどし受け付けていますので、是非是非

第37話 予備に過ぎない(前書き)

今回はイブール アレンの視線で進みます。

### 第37話 予備に過ぎない

アレンとチエスが、戦いの場所へ戻ろうとしていた一方

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

“8人の異端者”の一人・コルテラと戦っていたイブールとシアは、息切れを起こしていた。

コルテラ（あいつ）も、あたしたちと同じくらい長い時間魔法を使用しているのに・・・疲れた表情かお一つとして見せないなんて・・・！！

例え優れた魔術師であろうとも、長時間呪文の詠唱や発動を繰り返していれば疲労も増すはず。しかし、何事もなかったかのような表情かおをする敵に、イブールは信じられない気持ちでいっぱいであった。

「ねえ、もうこれで終わりなのー？」

視線の先には、不満そうな表情で呟くコルテラの姿が。

「あんたがそのキラモラフ石を渡してくれれば・・・終わるわよ・・・？」

「うーん・・・。でも、そういうわけにもいかないのよねー・・・」

淡い水色の石を眺めながら、コルテラは答える。

「だって、最終兵器を発動させたとしても・・・“星の意思”葉残る。完全なる“破滅”を望むあたしたちとしては、神様とやらにも頼らなきゃ・・・ですもんね」

「やっぱり、“8人の異端者”あんなたちの目的は・・・世界の滅亡なのね」  
イブールとシアは深刻な表情をしながら、コルテラの話聞いていた。

「まあね・・・！でも・・・」

「でも・・・？」

「あたしとしては、自分の一族さえ滅べば後はどうでもいいんだけ

どね」

「っ……!!!?」

コルテラが一瞬見せた憎悪に満ちている表情かお  
シアが、恐怖の余りに身震いをする。

それを見た

しかし、イブールは全くひるむことはなかった。それは、負の感情に包まれたものに何度も遭遇し、自身の中にも“憎悪”という感情が眠っているからである。

「……」

イブールはその隙に、魔術の詠唱を再開する。

バン!!!

詠唱開始が敵より早かったにも関わらず、イブールが放った光の矢はコルテラの結界で弾かれてしまう。

「W F E R E ……」

「……!!!?」

イブールの攻撃を弾いた後、コルテラが詠唱を始めると、シアの表情が一変する。

「きゃあああっ!!!?」

イブールとシアの頭上に、赤い光が弾ける。

悲鳴と共に、地面に倒れる2人。イブールは起き上がった後、自分の身に何が起きたのかを確認しようとする。しかし、確実に赤い光が当たっているのに、どこにも痛みや傷はない。

どういう事……!!!?

そう疑問に感じたイブールだったが、すぐに自分の身に何が起きたのかを知る。

「さっきのは……魔封じの術……!!!?」

そう呟きながら、イブールはコルテラを睨みつける。

声は出るものの、魔術を発動できない感覚に陥ったイブールとシア。  
「……そう。いくらあたしでも、あんまり長引くと疲れちゃうしね……」

「えっ……!!!?」

気がつくくと、地面から伸びた紐のような物が2人を捕らえていた。  
「・・・なにこれ・・・!？」

縄のように硬いそれが絡みつき、全く身動きが取れない。

何かに気がついたのか、イブールがバツと顔を上げると、目の前にいたコルテラが右手を前に出していた。

「あんたらを確実に始末するために、使用したのよ。・・・これだけの至近距離で炎を出せば・・・跡形もなくなる・・・わよね？」  
「!!!」

その右手が、詠唱の構えであることに気がついたイブールは、必死で絡みついた紐を引きちぎろうともがき始める。

しかし、魔術を封じられた今、力だけでは外せないくらいきつく引き締めるその物体。コルテラの表情は狂気に満ちていた。コルテラ（かれ）が、イブールとシアを見逃してくれることはまずありえない。

「ここまでね・・・!!!」

コルテラの右手から炎が現れ始め、イブールは死を覚悟したそのときであった。

ズバツ

イブールとシアは、何かによって斬られる音が聞こえたことに気がつく。

「あ・・・」

その直後、彼女たちの視界に入ってきたのは・・・厳しい表情をしたアレンだった。

そして、その後方には槍を構えたチェスの姿も・・・

「油断・・・したわね・・・」

コルテラは、口から血を流しながら呟く。

「まさか・・・あたしたちに利用される“鍵”に・・・やられるとは・・・ね・・・」

「・・・」

風でなびく銀色の髪。

右手に血のついた剣を持ったその男性は、紛れもないアレンだった。一言たりとも発せずただ黙り込んでいた彼は、コルテラが地面に倒れた直後、剣を鞘にしまう。

「……大丈夫か？」

アレンはイブール達を見つめながら、手を差し伸べてくれた。

「え……ええ……」

イブールはその手を取る。

しかし、敵とはいえ人間一人斬って顔色を変えないアレンに対し、

イブールは少し不安な気持ちを味わっていた。

「フフ……フ……」

「……!!」

イブールとシアがその場を立ち上がった後、地面に倒れていたコルテラからうめき声のようなものが聴こえる。

「……まだ生きていたか……!」

「……Wait!」

アレンが再び剣を抜こうとした瞬間、それをシアが制止する。

「……」

この時、シアが発した台詞の意味は、何となく理解できた。

古代種キ口の血を引いていようと、所詮は人間……。これだけ深く斬られれば、助からないわね

イブールは虫の息となっているコルテラを見下ろしながら、不意にそう考える。

「あなたたち……この石を探しているようだけど……所詮……それは無駄な足掻きにしか……ならない……」

「えっ……!？」

細い声で呟くコルテラの台詞に、その場にいる全員表情が一変する。

「石は……あくま……でも……“予備”……。あとは……」

・そこにいる“世界の（ガジェイレル）心”さえ・・・こちらに・・・落ち・・・れ・・・ば・・・」

「貴様・・・それは、一体どういう意味だ!!!?」

“世界の（ガジェイレル）心”という言葉に反応したアレンが、コルテラの服の裾を掴み上げる。

「・・・」

しかし、コルテラは一言も口を開かない。

それ所か、力が抜けたかのように、首がダランと下がってしまう。

「・・・死んだみたい・・・ね」

イブールは自分の首元に触れながら呟く。

コルテラにかけられた魔封じの術が解けたのを、実感できたからであった。裾から手を離れたアレンは、コルテラの懐からキタモラフ石を取り出す。その顔には、僅かであるが返り血がこびりついていた。

「石を手に入れたし・・・ひとまず、ラスリア達のいる場所に戻る」

「あー・・・面倒くさいから、私がミュルザを呼ぶわ!・・・シアちゃんも、疲れているでしょうし・・・」

「・・・そっか!それもそうだね」

イブールの提案に、チェスやアレンも同意する。

・・・今は、余計な事考えないようにしよう・・・

イブールがこんな提案をしたのは、今のような考えが頭に浮かんでいたからであった。

「良かった!皆、無事だったのね・・・!」

イブールがミュルザを呼び出し、悪魔に抱きかかえられた状態でラスリアが現れる。

彼女を地面に降ろした時、ミュルザの視線が一瞬だけ自分の方に向

く。

何か、気に障る表情かおだな・・・

視線が自分に向けられた時、アレンは少し不快な気分になっていた。一方で、ただミュルザがラスリアを連れてきただけなのに、彼女に触れている事に対して嫌な気分になっっている自分が不思議でたまらなかつた。

その後、ラスリアがシアと話し合い、手に入れたキタモラフ石はとりあえず自分たちが持つ事に決定した。

「とりあえず、ラスリアちゃんの故郷に戻るとして・・・この女、どうする？」

話し合いがまとまった頃、ミュルザがシアを指差しながら口を開く。

「・・・私家で匿う分には大丈夫だけど・・・」

「駄目だ」

ラスリアの提案を、即刻却下するアレン。

「アレン・・・どうして？」

そして、口を曲げた後、アレンは話し出す。

「この女・・・シアは、連中に狙われた身だ。今回はたまたま居場所を知られてなかつたから、良かったが・・・あのコルテラ以外の奴が襲ってきたら、どうする？お前だって、義姉や村の人間が虐殺されるのは見たくないだろ・・・？」

アレンが一気に話したため、その場にいる全員が呆気にとられていた。

「・・・？俺、何か変な事を言ったか・・・？」

皆が黙り込んでしまったため、複雑な気分になるアレン。

「プツ・・・ブハハハハハハ！！！！」

「！！！！？」

突然、ミュルザが大声を上げて笑い出す。

「な・・・何が可笑しい！！！！？」

ミュルザだけでなく、チエスやイプールまで笑い出したため、頬を

少し赤らめながらアレンは叫ぶ。

そんな彼らの横で、シアが苦笑いをしていた。

「いや・・・悪い。あまりに珍しいものを見たんで・・・つい・・・！」

まだ収まっていないのか、笑いをこらえながらミュルザは答える。

すると、ラスリアがアレンの手を両手で握る。

「ラスリア・・・？」

「・・・ありがとう、アレン。姉や、村の皆の心配をしてくれて・・・」

そう言いながら見せるラスリアの笑顔に、アレンは何て言えばよいかわからなくなる。

「ただ・・・いつもは静かなあなたが、あんなに早口でベラベラ話すなんて・・・ぶふっ」

「・・・うるさい」

・・・「笑顔が可愛い」なんて思った俺が馬鹿だったようだな・・・  
こらえきれなくなつて笑い出したラスリアを見て、アレンはふとそんな事を考えていた。

その後、シアをどうするかはストの村に戻つてから決めることにした。村へ戻る道中、ラスリアに同時通訳をしてもらいながら、「復活の手助け」に関する詳細を訊きだした。

「つまり・・・“8人の異端者”達を閉じ込めていた特殊な檻の強度を・・・歌を歌う”という行為で弱め、出やすいように動いていた・・・という事ね」

「・・・みたいだね。それにしても、家族を人質に取るなんて・・・なんて卑怯な連中・・・！」

シアから話を聞いたイブールとチェスが、各々の感想を述べていた。

「・・・？」

「・・・私を責めないのですか？」だって・・・」

ラスリアの同時通訳を聞いて、少しの間だけ沈黙が続く。

「・・・俺が思うに・・・」

口を開いたアレンはラスリアに通訳するよう、アイコンタクトを送る。

「奴らがそんな事を命じさせたのは、あくまで“世界の心”<sup>おれ</sup>という存在あつての、“予備”の行動だった。・・・俺さえ存在しなければ、そんな目に遭わなかっただろう・・・。だから、お前を責めるつもりはない・・・」

アレンは少しうつむきながら話す。

それに・・・「ラスリアに似ている」からか・・・少し調子が狂うな

ため息をつきながら、そんな事を考えていると

「・・・Thank you」

この時、何を言っているのか理解はできなかったが、表情を見て何が言いたいのかなんとなく理解できた。その表情は、まさにラスリアそっくりの笑顔。その顔色からは感謝の気持ちが見て取れたからだ。

「自分に“心”なんてあるはずない」。・・・そう思っていたが・・・まんざら、そういう訳でもないのかも・・・

アレンは心の中でそんな事を考えながら、歩き出して行く。

### 第37話 予備に過ぎない（後書き）

いかがでしたか。

この回でやっと、”シア編”終了といったかんじです。

次回から新章に突入しますが、現在構成は考え中。

クライマックスは考えてあるのですがね（苦笑）

スランプに陥らないよう、少しずつ執筆していきたいと思いますので、今後もよろしくお願いいたします。

### 第38話 2世界の学者達（前書き）

<前回までのあらすじ>

”8人の異端者”の一人、魔術師コルテラとの戦闘に入り、苦戦するイブールとシア。アレンやチエスの助太刀もあつて何とか勝利するが、死に際にコルテラは謎の台詞を述べたのであつた。

戦いを終えて、無事に”キタモラフ石”を手に入れたアレン達は、ひとますストの村へ戻ることになったのであつた。

### 第38話 2世界の学者達

2つの世界が統合し、ようやく両世界の人々はその事実を認識する事に成功した。しかし、安らぎが訪れる事はない。復活した“8人の異端者”が世界各地で「宣戦布告」を開始。それによつて、力のない小国はことごとく滅ぼされてしまったからであつた

「・・・ねえ。何か、変な服来た連中がうるついでいるわ」

キタモラフ石のあつた溪谷からストの村に戻つてきたアレン達。

しかし、村の雰囲気が先日よりも一変し、しかも見慣れない服装を着た男達がうるついでている。その状態を最初に見つけたのが、イブールだつた。

変な服ね・・・でも、一見したかんじだと・・・兵士・・・みたいなかんじかしら？

村の入り口近くにある林に隠れながら、イブールは見知らぬ人間たちを観察していた。

「シア!!!？」

その時、すぐ隣でラスリアの声が聞こえる。

気がつくと、自分たちの後ろにいたシアが、小走りで走り出したのだ。

「おい・・・!!！」

「ちよつ・・・!!!？」

単独行動に出たシアを止めようとアレンとイブールが声を張り上げたが、時既に遅く・・・入り口付近にいた変わった服装をした男達は、シアの存在に気がつく。

「・・・!!！」

「・・・!!!？」

何か話しているようだったが、意味がわからない以上、内容を理解

する事はできない。

あれ・・・？でも、ああやって話している・・・って事・・・は・・・？

「・・・どうやら、“あつちの世界”の奴らみたいだな。透視みている限り、味方のようだけ」

イブールがふと考えていた疑問に答えるかのように、ミュルザが口を開く。

その後、シアやラスリアの誘導で、イブール達は「ある人物達」がいるという宿屋へ向かう事になる。

「シアの説明によると・・・彼らは、彼女が住んでいる国の人達で・・・どうやら、私達を探していた・・・みたい」

「なに・・・！？」  
複雑かおそうな表情をしながら説明するラスリアに、アレンの表情が曇る。

「“僕らを探していた”って・・・。“向こうの世界”の人間たちが、なぜ・・・？」

「・・・わからない。ただ、この先にある宿屋にそれを説明してくれる人がいるから・・・って、あの変な服装の人が・・・」

チエスの質問にラスリアが答えた後、少しの間だけ、彼らの周囲に沈黙が続く。

「・・・」

シアは、イブール達が話す言葉は理解できなくても、雰囲気きふくを察知したのかラスリアの方を向いて口を開く。

「・・・私達がこれから会う人達は、学者で常識のある人ばかりだから・・・揉め事にはならないと思う」・・・だって

シアの台詞を同時通訳したラスリアの声を聞いた後、彼らは内心で少し安心したようであった。

・・・でも、考えてみたらおかしいわよね。彼らはレジエンディラスの人間が話す言葉をわからないはずなのに・・・なぜ、普通に

村に滞在しているのかしら・・・？

揉め事もなく、当たり前のようにいる彼らに、イブールは疑問を感じていた。

そして、宿屋に到着した彼らは、宿の扉をノックしてから扉を開く。

「おかみさん、こんにちは！」

「あら、ラスリアちゃん！」

扉を開けて、最初に視界に入ってきたのが宿屋の女将だった。

顔見知りであるラスリアは、そんな女将に挨拶をする。

「あ・・・2階の部屋に・・・」

「うん、ありがとう！・・・行きましょ！」

「・・・ああ」

「そうね」

女将の口調で何が言いたいのか察したラスリアは、イブール達に声をかけてから宿屋の階段を上り始める。

階段を上っている間、皆が緊張していたのか、誰一人として口を開かなかつた。

コンコン

「どうぞ」

・・・あれ？

シアが扉をノックすると、扉越しに男性らしき声が聞こえる。

しかし、その声はたった一言であってもレジエンディラス（この世界）の人間の台詞こゝば。

しかも、この声

イブールが声の主について考えていると、何も知らないシアが部屋の扉を開く。

「・・・イブール君！！？」

「ロレリア教授・・・！！？」

部屋を開け、最初に視界に入ってきたのは・・・イブールが通うコ

ミューニ大学に在籍する大学教授

ロレリアだった。

「え……？あ、うん……。私達は、以前にこの人にお会いしたことあるの……」

呆気にとられているシアにラスリアは説明していたが、イブールはその台詞など耳に入っていないかった。

「なぜ、教授がここに……！？それに、彼らは……」

「……ああ。再会を喜びたいところだが、事情を説明するのが先決のようじゃな……」

「……だが、なぜ奴らがこの村に平然といられるのかは理解できなかった」

「ええつと……事情が全く飲み込めていないのは、僕だけ……？」

イブールやロレリア教授、そしてアレンが口々に話す中、ただ一人事情がよくわからないチエスが複雑そうな表情かおをする。

「まあ、あのおっさんに会っていないのはガキンちよだけだからな。だから、ちゃんと説明してもらおうぜ……俺らを探していた理由も含めて……な」

チエスの頭をポンポン叩きながら、ミュルザが口を開く。

彼の台詞の後半が、かなり低く聴こえたせい、イブールは心臓が少しはねた。

ロレリア教授と再会したアレン達は、腰を下ろして彼の話を聞き始める。ロレリア教授は、2人ほどの学者らしき人物を連れていた。

「おそらく、あの2人がシアと同じ”向こうの世界の人”みたいね。

ラスリアは、教授の隣に座っている2人の学者を見ながらふとそんな事を考えていた。

「そこにいるウオトレストの少年ははじめましてだと思うので、彼らも含めて、自己紹介をしよう。私は学術都市アテレステンにあるコミュニ二大学の考古学教授、ロレリア・ガナフナッセラ。そして・・・」

途中言いかけた教授はその場で立ち上がり、自分の横に座っている2人の人物を紹介する。

「わたしの隣にるのが、”ガシエルアカデミー”・・・要は、アビスウオクテラの学者組織と言ったところかな？そこに在籍しているジェンド・クリオネム博士。そして、その隣が同じく、“ガシエルアカデミー”に所属する星命学者、トキヤ・フラトネス博士だ」

「・・・イブール・エンヴィです。よろしくお願い致します」

ロレリア教授が彼らの紹介をした後、イブールから順にラスリア達も挨拶してきた。

「はじめまして。ラスリアと申します」

「・・・いやあ、本当に君はシアちゃんにそっくりだね！」

ラスリアがトキヤ博士に挨拶をしたとき、彼は陽気な口調で話した。相手はラスリアが何を話しているのか知らないというのを前提で話しているようだが、5人の中で唯一、アビスウオクテラの人々が話す言語を理解できるラスリアには、筒抜けだった。

「・・・なんか、このトキヤ博士に似た人物に、以前会ったことがあるような・・・？」

ラスリアは、挨拶をしながら頭の中にモヤがかかっているような状態に疑問を感じていた。

「では、本題へ入る前に・・・君たちは、我々が生まれ育ったレジエンディラスと、“もう一つの世界”であるアビスウオクテラは1つになった・・・という事実を飲み込んでいると思って、話を進めてもいいね・・・？」

「・・・ああ」

ロレリア教授の問いに、アレンが静かに頷いた。

すると、つばをゴクリと飲んでから、教授は口を開く。

「世界が統合した後・・・私個人でもいろんな出来事があったのだが、幾日か過ぎたくらいに彼ら“ガシエルアカデミー”の人たちと出会った。・・・伊達に考古学の教授をやってはいないが、偶然にも彼らの話す言葉を理解できた私は自分の身分と状態について話した」

すると、教授の隣にいたジエンド・・・という博士が口を開く。

「我々は、彼がレジエンデイラスでも考古学や星命学に詳しい人物だとわかり、今後の対策についての助言ももらってイタノじゃ・・・」

「そして、我々が持つ“8人の異端者”の情報と・・・彼の知識を借りることで、君たちが探していた“キタモラフ石”と、“世界の心”<sup>ガシエレル</sup>の存在までたどり着いたんだ」

ジエンド博士の隣で、トキヤ博士が真剣な表情<sup>かお</sup>で話す。

「んー・・・じゃあ、結局の所、僕らに何をしてほしいの？」

食い入るような表情で、ジエンド博士たちを見つめるチエス。

そんなチエスを見た彼らは、竜騎士ウオトレストを見るのが初めてだからなのか、目を丸くしていた。しかし、それをごまかすかのような咳払いをした後、立ち上がりジエンド博士とトキヤ博士がラスリアたちに向かって深いお辞儀をする。

「え・・・？」

いきなり頭を下げた2人を見て、ラスリア達は困惑する。

「ぶしつけなお願いだが・・・君たちに、“8人の異端者”討伐の手助けをしてもらいたイ・・・！我々はそれを頼みたくて、この村を訪れたのだ」

「ちよっ・・・」

「頼む・・・この通りダ・・・！」

ジエンド博士とトキヤ博士が、今にも土下座しそうな勢いで頭を下げている。

状況をいくらか察していたロレリア教授は、ラスリア達に低い声で耳打ちする。

「実は……ここにいるトキヤ博士のご子息が、先日“8人の異端者”の一人に殺されたらしい……。私は彼の話を聞いて、協力を決めたが……。私からも、よろしく頼む……。！」

「教授……。！頭を上げてください……。！」  
博士たちのみならず、教授も頭を下げたため、イブールは困惑した表情を見せる。

……。何だか、心臓にズキツとくる……。なんだろう、この気持ちは……

ラスリアは彼らを見つめながらふとそう思っていた。

その後、彼らの間で沈黙が続く。イブールやチェス達もどう返答すべきか迷って、考え込んでしまう。

「……。一応訊いておくが、なぜ俺たちなんだ？」

最初に沈黙を破ったのは、普段は黙っていることの多いアレンだった。

その後、気まずそうな表情をしたものの、すぐに真剣な表情かおになってロレリア教授が話し出す。

「……。こう言ってしまうのもなんだが……。君たちは古代種キロヤ“世界の心”ガジエイレル、ウオトレストや悪魔といった特異な存在の集まりだ。そして……」

「なるほど、俺様たちの素性はおおよそ把握しているってわけね……。教授が語る中、ミュルザがボソツと呟く。

「そして、我々の最大の敵である“8人の異端者”達も、“異民族”という特異な存在の集団……。そのような者たちは互いに惹かれあうと言われている。奴らがそうであるように、そういった者が力を合わせれば、強い力を発揮できるのでないか……。と考えたのだ」

「……」

教授の返答を聞いたアレンは、その場で考え込む。すると、彼の視線がラスリア達に向いてきた。

「もし、このまま・・・彼らの暴走を止められなかったら、世界は滅びてしまう・・・って事だよね？」

「・・・まあ、俺様はぶっちゃけどちらでも良いが・・・。ラスリアちゃんはどっ思う？」

「えっ!?!?」

ミュルザがラスリアに尋ねてくる。

・・・彼は私の心を読めるはずだから、こうやって質問してこないと思っただけ・・・。  
ラスリアはオドオドしながら考え込む。

しかし、答えはすぐに決まっていた。このとき、ラスリアの脳裏には義理の姉シシュヤ、仲間たちの姿が浮かんだからである。

「何が起るかわからなくて怖い・・・という気持ちはあるの。でも、皆に出会って・・・初めて「失いたくない」って思えるようになったの。だから・・・。」

気がつくと、ラスリアの周りにいたイブール達が意を決したような表情で立っていた。

「そうね・・・。私自身の目的達成に向けて、少し気になることもあるし・・・いろんな事を把握できるのなら、彼らに同行してもいいと思うわ!」

「同感!」

イブールやチェス、そしてミュルザもしぶしぶ賛成し、アレン達はこの3人の学者と行動を共にすることを決意する。

同じ頃

とある遺跡の内部でのこと。

「・・・蒼い光・・・?」

そう呟く男の周りには、“8人の異端者”の何人がいた。

「タイドノル・・・それって、“世界の心”<sup>ガシエイレル</sup>であるあの青年がその光を発していた・・・って事?」



### 第38話 2世界の学者達（後書き）

いかがでしたでしょうか。

ここしばらく忙しかったので、なかなか小説の更新ができない状態でした。

それでも、平日の夜に少しずつ書いてきて、やっと久々投稿ができたわけです！

今回は最後の方で”8人の異端者”達の名前が出てきました。

今後、キャラ紹介のページを作るつもりですが、皆麻がストーリー整理するために、ちよっとまとめてみました

”野獣”ハデユス（R・L）

”魔人”タイドノル（R・L）

”墮天使”ミトセ（R）

”魔術師”コルテラ（R・L）

”吸血鬼”ジェルム（L）

”漆黒の悪魔”ヴァリモナルザ（L）

アギト（L）

ちなみに、” ”内は彼らについた通り名。そして、Rは『ガジエレル - Right -』、Lはこの『ガジエレル - Left -』を指しています。

これを見る限り・・・2作品に登場しているのが、ハデユス・タイドノル・コルテラの3人になりますね！

よろしければ、彼らがどの回に登場したかを探してみるのもいいかもしれません

また、今回初登場したアギトの通り名は現在考え中です。彼の種族は決まっていますが、これをここで書くと今後の展開が多少わかつち

やうかもしれないので、まだ載せないことにします！  
それでは、次回もお楽しみに

**第39話 表情や心を見て感じ取れる事（前書き）**

今回は、アレン ミュルザの視点で進みます。

### 第39話 表情や心を見て感じ取れる事

ガガガガガ

地面を引きずるような音が、周囲に響く。

「ガシエルアカデミー」の本部がある都市、メツカルかぁ……。すごい大きいのかなぁ？」

「そうね。レジエンディラスで言うアテレステンみたいな街らしいから、すごそうよね！」

トラックという乗り物で移動中のアレン達。

狭いトラックの中で、目的地のメツカルについて語るチェスとイブル。

4つある内、手に入れたキタモラフ石は一つ……。「あと2つは何とかする」とシアは言っていたが……。果たして、あの女に任せられて大丈夫なんだろうか？

アレンはボンヤリと一点を見つめながら、考え事をしていた。

「……それにしても、“8人の異端者”が世界中で暴れ回ってるなんて、実感が湧かないな……」

「その話だが……。さつき、学者連中がこんなにくれたぜ！」

ラスリアの呟きを聞いたミュルザが、数枚の紙束を彼女に渡す。

それを目にしたイブルやチェスも、ラスリアの近くへ行く。

「……これは？」

「確か、新聞……。とか言っていたな。見た所、各地での情報を紙に書かれた物らしい」

ミュルザの説明を聞いたラスリア達は、新聞に見入る。

「ええつと……。機械都市ゲヘナを始め、近隣諸国や敵対している国でも、死者数百名。重傷者が数千人……。!?」

「!!!!!!」

新聞の記事を読み上げるラスリアだけでなく、その場にいる全員の

表情が一変する。

「まさか、それが全部8人の異端者あいつらの仕業しごつて事!!?」

目を見開いて驚くチエス。

記事に食い入るラスリアは、何も答えなかった。事実を肯定するよう  
に

「・・・君らの世界のも合わせれば、かなりの被害になっ  
てい  
る」

アレん達の視線に入ってきたのは、イブールの師・ロレリア教授が  
知り合った学者、トキヤ博士だった。

「トキヤ博士・・・だったかしら？貴方、私達の（レジエンディラ  
ス）世界の言葉を話せるの？」

博士の登場で緊迫した空気の中、イブールが問いかける。  
するとトキヤ博士は、イブールに視線を合わせて言う。

「・・・君の師であるロレリア教授から教わったんだ。今は何より  
も、仕事に専念しなくてはならないカラ・・・」

博士は少し訛った口調で語る。

その後、トキヤ博士とイブール。そしてチエスの3人は、何やらい  
るんな事を話し始める。

そういえば、あの男・・・誰かに似ているような・・・?

アレんはトキヤ博士を見つめながら、ふと考え事をする。

この時、彼は“もう一人の世界の心ガジエイレル”である女性・セリエルと肉  
体  
が入れ替わっていた時を思い出す。記憶の中に映るのは、トキヤ博  
士そっくりの青年と、ストの村で対面したジエンド博士の顔。

・・・そんなわけないか

記憶が曖昧ではっきりと思い出せないアレんは、トキヤ博士の事  
に  
ついて考える事を止める。

・・・一世記ぶりに訪れたから、大分見た目がマシになってきたな  
目的地であるメツカルに到着し、一行はトラックから降りて歩きだ  
していた。100年前に一度訪れた事があったミュルザは、懐かし  
そうに辺りを見渡す。

「ガシエルアカデミー」は歴史が古くてネ・・・。200年くら  
い前に発足されたらしいんだ」

「200年か・・・。かなり古いんだな」

歩きながら語るトキヤ博士に、アレンが頷いていた。

「・・・なあ。この学者共が邪魔くせえんだが・・・」

辺りに数十人の学者が並んでアレン達を取り囲んでいる状態に、ミ  
ユルザは居心地悪そうな表情で呟く。

「君はともかく・・・。チエス君のような竜騎士は特に、アビスウオ  
クテラには存在しなかった。多分、一番注目を浴びているのは彼で  
あるウ」

「・・・」

トキヤ博士の台詞を聞いたミュルザは黙り込んでしまう。

・・・俺達悪魔は、世界が統合される前は両世界を歩き来してい  
たから、見たことない野郎なんていなくて当然だが・・・。今の言  
いは嫌なかんじがしたな・・・  
不機嫌そうな表情で考えるミュルザ。

そして、一行はガシエルアカデミーの本部に到達する。

「あの変な形したモノ、何？」

珍しいモノを目にしたチエスは、視線の先にある人間が間をくぐっ  
ている白い門のようなものを指差す。

「あれは、不審物がないか調べる機械だヨ。チエス君の場合、槍を  
持ったまま通ると、ブザーが鳴ってしまうので、あれをくぐるとき  
だけ、武器を預からせてモラウ」

「・・・という事は、俺の剣も・・・か？」

「・・・はい・・・」

アレンから問いかけられたとき、トキヤ博士は一瞬だけ固まっていた。

アレン（あいつ）と瓜二つな女・・・？もしや、今は・・・！？アレンを見て固まった時、ミュルザはトキヤ博士が考えていたことを偶然読んだ。

読み取った中でミュルザの目を引いたのは・・・銀色の髪を持ち、アレンと瓜二つの顔をした女性。トキヤ博士の考えていたことのため、この女性と会ったことがあるというのが、どう見ても明らかであった。

そして、ゲートのようなものを潜り抜けたミュルザ達は、とても長い机の存在する部屋へ入る。

「さて、今後の動きについてだが・・・。君たちは、“8人の異端者”を見かけたことは・・・？」

ジェンド博士やロレリア教授も揃い、全員が椅子に座った状態で話し合いが始まる。

その第一声を出したのが、ロレリア教授だった。

「・・・俺たち全員が見たのは3人。それと、イブールが見たという男も、連中の仲間らしい」

「4人か・・・。ちなみに、奴らの名前や特徴は覚えているかね？」

「・・・竜騎士“ダークイブナーレ”の女性、ヴァリモナルザ。黒髪・黒い瞳で、その瞳には憎悪が宿っていた・・・」

そう呟いたチエスの表情は、複雑そうな状態だった。

・・・まあ、あの女と戦ったのはガキンちよだけだし、説明しなくてはならないのは仕方ねえよ・・・

完全に他人事のような想いで、彼らを見つめるミュルザ。

悪魔である彼にとって、この世界がどうなるかと知ったことではない。ミュルザが一番に優先したいのは、主であるイブールが復讐という名の目的を達成し、自身に魂と肉体を戴くことだからだ。

一方で、話は続く。ミュルザも目撃している“血に飢えた吸血鬼”

ジェルムや、“魔法使い”コルテラ。そして、イブールが見かけたという伸縮自在の矛を持つ男の話も出る。

「あのー……」

「シア……じゃなかつた。ラスリアさん……かな？どうかしたのかい？」

トキヤ博士が、なぜかラスリアの名前を言い間違えた後、彼女に問いかける。

「いろんな事があつたんで、うる覚えでもあるんですが……」

「ラスリア……？」

おどおどした表情で口を開くラスリアに、全員の視線が集まる。

「世界統合して間もない時……私が出会ったあの男の人も……もしかしたら……」

「……そいつに、襲われたんだな？」

「なっ！！？」

ミュルザの台詞を聞いて、アレンやチェス達の表情が一変する。

ラスリアちゃんの思考から見ると……この野郎もただの人間じゃねえな……

ミュルザの脳裏には、ラスリアから読み取った人物　濃  
い茶髪と白銀色の瞳を持ち、大剣を軽々と担ぎ上げていた男の姿だった。

「おそらく……ラスリア君が言った男が“魔人”の異名を持つ男  
タイドノル。そして、イブール君が見かけた男は、“野獣”ハデユ  
スだろうな……」

ジェンド博士が話す言葉を、ロレリア教授が直訳して話してくれた。  
「まずは、君たちが知っている奴らの情報を、できる限りほしい。  
……そしてそれを聞いた上で、奴らの討伐計画を練る……！」

「ちなみに……討伐軍の指揮を取るのは、ギルガメシュ連邦とい  
う軍事国家らしい。それと、わたしの所属するコミュニ二大学から  
も、人材の支援などを記した文書を送つてある」

「そっか……。教授は、学長とも交流がありましたものね！」

全体の説明の中で、ロレリア教授がこつそりと呟いた。教授をよく知るイブールは、その発言に信憑性があるのをよく理解していたのである。

「ウオトレストと連絡を取れるのも僕だけだし……。僕も会議に参加した方がいいんだよね？」

「ああ。もちろんだとも！是非、よろしく頼む」

「その台詞を待ってました」と言わんばかりの口調で答えた後、ロレリア教授はチェスの両肩をポンと叩く。

「君達には申し訳ないが、知識人としてチェス君とイブール君を借りるよ。この警備はどの国にも引けをとらないくらいしっかりしているらしいから、君たち3人は建物内で自由にしてくれ」  
ロレリア教授からそのような言われて、各々で自由行動することになったミュルザ達。

「しかし、ラスリアちゃんが“あの話”をしなければ、アレンの野郎に“護衛”なんざつかなかったんだろうなあ……  
独り建物内を歩くミュルザは、ふとそんなことを考えていた。

それはつい先ほど、ラスリアが「アレンは狙われているかもしれない」という一言から始まった。

「……それは、本当かね!!?」

「はい……」

ラスリアの思いがけない発言で、周囲が静まり返る。

「その……さっき私がお話したタイドノル……?という男は、確かにアレンをどこかに連れて行くこととしていた……」

その当時のことを思い出しながら語るラスリア。

「ラスリア……何だか震えているわ。大丈夫?」

少し怯えながら話すラスリアに、イブールが心配そうな表情で見つめる。

「大丈夫……」

ラスリアは、自分に言い聞かせるようにして呟いた後、話を続ける。  
「あの後、何があったのか・・・彼はアレンを連れて行かなかった。  
でも、次に遭遇したら同じような事にはならないと思います。おそ  
らく・・・」  
ガシエルアカデミーの面々とアレン達の会話を、後ろのほうで聞いて  
いたミュルザ。  
辺りを見回したとき、ロレリア教授など、ほんの一部の人間がアレ  
ンの事を知っているように読み取れた。

「あの男、すごい変な髪色だよな・・・」  
「やっぱり、“あつちの世界の人間”は野蛮人が多いからかねえ・・・」  
気がつくば、自分とすれ違った学者達が、ミュルザを見て陰口を叩  
いていた。

くだらねえ・・・  
しかし、当のミュルザはそんな小言を全く気に留めていない。建物  
内の廊下を歩くミュルザ。

“人間の手助けをする”というのは面倒くさいが・・・あの墮天  
使を“正当な理由”でブチ殺せるというのには、ある意味感謝かも  
な・・・

ミュルザは、考え事をしながら不気味な笑みを浮かべる。  
はるか古代より争いの耐えなかつた天使と悪魔。その当時の敵対心  
は現在まで残り、“天使は八つ裂きにし、魂をもスタスタにする”  
という行為が、悪魔達の中で当たり前の事とされている。

“8人の異端者”とやらの争いが始まったら、俺様の相手は間違  
いなく“墮天使ミトセ”だな・・・。腕が鳴るぜ・・・!!  
ミュルザは正当な動機ではないが・・・アレン達も彼らとの戦いに  
備えて、士気を高めていくのであった

### 第39話 表情や心を見て感じ取れる事（後書き）

毎度、ご一読ありがとうございます。

最近、プライベートが忙しくてなかなか更新できなかったため、結構久々かもしれませんが。

でも、最終回までのくだりはおおよそ考えているので、あとは文章に起こすだけでしょうか。

先日、敵である”8人の異端者”について作者も整理してみました  
が・・・

この『Left』と、もう一つの『Right』両方に出てきている奴や、どちらか一方にしか出ていない敵・・・。それを確かめて「2作品作って良かったのかも？」と思えましたね

1作品のポリウムが薄いという欠点はありますが、そこはなんとか面白く書くことで解消していきたいです！

さて、今回は嵐の前の静けさ・・・みたいな回でしたが、次回はいろいろと動きます。

そして、お馴染みの「ガジェイル・Right」に出ていたキャラ」がまた一人登場予定。

いろんな面から、この作品を読んでいただければ幸いです。

では、ご意見・ご感想をお待ちします（^^）

## 第40話 敵をよく知るために（前書き）

今回は、アレン ミュルザ イブールの視点で進みます。

コロコロ変わってわかりづらいかもしれませんが、話をより具体的にするために、ご了承ください。

## 第40話 敵をよく知るために

「おはよう、アレン」

「あ……ああ……」

ラスリアがアレンに挨拶をする。

メツカル（ここ）に来て、もう1週間か……

アレンはゆっくりと起き上がりながら、ふと考え事をする。

イブールの師・ロレリア教授や、ストの村で出会った学者達と行動を共にしてから一週間。イブールはロレリア教授の助手という形で、“8人の異端者”討伐作戦の会議に参加をし、チェスもまた、竜騎士にコンタクトを取れる唯一の人物として、共に参加をしていた。

「おはようございます。アレンさん、ラスリアさん」

「おはようございます。クウラさん！」

ノックと共に部屋の戸が開き、入ってきた人物に挨拶をするラスリア。

このクウラという青年を見たアレンは、フーツとため息をつく。

ラスリアが「アレンが敵に狙われている」と公言したのをきっかけに、彼に護衛がつくことになった。また、ラスリアが古代種ということもあってか、単純に人手不足なだけなのか……このクウラという青年がラスリアの護衛も兼任している。

「……それにしても、この施設の方々って、皆して私の名前を間違えるんです！確かに、私はシアそっくりだけど……」

「あはは……。まあ、アビスウオクテラ（こっち）で歌姫シアは有名だしね！しかも、声まで彼女と似たもんだから……」

部屋に入ってきたクウラとラスリアが会話をする。

「なあ、そういえば……一昨日くらいから、ミウルザの奴がいないよな？」

「そういえば……」

「自分も詳しくは知らないデスガ……。その方は時折、敵陣への偵察をしているとカ……」

「あいつが……?」

人間に興味を持たないミュルザが、そんな事を自分からしているなんて、不思議な感覚を覚えるアレン。

おそらく、イブールの命でもあるんだろうな……

アレンは部屋の扉を見つめながら、考え事をしていた。

「さて……。今日こそ、連れて行ってくれるんですね?」

ラスリアがクウラの方を向いて、話を切り出す。

彼は意表を突かれたような表情かおをするが、すぐに真剣な表情になって口を開く。

「そうですね。あなた方は一般人……。しかも、特別なお客なのもあって、許可をもらうのは大変でしたが……。とりあえず、向かいましょうか!」

部屋を出たアレン・ラスリア・クウラの3人は、“ガシエルアカデミー”本部の建物内に存在する資料庫へ向かい始める。

「問題ないと思いますが……。一応、ガシエルアカデミー（ここ）の資料庫はジェンド博士のようなアカデミーの人間でも、許可が必要とされる場所。くれぐれも、ここに入った事は他言しないでくださいネ?」

「ああ……」

「わかりました!」

クウラの念押しに、首を縦に振るアレンとラスリア。

俺達の世界と比べ、古代大戦後も文明が生きていたアビスウオクテラ（この世界）……。そこに存在する文献は、俺達が知っているモノとは内容が異なるはず……。何か敵を知る上での手がかりとなればいいが……

アレンが歩きながら考え事をしていると、3人は資料庫に到着する。「ここにはアビスウオクテラの歴史や、古代大戦前の時代について

書かれた文献があるらしいですが・・・すごい量ですネ・・・！」  
空間を埋め尽くす程ある書物の量に、一同は目を見張る。

「 8人の異端者」・・・奴らの事については、古代大戦前後を探せばいいんだな？」

「・・・そうね！いろいろと探してみましようか！」

アレンとラスリアが資料庫にこもり始めた頃・・・一人単独行動をしていたミュルザは、黒い翼を広げて大空を飛んでいた。

「やっぱり、一人で飛んでいるときが一番気持ちいいぜー！！！」  
漆黒の翼を羽ばたかせながら、ミュルザは気持ちよさそうに叫ぶ。

・・・イブール姐さんの命令とはいえ、面倒くさい仕事だが・・・  
こういう時間があるのなら、意外と悪くないかもな！

ミュルザは心地良さを感じながら、ふとそんな事を考えていた。  
「うし！到着・・・！」

目的地に到達したミュルザは、翼を収容し、一瞬で地に着けた。  
ミュルザがメツカルを出発したのは、到着の前日。そのため、飛行時間は丸一日かかっている。しかし、世界地図から見て北西に位置するメツカルから、この世界地図の中心に当たる場所を徒歩や交通手段を使ってでは、一日で到着などまずあり得ない。

この速さを見込まれてか、イブールに敵陣へので偵察を頼まれたのである。

「それにしても・・・レジエンディラス（こっち）で“未到の地”であった場所に、アビスウオクテラ（あっち）では人間の街があったとはな・・・。」

歩き始めたミュルザは、周囲に広がる崩壊した街を見つめる。

これだけぶっ壊れているのは、世界統合でぶつかったせいかな・・・  
崩壊した建物や、地面に横たわっている人間たちの死体を見つめながら、考える。少しずつ歩いていくミュルザは、自分の視界に見慣

れないモノが入ってきたのを感じる。

「なんだありゃ!!!?」

気になった彼は、光速でその近くまで進み、見晴らしが良さそうな大木の頂上に上る。

そこから下の景色を見ると・・・悪魔であるミュルザですら、見たことのないものが存在していた。

「パツと見だと、遺跡・・・。だが、ちっこい建物跡から見ると・・・人間の都市跡か・・・?」

目に見える「それ」を見つめながら、ミュルザはぶつくさと呟く。

500年前に、両世界にある“この場所”を1回訪れたが・・・どちらにも、こんな場所はなかった・・・。これは一体・・・?しかし、考えても結論が出なかったミュルザはこの都市跡の近くに存在する、“8人の異端者”達の根城アシトへ向かおうと考え、歩き出すとすると・・・

「あそこは、古代種共の都市だった場所だ」

「!!!?」

ミュルザの背後から、凶太い声が聞こえる。

その声とほぼ同時に、後ろへ振り返るミュルザ。そこにいたのは・・・

・黒い髪と銀色の髪を持つ男性だった。

「プライドじゃねえか!全く、ビビらせんじゃねえーよ!」

気配すら感じ取れなかった存在が自分の顔見知りだと知り、安堵するミュルザ。

「久しぶりだな・・・!前回会ったのは・・・150年前くらいか?」

「さあな・・・。だが、こんな場所で同族に会うとは思ひもしなかったな・・・」

機嫌よさそうな口調で話すミュルザに対し、このプライドンという男　ミュルザを“同族”と呼ぶ彼もまた、悪魔であった。

「まあ、とりあえずは本題に戻るとして・・・」

久々の会話から一息つかせたミュルザは、改めてプライドンの顔を見る。

「古代種って・・・あの“キロ”の事だろ？・・・どうして、2つの世界に存在しなかったモノが存在するんだ？」

ミュルザが問いかけをすると、黒髪の悪魔はその場で黙り込む。

そして、ため息をついた後、口を開く。

「おそらく、誰かが“星の意思”に語りかけ、術か何かを使ってこの世界に引つ張り出したんだろう・・・」

「“星の意思”かよ・・・」

その台詞を聞いたミュルザは、しかめっ面をしながら、髪をクシャクシャとかき乱す。

そして、彼らの間で少しの間だけ沈黙が続く。世界を創造した“星の意思”とそれに関連する者に関わることを嫌う悪魔たち。悠久の時を生きる彼らであったが、“星の意思”関連のことは、全くいっていいほど知識がない。

「ミュルザ・・・」

「ああん？」

長い沈黙が続く中、最初に口を開いたのはプライドンだった。

「あれに関係するかはわからないが・・・」

「？」

首をかしげるミュルザに対し、淡々とした口調で話すプライドン。

「この近くにいるであろう、“8人の異端者”と呼ばれた者達・・・彼らを統べる奴が、古代種の男らしい・・・」

「は・・・!!?」

思いがけない事実を聞いたミュルザの表情がかお一変する。

俺がこの数百年で見かけた古代種は、ラスリアちゃん一人・・・まさか、あの嬢ちゃんの他にも生き残りがいる・・・!!?!

初めて知った事実には、流石のミュルザも動揺を隠し切れない。

「しかし、プライドンよお・・・。その話は一体どこで・・・?」

「・・・魔界にいる老いぼれ共だ」

「・・・確実な情報・・・ってわけだな」

情報の出所を問いかけると、プライドンは魔界に住む悪魔族の長老達の名前を出した。

今、彼らがいる世界とは別に悪魔だけが住む“魔界”という存在がある。しかし、その事実を知るのは当人だけで、この世界に暮らす生き物は、誰一人として知らない事実であつた。そんな魔界を収める長たちが、ミュルザ以上に永い時を生きる悪魔であるがゆえに、“老いばれ”と皮肉をこめた言い方で表したのである。

「・・・古代種キロは、ラスリアちゃんみたいにどんな能力を持っているか、実際に見ないとわからねえから、厄介なんだよな・・・」  
「・・・ならば、一族の掟に従い、関わらないことだ。・・・古代種“キロ”も“星の意思”tp関係のある生き物だからな・・・」  
「あ・・・おい!!」

プライドンは一言を言い放つた後、ミュルザが引き止める間もなく、漆黒の翼を広げて飛んでいってしまふ。

「ったく・・・気まぐれというか、キザな野郎だぜ・・・」  
プライドンが飛び去った後、空を見つめながらミュルザはボソッと呟く。

「同じ古代種でも、ラスリアちゃんは非戦闘能力の持ち主・・・。果たして、あいつらに“8人の異端者”共を倒せるのかねえ・・・」  
他人事のような口調ではあつたものの、内心では小さな不安を抱く。  
「!!!?」

突然、自身の心臓がドクンと鳴つたのを感じたミュルザの表情が一変する。

この感覚は・・・!!!

ミュルザは、これまでも感じたことのある感覚に陥る。それは、契約を交わした“主”に何かあつたとき、共鳴するかのよう感じる悪魔特有の現象。

「・・・イブール・・・一体、メツカル（あそこ）で何が起きてやがる!!!?」

「ぎゃあああああつ！！！！」

「えっ……！！？」

少し離れた場所から聞こえる悲鳴に、驚くイブール。

この頃、イブールとチエスはロレリア教授やトキヤ博士・ジェンド博士と一緒に、「ガシエルアカデミー」本部内を移動していた。

「何かが……来る……！」

真剣な表情で呟くチエス。

チエス（この子）がこんな深刻な表情をする……ということは、まさか……！！！？

周囲が緊迫した雰囲気となり、心の中で考え事をしながらつばをゴクリと飲み込むイブール。

人らしき足音が、大廊下の奥から聞こえる。  
ズツ……ズツ……

何かを引きずりながら歩いてきたのは、濃い茶髪と白銀色の瞳を持ち、身の丈ほどある大剣を担いだ男だった。

そして……尖った耳を持ち、獣のような目つきでイブール達を見るこの男こそ、ラスリアが「見た」という“8人の異端者”が一人・  
「魔人タイドノル」であった

#### 第40話 敵をよく知るために（後書き）

いかがでしたか。

今回の話の終わりは、漫画のような終わり方を意識して書いてみました（^^）

本編についてですが・・・

今回初登場となった悪魔・プライドンは、ご存知の方もいるかもですが、『ガジエイルル・R i g h t - 』に登場していたキャラ。ミユルザと彼は、どうやら顔見知りらしく、他人に興味を持たない悪魔でも、同族同士の親交はありなのかな？と、書いてて思いました

さて、”8人の異端者”の一人であるタイドノルが、再び主人公たちの前に立ちはだかる。その目的はいかに  
！！？

・・・次回をお楽しみに

ご意見・ご感想をお待ちしてます！

## 第41話 襲撃の目的は・・・（前書き）

> 前回までのあらすじ<  
学者組織”ガシエルアカデミー”本部に滞在する事になったアレ  
ン達。

それから1週間が経過し、彼らは決戦に向けての準備を始めていた。  
一人、敵陣への偵察へ行っていたミュルザは、同族であるプライド  
ンから”8人の異端者”達を束ねるリーダーが、ラスリアと同じ古  
代種だという事を知る。

一方、学者達と行動を共にするイブールとチェスの前に、敵の一人  
が姿を現す。

## 第41話 襲撃の目的は・・・

半端じゃない殺気を、あいつから感じる……。もしかして……！！？

ガシエルアカデミー本部内に突如、敵が現れたことで息もつけない緊迫とした空気に変わっていた。

「Tydnole……！！！」  
「え……？」

その時、目を見開いて驚いているジエンド博士が、目の前にいる敵を見て声を張り上げる。

「ジエンド博士！！彼が……！！？」

博士が言った言葉に、ロレリア教授も驚きを隠せない。

「教授……彼はなんと……？」

イブールはロレリア教授に、小声で恐る恐る尋ねる。  
すると、彼は冷や汗をかきながら口を開こうとすると

「コソコソと、何を話しているか知らねえが……」

視線の先にいる、大剣を担いだ男が口を開いた。

「……この建物の警備は、並の人間だったら侵入は難しい。それを易々と侵入はいつてこれたという事ハ……」

イブール達に語るようにして呟きながら、男を鋭い視線で睨みつけるトキヤ博士。

「ああ、そうか！俺様を知らない連中もいたんだもん！……俺様は、てめえらが“魔人”と呼んでいた“8人の異端者”が一人、タイドノルだ」

「！！！！！」

改めて名乗ってきた敵に、イブールとチェスの表情が一変する。

「あなたが……」

ポロツと呟くイブールだったが、この先の言葉を口には出せなかつ

た。

こいつが、ラスリアの言っていたタイドノルって男……。ということは、目的はアレン!!?」

イブールはバツと周囲を見渡す。

ここ数日、アレンやラスリア。そして、ミュルザとも別行動をしていたことを思い出す。

あの子達の様子を見に行かなきゃ……。!!でも……

「何が目的であろうと、君らの勝手には……。させないよ!!」  
そう啖呵を切ったチエスは、いつの間にか槍を構えていた。

チエスの言動を見ていたタイドノルは、一瞬だけ目を丸くしていたが……。上機嫌になったのか、肩に担いでいた大剣を両手で握る。

「せっかく、こんなに人間共の多い街に来たわけだし……。ぶっ殺していかないと、来た甲斐なくなっちまうよなあ……。!」  
そう言つて大剣を構える。

やっぱり……。そう簡単には行かせてくれなさそうね……。!

イブールはタイドノルが通ってきた廊下の方を見る。それは、アレンやラスリアが使っている部屋がその方向にあるからだ。

「ロレリア教授……。私とチエスが敵を引き付けるので、博士たちを連れて逃げてください……。!」

「イブール君!!?」

イブールは低い声で教授に言う。

「敵は、この場にいる人間を平気で殺せるような奴です。この“ガシエルアカデミー”で、皆さんは“頭脳”として必要とされている

学者でしょう?……。私は先生の教え子として、そんな皆さんを失いたくないです。だから……。!」

「いや、しかし……。!」

「お願いします……。!!」

イブールの台詞を聞いたロレリア教授は、一瞬黙り込む。

しかし、すぐに意を決したのか……

「……。わかった。わたしが先導して、彼らを連れて行こう」

「……お願いします」

教授は複雑そうな表情かおをしていたが、すぐに学者達の先導を開始した。

その様子をジーツと観察していたタイドノル。

「そういえば、あの銀髪の小僧がどうだ？」

「……君らに答える義理なんてないね!!」

「やっぱり、あなたの目的は……!!」

改めて、敵と向きなおすイブールとチエス。

「……まあ、いいや。どの道、奴らは逃げられるはずねえだろうし」

「なんですって……!!?」

思いがけない台詞に、驚くイブール。

「ぎゃああああっ!!!!」

「ひいひいひいっ……!!!!?」

すると、背後から叫び声が響く。

「まさか……!!!?!」

チエスの表情が青ざめる。

そして、悲鳴の後に現れたのは……つい先ほど、ロレリア教授の先導で逃げ始めたばかりの学者達であった。

そして、一番最後に現れたのは

金の髪と瞳を

持ち……背中に白い翼を持つ男だった。

「“墮天使”ミトセ……!!!?!」

目を見開いた状態で呟くチエス。

しまった……困まれたか……!!!!

前方にはタイドノル。そして、今現れたミトセによって退路を絶たれた事にイブールは気がつく。

「さーて!!話しているだけじゃつまらねえし……楽しませてくれよ……?」

前方でニヤニヤしながら呟くタイドノルの瞳は、ギラギラと殺気に

満ちていた

「ぐあつ・・・！！！」

「クウラさん・・・！！！」

壁に吹っ飛ばされ、苦しそうな表情かおでしゃがみこむクウラ。

そんな彼の側に行くラスリア。一方で、アレンとラスリアは違う敵と対峙していた。

「全く・・・弱い犬ほどよく吠えるというのは、本当だよな」

彼らの視線の先にいる燃えるような紅い髪を持つ男が、ため息交じりで言う。

その男の指からは、伸縮自在の矛が連なっている。地面に座り込んだクウラは、敵に立ち向かい、その矛で斬られたのである。

「貴様が、“8人の異端者”の一人・“野獣”ハデユスとかいう男か・・・」

「よく知っていたね！・・・といっても、あの魔術師のお嬢さんから話を聞いているって所かな？」

やっぱり、この男性ひとが・・・

ハデユスを見上げながら、ラスリアはふとそう思った。

「ラスリア・・・。下がっている」

「う、うん・・・」

剣を構えたアレンに対して、頷くラスリア。

しかし、再び敵の方を向いたとき、大事なことを思い出す。

「アレン・・・その人の狙いは・・・！！！」

しかし、時既に遅く・・・アレンはハデユスに立ち向かっていった。いた。

剣と矛のぶつかり合う音が、周囲に響く。

「・・・なかなかいい腕しているねえ。“星の心”ガジェイレル・・・」

「その名前で呼ぶな・・・！！！」

両手で剣を振るうアレンに対し、片腕の矛で軽く受け流すハデユス。  
「今とはとにかく、彼の治療を早急にしなきゃ……！」

ラスリアは、アレンの事を心配しつつも、まずは傷の深いクウラを治そうと、治癒魔法キユアを使い始める。

「ラスリアさん……これは……？」

「……今は説明する暇がありません。とにかく、ジツとしてください……！」

治癒魔法キユアによる光が、クウラの腹部にできた傷を少しずつ癒していく。

「自分は……悔しいデス……」

「えっ……？」

冷や汗をかきながら、クウラが呟く。

「皆さんと会う……少し前……自分の親友が、奴らに殺されたデス……。遺体からは、ナイフにしては細い斬り傷があっ……タ……。だから、奴が敵なの二……!!」

拳を握り締めることで、怒りを抑えているクウラ。

その表情は今にも泣き叫びそうな状態であった。

「クウラさん……」

彼の話聞いたラスリアは、うつむいてしまう。

「ぐっ……!!」

「アレン!!?」

アレンのうめき声が聞こえ、ラスリアはバツと顔を上げる。

彼女の目の前には、地面に足をついたアレんと、勝ち誇ったような表情かおで見下ろすハデユスの姿であった。

「やれやれ……。『君たち』は、殺してはいけないうって言われているんだけどなあ……」

「それは……貴様らを束ねている奴……か!!?」

「ゼーゼーと息を上げながら、敵を睨むアレン。」

「……さあね。でも、君が僕らのところに来てくれれば、自然と

わかるんじゃない？」

飄々とした口調で話すハデユス。

「まずい……。このままでは、アレンが連れてかれてしまう……！！」

そう思ったラスリアは、すぐにアレンの側に行き、立ちほだかるように彼とハデユスの間に立つ。

「ラスリア……！！」

「彼を連れて行かせないわ……！！！」

ラスリアは、鋭い眼差しで敵を睨みつける。

「怖い……。でも、そんなことを考えている場合じゃないわよね……！！」

今現在、チェスやイブールがこの場にいないため、何とか乗り切らなければという想いを強く持つラスリア。

一方でアレンも、再び立ち向かおうとするが……。今の戦いで足をひねったらしく、すぐには立ち上がれない状況だった。

2人の様子を黙って見つめるハデユス。その顔に不気味な笑みが浮かべた後、彼は口を開く。

「大丈夫だよ！今日は、彼を連れて行くために来たわけじゃないから……」

「え……。！？」

予想外の台詞を聞いたラスリアは、その場で一瞬固まる。

すると、その一瞬の間隙についてかハデユスの腕が自分に伸びてくる。

「あつ……。！？」

伸びてきた腕はラスリアを絡めとり……。気がつくと、ハデユスの腕に抱き寄せられていた。

「今日は、君を迎えに来たんだ。古代種のお姫様……」

「えっ……！！？」

自分の耳元で囁くハデユスの台詞に、驚きながら頬を赤らめるラスリア。

「よくわからないけど……。放して……。！！」

ラスリアは、敵の腕の中から逃れようと、身体をジタバタさせる。しかし、伊達に“野獣”と呼ばれていないのか・・・彼女の肩から首にかけて掴んでいるハデユスの腕はビクともしなかった。そんなラスリアを見たハデユスは、その場でため息をつく。

「全く・・・元氣のあるお姫様だねえ・・・」  
「痛っ・・・」

ハデユスがボソツと呟いた後、ラスリアの首筋に軽い痛みを感じる。彼が背後から、ラスリアの首筋を浅く噛み付いたようだ。

「あ・・・れ・・・？」  
数秒後、ラスリアの視界がグニヤリと曲がり始める。

「なんか・・・すごい眠・・・く・・・？」  
「おやすみなさい、お姫様・・・」

耳元で囁いているハデユスの声すら、だんだん聞こえなくなる。そして、ついにはラスリアの視界は真っ暗になってしまつたのであった。

「貴様・・・ラスリアに何をした・・・！！？」

アレンは痛めた足を抑えながら、ハデユスを睨みつける。ハデユスに首筋を噛まれたラスリアは、その腕の中で意識を失っていた。

「・・・なにをしたかつて？僕の齒は、ちよつとした毒が含まれている。それで眠らせただけ・・・かな？」

「貴様っ・・・！！」  
アレンは敵を睨みつけてはいるが、内心は動揺していた。そんな彼を眼中にないように、ハデユスは気絶したラスリアを担ぎあげる。

「まさか、貴様の目的は最初から・・・！？」  
そう叫ぶアレン。

一方で、敵は否定をせずただ不気味な笑みを浮かべていた。

「ぐあつ!?!」

その直後 アレンの腹部に痛みが入り、そのまま壁に飛ばされる。

ハデユスが、アレンを蹴り飛ばしたのだ。

このかんじ……。肋骨にひび入ったか……。!?!?

アレンが腹部を抑えていると、ハデユスは彼の目の前を通りすぎようとする。

「この娘を返してほしいなら……。古代種の都跡“こ”に来る事だね。

……!」

「……。!待てつ……。!?!?!」

彼は敵を引き止めようとするが、痛みであまり大きな声が出せなかった。

「ラスリアっ……。!?!」

苦し紛れにラスリアの名前を呼ぶが……。彼女を抱えたハデユスは、いずこへと去ってしまうのであった

#### 第41話 襲撃の目的は・・・（後書き）

いかがでしたか。

今回、クウラが悔しそうに語っていた親友の話・・・『ガジエイレル・Right-』をご覧になった方はおわかり戴けると思います！ここであちらとのつながりは・・・まず、アレン達の警護をしているクウラがそっちのキャラだという事。

また、「クウラの親友」と「トキヤ博士の息子」は、『Right-』で言うナチの事ですネ

そのナチにラスリアは1度出会っているわけですから・・・彼って結構キーパーソンなかんじ？

さて、今回でラスリアがハデユスに拉致されてしまいました・・・この展開も、以前からずっと考えてたもの。

具体的にこうなったのは、多分『薄桜鬼』の影響かと。笑

何はともあれ、次回をお楽しみに

ご意見・ご感想をお待ちしてます

## 第42話 戸惑い(前書き)

今回は、チエス イブールの視点で物語が進みます

## 第42話 戸惑い

ガッ!!!

アレンが拳を壁に叩きつける音が、周囲に響く。

アレン・・・つらいだろうな・・・。

腹部に包帯をまき、ベッドの中にいるアレンを見ながらチェスは思う。

チェスやイブールは“8人の異端者”達との睨み合いが続いていたが・・・タイドノルが持つ通信機という機械が鳴った後、彼らは即座に立ち去ってしまった。

「まさか、連中の狙いがラスリアちゃんだったとはな・・・」

「私達の目の前に現れたあいつらは、囷だったって事よね・・・  
今でも腹が立つわ・・・!」

ベッドが複数存在する病室の中で、偵察から戻ってきたミュルザと絆創膏を貼ったイブールが話す。

一方で、腹部に怪我をしているアレンは、ただうつむいたままだった。

「それにしても・・・なぜ、彼らはラスリアを・・・?」

チェスはその場でボソツと呟く。

彼らの狙いは、最初アレンだったのに・・・あのクウラっていう人の話だと、本当にラスリアを連れ去る事が目的のように見られたって言う・・・。彼女を連れ去って、僕達をおびきよせるためか・・・もしくは・・・?

ベッドの中で考えるチェス。

しかし、どんなに考えても彼らの狙いが読み取れなかった。

「失礼するよ」

ノックの後、扉の向こう側から声が聞こえる。

そうしてチェス達のいる病室にやってきたのは、ロレリア教授だった。

た。

「ロレリア教授・・・申し訳ないです。お手数おかけして・・・」  
教授の顔を見たイブールは、申し訳なさそうな表情かおをする。

「いやいや・・・。可愛い教え子のためだ。これくらいはな・・・」  
イブールの台詞に対し、苦笑いで話す教授。

「・・・？」

「・・・ラスリアちゃんが連中に拉致された事で、「俺達が“8人の異端者”とつながっているんじゃないか」と疑いまくる人間が大勢いるらしい・・・」

チエスが疑問そうに首をかしげていると、彼の側でミュルザが呟く。  
「どうやら、チエスが疑問に思っていたのを、察していたようだ。」

「じゃあ、あの教授がその人達をなだめてくれている・・・って事？」

「・・・だろうな。たたく、人間てのは器の小せえ連中ばかりだ」  
「・・・」

ミュルザの呟きを、チエスは黙って聞いていた。

「君達が奴らの仲間かどうかなんてのは、全く考えていない・・・」

だが、私も彼らと同じように、疑いたい部分もある」

「・・・なぜ、あの子がさらわれたか・・・ですよね？」

イブールの台詞に、ロレリア教授は黙って頷く。

彼らの間で、短い沈黙が続く。

「チエス・・・」

「あつ・・・!？」

この時、チエスの頭の中に声が響く。

周囲を見たところ、彼だけにしか聞こえないような声。

この声は確か

考え事をしながらベッドを抜け出したチエスは、急に走り出す。

「チエス・・・!？」

「すぐ戻る!!!」

背後からイブールの声が聞こえたが、チエスはかまわずに部屋の外へ走っていった。

「はぁ……はぁ……」

彼は小走りで建物内を進む。

ただし、周囲を気にしながら走るのであった。

「いた……!!」

数分間走り続けた後、チエスはやっと声の主がいる方向にたどり着く。

「チチツ……」

チエスの視界に入ってきたのは、1羽の鳥だった。

そして、彼はその鳥に触れようと、恐る恐る手を近づけると……

「やっと、見つけてくれたな。チエス……」

「ビジョップ兄さん……!!」

鳥に触れた瞬間、チエスの頭の中に、彼の兄・ビジョップの声が響いてくる。

「兄さんが伝令役なんて、珍しいよね!」

「しっ……!!」

普通に話すチエスに、ビジョップの意識を宿した鳥は彼を黙らせる。

「そのまま話していたら、人間たちに不審がられる。これは精神感<sup>パス</sup>応能力も使えるのだから、心の中でつぶやくように!」

「う、うん……。わかった……」

チエスは気持ちを落ち着かせてから、兄の求めに答える。

「では、ウンディエル様からの伝言を伝える。実は……」

「チエス……どうしたのかしら?」

「……すぐ戻るだろ」

イブールとミユルザは、チエスが出て行った扉を見つめて呟いていた。

それにしても・・・アレンや私達をおびき出すためでしょうけど、何か引つかかる・・・。

イブールは、なぜラスリアが連れ去られたのかを考えていた。

「太陽は我々の元に堕ちた」か・・・」

「・・・なんだそりゃ？」

イブールの呟きに首をかしげるミュルザ。

彼女は敵が自分たちの前から去る時を思い出しながら口を開く。

「ミトセ・・・だったかしら。あの金髪金眼の天使が、去り際に残した言葉。意識すると、“私達の希望がなくなった”って事だと思っけど・・・それとラスリアに何の関係があるのかな・・・と思っ  
て・・・」

「ふーん・・・」

ミュルザはイブールの考えを読みながら話を聞いているのか、特に意見もせずに黙って聞いていた。

「あの娘は・・・」

「・・・？」

低い声が聞こえたため、その方向を見るイブールとミュルザ。

気がつく・・・虚ろな表情のアレンが、彼らを視界に捉えていた。

「あの娘は、“キ口”の中でも重大な宿命を背負う身・・・。あれを拉致する事。それすなわち、彼らの目的を成就させるための行為・・・」

アレンの口から紡ぎだされる言葉

しかし、そ

れは彼本人の意思が述べた言葉でないことは明白だった。

「・・・ん・・・？」

数秒ほど黙り込んだ後・・・アレンは我に返ったように周囲を見渡す。

その後、驚きの余りに固まっているイブールとミュルザを見た途端、アレンは何かを察したような表情かおをする。

「俺・・・また何か言っていたみたい・・・だな？」

「ええ・・・思いつき・・・」

アレンの台詞で我に返ったイブールは、驚きの表情のまま口を開く。

「これが以前、ラスリアが言っていた・・・」

「・・・それが、“星の意思”とやらがためえに語りかけている・・・  
って事なんだな？」

「ああ・・・」

ミュルザの一言に頷くアレン。

その後、彼らの間に短い沈黙が続く。

・・・「ラスリアを捕える事が、奴ら・・・“8人の異端者”の  
目的を達成するため」って一体、どういう意味なのかしら・・・？  
イブールは、アレンが述べた“星の意思”による語りかけを聞いて、  
頭が混乱し始めていた。当然、“星の意思”や古代種“キロ”につ  
いて知っている人物はこの場にいない。そのため、状況の整理が  
つかずの状態に陥る。

何か話そうと、イブールが口を開こうとしたその時だった。

「皆っ！！！」

ボタンという大きな音と共に、先ほど部屋を出て行ったチエスが現  
れる。

「どうしたんだ、ガキンちょ！慌てた顔をして・・・」

ミュルザがからかうような口調で、チエスを睨みつける。

「とにかく、ゆっくり話している場合じゃないんだ！移動しながら  
話すから・・・今から僕と一緒に来てほしいんだ・・・！！！」

「??？」

「へえー、奴らが“シルクル”ねえ・・・。全然、“風”ってかん  
じがしねえが・・・」

チエスがアレン達の下へ戻ってから数時間後・・・彼らはウオトレ  
ストの竜に乗ってある場所に向かっていた。

しかし、これまでと異なるのは彼らが乗るウオトレストの水竜の他  
に、風の竜騎士“シルクル”の竜が数匹同行していたことだった。

「それにしても、ラスリア以外にもう一人古代種の末裔がいたとは・

「．．ね」  
竜の背にまたがるイブールは、ここに至るまでの経緯について思い出す。

「これから僕たちは、“ある人物”のいる場所に向かうんだ」  
急ぎ歩きで進みながら、チエスが話す。

「“ある人物”．．．？」

「．．．こんなときに会いに行くぐらいだから、ラスリアに関係ある人物．．．とか？」

アレンが首をかしげる中、イブールは恐る恐るその言葉を紡ぎだす。  
「．．．一族の掟もあって、君らには話せなかったんだ。最も、ビジョップ兄さんがラスリアにだけは伝えていたらしいんだけど．．．」

「マジかよ．．．!!!!」

途中言いかけたチエスに、反応するミュルザ。

「？ミュルザ．．．あんた、今何を透視みたの．．．？」

ミュルザの驚きようが尋常ではなかったため、彼の顔色を見ながらイブールは口を開く。

「．．．チエス。その“ラスリアにだけは話した”というのは．．．」

「．．．うん。実は、古代種“キロ”の末裔は、ラスリア以外にもう一人いるって事なんだ」

「なっ．．．!!!？」

その台詞を聞いたアレンとイブールの表情が一変する。

そこまでの経緯を訊きたいところだけど．．．雰囲気的に、今は止めたほうがよさそうね．．．

イブールはチエスの深刻そうな表情かおを見て、これ以上訊くのは後にしようとして心に決める。

「今から、その男性おとこの元へ行くんだけど．．．。アレンの事もあって、今回は僕らウオトレストだけでなく、風の竜騎士・シルクルの

人たちも一緒にこつちへ向かっているんだ」

「うそ……!!?」

イブールは声を張り上げるようにして驚く。

「……ただでさえ、竜騎士は人間の前に姿を現さないというのに……。シルクル（そいつら）が出てくるって事は、相当重要な人物……って事……!!?」

その後、指定された場所に到達したアレン達はウオトレストやシルクルの竜騎士達と合流。そして、現在に至る。

竜たちはやはり、私達を乗せることが不満なんでしょうね……。でも、それでも乗せているのは、これから会う人物がそれだけ重要な人物であることを強く物語っている……。かんじかしら。

イブールは一緒に乗っているウオトレストにつかまりながら、ボンヤリと考え事を続けていた。

竜の背に乗ってから数時間が経過し、一行はその人物が住むとされる場所へ到達していた。

「……おい、イブール」

「どうしたの、アレン?」

竜から降りた後、辺りを見回しながらアレンがイブールに声をかける。

「この場所……以前俺たちが通った場所に……。似ていないか?」

「……言われてみれば……」

そう呟きながら、イブールも周囲を見渡す。

彼らが降り立った場所は、街道から少し外れた森の中。森なんていんな場所にあるからどれも同じに思われるが、イブール自身もこの場所に見覚えがあるような気がした。

「……行きますよ」

2人で話している中に、チェスの兄・ビジョップが割って入ってくる。

その後、森の中を進んでいくアレン達。彼らの周りにはビジョップ率いるウォトレストがいた。同行していたシルクル達は竜の見張りも兼ねて、着地した場所に残してきたのである。そして、イブールは小声でミュルザと会話をしていた。

「見覚えあるなと思ったけど・・・ここって、ミュルザ（あんた）やアレンが眠くなってヨレヨレになった場所なのでは・・・？」

「・・・あの時は本当にヤバかったから、あまり覚えてねえが・・・この感覚は、恐らくそうだろうな・・・」

「・・・でも、今はあんた達もピンピンしているし、私も結界に弾かれていない・・・。一体、どうなっているのかしら・・・？」

2人は小声で会話をしながら、森の中を進んでいく。やがて一行は高くそびえる塔の入り口に到達する。

ギギギギッ

塔の扉を開き、中へ入る。アレン達も含めて皆が用心しながら塔の中を進んでいく。

「イブール・・・君はどう思う？」

「チエス・・・？」

深刻そうな表情で壁を見つめながら、今度はチエスがイブールに声をかける。

「この壁いっぱいに描かれている文様・・・。おそらく、“キロ”だけが使える古代魔術の一種・・・。でもこれ、全部が無効になっているみたいなんだ」

「魔術が・・・無効・・・!？」

チエスの台詞を聞いて、驚くイブール。

でも確かに・・・この魔方陣にも似た文様からは、どれも魔力を感じない・・・

壁の文様に触れながら考え事をするイブール。

ビジョップの話だと・・・ここに住む古代種の末裔は、塔の存在を魔術によって隠して生活をしていたらしい。彼の推測で、壁一面に描かれている文様がその“存在を隠す術”に何かしら関連性がある

らしいが、今の状態は明らかにおかしいと考えているようだ。

「……こんな状態になっているという事は……」

「……侵入者……とかかもな？しかも、この魔術とやらを敗れるくらいの野郎とか……」

アレンやミュルザが呟く中、ミュルザだけが何か考え事をしながら話しているように見えた。

「……とにかく、その人には訊かなきゃいけないことが山ほどあるから……急ごう!!」

チエスが3人に呼びかけ、一行は塔の中を先へ先へと進んでいくのであった。

## 第42話 戸惑い（後書き）

いかがでしたか。

ラスリアが敵に捕らえられた事で、一行の気持ちの面に影が生じた回でした。

次回辺りで顔を合わせるであろう、「もう一人の古代種」についてですが・・・実はラスリアだけは一度彼に会っています。

詳しくはこの作品の第12話をご覧ください

また、チエスが「一族の掟」という言葉を述べていましたが、その辺も軽い解説を。

チエスの一族”ウオトレスト”を含め、竜騎士はこの物語の世界における”先住民”とも言える存在。そんな中、彼らの元に現れたのが”星を切り開く民”と呼ばれていた”キロ”。この先は長いので割愛させて戴きますが、要はキロと竜騎士は共に力を合わせてきた”同志”みたいな関係。

そのため、古代大戦前後でキロの数が激減した際、彼らを保護して見守る役割を自然と担うようになった・・・という歴史が、彼らの間に根付いているかんじです。

掟や昔の風習にあまりこだわらないチエスですが、やはり彼なりに一族の者という自覚を持ち始めての発言だったのでないでしょうか。

さて、訪れた塔に異変があるのに気がついたアレン達。

また、”もう一人の古代種”からどんな情報が得られるのか!?

・・・次回をお楽しみに

ご意見・ご感想をお待ちしてます（^^）

### 第43話 黒い瞳が映し出すもの（前書き）

今回はアレン ラスリアの視点で話が進みます。

普段よりは文が短いので、いくらか読みやすいかも？

### 第43話 黒い瞳が映し出すもの

肋骨にひびが入った箇所……。少し痛むな……

アレンは塔の中を進みながら、腹を右手で押さえながら考える。

ギイイイッ

ラスリアと同じ古代種の末裔に会うため、この場所を訪れたアレン達。結果が解けていたとはいえ、広い塔の中を探し回るのは流石に骨が折れた。探索を始めてから2時間ほど経過した後、やっとの思いでその場所に到達した。

「これは……!?!」

先行していたチエスらウオトレストの竜騎士達が、目を丸くして驚く。

大きな扉の中へ入ると

中は荒れており、たくさ

んの本が床に散らばっている。そして、書類や机も落ちていたり、壊れていたりという惨状になっていた。

「誰かと……争っていたのか?これは……」

「……そのようね……」

辺りを見回しながら、アレンとイブールが各々の感想を述べる。

紙が、焦げてる……?

アレンは、散り散りになっている本や書類の内、炎であぶったかのように焦げている部分を発見する。なぜ、このような事になっていたか考えていると……

「あ……あれ……!?!」

何かに気がついたチエスが、部屋の奥の方を指差す。

「ラゼ殿……!?!」

その存在に気がついたビジョップが、床に倒れている人物

ラゼの近くへ走って行った。

アレン達も近くに行つて見ると……紺色の長い髪を持つ青年が、

全身に傷を負って倒れていた。

「……ウオトレストか……」

だるそうな表情をするラゼという男は、ビジョップやチェスを見ずに彼らがウオトレストである事を言い当てる。

「……古代種というのも、伊達ではないようだな……」

彼の側に寄るチェス達を見ながら、アレンはふとそう思った。

その後、倒れていたラゼをベッドに運び座らせた。

「……数年ぶりですね。ラゼ殿……。急な用件があった故、突然の来訪をお許し願いたい」

「……いいよ。最も、“奴”のせいで関係ない奴まで入り込んでしまったけど……」

傷を見つめながら話す男は、その後……彼の黒い瞳は真つ直ぐにアレンの方を見た。

「……“君”と会うのは、初めてのようだね」

「……どういう意味だ？」

ラゼの台詞に反応するアレン。

「……そのままの意味だよ。僕は、もう一人の“君”と一度会ったことがあるからね……」

「お前は一体……？」

意味深な台詞を述べるラゼに、首をかしげるアレン。

周囲は微妙な雰囲気に含まれていた。ベッドから上半身だけ起き上がったラゼに、ビジョップが声をかける。

「……一体、我々が来るまでに何があつたんですか？」

その台詞を聞いたラゼは、数秒だけ黙ってから口を開く。

「見ての通りさ！……その様子だと、“あの男”の存在は知らないみたいだね」

「“あの男”……？」

ラゼの台詞に、今度はチェスが反応する。

「……僕の家を荒らして行った男の名前はアギト。フルネームが“アギラストリュエ・ゴナセイル”」

「まさか・・・貴方と同じ、“キロ”・・・!!!?でも・・・その名前は・・・」

「?そいつは一体、何者だ・・・?」

アレンは、驚くビジョップ・チエス兄弟を見ながら首をかしげる。

「・・・おそらく、そいつが“8人の異端者”共のリーダー・・・だな・・・」

「なっ・・・!!!?」

自分の背後で、呟くミュルザの台詞を聞いたアレンは、表情を一変させる。

「・・・ミュルザ。あんた、そんな事いつの間にか知っていたの・・・?」

「まあ、知ったのはつい最近だけだな。でも、確かな筋から手に入れた情報だから、嘘はついてねえぜ!イブール姐さん!」

不審そうな表情で見つめるイブールに対し、飄々とした態度で答えるミュルザ。

「まあ、いいわ。・・・本題に戻るけど・・・一体何が目的で・・・?」

「・・・」

腕を組みながら呟くイブールに、黙り込むラゼ。

しかし、一息ついたのが、再び話し始める。

「それは、さておき・・・。今日はどういった用件で来たんだい?」

・・・“世界の心”カジェイレルやら悪魔やらまでおしかけて・・・」

訊くなら今・・・か?

話題を変えたラゼを見て、アレンはふと思った。

「・・・“古代種の都跡”について、尋ねたい・・・」

「!!!?」

アレンが口を開くと、ラゼの表情が一変する。

思いがけないような驚きを見せるラゼに、ビジョップ達も戸惑っていた。

「・・・“あそこ”の場所を聞いて・・・何がしたいの?」

「連れ去られた仲間を助けるためだ」

疑心暗鬼な表情かおで尋ねるラゼに対し、アレンはきっぱりと言う。  
そこに、チエスが顔を出して言う。

「・・・僕らがそこに行く事は、敵の思う壺かもしれない。でも、このまま彼女を見殺しにはしたくないんだ・・・！だから、教えてほしいんです・・・！！」

必死そうな表情かおで訴えかけるチエス。

少年らしい不安がさらけ出されたような声をしていた。

「・・・例え俺達を信用していなくても、てめえの頭の中に今、ラスリアちゃんの姿が浮かんでいたのは事実・・・。何も知らないとは言わせねえぜ・・・？」

後ろの方で話を聞いていたミュルザが、鋭い視線でラゼを睨む。

「・・・余計な口出しをするな、悪魔。見ず知らずの人間ならどうでもいいけど・・・同胞ともあれば、僕とて協力するさ」

ラゼはそう言い放ちながら、ミュルザを睨み返す。

「・・・じゃあ、“古代種の都市跡”の場所を知っているのね・・・！！？」

「・・・まあね。だけど、教える代わりに条件がある」

「条件・・・？」

ラゼが真剣な表情で、アレン達を見つめる。

しかし、真剣な表情はラゼだけはなかったのである。

「・・・僕もその場所に連れて行け。それが、奴らの居場所を教える条件だ」

アレン達がラゼに話を聞いていた頃

当のラス

リアは、“8人の異端者”達の根城アシトでもある古代種の都跡付近にいた。

「・・・なぜ、あの娘は目覚めない？」

意識が朦朧としている中で、ラスリアの耳に見知らぬ男性の音が聞こえる。

「おかしいなあ……。浅く嚙んだから、致死量には満たないはずだし……。この娘は貴方と同じ種族だから、耐性もあるのでは……？」

ビシッ

頬を弾くような音が聴こえた瞬間、ラスリアの意識は確かなモノになる。

「ここは……？」

重たくなつた瞼を開くラスリア。指を動かそうとすると、布団のような手触りを感じる。

「……。目覚めたようだね」

気がつくと、頭上に赤茶色の髪を持つ男がいた。

「あなたは……？」

ラスリアは上半身だけ起き上がりながら、口を開く。

しかし、その長髪の男は特に何も答えなかった。

『今日は、君を迎えに来たんだ。古代種のお姫様……』

メッカルで、彼女の耳元で囁いたハデユスの声が浮かぶ。最初、それが何かとボンヤリ考えていたラスリア。

「そっだ……。私……！！！」

頭の中がハッキリしたラスリアは、自分の身に何があったのかを思い出す。

「……。私をどうする気なの……。！？」

ラスリアは目の前にいる男を、敵意むき出しの表情で睨み付ける。

しかし、そんな表情を物ともしないくらい落ち着いていた。そして、何かにとり憑かれたような態度にも見える。

「……。ハデユスが手荒なマネをしてみましたようだね」

「……。やはり、貴方も彼らの……？」

そう尋ねるラスリアの心臓は、強く脈打っていた。

そして、同時に確信をする。

やっぱり、私・・・ハデユスによって、連れて来られたみたい・・・ね。ここがどこなのかもわからないし・・・でも、なんでベッドに寝ていたんだろう・・・？それに・・・

ラスリアはいろんな事を考えながら、男を見る。彼女は自分の目の前にいる男に対して、何か懐かしいような感覚を感じていた。

「さて、行くか・・・」

「え・・・？」

男がボソツと呟く。

気がつくのと、手を差し伸べられていた。

「一緒に来てもらうよ・・・君に見せたいモノもあるから・・・」

穏やかな口調で男は話すが、とても逃げられないような雰囲気をもし出していた。

私と同じ、黒い瞳・・・

ラスリアは自分と同じ瞳を持つ男を見つめながら、その手を取ろうとする。

『ラスリアよ・・・』

「えっ・・・！！？」

この瞬間、ラスリアの頭の中に聴いたことのない声が響く。

彼女は辺りを見回すが、この空間にいるのはラスリアとこの赤茶色の髪を持つ男の2人だけ・・・そこに第三者がいる気配は全く見られなかった。

「・・・どうかしたのかい？」

男に声をかけられ、ドキツとするラスリア。

「いえ、何でも・・・」

少し緊張した声色で答える。

今の声・・・なんだったんだろう・・・？

男の手を取ったラスリアは、立ち上がりながらそんな事をふと考える。

．．．いや、今はそれよりも．．．。ここから脱出する術を考え  
なきゃ．．．

立ち上がったラスリアは、男に右腕を掴まれたままの状態です。  
歩き出

### 第43話 黒い瞳が映し出すもの（後書き）

毎度ご一読ありがとうございます。

さて、満を持しての初&再登場。

ラゼはこの『ガジェイレル』両作品にちらりほらりと登場してきたキャラクター。

一方、ラゼを襲撃した男アギトというのは、“8人の異端者”のリーダーでもあり、この回でラスリアと話をしている赤茶色の髪を持つ男の事です。

ラスリアはまだ、“彼が自分と同じ”キロ”の末裔である事を知らない状態ですが・・・彼らの秘密はこれだけではありません。

ラスリア・ラゼ・アギトにはちょっととした関係があり、その辺は次回以降で語られると思いますので、お楽しみに

引き続き、ご意見・ご感想をお待ちしてます！

## 第44話 忌むべき相手（前書き）

今回は、ラスリア チェスの視線で話が進みます。

## 第44話 忌むべき相手

「話が違うではないか……!!」

ラスリアが自分が眠りについていていた部屋を出た途端、聞き覚えのある叫び声が聞こえる。

「あの男性……!!」

赤茶色の髪の男の後ろから見たラスリアは、視線の先にいる人物を見て驚く。

そこにいたのは、世界が統合する前……宗教自治区ルーメニシエアで会い、古代種であるラスリアを狙っていたライトリア教の僧長・モーゼだった。

「アギト様……」

モーゼと一緒にいた白い翼を持つ男性が、こちらを向いて名を呼び、お辞儀をする。

……金髪金眼の天使……。彼が“8人の異端者”の一人、“墮天使”ミトセ?という事は、この赤茶色の男性がアギトっていう男性?

ラスリアは彼らの顔をチラチラと見ながら、どの“敵”に当たるか観察していた。

「アギト!!! 貴様らに“世界の心”ガジエイレル一行の居場所を教えれば、古代種をこのわたしに譲ると約束だったではないか!!!」

モーゼはラスリアが目に入っていないのか、食い入るようにアギトという男に睨みつける。

しかし、服の裾をつかまれても、アギトは繭一つすら動かさない。それはまるで、眼中にないような雰囲気だった。

「貴方が、私達の居場所を彼らに教えたというの……!?!」  
「憤りを感じていたラスリアは、必死のモーゼを睨みつける。」

一方で、なぜ彼らがメツカルにいきなり来ることができたのかを納

得することができた。

「これはこれは……こちらにいらしたのですね。ラスリア殿……」

「貴方なんかにも名前を呼ばれたくない!!!」

ラスリアはこの時、自身の過去について語ってくれたイブールを思い出す。

モーゼは仲間であるイブールが復讐をしたい相手……。それはすなわち、ラスリアにとっても“敵”と同じような存在になる。

「……近づくな」

「!?!?!」

モーゼがラスリアに近づこうとした瞬間が彼らの間に立ち塞がる。

アギト

「……すごい殺気……。この男性は一体……?」

自分に背を向けていたので表情まではわからなかったが……。このアギトという男から凄まじい殺気を感じたラスリア。感じた瞬間、全身に鳥肌が立つ。

「……そいつの処分は、お前達に任せる」

「はっ」

気がつくくと、アギトはラスリアの腕を掴んで歩き始めていた。そして、ミトセとすれ違ったときに、低い声で命令を口走る。ラスリアはミトセやモーゼの方を振り返りながら、アギトに連れられて再び歩き出す。

「……モーゼが“8人の異端者”とつながっていたのね……ラスリアは歩きながらふとそんな事を考えていた。

「そういえば……。私に見せたいものって、一体……?」

ラスリアは恐る恐る尋ねる。

アギトは一瞬だけ黙った後、口を開く。

「この辺りだったら……。君も以前、訪れたことがあるのでは……?」

「えっ……?」

その場で立ち止まる2人。

アギトの黒い瞳がラスリアを捉えながら言う。彼女は相手に言われ  
て、周囲を見渡す。狭い廊下……。そして、水晶のような鉱石で  
きた壁。ボンヤリと考え事をした後、やっとこの場所がどこかを思  
い出す。

「未開の地」……!!?」

ラスリアは目を丸くして驚く。

そんな彼女を見つめながら、男も周囲を見渡す。

「レジエンデイラス（あそこ）の人間共はそう呼んでいたか……。

しかし、我々にとっては懐かしき故郷へ続く道……」

「……?」

ボソボソと呟くアギト。

しかし、ラスリアは最後の方だけ聞き取ることができなかった。

「ここ……」

鉱石でできた廊下を抜けると、ラスリアの目には以前に訪れた風景・

・そして、そこには未だ見たことのない「もの」が存在していた。

……この場所に来て、アレンはおかしくなった……。忘れも

しないわ……

ラスリアとアギトが次にたどり着いた場所は、レジエンデイラスで

“イル”を目撃した場所だった。

その場に立ち尽くしているラスリアに構うことなく、アギトは“イ  
ル”のあった広間の中央へと歩いていく。

「君に見せたかったモノの一つが、これだよ……」

「!!!?」

アギトがラスリアの方を振り向き、「それ」を見せた。

彼が言うモノを見たラスリアの表情が一変する。

「これ……は……?」

ラスリアは緊張と恐怖の入り混じった声で問いかける。

その視線の先にあったのは……赤い肉塊のようなモノ。そして、

その異質な物質ものに絡み付いていた人間だった。しかも、ラスリアが何よりも驚いたのは・・・その人間が、アレンと同じ顔をしていたという事であった。

「人間名“セリエル”・・・しかし、それは仮の名前に過ぎない。

その本名は・・・」

「ガジエイレル世界の心”・・・？」

ラスリアの口から、自然とその名前が紡ぎだされる。

その肉塊と彼女たちの間にはガラスのような壁が存在し、直接触れることはできない。ラスリアは壁のようなモノに触れながら“それ”を見つめていた。

右目下にある痣・・・あれは、アレンが持っている痣と同じ・・・しかも・・・女性・・・？

学者にしてみれば、神秘的なモノかもしれないが・・・ラスリアにとっては、このアレンと瓜二つで眠りについていてる女性は異様なものしか映らない。すると、ラスリアは直感的な“何か”を感じ始める。

「っ！！！！！」

ラスリアは、相手の隙をついて、その場から逃げ出す。

「はあっ・・・はあっ・・・」

周囲など気にせず、全力疾走するラスリア。

アレン・・・この場所に・・・この場所に来ては駄目・・・！！！！！！

ラスリアは走りながら思う。

そして、先ほど見た“ガジエイレル世界の心”もあって、自分がなぜ彼らに捕らえられたのかを唐突に理解した。

「・・・なんとか、自力で抜け出さなきゃ・・・！！！」

ラスリアは、自分がアレン達をおびき出すための餌だという事実を考えないようにしながら走る。

目標に逃げられたアギトは、特に動揺するわけでもなく・・・その場に立ち尽くしていた。

「・・・追わなくていいんですか？」

その口にしなから現れたのが・・・“血に飢えた吸血鬼”ジェルムだった。

「・・・問題はない」

「でも、“あそこ”は、今走っていった方向ではないよね・・・？」  
首をかしげながら、ジェルムはアギトに尋ねる。

「・・・あの道はあの娘にしか効かない魔術が施されている」

「へえ・・・？」

ジェルムは肩を上げながら話を聞いていた。

その後、アギトはラスリアが走っていった方向へと歩き始める。

「どの道、あの娘はわたしが連れて行くとうとしていた場所にたどり着く・・・。無理に追いかける必要はない・・・」

そう呟きながら、アギトはジェルムを見る。

「・・・なんだ」

「ああ、言い忘れるところだった！・・・この島の端っこの方に、珍しい魔力を感じたんです。それを伝えに来たつもりですが・・・どうします？」

ジェルムは相手の顔色を伺うような口調で話す。

それを聞いて、アギトは黙り込むが・・・視線だけジェルムの方に向けて口を開く。

「・・・“奴”以外は好きにしろ」

「・・・了解！」

低い声で答えた後、ジェルムはその場から姿を消す。

カツ！！！！

“8人の異端者”達の根城<sup>アシト</sup>であり、かつてレジェンディラスで“未開の地”と呼ばれていた島の海岸に光が現れる。そこから出てきたのは・・・アレン・イブール・チェス・ミウルザの4人と、古代種

“キロ”の末裔である青年・ラゼの5人だった。

「ここが以前、“未開の地”と呼ばれていた場所……」  
辺りを見回しながら、チエスは思ったことを口にする。

それにしても……この人数を一瞬で運べるだなんて、流石は古代種といったところかな？

チエスはラゼを見つめながら考え事をする。

「敵の根城<sup>アシト</sup>へ連れて行け」とラゼは言ったものの、結局は彼が瞬間移動でアレン達を連れてきたのだった。瞬間移動は魔術の中でもレベルの高い術で、並の魔術師では会得できないと言われている。そのため、この人数をいとも簡単に連れてこれたラゼの魔力がどのくらいなのかと、チエスは興味津々でもあった。

「おい、ガキンちよ！アレンの野郎が「早くしろ」って瞳<sup>め</sup>で睨んでるぞ？」

「あ……ごめん」

ミュルザに急かされたチエスは、彼らと一緒に歩き出す。

「ここは……！」

「すごい……圧巻ね……！！」

海岸から一時間ほど歩くと……彼らの視線の先には古代種の都跡が見えてくる。

文献で見られないような建築様式である建物や、見たことのない機械の残骸  
全ては崩れ果ててはいたが、まさに“古代種の都”

「遺跡についてはよくわからないが……ここが“古代種の都跡”

で間違いないんだな？」

「……そうだよ」

真剣な表情で問いかけるアレンに対し、ラゼは静かにうなづいた。

「でもさ……そのアギトって奴は、どうしてこの場所を引っ張り出したのかな？……古代種とはいえ、これだけ大きな場所を引っ張り出すのはかなり大変そうだけど……」

「・・・私も、その辺が気になっていた。実際のところはどんなの？」  
イブールが考えていたことをチエスが口にし、彼女も口を動かさなからラゼの方向を見る。

「・・・彼のような存在があるならば、当然“心臓”だつてある」「  
“どういう意味だ？”

アレンを見ながら話すラゼに、全員が不思議がる。

「・・・“星の意思”が発せられている場所が、都の跡地の奥にある・・・とても言えば、君らでもわかるかな」

「・・・」

ラゼの話に、全員が黙って聞いていた。

「いや・・・むしろ僕たちは、“星の意思”を直に読み取れる場所に都を作った・・・。そして・・・」

ラゼの声がどんどん小さな呟きのようになっていく。

「!!!!」

「ミュルザ・・・？」

何かに反応したのか、ミュルザがバツと前方を見る。

それを不思議に感じたイブールは、彼に問いかける。

「誰かが来る・・・！だが、この感覚は・・・」

ミュルザがしかめっ面で答える。

ミュルザ（あいつ）がこんな表情かおをするという事は・・・墮天使  
ミトセとか・・・！！！？

チエスはそう考えながら、だんだん大きくなる足音に耳を澄ます。

そして、その両手には槍が強く握られていた。

「くそ・・・どうなっているのだ、ここは・・・！！！！」

すると、そこには聞き覚えのある声が。

あの人は確か・・・

彼らの目の前に現れたのは、ライトリア教団の服装をした中年男性。どこかで見たことあるような感覚で考えたが、すぐその正体に気がつく。

「あの時の・・・!!」

チエスはその男性がラスリアを狙っていた教団の僧長・モーゼであることを思い出す。

「ウオトレストの少年……。あの人間は、何者だ・・・？」

気がつくのと、チエスの真横にラゼが立っていた。

「僕らウオトレストや、貴方たち“キロ”にとって忌むべき相手だよ。そして・・・」

途中まで言いかけた時、何かを思い出したかのように後ろを振り返るチエス。

「イブール・・・!!!!」

イブールの様子を見たチエスは表情を一変される。

そこに立っているイブールは・・・気さくで優しい普段の彼女ではなく、“復讐にとり憑かれた者”が持つような殺気を放ち、その瞳には憎悪が宿っていた

#### 第44話 忌むべき相手（後書き）

いかがでしたか。

今回登場したモーゼは、以前にも出てきたキャラクター。

彼については、第21話〜第23話辺りを読むと、どんな人物かわかると思います。

さて、モーゼがなぜ”古代種の都跡”をうろついていたのか。

そして、復讐の標的ターゲットに再び巡り合えたイブールはどうするのか!?

また、アギトの元から逃げ出したラスリアは、無事にアレン達と合流できるのか・・・?

次回をお楽しみに

ご意見・ご感想をお待ちしてます！

## 第45話 イブールの復讐と契約した理由（前書き）

<前回までのあらすじ>

”8人の異端者”に捕らえられたラスリアは、とある場所で彼らを束ねるリーダーのアギトと顔を合わせていた。アギトはラスリアをとある場所に連れて行き、そこに安置されているモノを見せる。

一方で、”8人の異端者”達の根城があると思われる”古代種の都跡”に到達したアレン達。跡地を進んでいくと、そこで思いがけない人物と出逢う。

## 第45話 イブールの復讐と契約した理由

「貴様・・・なぜ、ここに・・・!!?」

驚きと戸惑いの表情かおをしながら、アレンが声を張り上げる。

“古代種の都跡”に到達したアレン達は、そこにいるはずのない人物  
ライトリア教の僧長・モーゼと対峙していた。

「・・・誰かと思えば・・・。一体ここで、何をしているのですかな?」

冷や汗をかいていたモーゼは、一息つき、取り繕った状態になってから口を開く。

・・・こいつに本当の事なんて、言えるはずないし・・・

アレンはどう切り返せばいいかわからず、一瞬考え込む。その時、ミュルザが彼の前に出てくる。

「なる・・・。だから連中が、普通に現れたわけだ・・・」

「ミュルザ・・・?」

彼の呟きに、全員の視線が集まる。

「どうして奴らが、メツカルにすんなり現れたのが腑に落ちなかったんだ。いくらあいつらでも、古代種の娘1人の正確な居場所を突き止めるのは困難なはずだし・・・」

「・・・おい、悪魔。それは一体、どういう事だ・・・!?!」

“古代種の娘”という言葉に、ラゼが反応する。

そんなラゼに、ミュルザは目線だけ向けて話す。

「・・・要するに、この野郎が“8人の異端者”共と通じていた。

そして、どこで知ったかは知らねえが：俺達の居場所を連中に教えたといい事だ」

「!?!?!」

ミュルザの台詞に、全員の表情が変わる。

なぜ、俺たちの居場所がすぐにわかったのかと思えば・・・。そ

ういうことだったのか・・・

アレンは“8人の異端者”達が襲撃してきた際、なぜすぐに自分たちの居場所がわかったのかを疑問に思っていた。しかし、今の台詞によって、思いのほか冷静に納得する事ができた。

「・・・ラゼ」

「なんだい？」

その直後、イブールの低い声が聞こえる。

「私とミュルザは後から行く・・・。だから、アレンとチェスを連れて、先に行ってもらえるかしら？」

「・・・仕方ないな」

イブールはこちらに振り返らないまま、ラゼとの会話を進める。

「言うておくけど・・・ここ周辺には、古代種（僕ら）の知恵がたくさん詰められている！だから、僕らを見つけるのは一苦労するかもだけどいいのかい？」

「・・・心配しなさんな。お前ら3人とも変わった野郎だし、俺様にかかればすぐに合流できるぜ！」

ラゼの問いかけに対して、ミュルザが自信満々の表情で答える。

「・・・そんな簡単なモノではないと思うけど・・・。まあ、いいや。いくよ・・・！」

ラゼがその場でボソボソ呟いた後・・・アレンとチェスを連れて、その場を後にしようとする。

俺たちの前にいるから、表情がわからない・・・。否、見ない方がいいのかもしれないな

アレンはイブールやミュルザの背中を見つめながら、その場を後にした。

「さて・・・ご命令とあらば動くが・・・どうする？」

ミュルザがニヤニヤしながら、イブールに問いかける。

アレン達を先に行かせ、その場に残ったのはイブールとミュルザ。そして、モーゼの3人だけだった。

「やっとな怒り、この時が……!!!」

イブールは、ミュルザと出逢うまでの事を思い出す一方、今にもはち切れそうな怒りを抑えている。

一方で、身体の奥底から妙な力が湧いてくるのを感じていた。

「……ミュルザ（あんた）に殺<sup>や</sup>らせたなら……こいつに最高の快感を与えてしまおう……。だから、あんたは手を出さないで……」

「……了解！」

鋭い視線で悪魔を睨みつけながら呟くイブール。

手出しを禁じられたミュルザは、邪魔にならなそうな位置へと飛び去っていく。

「そなたのような阿婆擦れが……このわたしを殺すだと……？」

正面を向くと、いやみつたらしい口調でモーゼが口を開いていた。

「フフ……」

そんな口調のモーゼなど全く気にせず、イブールはクスクスと笑う。

「殺す……ですって？……そう簡単には殺さないわ。なんでか

は……わかるわよね？」

「……なんのことかね？」

イブールとモーゼとの間で緊迫とした空気が流れる。

「……まあ、いいわ。あんたが私の両親を殺害した……結果的には、指示したって所かしら？……積年の恨み、今ここで晴らさせてもらおうわ……！」

ゴオオオオオッ

イブールの周囲から炎が現れ、それがモーゼに向かって放たれて行く。

「ふん……!!」

魔法に気がついたモーゼは、両腕を前に出し、結界魔法を唱える。そして、イブールが放った炎を横へ逸らすことで、避けたのだ。

「ふん、小娘が！この私が、これしきの魔術でやられるとも・・・」  
モーゼは勝ち誇ったかのような口調で声を張り上げる。

「・・・甘いわね」

「何・・・？」

イブールが低い声でボソツと呟く。

それが聞き取れなかったモーゼはしかめっ面をしながら、彼女を睨む。

「なんだこれは・・・！！？」

モーゼの足許には、茨のような物がみると伸びて行く。

「ぐっ・・・！！！」

地面から伸びた茨のつたは、あっという間にモーゼの身体を拘束する。

数秒後には、磔の状態となっていた。

「最初の炎は・・・囧！！？」

「・・・ええ。あれだけの炎を出せば、あなたは絶対に結界魔法を使うと思っていた。・・・結界魔法は身を守るのには最適だけど、地面にはかからないという弱点がある。言うておくけど、魔術を学ぶ上で基本中の基本なんだけどね」

茨に拘束されたモーゼの近くへ、少しずつ歩み寄るイブール。

「あんたをいたぶる方法はいろいろ考えていた。ジワジワと追い詰めて行くやり方とか・・・ね。でも、いろんな意味で“これ”が最も罰にふさわしいと思ったわけ」

イブールは遊びを楽しみにしている子供のようには話す。

しかし、その表情が狂気に満ちているのは言うまでもない。

「・・・ミユルザ！こっちへ来て・・・！！！」

「あん？・・・俺様の力は借りないんじゃないかなかったのか・・・？」

イブールは、遺跡の小高い場所にいるミユルザに声をかける。

当の本人は、なぜかと首をかしげながら答えた。

「“あれ”を使いたいの・・・！そう言えば、わかるわよね・・・？」

「・・・了解」

イブールの台詞で、自分に何をやらせようとしているか気がついたミュルザは、その場から一瞬で地上に降り立つ。

・・・今思えば、ミュルザ（あいつ）が私の元に現れたのって・・・  
“これ”を所持していたからでしようね・・・

この瞬間、イブールはそんな事を思っていた。

「さて、イブール姐さん・・・」

「・・・」

気がつくと、イブールの背後にミュルザが存在し、耳元で囁く。

黙ってはいたものの、自分の耳元に囁かれて一瞬ドキツとするイブール。

「・・・私の力では取り出せないしね・・・。やってちょうだい」

「・・・じゃあ、瞳を閉じてもらおうか」

そう囁いたミュルザは、左腕でイブールの身体を抱き寄せる。

その後　　イブールの首に巻かれているスカーフを

外し始めるのだった。

さて・・・やつと“これ”を拝める瞬間がやってきたな・・・

イブールの首に巻きついているスカーフをほどこきながら、ミュルザは一人考えていた。

そして、彼女の首筋に奇妙な形をした紋章　　人間の

間では“契約書”とも呼ばれる痣がはつきりと見えてくる。

「な・・・なにを・・・!!!??」

これから何が起こるのか全く想像できないモーゼは、困惑した表情で彼らを見下ろしていた。

モーゼの台詞なんて全く聞いてないミュルザは、自分の牙で指に軽い傷をつける。そして、血のついた指を“契約書”に近づけた。すると・・・

「・・・っ・・・！！！」

瞳を閉じたイブールの口から、苦悶の声が聞こえる。

彼女の首元は紅い光が立ちこみ、その首からは鋭利な「何か」が現れ始める。

メキメキメキ・・・

光を発しているため、魔法で取り出しているようにも見えろが・・・イブールの口から出る苦痛に耐える声は、身体の内部から直接取り出しているように聞こえる。

「そ・・・それは、まさか・・・！！？」

イブールから現れた「それ」を見たモーゼの表情が見る見ると青ざめていく。

数秒後、彼女から現れ、ミュルザがしっかりと握り締めていたモノ

それは、血のように赤い刃を持つ、巨大な鎌だった。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

自分の身体から取り出されたモノを見つめながら、息切れをしているイブール。

俺様がこの女と“契約”した理由

無論、人間共に召

喚されたのもあるが・・・イブール（あいつ）の魂が、この“嘆きの鎌”の思念とくっついていたからってのが一番だしな・・・

ミュルザは、この初めて見る“嘆きの鎌”を見つめながら、自分が契約した理由について考えていた。

「悪魔信仰のてめえなら、この鎌が何かは知っているんじゃないか・・・

・・・？」

「そんな、馬鹿な・・・！！どうして、こんな小娘がこれを・・・！！！？」

ニヤニヤした口調で話すミュルザに、動揺を隠せないモーゼ。

「そう・・・これは、“嘆きの鎌”。人間だろうが何だろうが・・・悪魔を除く生き物なら、何でも斬れる」

ミュルザの手から鎌を取ったイブールは、ボソボソと呟きながら茨で拘束されているモーゼの下へ歩き出す。

「そして、この鎌に引き裂かれたものの魂は・・・」

「や・・・やめる・・・!!!」

ジリジリと近づいていくイブール。

鎌を見つめ、ひどく怯えるモーゼ。彼らの周囲では、イブールの足音だけが響く。

「ゆ・・・許してくれ・・・!!!金でも地位でも何でも・・・望むものなら、何でも差し出す・・・!!!だから、命だけは・・・!!!!!!」

「・・・地獄にて塵になるまで、魂をすり潰され、引き裂かれ、焼かれる・・・。それは、魂だけの存在であろうとも、最大級の苦痛を伴う・・・。それが永遠と繰り返される場所に堕ちるのだ・・・」  
狂気の表情で話しながら、イブールは“嘆きの鎌”を振り上げる。

イブール（あいつ）の魂と同化している以上、今は使えないが・・・。この戦いとやらが終われば、俺様の物・・・だな・・・!

ミュルザは遠目で観察しながら、イブールの魂を手に入れる瞬間のことを考えていた。悪魔である彼に、“情”などない。彼がイブールに力を貸すのも、全ては目的を果たした後・・・イブールの魂と同化した“嘆きの鎌”を手に入れるためだったのだ。

だが、あの鎌の思念は、俺ら悪魔並みに邪気が強い・・・。人間ごときの魂じゃ、思念に押しつぶされてしまう・・・。が、イブール（あいつ）は押しつぶされなかった。という事は

「これは、あんに課せられた罰・・・。その地獄とやらで・・・私の両親を殺害し、私自身を闇に葬り去ろうとした事を、悔いるがいいわ・・・!!!」

・・・稀に見る、“悪魔になり得る資質を持つ人間”って訳か

イブールが鎌を振り下ろそうとした瞬間、彼女は正気の状態で言葉を口走り・・・ミュルザは視線を落としながらふとそんな事を考え



## 第45話 イブールの復讐と契約した理由（後書き）

こんばんは、皆麻です。

最近忙しくて、なかなか更新できませんでしたが・・・久々の更新でした。

今回、いろんな意味でイブールの見せ場にしよう！！と思って執筆しました。

ミルザがイブールと契約した理由もここで明かされた訳ですが・・・

今回の話は、かなり前から考えていたシナリオ。ただし、イブールの身体から現れた鎌の名称は、つい先ほど考えたんです、実は（笑）

さて、次回はどうなるのか！？

最終章でもあるこの辺りでは、いろんな事が明かされていきます。

戦闘シーンも増えるかんじかな？

また、「アギトがラスリアに見せたいモノ」の2つ目が、次回以降でわかります。

・・・次回もお楽しみに

ご意見・ご感想をお待ちしてます！

第46話 高鳴る鼓動(前書き)

今回は、チエス ラスリア アレンの視点で物語が進みます！

## 第46話 高鳴る鼓動

「イブール……大丈夫かな……？」

アレンとチェス。そして、ラゼの3人で進む中……チェスがポツリと呟く。

「……？」

「チェス……」

この時、ラゼは後ろに振り返り、彼の横にいたアレンはチェスを見つめる。

あのモーゼっていうおじさんを見たときのイブール……。感じる気が相当禍々しくて、怖かった……。あれは、まるで

「あの人間が、僕らの元へ戻ってくる頃には……おそらく、目的を果たしているんだろうね……」

「え……？」

チェスが考え事をしてしていると、ラゼが深刻な表情かおをしながら、一言口走る。

「……どういう意味だ？」

「……これは、僕の憶測に過ぎないけど……。あの人間が悪魔と“契約”するなんて理由は、大体想像がつく……。先ほどの相当激しい邪気には、驚かされたけど……。ね」

鋭い視線で睨みながら、アレンはラゼに問いかける。

一方でラゼは、そんなアレンにも動じず、淡々と話すのであった。

もしかして……僕が、険悪なムードを作っちゃった……かな？  
ピリピリとした空気に、チェスは拳動不審になる。

「そうだ……ラゼさん！僕、貴方に訊きたいことがあったんだ……！」

チェスは、この場を何とかしようとして、話題を変えることにした。

「……なにかな？」

ラゼは、少し落ち着かせた状態で口を開く。

「・・・やっぱり、僕が話をした方がこの男性おとこもいろいろ話してくれそうだな・・・」

チエスは、自分たちウオトレストが彼らを認めているように・・・古代種“キロ”であるラゼも自分達の事を認め、信用してくれていることがわかり、少しだけ安堵した。

そして、真面目な話である以上、ちゃんとした状態で話さなくては考えたチエスは、その場に立ち止まり、真剣な表情になってから口を開く。

「僕達ウオトレストは、古代種あなたたちのように、生き物の気・・・さしづめ、オーラを感じ取れることは、ご存知ですよね？」

「・・・うん、知っているよ。それがどうかしたの？」  
落ち着いた表情で答えるラゼ。

一方でチエスは緊張感が強くなるばかりだ。

「貴方と同族であるラスリアと一番長く過ごしてきたのは・・・一族でも僕一人だけです。だから、気がついたのかもしれませんが・・・」

「・・・回りくどいね。君は、何が言いたいのか・・・？」  
チエスの言い返しに、少しばかりか苛立ちを見せるラゼ。  
そんな2人のやり取りを、アレンは黙って見つめていた。

「ラゼさん・・・。貴方は“二大魔術”を使えるほどの術者だから、自分から発せられる“気”を操る事も可能はず・・・。例えば、人間でも双子とかは同じ“気”を感じる。一方で、貴方は全く別人かのように気を操っているが・・・ほんのわずかな分だけ、ある人と同じ気を感じました・・・」

「おい、チエス・・・。それって・・・」

長々と語るチエスに、途中で割って入るアレン。

「・・・貴方とラスリアって、もしかして・・・」

「・・・言っな!!!」

チエスはその先を話そうとした瞬間、ラゼの叫び声がそれを遮る。

その荒々しい叫び声を聞き、チエスは自分の仮説が正しい事を確信する。

「チエス……だったっけ？」

「あ……はい！」

数秒ほど、彼らの間に沈黙が流れた後

突然、ラ

ゼが口を開く。

「君の想像通り……だよ。ただ、この事は、胸の内に収めておいてくれないかな……？ 僕ら古代種の問題でもあるし……何より、彼女は“この事”を知らないから……」

そう言いながら、周囲にある崩れた家屋を見つめるラゼ。

彼が持つ紺色の髪が風で靡く中……その表情は切なさが垣間見えていた。

「……そろそろ行こう。このままでは、“奴”が彼女に何をするか……わかったものじゃないからね……」

そう呟いた後、ラゼはスタスタと再び歩き始める。

彼が意味深な台詞を口走ったにも関わらず、チエスは先ほど自分が持ちかけた話について考えていた。

どうして、ラゼは、“あの事”をラスリアには黙っているんだろう……？

不思議そうな表情かおをしながら、チエスも再び歩き出すのであった。

「はあ……はあ……はあ……」

チエス達が”古代種の都跡”を進んでいく一方……アギトの元から逃げ出したラスリアは、見知らぬ場所で立ち尽くしていた。

「ここまで来れば……追いつかれない……わよ……ね……」  
息切れをしながら、ラスリアは周囲を見渡し始める。

……最初に来た方向とは、逆に走ったつもりだったけど……  
ここは一体、どこなのかしら……？

周囲の見知らぬ風景を見渡しながら、ラスリアはふと考える。  
ドクン

数分程ボンヤリした後  
脈打つ。

突然、ラスリアの心臓が強く

「あ．．．れ．．．？」

何かに導かれるように、ラスリアの足が独りでに進みだす。

そして、彼女が最初に立っていた建築物の入り口のような場所から．．．さらに奥へ奥へと進んでいた。ラスリアが進んでいく先の周りでは、さんご礁のように色鮮やかな大理石の柱が多く存在する。まるで、神殿のような雰囲気を持つ場所であった。

「ここ．．．」

数十分程歩くと、ラスリアは大きな広間のような場所に到達する。

彼女の視線の先には、玉座のようなモノが見えていた。

「私．．．」

その玉座を見た瞬間、ラスリアは困惑した表情に変わる。

私．．．この場所を、知っている．．．？

初めて訪れるはずなのに．．．一度、その場所に自分がいたような感覚を覚える。

『ラスリアよ．．．』

「えっ．．．!!!？」

その瞬間、ラスリアの頭の中に謎の音が響いてくる。

この声．．．あの時の．．．!!!？」

ラスリアは、自分が眠りから覚めた直後に聞いた声と、同じものだという事に気がつく。

「さつきも聞こえた、この声．．．。貴方は一体．．．？」

頭を抱えながら、声の主に問いかけるラスリア。

『そなたの肉体が感じているように、ここはそなたが一時期育った場所．．．。しかし．．．今、我が伝えたいのは、そのような昔話ではない．．．』

「伝えたい事．．．？」

声の主の話聞きながら、ラスリアは首をかしげる。

『ラストイルレリンドリア・ユンドラフよ……。そなたは、生まれながらにして“宿命”ともいえる大事な役割を担っている……。あの2人の“キロ”と同じく……。だ』

「それは、一体……？」

問いかけるような口調になるラスリアだったが、声の主が自分の疑問に答えてくれないのは、先ほどの事でわかりきっていた。

しかし、なぜ声の主が自分の本名を知っていたなかつても気にならず、ただその声に耳を傾けていた。

『話そう……。そなたが持つ、“宿命”を……。！』

「……。ここがどこだか、思い出せたか？」

「……！」

声の主から話を聞いてから数十分後……。ラスリアの背後から、聞き覚えのある声が聞こえる。

ラスリアがすぐさま振り返ると、そこにはアギトの姿があった。

「貴方が……」

ラスリアは、アギトを見つめたまま、その場で立ち尽くしていた。

私が生まれてきた理由……

声の主から聞かされた話に、呆然とするラスリア。そんな彼女に構うことなく、アギトはその近くまで歩いてきて口を開く。

「ここは、本来……。わたしが座るべき場所だった……」

「え……？」

アギトは、玉座に触れながら話を続ける。

「……。君に見せたかったモノの2つめが、この場所……。我らは“キロ”を統べる王族の者であった……」

「……。やっぱり、貴方も私と同じ……」

ラスリアはアギトを見つめながら、ボツリと呟く。

声の主は、アギトが何者かとは教えてくれなかったが……。彼が自分と同じ古代種の末裔であることは、話を聞いていて明らかであっ

た。

「自己紹介が、まだだったね……。わたしはアギラストリユエ・ゴナセイル。……通称“アギト”」

「……“8人の異端者”のリーダー……？」

「……人間共はそう捉えているみたいだね」

「“みたい”……？」

ラスリアは、下から覗き込むような表情で、アギトを見つめる。

その視線は疑いの視線をしていた。

「……知つての通り、我々が“救済”を始めた張本人。だが、“愚かな連中を救済する”という利害が一致しただけ……。我々の間で、“情”などない」

“救済”……って、古代大戦の事を言っているのかしら……？  
ラスリアはアギトの主観的な語り、戸惑いながらもおとなしく聴いていた。

すると、男はラスリアの方を向いて、再び語りだす。

「我々は、常に相手に疑いを持ちながら行動を共にしてきた……。ミトセが君の記憶をいじり、会っていた事を報告しなかったことがいい例だな……」

「……あの金髪の天使が、私と……？」

その台詞を聞いた途端、不思議そうに首をかしげるラスリア。

あの男性は、ここで初めて会ったはずのような……？

ラスリアの表情は、戸惑いでいっぱいになる。それを見かねたアギトは、フツと晒いながら再び話し出す。

「……何、大した記憶ではないから、気にする必要はない……」

それより……」

「それより……？」

その言葉の後……周囲の空気が変わったような感覚に、ラスリアは陥る。

「!!!？」

ラスリアはアギトの顔を見つめた途端、表情を一変さえる。

穏やかそうな表情は、いつしか狂気に満ち溢れた表情へと変貌して  
いた。

「ラスリアよ……。わたしは、この世界を“浄化”し、再び我ら  
一族の再興をしたい……。と考えているのだよ……。!!」  
その狂気に満ちた表情で語るアギトを見て、ラスリアは悪寒を感じ  
る。

「浄化……。?」

「……。我々“キロ”は、“星の意思”に従って生きてきた……。  
しかし、奴は我らを見放したのだ……。最初は絶望したが、最終  
的によいことを思いついたのだ……。!」

「……。まさか……。!!?」

この男性ひつひが言っている事って、まさか……。!!?」

ラスリアの心臓が強く脈打つ。

「わたしは、思いついた!……。奴が自ら創り出した玩具おもちゃを使って、  
自滅するという運命みちを……。!!」

「……。!!!!」

恐怖の余り、その場で固まるラスリア。

声の主が言っていた、世界を滅ぼす最終兵器ファイナルウェポン・

く……。本当に、この人たちは……。世界を滅ぼそうとしているのね。  
……。!!

数少ない同胞が、世界を滅ぼす

すなわち、“世界

の心”ガジエイレルであるアレンや、セリエルという“もう一人の世界の心”ガジエイレルを  
犠牲にするという考えを持っていたことに、ラスリア怒りと悲しみが  
広がる。

それと同時に、それは「正しくない事だ」と言い聞かせている自分  
もいた。

「この場所に来て……。何となくだけど、ここで過ごした感覚が思  
い出されてきた……。私はまだ幼かったから曖昧だけど……。  
人間という名の大軍が、この地に襲い掛かってきたことは……。身  
体が覚えているみたい……」

ラスリアは掌を胸に当てながら、その場で呟く。

「・・・その感覚こそ、人間を滅ぼす力を持ちえる力・・・!!!今こそ、我ら一族の恨みと屈辱を晴らすのだ・・・!!!」

まるで演説するかのように語るアギト。

「これ・・・は・・・!!!?」

「何これ!!!? 気味悪い・・・!!!」

古代種の都跡の最深部の方へ辿り着きつつあるアレン達。

チエスは怖がつているような表情をしながら言う。そんな彼らの周囲に白い浮遊物が漂い、物凄いスピードで奥の方へと向かっていく。

「彼らは、僕の同胞・・・。はるか昔に死した、キロの魂達だよ・・・」

「数千年が経過しているのに、まださまよっている・・・という事か・・・?」

アレンの台詞に、ラゼは黙って頷く。

「アギト・・・あの男、まさか・・・!!!?」

「あつ・・・ラゼさん!!!?」

ラゼはポツンと何かを呟いた後、思い出したかのように突然走り始める。

そんな彼を見たチエスは、急いで追いかけ始める。

ドクン

アレンも走り出そうとしたときだった。急に、彼の心臓が強く脈打ったのだ。

「なんだ、このかんじ・・・!!!?」

何かの予兆を示しているような心臓の高鳴りに、驚きを隠せないアレン。

なぜだろう・・・。何か、嫌な予感がする・・・!!!?」

アレンの中に一筋の不安がよぎる。

「今は・・・」

“今はラスリアを救い出すことが先決”

そ

う考えたアレンは、先に走り出したラゼやチェスを追うため、自身も走り出すのであった。

## 第46話 高鳴る鼓動（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回は、”8人の異端者”のリーダーであるアギトの台詞が結構多かったですね。

ラゼとアレン・チェスのやり取りもですが……。

彼らが問いかけた、ラゼとラスリアの関係……。もちろん、ちゃんと語られますが、今の段階ではご想像にお任せします

話が淡々としたかんじかもしれませんが、最終回へと向かいつつある今作。

次回はどうなるか……!？

ご意見・ご感想をお待ちします (^ ^)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2256/>

---

ガジェイレル-Left-

2010年12月14日12時05分発行